

愛知学院大学

教養部紀要

第58巻 第1号

論文

- 山 野 明 男：ナイル川に依存するエジプト農業の一考察…………… (1)
- 小 村 賢 二：伝達関数モデルによる時系列予測…………… (19)
- 清 水 義 和：寺山修司とアンディ・ウォーホルの実験映画フィルム…………… (33)
- 伊 豆 原 英 子：「日本語表現法」教育をめぐる問題点と課題(2)…………… (63)
- 川 口 高 風：各地に所蔵する掛絡について…………… (228)

資料

- 木 村 文 輝：静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(5)…………… (73)
- 吉 田 道 興：道元禅師伝記史料集成(十一上)…………… (220)
- 川 口 高 風：明治期以降曹洞宗人物誌(二)…………… (132)

2010

愛知学院大学教養部

ナイル川に依存するエジプト農業の一考察

山 野 明 男

はじめに

熱帯地域の農業に関心をもつ筆者は、これまでにインドネシア、ネパール、ラオス、台湾などの農業・農村についての調査報告をまとめてきた（山野明男：1975、1985、1986、1991、2007）。熱帯に近接する乾燥地域のナイル川については、地形や農業の講義で多くを紹介してきた。2010年春にエジプトを訪問することができたので、関心のあるこの河川に依存するエジプトの農業を捉えてみたい。

古代ギリシャの歴史家ヘロドトスが、著書『歴史』において「エジプトはナイルの賜物」と記述した言葉は有名であるが、現地を視察してこの感を再認識した。上空から眺めると、エジプトはナイル川の流域とその三角州に緑地が開け、他は砂漠の世界が広がっている。古代文明の遺跡が、このナイル川沿いの緑地の中に、またその淵に立地していることも当然と思われる。

乾燥の激しい砂漠気候の中で、エジプトはナイル川をうまく利用し文明・文化を発展させた。英語の culture が本来は「耕地」を意味し、また「培い耕すこと」から来ていることを考えれば、ナイル川の流域、とくにナイル川デルタ（三角州）での耕作すなわち農業の発展が文化・文明を拓かせ、巨大な遺跡を残す国を形成したといえよう。

現地が一番印象的な風景は、ナイル川沿いに多くのナツメヤシの木が生い茂っていることであつた。そのナツメヤシの果実（デーツ）の生産量はエジプトが世界一である。

今回の報告は1952年の、王制から共和制への革命後のエジプト現代農業について考察することとした。

I ナイル川の概況と役割

アフリカの中部から地中海に注ぐナイル川は、全長6,695kmと世界一の長さであり、そのナイルの語源は「大河」を意味する。ナイル川の流域面積は335万km²であり、アマゾン川に次いで世界二位となっている(図1)。この巨大な河川は赤道直下のヴィクトリア湖付近を源流としている。この源流地域はサバナ気候区のため雨季と乾季が明瞭であり、雨季に降った大量の水が増水しナイル川下流部をしばしば洪水で襲っていたのである(図2)。上流域に当たるウガンダの首都カンパラは、図のように雨季と乾季が明瞭なサバナ気候区である。もし、上流域がこの地域の西側にあるコンゴ盆地であったなら、エジプトの水利用は変わった形となったであろう。なぜなら、コンゴ盆地は熱帯雨林気候区で流量が多く水量・水位も年間を通して変動が少ないからである。

ナイル川は、上流域の多くの支流が合流しながら、スーダンの首都ハルツーム付近でエチオピアからの青ナイル川と合流、エジプトを貫流して地中海に注ぐ。エジプト国内では合流する河川はほとんどなく、多少は蛇行しているが南北に縦断している。ナイル川のうちエジプトを流れる距離は1,350kmである。

ナイル川下流の三角州は、カイロを基点に扇状に円弧を描くように円弧状三角州が広がっている。その間、支流が何本も発達し、有名なのがロゼッタ支流、ダミエッタ支流である。

ナイル川は上流のサバナ地帯の雨季に大量の水が流れ、アスワンハイダムが建設されるまでは下流部で増水し洪水をもたらした。しかし、この増水と洪水が川沿いや三角州に水と肥沃な土壌を運び、農地の再生に役立っていた。

古代のエジプト人は、その増水期の水を畦に囲まれた畑(ベイスン)に水路で導き、数週間そのままにして畑にたっぷり水を吸わせ、天然の肥料分を沈殿させた。そして、その後には排水し、冬小麦などの種を播いた。これをベイスンかんがい農業と呼んでいる。こうした恩恵を受け、この地域での農業は、塩類の集積作用に悩まされることなく、また忌地性の連作障害もなく生産力の高い農業が継続できたのである。エジプトは、ナイル川の洪水をうまくコントロールすることにより、古代王国を維持することができたと考えられる。

また、われわれ日本人が洪水を想起するときには、堤防が切れ家々が流され人的被害を考えるが、ナイル川の増水による洪水は徐々に水位を高め堤防を緩やかに越えるもので、人的被害は最小限に抑えられた。

まず、増水による洪水を自然に受け止めるために暦(カレンダー)を作成した。このために天体観測が発達し、天文学や物理学、数学が発達した。すなわち、1年というサイクルを見つけ出し、1年間でいつごろ増水、または洪水が発生するかを読み取る努力がされた。これによ

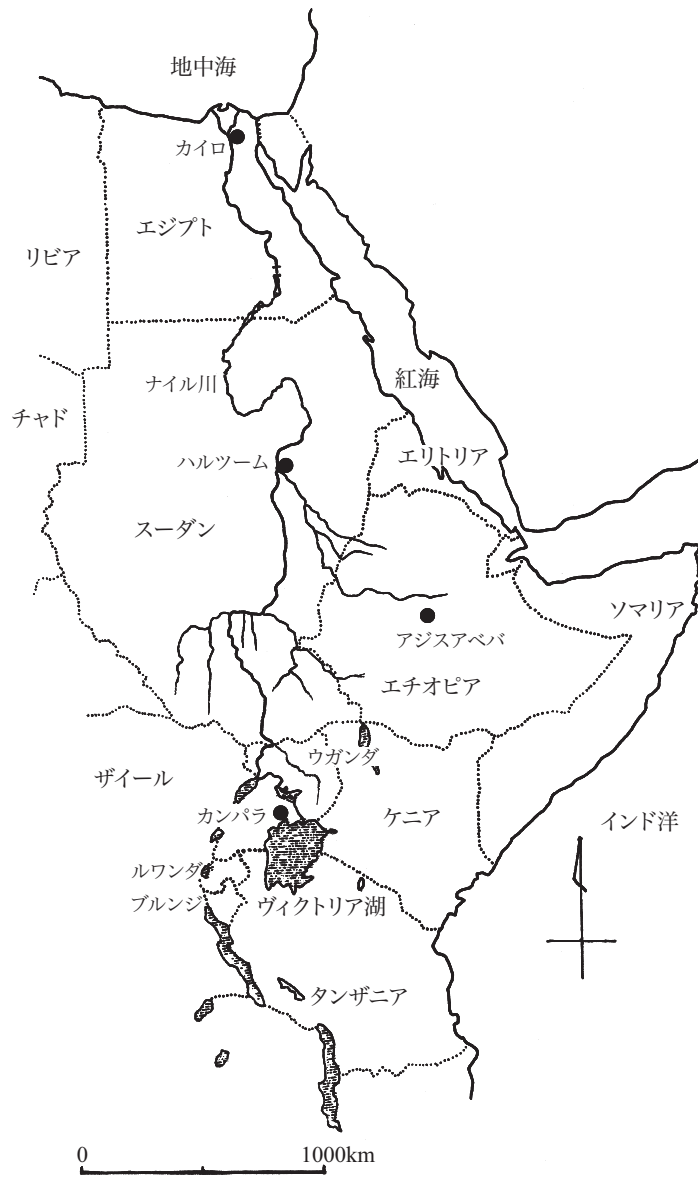


図1 ナイル川の流域 (筆者作図)

り、農作物の農暦を作り、増水期に農地は水を被ることを前提として、農作物の作付を避けられよいためである。よって他の時期はほとんど栽培が可能となる。なぜなら、食物の栽培に適した条件、すなわち洪水が肥沃な土壌をもたらし、かんがい用水はナイル川に頼り、太陽光は砂

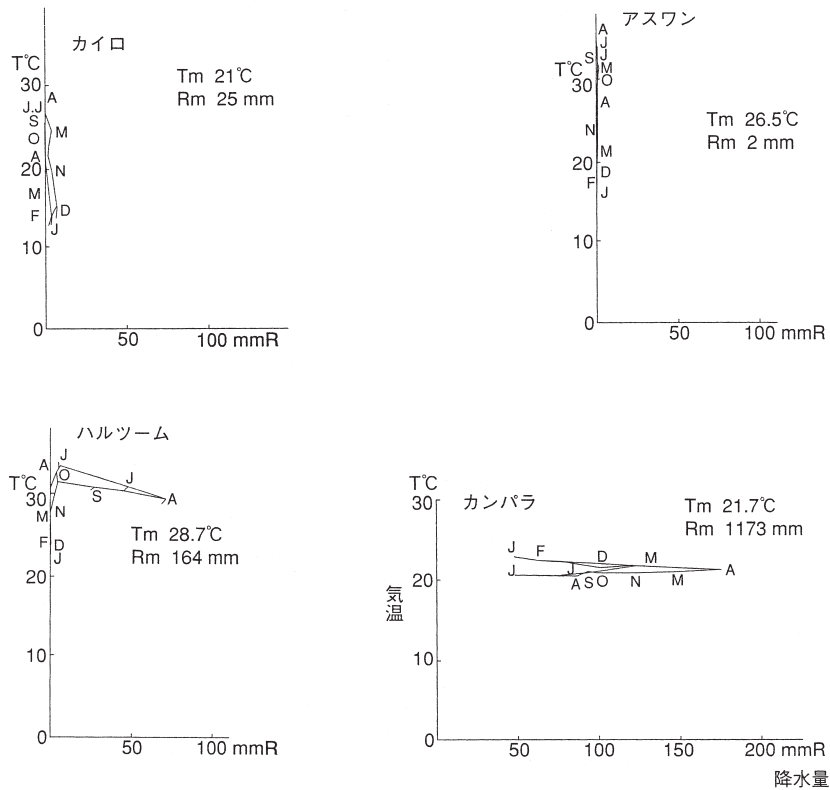


図2 ナイル川流域における都市のハイサーグラフ

- * 春山成子 (2007) による
- * 図中アルファベットは月の頭文字を表す

漠気候のため燦燦と輝いている。冬季でも温度はそれほど下がらず、首都カイロは1月が最寒月平均気温となり、14°Cであることから冬作物が十分育つ気温である（図2のカイロを参照）。

最近、ピラミッドの造成にこのエジプト農民が携わったという説が注目を集めている。このナイル川の増水期が、農民にとっては失業状態になるので、失業対策の公共事業として実行されたのではないかという。それを裏付けるものとして、ピラミッドの造成を描いた壁画の中に労働している人々が生き生きと描かれ、奴隷が鞭打たれた姿ではないというものである。

このように考えてくると、古代エジプトでは農業も公共事業も円滑に実施され、強大な財政力の豊かな国家が出現していたとみるべきであろう。見過ごされがちなのは、ナイル川の流量の変動が土地を肥沃にする一方で、水不足や洪水をもたらし、飢えや病気などの原因になってきたことである。そのため、ナイル川には水量を測るためのナイロメーターが各所に設置さ

れ、その水量によって農業の作目選択が行われた。

原始的な取水方法としては、ナイル川から浸透した地下水をロバや牛の労役により井戸から汲み上げる形もみられた。また、上エジプトのナイル川の中にフローティングポンプが設置された。フローティングポンプとは、川に浮かべた揚水機が水位の変動によって上下して取水できる設備である。このポンプ場は、上エジプトにおいて45か所設置されたが、老朽化して日本の協力で26か所が改修され、これにより7.5万人、約1万haの耕地が利益を受けた。

中エジプトでは、ナイル川左岸地域にハバルヨセフかんがい用水路が312kmに渡って設置されており、農業を支える施設として役立っている。

また特筆すべきは、エジプトの全人口8,299.9万人のほとんどが利用する飲料水から流域の農地へのかんがい用水まで、すべてナイル川という一本の河川に依存していることである。エジプトは表流水の他、その伏流水により涵養される地下水をあわせた97%をナイル川に依存している。それ故、現代のエジプトは、人口の急増、それに伴う耕地の拡大・生産性向上、さらに工業化に伴う水資源の開発の必要に迫られ、巨大ダムの建設に繋がっていくのである。

II アスワンハイダムの功罪

現代のピラミッドとも称せられるアスワンハイダムは、エジプト革命で共和国大統領になったナセルによって1970年に実現したものである。増水や洪水に頼るベイスンかんがい農業を行っていたが、アスワンハイダム建設以前から低いダムを設け通年灌漑農業に変化していった。1902年にはアスワンダムがナイル第一瀑布に建設された。アスワンダムの貯水量は10億 m^3 と少なく水利用に期待ができなかった。このダムは洪水調整でも不十分であったと現地でも聞くことができた。アスワンダムは、その後1934年に追加工事がなされ、貯水容量53億 m^3 、最大出力35万kWの発電所が出来上がった。

アスワンハイダムは、このアスワンダムの上流7kmのところの高さ111m、幅3.6kmの堰堤がつくられた。使用された石材は、クフ王のピラミッドの17倍の量に達している。ダムの上流側は人造湖が出現し、計画を推進した大統領の名前をとりナセル湖と命名された。その湖の長さはエジプト領内で350kmであり、スーダン領内で150kmもある。面積は3,240 km^2 、総貯水量が1,689億 m^3 で、その量は世界第三位である。このダムの建設により下流部の洪水の心配は全く無くなった。

そして、アスワンハイダムが着工される前年の1959年に上流のスーダンとエジプトの間で国際水利協定が締結され、エジプトには年間555億 m^3 と、スーダンには185億 m^3 の水量割当が合意された。農業利用の面からみると、完成前の1965年にアスワンハイダムの第1期工事

が終了し、かんがい整備され始め農作物の面積的变化がみられるようになった。

その結果、約300万 ha のベイスンかんがい地が通年かんがい地に転換され、ここでは多毛作化がなされ、新たに40万 ha の耕地が造成され、作付面積が大幅に増大した。農地の拡大は、エジプトにとって重要な価値を生み出した。

また、水力発電については、出力210万 kW の発電所も建設され年間100億 kWh の発電量が可能となり、エジプトの電力需要の1/5を賄っている。この国の工業化の促進に大きな役割を果たしている。またこのダムは、巨大なダムゆえ大勢の観光客を呼び込むことにもなった。

このようなダム効果が認められ、アスワンハイダムの成功は他の発展途上国にも影響を及ぼし、多くの発展途上国で大規模なダム建設が計画実行されるようになった。

しかし、巨大ダム建設が人間社会にとって長所だけではないことをこのダムが示している。まず、アスワンハイダムによってこのダムの上流側の広大な土地が水没し、川沿いにあった集落も立ち退きを迫られた。とくに、古代エジプト王国の遺跡であるアブ・シンベル神殿は、水没の危機に見舞われ、ユネスコなどの協力のもと上部へ移転修築した話は有名である。

下流部は、毎年の増水・洪水が病原菌も洗い流していたが、それもなくなり風土病が生起することとなった。また、上流から土砂が供給されなくなり河川浸食や表土の塩分の集積作用が急速に進むようになり「塩害」が発生している。

下流のナイルデルタ地帯では、肥沃な土壌の堆積がなくなり化学肥料の使用を余儀なくされ、農民の経済的負担が著しく増える結果となった。よって、今、古代エジプトのベイスンかんがい農業が見直されている。

海岸部でもアスワンハイダムの影響が出ている。その海岸線が円弧状三角州の例として地形学でよく紹介されているが、現在ではその円弧が全体にわたって抉り取られた形になりいびつな姿を呈している。これは、ナイル川上流域からの大量の土砂の供給が無くなったためである。また三角州の沖合に当たる地中海でも、ナイル川からもたらされる有機物質が流れ込まなくなり、プランクトンの発生が少なくなった結果、漁獲高が大幅に減少したともいわれている。

このように、巨大ダムの出現は、農地の造成・かんがい、発電による工業化、観光などに役立つ反面、水没の犠牲、塩害、肥料の購入負担、河川沿いの侵食、風土病の発生、沖合の漁業の衰退などマイナス面も多いことが分かる。

Ⅲ ナイル川に頼るエジプト農業と農業政策

水需要の80%を占める農業はエジプト経済において最も重要な産業であり、労働人口の

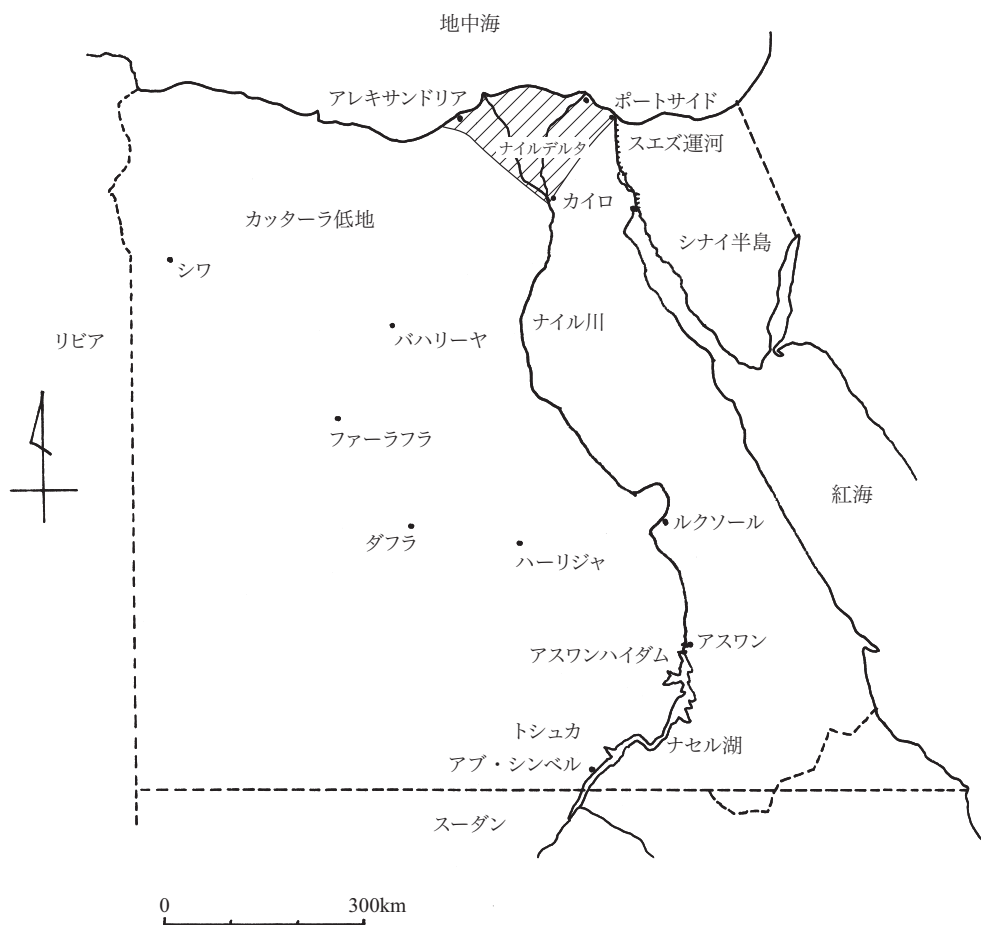


図3 エジプトの概念図 (筆者作図)

30%が農業に従事している。その農業は、今まで見てきたようにナイル川河岸と河口のデルタに限定されている (図3)。一河川のみでこれだけ農業用水を頼る国も珍しいのではないかと思われる。

農業地域を詳しく見ると、エジプト南部のナイル川の上流部では、一部かんがいでも成立するところもある。しかし、アスワンより上流部ではかつて耕地だった部分がダム湖に沈ずみ、航空写真では耕地は認められない。一部、ナセル湖から直接取水してかんがいしようとするトシュカ (ニューバレー) がある。アスワンから下流にかけては、ナイル低地の農業地帯が下流に進むほどその幅が広がってくる。いわゆる地形的にみれば、地溝帯を形成したところに川が流れていると見ることができる。また、下流部から取水した水をスエズ運河の下をくぐりシ

ナイ半島北部に送り農業地帯を造成する巨大プロジェクトもある。

そのナイル川の周辺は、ある一定の幅をおいて段丘のような地形で一線が画され、草木のない砂漠の世界となっている。砂漠の中にオアシス集落が存在するが、面的というより点でしかない。例えば、ハールジャ・オアシス、ダフラ・オアシス、ファラーフラ・オアシス、バハリヤ・オアシス、シワ・オアシスなどの他に、北部にクッターラ低地が存在する。また、ナイル川左岸のカイロ南西方向のファイユーム近くにカールーン湖の存在が認められるのみである。これら地域で大規模な農業活動がされているとはいいがたい。

このように、エジプトの耕地分布をみるとナイル川に沿った流域に限定されていること、またナイル川のかんがい用水に規定されていることが読み取れる。

近代化以前の17世紀から18世紀にかけてのエジプト農業は、土地の私有は認められておらず、個人は土地税を支払う代わりに土地の使用権を得ていた。しかし、18世紀の末までには実質的に個人所有と変わらない状況になった。

1952年の共和制以降の農業開発政策の経緯については、土屋一樹（2003）の報告に見られる。それによると大きく四つの期間に分類している。第1の時期は1952年の農業改革法に始まる農業システム再構築の時期、第2は1960年代の農業協同組合を通じての国家による農業生産コントロールの時期である。第3は1974年以降の政府による農業生産管理が緩和された時期、第4は1986年以降の農業自由化の時期であり、現在に至っているという。これらの農業政策により、次に見る農業生産の品目が大きく異なるのである。農地改革から自由化の流れは戦後の日本と類似する点もある。

第1次から3次にわたる農地改革の結果、農家の農地所有者は増加したが、農地の細分化により農地改革の恩恵がどの程度であったかは不明であるという。このとき農地の所有上限も決められたが、その次期により耕地所有の上限は80haから40ha、69年には21haとなった。

エジプトの最初の農業協同組合は1910年に設立された。1952年の農業改革法以降は再分配された土地を入手した農家だけが加入することを要求されたが、1961には全農家が対象となった。そして、農業生産の組織化や肥料や農薬の生産流通、特定作物の強制買い上げなどが実施された。これらの政策を見ると、前半は農業生産が軌道に乗るよう計画が進められたといえる。

それに対して1974年以降は門戸開放の時期であり、規制の改定により民間活力を導入しようという政策が主となった。そこでは、まず一人当たりの50フェッダン（21ha）を上限とした農地所有制限が廃止された。その結果、200フェッダン（84ha）以上の農地を所有する層も出現した。エジプトでは面積にフェッダンという単位が使用され、1フェッダンが0.42haである。

政府による農作物の買い上げ制度は継続されたが、農家の生産意欲を高めるため買い上げ価格の改正措置がとられた。これによると、米と小麦は1974年を境に国際価格に近づいたが、その後再び国際価格の6割程度となっている。綿花も一旦は国際価格に近づくが徐々に格差が拡大した。サトウキビも同様の過程をたどり8割程度にとどまっている。

エジプトで、経済改革・構造調整プログラムが開始されたのは1991年からであったが、農業分野に関しては1986年から自由化政策が開始された。この自由化政策とは、買い上げ制度の自由化、投入財改革、小作制度の三点である。

このように、エジプトの革命から今日まで農業政策が大きく変化し、初期から中期までは社会主義的改革で農地改革し、農民に農地が行き渡り農業協同組合にも入って個々の農業が円滑に進むよう多くの規制をもうけた。中期以降は、規制の緩和とともに自由化して、生産性の向上に努めたといえよう。

IV エジプトの農業生産

(1) 農業生産の概況

エジプトの総面積は100.2万 km²であるが、土地面積は95.5万 km²であり、農地は3.5%の352万 ha にすぎない。うち樹園地は52万 ha でその多くはナツメヤシである。牧場・放牧地は皆無に等しい。エジプトの人口は8,299.9万人であり、そのうち農業従事者は854万で、一人当たりの耕地面積は0.4ha で零細である。ナイル川流域とそのデルタ地帯を中心に土地生産性の高い農業生産が営まれ農業国家として発展してきた。

農業生産高で見ると2007年現在、穀物は小麦738万トン、米が688万トン、トウモロコシ624万トンなどである。商品作物としては、サトウキビ1,620万トン、テンサイ546万トン（冬作物か）、オレンジ類246万トン、ブドウ149万トン、ナツメヤシ113万トン、綿花11万トン、畜産物は牛乳220万トンなどがある。

次の図は、エジプトの農産物の季節別作付面積の推移を示したものである（図4）。この国の農作物の栽培時期は、冬期、夏期、ナイル期に分けられる。冬期作物は11月から5月にかけて、いわゆる裏作である。夏期作物は3月か4月から9月にかけて栽培されるいわゆる表作である。ナイル作物とはこの国独自のナイル川の増水期を利用して5月から10月に栽培されるものである。夏期作物に必要な水の確保が不安定のため作付を延期してナイル期に栽培する例もあったという。

1965年にはアスワンハイダムの第一期の工事が完成したことにより、ほとんどの地域で通年かんがいが可能となった。そのため、夏季作物の増加とそれに伴うナイル期の作付の減少が

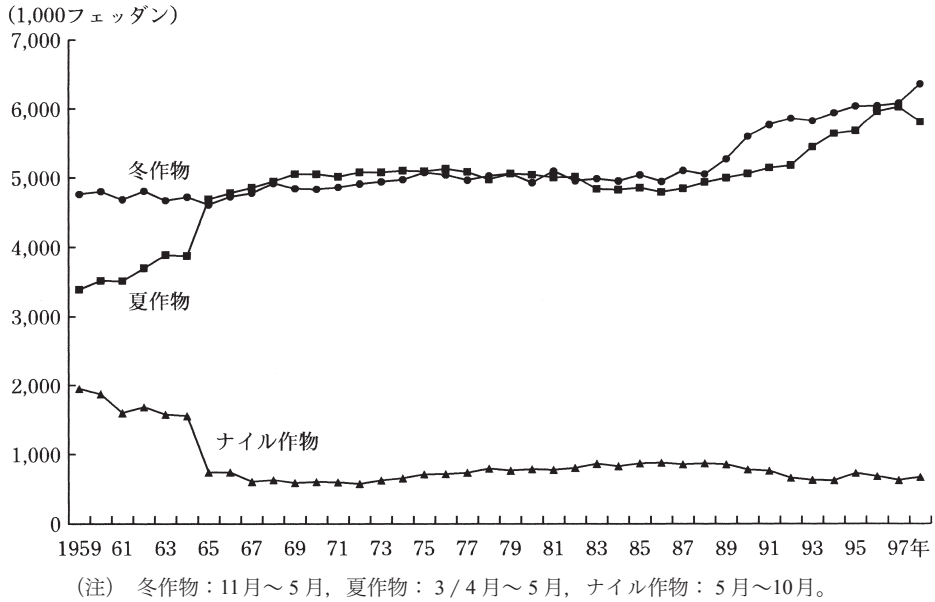


図4 エジプトにおける作期別作付面積の推移

*CAPMAS, various years のデータより土屋一樹作成

見られた。1985年以降は作付面積が増加し、冬期作物と夏期作物が拮抗している状態である。

(2) 主要農産物の生産動向

土屋 (2003) の報告に、過去50年間の主要作物の作付面積、産出量、単位面積当たりの収穫量を図で示しているのので、小麦・トウモロコシ・米・サトウキビ・綿花の5種類を取り上げ検討する。

この作物の取り上げる順序は、比較的規制の緩かった小麦とトウモロコシ、次に米、最後に規制の厳しかったサトウキビと綿花となっている。それ以外に、エジプトの食料を担っていると思われるナツメヤシについても言及する。

小麦は、1952年以降1980年代中ごろまで作付面積に大きな変化はなかった。それは、政府の作付制限と国内価格を低く抑えられていたためである (図5)。1985年以降増加し2000年までに作付面積は2倍、生産量は3.5倍、単収でも3倍に増加している。小麦の生産量は、1999年には約650万トンとグラフで読み取れるが、2007年現在の農業生産量で738万トンと示されるので、約10年間で100万トン増加していることが分かる。2010年3月にエジプト国内を歩いたが、各所で冬作のいわゆる冬小麦の栽培を確認することができた。しかし、小麦輸入量でみ

ナイル川に依存するエジプト農業の一考察

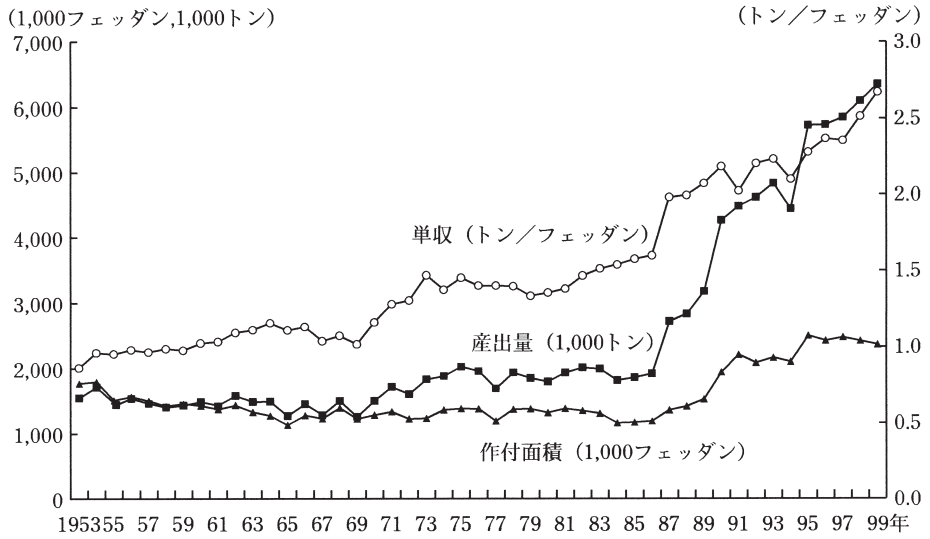


図5 エジプトにおける小麦生産の推移

* 出典は図4に同じ

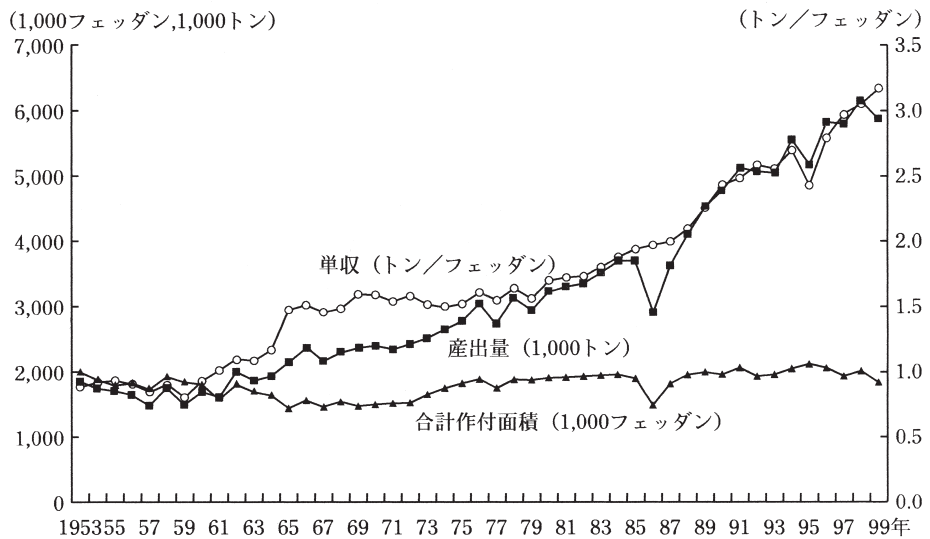


図6 エジプトにおけるトウモロコシ生産の推移

* 出典は図4に同じ

ると世界第3位(4.4%)の591万トンを入力している。ちなみに、日本の小麦輸入量は528万トンで第5位である。

トウモロコシは、夏期とナイル期の両方で栽培可能な作物で1965年以前はナイル期の作付が夏期を大きく上回っていた。ところがこの年以降、アスワンハイダムのかんがいを利用して夏期作物として3/4が栽培されるようになった。産出量は1960年以降ほぼ一貫して増加し、近年は急増している(図6)。トウモロコシの単収は1965年から増加しているが、かんがいの成果が考えられる。1986年の自由化以降急速に上昇している。1999年の生産量は約600万トンと読み取れるが、2007年現在は624万トンと微増している。

米の生産は、作付面積で見ると徐々に増加した(図7)。とくに、1965年のアスワンハイダムの第1期工事の完了で夏期作が可能となり作付面積が増加した。途中1970年代から80年代の後半までは若干減少傾向であった。これは、米と同時期に栽培されるトウモロコシへの転換が起こったためであると考えられている。その後、米は増加に転じ1990年代後半には過去最高の作付面積となった。産出量にしても同様の傾向をたどり、1980年代後半の自由化政策期になると急激に増加した。10年間で2.5倍の産出量となった。1999年は約570万トン、2007年現在では688万トンと大きく増加している。単収についても1980年代後半からの増加が著しい。1999年には1フェッダン当たり3.7トンを記録している。これは、1haあたりに直すと8.8トン

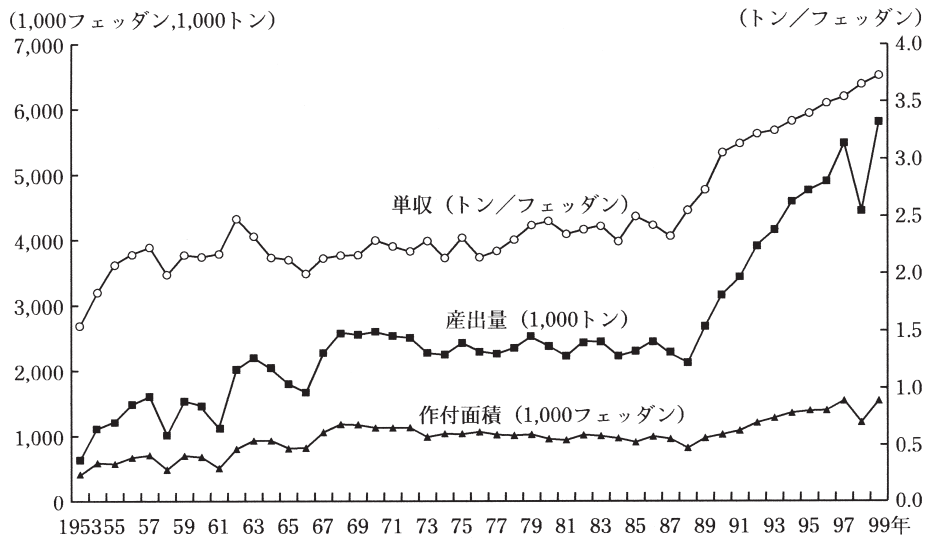


図7 エジプトにおける米生産の推移

* 出典は図4に同じ

となり、10a 当たりでは 880kg で高収量であることが分かる。粉換算など直接比較はできないが、わが国で最も単収の高い新潟県でも 650kg/10a である。2005 年の FAO の統計でも世界一と認定している。これは、1 年間ほぼ快晴で日照時間が長いこと、背丈が 1m 近くにも達し高収量の早稲品種で、この地域は台風などの自然災害が少ないこと、高温乾燥した気候で害虫も少ないことなどによる（堀琢磨：2008）。この結果、エジプトでは今や米が最大の農産物輸出品となっている。2007 年現在、輸出量は 122 万トンで世界第 7 位である。エジプト人の主食は小麦であるが、一人当たりの米の年間消費量（粉重量）は 40kg に近い。米の品種はジャポニカ米が 8 割であり、2 割は輸出用のインディカ米である。1917 年に農業省に品種改良を行う部署が設置され、世界中から集められた 250 種の中から、当地で生産性の高かったジャポニカ米のヤバニ（日本を意味する）とアガミなどが選定されたのが契機となった。エジプト料理のコシヤリの絶妙の食感を出すにはジャポニカ米が欠かせないともいう。

サトウキビは、通常政府との契約で栽培され、また買い上げられていたため政策が生産動向を左右することとなった。サトウキビの生産は、作付面積でほぼ一貫して増加している（図 8）。サトウキビの栽培に必要な水の供給が可能となった 1965 年以降急増している。産出量も作付面積同様のペースで増加した。単収はほぼ横ばいで推移したが 1990 年代中頃の流通の自由化期は若干増加が見られる。サトウキビの輸送風景を現地の各所で観察できた。ナイル川中

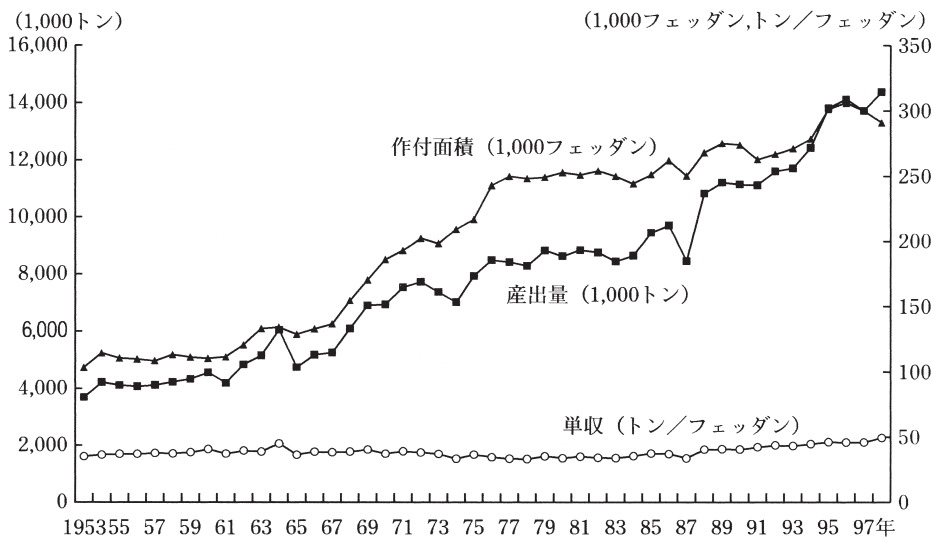


図 8 エジプトにおけるサトウキビ生産の推移

* 出典は図 4 に同じ

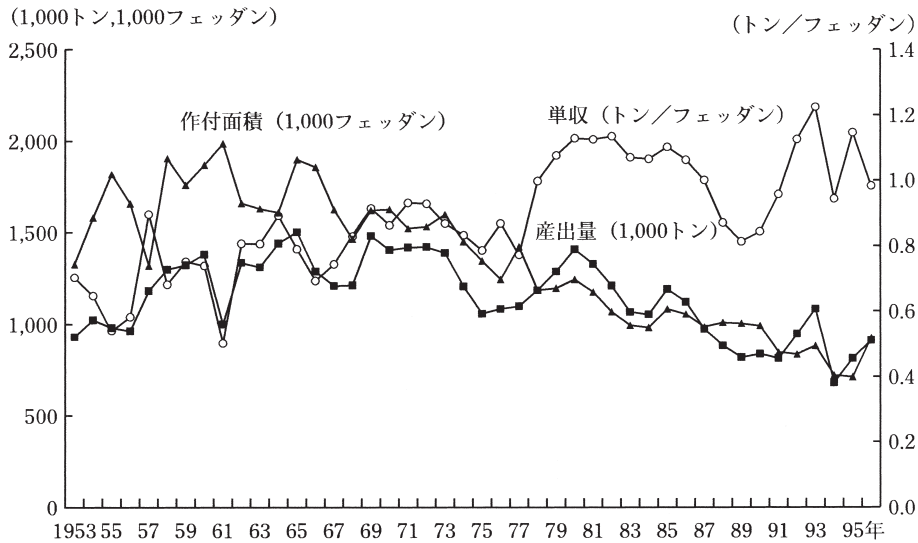


図9 エジプトにおける綿花生産の推移

* 出典は図4に同じ

流のルクソールとエドフの間では、国営の大規模な製糖工場を見ることができた。

綿花は、かつてエジプトの総生産額に占める比率が9割を超える時期が1世紀近くも続き、モノカルチャー経済の典型であった。「白い金」と呼ばれた綿花生産の比率は、大恐慌で陰りをみせ第二次世界大戦後は急速に低下した。革命後の綿花生産は、政府による厳しい作付の規制があり、産出の全量が農業協同組合を通して買い上げられた。作付面積は1960年以降減少している(図9)。品種として長繊維と中繊維の作付面積が減少している。それに対して、中長繊維が増加している。産出量は前半100万トンから150万トンで推移していたが、1987年以降は100万トンを割る年が多くなっている。そして、2007年の統計では22万トンまで減少している。これは、長きにわたり価格統制が行われ買取価格が低く設定されてきたためである。流通の自由化後も売り先が国営紡績企業などに限定されるため、米や野菜などの他の作物への転換が進んだためとも言われている。古代エジプトでは亜麻が衣類として利用されていた。エジプトで綿花が伝わったのは8世紀といわれ、栽培が拡大したのは19世紀半ばである。これは19世紀後半に地中海東部の中東市場でエジプト製の綿織物とイギリスのランカシャーの綿織物とが競合する一方で、南北戦争でアメリカ合衆国からの綿花の供給が不安定になったイギリスがエジプトに綿花を求めたという。しかし、今や綿花の純輸入国になり、綿糸はインドから輸入して織機で織った布を、エジプトの労働力を使って加工・縫製し、欧米に輸出している形態もみられる。夏期作物である綿花は、秋の収穫期にナイルデルタでは大勢の綿摘み(手摘

み)の労働者を見かけるといふ。

主要5作物の生産動向と農業政策の影響をみると1960年代の農業発展重視政策、1965年のアスワンハイダムからの通水、1970年代の農業軽視政策が主要作物の産出動向に見て取れる。1960年代は米、トウモロコシ、サトウキビで産出量は増加したが、1970年代は米、小麦、サトウキビの停滞がみられた。

次に、個別作物への規制と全般的な農業開発政策が生産に与えた影響については、小麦とトウモロコシは比較的規制が緩く、米は中程度、サトウキビと綿花の規制は厳しかった。規制の緩かった作物は農業政策の変更によって増加の傾向であるが、規制の厳しかったサトウキビや綿花は政策変更の影響が明確でなく、個別の政策に反応する余地が少なかったという(土屋：2003)。

農産物の自由化政策(1986年)は、各作物に影響を与えた。綿花を除く他の4作物は大幅な増収をしている。また、綿花生産は特異なものとなり、主要輸出品としてエジプト経済で重要な地位を占めていたため、他の作物以上に厳しい管理下におかれたが、現在は輸入に頼っている。

最後にナツメヤシの役割をみておきたい。ナツメヤシはヤシ科の常緑高木で、その果実は乾燥地帯の主要な食料品といわれている。この作物は、雌雄異株であり自然界では風による受粉によるが、近代的な商業園芸では人工受粉が行われている。2007年現在、ナツメヤシの生産はエジプトが113万tで世界の17%を占め第1位である(表1)。次にイラン、サウジアラビア、アラブ首長国連邦、アルジェリアと西アジアから北アフリカへと続く。

このナツメヤシの果実はデーツといい、この果実が熟するまでに6か月を要する。3月にナツメヤシを見たが、樹頭と葉の間から果実の穂がいくつも出ており、これが当地では9月ごろ熟する。デーツは100g当たり230kcalの熱源があり、主食としての炭水化物や豊富なビタミンCが含まれている。乾燥したものは、100g当たり3gの食物繊維と270kcalの熱源がある。

デーツの柔らかいものや干したものは、そのまま食べるか、あるいはジャムやゼリー、ジュース、菓子などに加工される。粉にしたデーツは小麦と混ぜて保存食にする。乾燥したデーツや種はラクダや馬、犬などの餌にもされ

表1 世界におけるナツメヤシ果実(デーツ)の生産量順位

国名	千トン	%
エジプト	1,130	17.0
イラン	1,000	15.1
サウジアラビア	983	14.8
アラブ首長国	755	11.4
アルジェリア	500	7.5
パキスタン	500	7.5
イラク	440	6.6
スーダン	332	5.0
オマーン	256	3.9
リビア	175	2.6
世界計	6,639	100.0

* FAOSTAT 2009年による(2007年の数値)

る。種子からとれる油は石鹼や化粧品として用いられる。またその葉は帽子の材料や敷物や仕切り布、籠、団扇などにも利用される。幹は建材や燃料としても用いられる。

このようにナツメヤシは、樹園地だけでなく道端にもみられ、農作物の不作時における救荒作物の役割を果たしていたと考えられる。熱帯地方でも、バナナやココヤシなどがそれに当たり、日本の山間地では栃の実がその役割を果たしていた。

おわりに

熱帯地域の農業に関心を持つ筆者は、もう一度エジプトの農業を捉えなおしてみたいとの思いから現地を訪ね、各種の文献から次のようなことが判明した。

エジプトの総面積は100.2万 km²であるが、土地面積は95.5万 km²であり、農地は3.5%の352万 ha にすぎない。うち樹園地は52万 ha でその多くはナツメヤシと推測される。牧場・放牧地は皆無に等しい。

エジプトの場合、全人口2009年現在8,299.9万人のほとんどが利用する飲料水から流域の農地へのかんがい用水まで、すべてナイル川という一本の河川に依存している。エジプトは人口の急増に対処するため水資源の開発の必要に迫られ、巨大ダムの建設へと繋がっていったのである。エジプト農業は完全にナイル川の水に頼っている。かんがい用水の届かないところは、砂漠の世界であることが明瞭に示された。

1970年完成のアスワンハイダムという巨大ダムの出現により、年間555億 m³の水がエジプトに供給されるようになり、農地の造成・かんがい、発電による工業化、観光などに役立つ反面、水没の犠牲、塩害、肥料の購入負担、河川沿いの侵食、風土病の発生、漁業の衰退などマイナス面も多い。

アスワンハイダムの完成によって、約300万 ha のベイスンかんがい地が通年かんがい地に転換され多毛作化がなされ、新たに40万 ha の耕地が造成され、作付面積が大幅に増大した。そして、エジプトの耕地の分布をみると、ナイル川に沿った流域に限定されていること、またナイル川のかんがい用水に規定されていることが読み取れる。

エジプトは、1952年の革命から今日まで農業政策が大きく変化し、中期までは社会主義的改革で農地改革し、農民に農地が行き渡り農業協同組合にも入って個々の農業が円滑に進むよう多くの規制をもうけた。中期以降は、規制の緩和とともに自由にして、生産性の向上に努めたといえよう。

農業生産高でみると2007年現在、穀物は小麦738万トン、米688万トン、トウモロコシ624万トンなどである。商品作物としては、サトウキビ1,620万トン、テンサイ546万トン、オレ

ンジ類246万トン、ブドウ149万トン、ナツメヤシ113万トン、綿花11万トン、畜産物は牛乳220万トンなどがある。

1965年にはアスワンハイダムの第一期の工事が完成したことにより、ほとんどの地域で通年かんがいが可能となった。そのため、夏季作物の増加とそれに伴うナイル期の作付の減少がみられた。1985年以降は作付面積が増加し、冬期作物と夏期作物が拮抗している状態である。

主要5作物の生産動向と農業政策の影響は、1960年代の農業発展重視政策と1970年代の農業軽視政策が主要作物の産出動向からも見て取れる。1960年代は米、トウモロコシ、サトウキビで産出量は増加したが、1970年代は米、小麦、サトウキビの停滞がみられた。農産物の自由化政策（1986年）以降は、綿花を除く他の4作物は大幅に増加している。ナツメヤシは、世界第1位の生産量で樹園地だけでなく道端にもみられ、いざ農作物が取れないときの救荒作物の役割を果たしていたと考えられる。

以上、ナイル川に依存するエジプト現代農業を検討してみた結果、アスワンハイダムによるかんがい施設の充実とエジプト政府の農業政策が大きく影響を与えていることが判明した。将来的にみても、人口が増加することが予想される中、ナイル川の水をいかに効率よく農業利用できるかが大きな課題と言えよう。

参考文献

- 岩淵 孝 (1993) : 「ナイル川とアラブ共和国の悩み」『地球を旅する地理の本 3. 西アジア・アフリカ』大月書店 73-82.
- 土屋一樹 (2003) : 「エジプトの農業開発政策と農業生産の推移」『現代の中東』No. 34 19-41.
- 長澤栄治 (2007) : 「近代エジプトの国家と社会」『朝倉世界地理講座11 アフリカ I』319-332. 二宮書店 (2010) : 『データブック オブ・ワールド』2010年版.
- 畑 明彦 (2008) : 「砂漠の国エジプトの水資源」『Civil Engineering Consultant』Vol. 238 62-65.
- 春山成子 (2007) : 「ナイル川の自然生態」『朝倉世界地理講座11 アフリカ I』193-203.
- 堀 琢磨 (2008/2009) : 「エジプトは今日も快晴」(第1話-第22話)『地理』53-7~54-4.
- 松永紀義 (1980) : 「水資源開発と環境変化—アスワンハイダムの建設を事例として—」『地理』25-7 43-51.
- 山野明男 (1975) : 「ネパールの農業・農山村の現状」『地理』20-2 57-66.
- 山野明男 (1985) : 「西部ジャワ、デサ・チマヒにおける集落と生活」『インドネシア農村地域の変貌』山村研究会 3-21.
- 山野明男 (1986) : 「台湾農業の現状 (一)(二)」『地理』31-7, 8 105-109, 131-137.
- 山野明男 (1991) : 「東南アジアの農業地域—インドネシアの農業と農村—」『世界の農業地域システム』大明堂 53-66.
- 山野明男 (2007) : 「ラオスの地理」『ラオス国の理解のために』永末書店 9-30.

伝達関数モデルによる時系列予測

小 村 賢 二

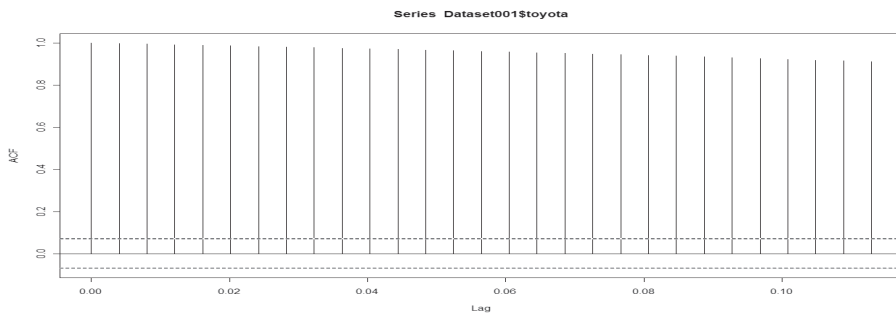
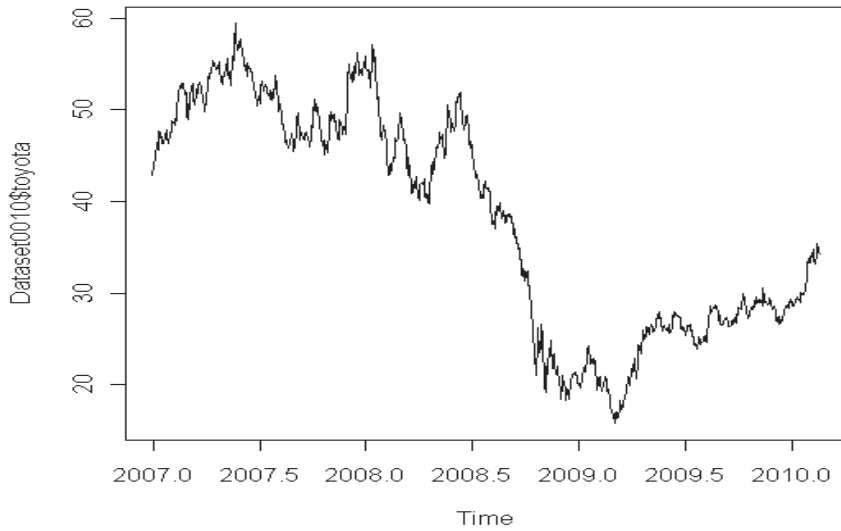
要約;時系列データ $\{y_t \in T\}$ (2007年1月から2010年2月5日まで)の予測問題を考える. この期間には図の如く2008年9月16日のNew Yorkでのリーマン&ブラザー証券の破綻により始まった世界的な金融不安による世界的な株価の下落が含まれている. この要因を時系列モデルの干渉モデルを使い、時系列の構造的な変化後の予測を行なう. R-2.10.1とSASを使い、ARIMAモデルによる予測値と干渉モデルと伝達関数(分布ラグ)モデルを使い時系列の予測値を与えた.

キーワード ; R-2.10.1 , 伝達関数, 干渉モデル, ARIMA, AIC, クロス相関関数

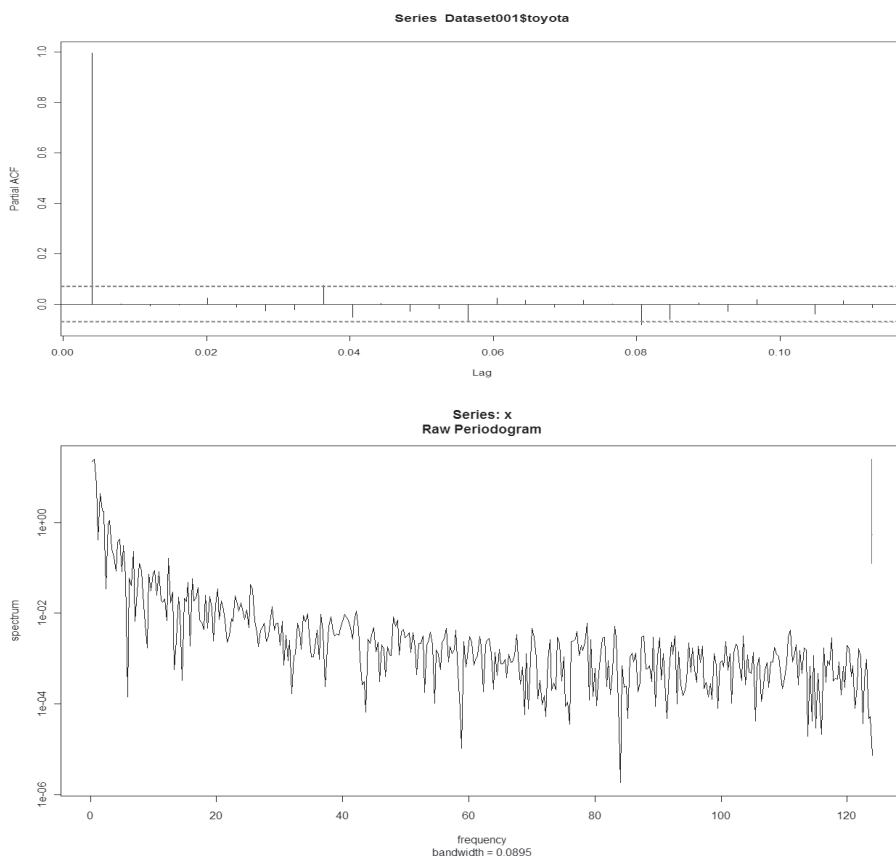
§-1 時系列のプロットとR-2.10.1による予測

R-2.10.1のpackage Rcmdr-Plulag.InのTS-modelにおいてRun Multiple ARMAとRun Multiple GARCHの機能が新たに追加され多変量解析の機能がアップされた. 時系列データ $\{y_t \in T\}$ をR-MySQLによってYahooのデータベース(NYSE)から取得する. 時系列データ $\{y_t \in T\}$ の特徴を把握するためにプロットし、定常性を確認する. 非定常過程であれば、1次の階差 $\nabla=(1-B)$ 、または2次階差 $\nabla^2=(1-B)^2$ を取り、自己相関関数またはコログラムやDF検定(単位根)で確認する. まず干渉モデルのステップ関数を含まないARIMA(12, 1, 0), ARIMA(12, 1, 1)とARIMA(24, 1, 0)によって予測値を比較する.

時系列 $\{y_t \in T\}$ の自己共分散関数と偏自己相関関数のプロットのグラフは以下である.



伝達関数モデルによる時系列予測



```
summary(arma(y))
```

```
> print(forecast(fit, h=6))
```

以下はR-2.10.1による ARIMA(12, 1, 0)モデルの予測値 (h=6) である.

予測標本	Point Forecast	Lo 80	Hi 80	Lo 95	Hi 95
2010.14516129032	34.18068	33.05311	35.30826	32.45621	35.90516
2010.14919354839	34.32548	32.73863	35.91232	31.89861	36.75235
2010.15322580645	34.60547	32.66404	36.54691	31.63630	37.57464
2010.15725806452	34.57247	32.32683	36.81811	31.13806	38.00688
2010.16129032258	34.45219	31.96378	36.94061	30.64649	38.25789

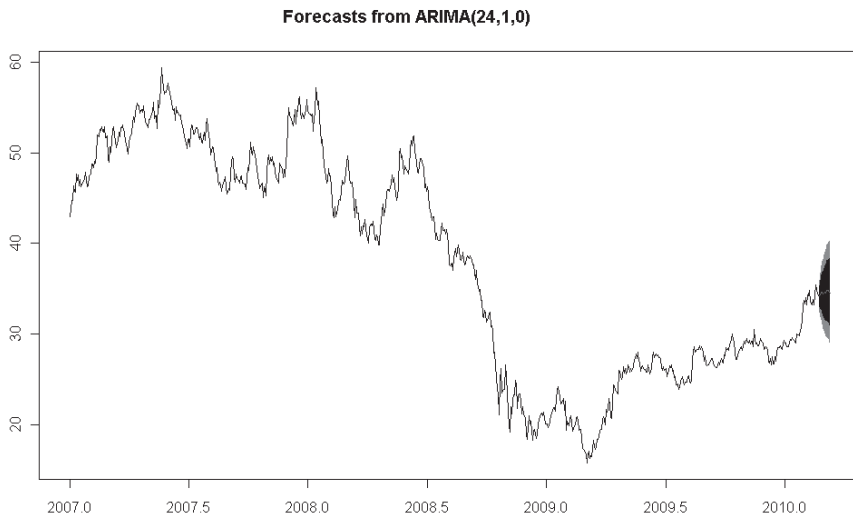
ここで 2010.14516129032 は 780 番目の時系列、以下同様に 2010.14919354839 は 781 番目の時系列である。80%と95%の予測信頼区間である。予測値の精度は標本誤差測定基準として、MSE(平均2乗誤差)、MPE(平均パーセント誤差)、MAPE(平均絶対パーセント誤差)、RMSE

等があり、値の小さい方の予測値が選択される。赤池情報量基準 AIC は $\ln(\hat{\sigma}_a^2) + r \frac{2}{n} + cons.$

である。 $\hat{\sigma}_a^2$ は white noise の分散の最尤推定値。パラメーターの個数は $r=p+q+1$ である。

BIC は次の量である。 n ; 標本数

$$BIC = \ln(\hat{\sigma}_a^2) + r \frac{\ln(n)}{n}.$$



```
> ArimaModel.1
Series: Dataset0010$y
ARIMA(12,1,1)
Call: arima(x = Dataset0010$y, order = c(12, 1, 1), seasonal = list(order = c(0, 0, 0),
period = 248), include.mean = 1)
Coefficients:
ar1   ar2   ar3   ar4   ar5   ar6   ar7   ar8   ar9   ar10  ar11  ar12  ma1
0.4348 0.0038 0.0016 -0.0519 0.0332 0.0220 -0.0048 -0.0731 0.0748 -0.0138 0.0142 0.0289 -0.4416
s.e. 0.4465 0.0391 0.0390 0.0391 0.0455 0.0392 0.0410 0.0393 0.0507 0.0439 0.0395 0.0396 0.4458
sigma^2 estimated as 0.7874: log likelihood = -1011.02
AIC = 2050.04   AICc = 2050.59   BIC = 2115.23
> predar3(ArimaModel.1, fore1=6)
```

伝達関数モデルによる時系列予測

	予測値	lower	upper
1	34.32866	32.58940	36.06791
2	34.38549	31.93415	36.83683
3	34.44285	31.44319	37.44251
4	34.37877	30.91488	37.84266
5	34.27694	30.44296	38.11093
6	34.33219	30.15298	38.51140

Series: y

ARIMA(12, 1, 0) の出力結果は以下である。

Call: arima(y, order = c(12, 1, 0))

Coefficients:

ar1	ar2	ar3	ar4	ar5	ar6	ar7	ar8	ar9	ar10	ar11	ar12
-0.0072	0.0007	0.0079	-0.0532	0.0076	0.0249	0.0098	-0.0690	0.0421	0.0066	0.0125	0.0232

s.e.

0.0358	0.0358	0.0358	0.0359	0.0358	0.0358	0.0359	0.0359	0.0360	0.0361	0.0360	0.0361
--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

sigma^2 estimated as 0.7883: log likelihood = -1012.72

AIC = 2051.44 AICc = 2051.92 BIC = 2112

In-sample error measures:

ME	RMSE	MAE	MPE	MAPE	MASE
-0.01101189	0.88727380	0.67034878	-0.06630615	1.94192744	0.99689155

y <- ts(y\$Close, start=c(2007, 1), frequency=248)

fit <- arima(y, order=c(24, 1, 0)) #ARIMA(24, 1, 0)

plot(forecast(fit, h=12))

summary(fit)

Series: y

ARIMA(24,1,0)

Call: arima(y, order = c(24, 1, 0))

Coefficients:

ar1	ar2	ar3	ar4	ar5	ar6	ar7	ar8	ar9	ar10	ar11	ar12
-0.0098	0.0017	0.0090	-0.0500	0.0175	0.0202	0.0019	-0.0695	0.0414	0.0031	0.0142	0.0283

0.0621	-0.0243	-0.0275	0.0005	-0.0179	0.0021	0.0732	0.0593	0.0132	0.0288	-0.0379	0.0036
--------	---------	---------	--------	---------	--------	--------	--------	--------	--------	---------	--------

s.e. 0.0358 0.0358 0.0358 0.0359 0.0358 0.0357 0.0358 0.0358 0.0359 0.0360 0.0360

0.0360 0.0360 0.0360 0.0360 0.0360 0.0360 0.0360 0.0361 0.0361 0.0360 0.0361 0.0361

sigma^2 estimated as 0.7741: log likelihood = -1005.84

AIC = 2061.67 AICc = 2063.4 BIC = 2178.12

ARIMAモデルによる予測値は過去の時系列の加重ウエイトの和として表現されるから、モデルの推定方法として、ユール・ウォーカー(YW)及び最尤法(ML)による予測値より最適である。過去のリーマンショックによる影響もモデルに含めることができる。ARIMAモデル

$\varphi(B)y_t = \theta(B)a_t$ の予測値は加重ウエイト平均、 $\bar{y}_{t+t-1}(\boldsymbol{\pi}) = \sum_{j=1}^{\infty} \pi_j y_{t+t-j}$ である。ここで

$$\sum_{i=1}^{\infty} \pi_i = 1.$$

§ 2 SAS による干渉モデルと伝達関数(分布ラグ)モデル

以下干渉モデルと伝達関数(分布ラグ)モデルを使い解析すると、干渉モデルよりもモデルの適合度、AICの基準やモデルの識別や推定方法を考えると分布ラグ予測値が選択される。

変数名 = y

系列の階差	1
系列の平均	-0.01112
標準偏差	0.892817
オブザベーション数	778
階差で取り除かれたオブザベーション	1

自己相関係数

ラグ	共分散	相関係数	-1	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	2	3	4	5	6	7	8	9	標準誤差
0	0.797122	1.00000																																																			0						
1	-0.0072504	-0.00910																																																					0.035852				
2	-0.0006273	-0.00079																																																				0.035855					
3	0.0028787	0.00361																																																			0.035855						
4	-0.039295	-0.04930																																																		0.035855							
5	0.0070781	0.00888																																																			0.035942						
6	0.021238	0.02664																																																		0.035945							
7	0.0051234	0.00643																																																		0.035970							
8	-0.054994	-0.06899																																																		0.035972							
9	0.034299	0.04303																																																			0.036142						
10	0.0014749	0.00185																																																			0.036207						
11	0.011900	0.01493																																																			0.036207						
12	0.025488	0.03197																																																		0.036215							
13	0.044722	0.05610																																																		0.036252							
14	-0.023943	-0.03004																																																		0.036363							
15	-0.021547	-0.02703																																																			0.036395						

伝達関数モデルによる時系列予測

16	0.0013358	0.00168		.		0.036421
17	-0.023463	-.02943		*		0.036421
18	0.0069524	0.00872		.		0.036451
19	0.061636	0.07732		. **		0.036454
20	0.039065	0.04901		. *		0.036664
21	-0.014750	-.01850		.		0.036748
22	0.030866	0.03872		. *		0.036760
23	-0.033722	-.04231		*		0.036813
24	-0.0008028	-.00101		.		0.036875

"/ は 2 標準誤差を示します

ホワイトノイズの自己相関検証

ラグ	カイ 2 乗	自由度	Pr > ChiSq	-----自己相関係数-----					
6	2.60	6	0.8571	-0.009	-0.001	0.004	-0.049	0.009	0.027
12	8.83	12	0.7170	0.006	-0.069	0.043	0.002	0.015	0.032
18	13.38	18	0.7684	0.056	-0.030	-0.027	0.002	-0.029	0.009
24	23.00	24	0.5196	0.077	0.049	-0.019	0.039	-0.042	-0.001

変数 s の差分を取りました。

y と s の相関

系列の階差 2
 入力変数の分散 = 0.002532
 オブザベーション数 777
 階差で取り除かれたオブザベーション 2

相互相関

ラグ	共分散	相関係数	-1	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1
-24	0.00022919	0.00507												.									
-23	-0.0003104	-.00686												.									
-22	0.00023959	0.00530												.									
-21	-0.0001075	-.00238												.									
-20	-0.0012271	-.02713												*									
-19	-0.0006478	-.01432												.									
-18	-0.0010875	-.02404												.									
-17	-0.0020148	-.04454												*									
-16	0.00027283	0.00603												.									
-15	-0.0007878	-.01742												.									

-14	-0.0020510	-.04534		* .	
-13	-0.0008271	-.01828		. .	
-12	-0.0005590	-.01236		. .	
-11	-0.0012902	-.02852		* .	
-10	-0.0015513	-.03429		* .	
-9	-0.0021814	-.04822		* .	
-8	-0.0024152	-.05339		* .	
-7	0.00084522	0.01868		. .	
-6	0.00070447	0.01557		. .	
-5	-0.0016250	-.03592		* .	
-4	-0.0006373	-.01409		. .	
-3	0.0011733	0.02594		. *	
-2	0.00085311	0.01886		. .	
-1	-0.0018610	-.04114		* .	
0	-0.0019504	-.04311		* .	
1	-0.0002997	-.00662		. .	
2	-0.0037616	-.08315		** .	
3	-0.0031900	-.07052		* .	
4	-0.0018407	-.04069		* .	
5	-0.0034241	-.07569		** .	
6	-0.0032500	-.07184		* .	
7	-0.0022612	-.04999		* .	
8	-0.0036622	-.08096		** .	
9	0.0018165	0.04015		. *	
10	0.0067095	0.14832		. ***	
11	-0.0018387	-.04064		* .	
12	-0.0031246	-.06907		* .	
13	0.00066003	0.01459		. .	
14	0.0037240	0.08232		. **	
15	0.0018860	0.04169		. *	
16	-0.0041013	-.09066		** .	
17	-0.0049530	-.10949		** .	
18	-0.0045410	-.10038		** .	
19	-0.0028898	-.06388		* .	
20	0.0028378	0.06273		. *	
21	0.0025548	0.05647		. *	

伝達関数モデルによる時系列予測

22	0.00089852	0.01986		.	
23	0.0027645	0.06111		. *	
24	0.00080705	0.01784		.	

“.” は 2 標準誤差を示します

予備推定

初期自己回帰パラメータの推定値

	推定値
1	-0.00603
2	0.00156
3	0.00292
4	-0.05157
5	0.01009
6	0.02615
7	0.00709
8	-0.06999
9	0.04273
10	0.00524
11	0.01581
12	0.02410

ARIMA 推定最適化の要約

推定法	Conditional Least Squares
パラメータ推定値	14
停止基準	Maximum Relative Change in Estimates
反復ストップ値	0.001
基準値	0.000757
代替基準	Relative Change in Objective Function
代替基準値	2.119E-9
勾配の最大絶対値	0.014795
最終反復からの R2 乗変換	0.000038
目的変数	Sum of Squared Residuals
目的変数値	599.8167
Marquardt の Lambda 係数	1E-6
数値的導関数 摂動デルタ	0.001
反復	13

分散 推定値 0.79236
 標準誤差 推定値 0.890146
 AIC 2022.433
 SBC 2087.5
 残差の数 771

* AIC と SBC には行列式の対数を含みません。

残差の自己相関検証

ラグ	カイ 2 乗	自由度	Pr > ChiSq	-----自己相関係数-----					
6	.	0	.	-0.001	-0.000	0.001	-0.002	0.006	-0.001
12	.	0	.	-0.004	-0.001	0.002	-0.004	0.002	0.004
18	4.40	6	0.6225	0.047	-0.032	-0.037	-0.014	-0.025	-0.001
24	11.29	12	0.5039	0.066	0.045	-0.018	0.019	-0.038	-0.011
30	18.08	18	0.4506	0.036	-0.032	-0.008	-0.052	0.056	-0.018
36	27.00	24	0.3043	0.049	-0.019	-0.053	-0.062	-0.020	0.035
42	28.92	30	0.5219	-0.028	-0.022	0.019	0.003	0.013	0.024
48	29.87	36	0.7545	0.004	0.010	0.002	-0.022	-0.013	0.020

偏自己相関係数

ラグ	相関係数	-1	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1
1	-0.00087																					
2	-0.00002																					
3	0.00091																					
4	-0.00152																					
5	0.00588																					
6	-0.00053																					
7	-0.00423																					
8	-0.00076																					
9	0.00193																					
10	-0.00419																					
11	0.00186																					
12	0.00441																					
13	0.04734																					
14	-0.03239																					
15	-0.03741																					
16	-0.01417																					
17	-0.02473																					

伝達関数モデルによる時系列予測

18	-0.00181		.	
19	0.06716		.*	
20	0.04651		.*	
21	-0.01786		.	
22	0.01880		.	
23	-0.03826		*	
24	-0.01353		.	

ARIMA プロシジャ

時系列変数 y のモデル

系列の階差 1

モデル内に平均項はありません.

自己回帰モデルの因子

$$\text{Factor 1: } 1 + 0.01601 B^{**}(1) + 0.01264 B^{**}(2) + 0.00874 B^{**}(3) + 0.05919 B^{**}(4) + 0.00009 B^{**}(5) - 0.02043 B^{**}(6) - 0.00136 B^{**}(7) + 0.07091 B^{**}(8) - 0.04018 B^{**}(9) - 0.00099 B^{**}(10) - 0.01012 B^{**}(11) - 0.01596 B^{**}(12)$$

入力番号 1

入力変数 s

シフト 1

系列の階差 2

総合的な回帰の因子 -0.84978

分母の因子

$$\text{Factor 1: } 1 - 0.83553 B^{**}(2)$$

変数の予測値: y

Obs	予測値	標準誤差	95% 信頼限界	
780	34.3181	0.8901	32.5734	36.0628
781	34.3544	1.2488	31.9067	36.8020
782	34.4005	1.5191	31.4232	37.3778
783	34.3305	1.7444	30.9116	37.7494
784	34.2481	1.9212	30.4826	38.0137
785	34.3209	2.0838	30.2368	38.4051

ここで、干渉モデルの独立変数、2008 年9月16日以後をステップ(step)反応関数で、入力変数の値を $S(\omega)=1$ とする. $S_t(\omega) = 1$ if $t \geq 2008-9-16$. それ以外は $S_t(\omega) = 0$.

以下は伝達関数(分布ラグ)モデルとして、時系列の構造解析を行なう. 伝達関数のシステムの入力変数 $S(\omega)$ の条件付最小2乗法による推定は以下である.

	推定値	Standard Error	t Value	Approx Pr > t	Lag Variable	Shift
MU	-0.0040637	0.03151	-0.13	0.8974 0	y	0
NUM1	-1.64594	0.86529	-1.90	0.0575	s	0
NUM1,1	-0.11406	0.86529	-0.13	0.8952	s	0
NUM1,2	0.36594	0.86529	0.42	0.6725	s	0
NUM1,3	2.57594	0.86529	2.98	0.0030	s	0
NUM1,4	-0.07406	0.86529	-0.09	0.9318	s	0
NUM1,5	1.52594	0.86529	1.76	0.0782	s	0
NUM1,6	1.15594	0.86529	1.34	0.1820	s	0
NUM1,7	1.39594	0.86529	1.61	0.1071	s	0
NUM1,8	0.38594	0.86529	0.45	0.6557	s	0
NUM1,9	2.48594	0.86529	2.87	0.0042	s	0
NUM1,10	-3.87406	0.86529	-4.48	<.0001	s	0
NUM1,11	-1.31406	0.86529	-1.52	0.1293	s	0
NUM1,12	2.76594	0.86529	3.20	0.0014	s	0

Constant Estimate -0.00406

Variance Estimate 0.747727

Std Error Estimate 0.864712

AIC 1964.995

SBC 2029.971

Number of Residuals 766

* AIC and SBC do not include log determinant.

分布ラグモデルとしてモデルを推定し、モデルの切片と入力変数Sである。

Model for variable y

Estimated Intercept -0.00406

Period(s) of Differencing 1

Input Number 1

Input Variable s

Period(s) of Differencing 1

numerator Factors

Factor 1: $-1.6459 + 0.11406 B^{**}(1) - 0.36594 B^{**}(2) - 2.57594 B^{**}(3) + 0.07406 B^{**}(4) - 1.52594 B^{**}(5) - 1.15594 B^{**}(6) - 1.39594 B^{**}(7) - 0.38594 B^{**}(8) - 2.48594 B^{**}(9) + 3.87406 B^{**}(10) + 1.31406 B^{**}(11) - 2.76594 B^{**}(12)$

変数 y の予測値 y_t ,

	予測値	標準誤差	95% 信頼区間
780	34.2559	0.8647	32.5611 35.9507
781	34.2519	1.2229	31.8551 36.6487
782	34.2478	1.4977	31.3123 37.1833
783	34.2437	1.7294	30.8541 37.6334
784	34.2397	1.9336	30.4500 38.0294
785	34.2356	2.1181	30.0842 38.3870

結論;ARIMA モデルと伝達関数(分布ラグ)モデルは時系列の構造変化に対応でき、予測の使いやすさとモデルの識別やモデル選択の基準 AIC において、干渉モデルよりも最適である。R において ODBC(Open DataBase Connectivity)のパッケージは CRAN から求められる。また R でよく使われ RMySQL も同様に求められる。R-2.10.1 と SAS とのデータのやり取りにはパッケージ foreign がインストールされている必要がある。ここで R-2.10.1 のパッケージすべて(2200 個)をパソコンに入れると反応のスピードは少し遅くなることを述べておきたい。

参考文献

- Box, G. E.P., G. M. Jenkins , and Reinsel ,G., (2008), *Time Series Analysis, Forecasting and Control*. Wily , Fourth Edition NJ.
- Brockwell , P. J. and Davis, R . A., (2002) . *Introduction to Time Series and Forecasting*, 2nd ,Springer ,New York.
- Douglas C. Montgomery, Cheryl L .Jennings and Murat, Kulahci .,(2008), *Introduction to Time Series Analysis and Forecasting*. John Wily& Sons ,Inc , New Jersey.
- K , Komura ., (2001). 予測のためのデータ科学 . 晃洋書房
- John , M. Chambers., (2008), *Software for Data Analysis Programming with R* , Springer .CA.
- Phil , Spector .,(2008) ., *Data Manipulation with R*. Springer. New York.
- Robert ,A . Muenchen. , (2009) , *R for SAS and SPSS Users*, Springer ,New York.
- CRAN., (2009) ., *R-2.10.1 Reference manuals*

寺山修司とアンディ・ウォーホルの 実験映画フィルム

清水 義和

01. まえおき

美術評論家の東野英明は、アンディ・ウォーホルが実験映画『エンパイア』の映像を8時間繰り返し映写し続ける意義を評して、ちょうどエリック・サティが一分前後のピアノ曲「ヴェクサシオン」を840回中断せず13時間38分繰り返すよう指示した演奏に似ていると指摘している¹⁾。また、東野はジョン・ケージが現代音楽について行った解釈をウォーホルの実験映画に当て嵌めて『エンパイア』解説の手掛かりを掴もうとした²⁾。云わば、重厚な現代の文明に向かって単調な磔をぶつけ風穴を開け、そこに深い意味を掴もうとする戦略は、エリック・サティやジョン・ケージだけでなくウォーホルや寺山修司の実験映画にも求める事が出来る。

先ず、ウォーホルも寺山も生立ちが他の家族と異なり父を幼い時に失い母子生活を続けた。そのせいか、ダヴィッド・ボウドンはウォーホルのポスター「キャンベルスープ」を見て「子宮」を表していると述べた³⁾。また、ウォーホルの考えには「死」のテーマが絶えずつきまといっている (p. 25)。それにまた、ウォーホルは自分の絵画を「魔術」だとも言った (p. 26)。しかも、ウォーホルは独自の「機械」論を持っていた (p. 37)。他にも、ウォーホルは実験映画『スリープ』で8時間も同じ眠る男を撮り続けた (p. 40)。やがて、ウォーホルは、ジョナス・メカスと出会い本格的に実験映画に取り組むことになった (p. 41)。ウォーホルは実験映画のコンセプトで既成芸術の想像力を否定する (p. 23)。だが、ウォーホルが想像力を否定したのは、あくまでも既存の想像力の否定であって今までにない想像力の発見を目指していた。その意味から言えば、寺山が考える想像力に近いことになる。

どんな鳥だって想像力より高く飛ぶことはできないだろう。(『邪宗門』)

ウォーホルは現代アートに絶えず斬新な発見を求めコンセプチュアル・アート (Conceptual art) にも言及し (p. 128)、こうしてウォーホルは絶え間なく新しい世界を追求して、「鏡に自分が見えますか」という質問に「いいえ」と答えたり (p. 350)、或いはウォーホルは好きな人はという質問に「犬」と答えたり (p. 370)、そして、ディナーの相手はという問いに「テレビ」と答えている (p. 371)。

さて、アメリカの実験映画の移入史の繁栄は、第二次世界大戦中、戦火を避けて、ヨーロッパの前衛映画人の多くが、アメリカに渡ったことが切っ掛けとなった。やがて新しい映画人がニューヨークを軸にして映画制作活動に入り、最初の頃は新天地のニューヨークの前衛映画人はヨーロッパの支流にすぎなかったが、やがて本家のヨーロッパに代わり、実験映画の本流へと急成長を遂げた。アダムス・シトニー編の『アメリカの実験映画』やウォーホルの『ポップイズム』によると、メカスがアメリカで最初に実験映画を制作した経緯が記されている⁴⁾。また、女優のウルトラ・ヴァイオレットが、フランスからウォーホルのファクトリーに移住し、ウォーホルにダリを紹介したり、デュシャンを紹介したりした経緯があり、そうした時代背景からアメリカ実験映画の隆盛の歴史を見る事が出来る。『ポップイズム』によると、ウォーホルはメカスと会って実験映画を制作し (p. 63) また更にウォーホルの『日記』によるとウォーホルはジョン・レノンやヨーコ・オノらと前衛芸術を通して異文化交流を続けた⁵⁾。やがて寺山がアメリカに渡り、ウォーホルらのアメリカ映画や演劇との交流の機会が生まれていった。

或いは、美術評論家の日向あき子は自著『アンディ・ウォーホル』の中で「アンディ・ウォーホルは現代のシャーマンの再来」⁶⁾と述べている。シャーマンは魔術を使って宇宙と交信している。更に、日向によれば、マーシャル・マクルーハンが『グーテンベルグの銀河系』で予見したように⁷⁾、ウォーホルは、シャーマンのようにメディアを媒体にして宇宙と交信していると述べた。現代でも、原始社会のシャーマンは世界各地の異文化社会には実在する。原始の時代からシャーマンは一種の麻薬を使って入神状態に入り宇宙と交信した。マヤ文明ではエル・ドラード (黄金郷) があると信じられたが、シャーマンが麻薬で幻覚状態に入ると、ちらちらと明滅する金の輝きから、黄金には特別な信仰の価値があったといわれる。しかも、マヤ文明の人たちが用いた黄金はずっしりと中身のある黄金像ではなく、金細工師も驚嘆する限りなく薄く引き延ばした金箔で覆われた像であった。マヤ文明の金箔は、ちらちらと明滅する黄金の光を表そうとしている。だから、マルクスが述べたように、近代人が抱く「物神性」を象徴した黄金への欲望に関しては、古代マヤ文明人と近代人との間には天界と俗界との違いがあることを教えてくれる。

いっぽう、ウォーホルは、自分の工房をファクトリーと称し、室内の装飾を銀色で統一し、メディアとしての宇宙パイロットやロケットを象徴した色で表し、しかも自らも銀色の髪を被ってトレードマークにした。更にまたウォーホルは、前に述べたように自ら「機械」でありたいと考えていたようだが⁸⁾、機械の表面を表した銀色の世界は、何処かしら古代マヤ人が憧れた黄金郷と表裏一体を成しているように思われる。『僕の哲学』で、ウォーホルは、テープレコーダーと結婚している (p. 26)、と語っている。

また、ウォーホルが描いたシルクスクリーン『マリリン』は、ぺらぺらで中身はなく、室内の光線を落とし薄暗くすると、シルクスクリーンの『マリリン』の映像は消えてしまう。このように『マリリン』は見えるか見えないか儂い絵画であるために、フェルメールが描いた『デルフトの眺望』から浮かび上がる光に満ちた色彩の分厚い質量感とは対極にある異質な世界である。

さて、ウォーホルが書いたエッセイ『僕の哲学』、『ポップイズム』、『日記』を読むと、現代人の心の病と間接的な因果関係にある覚醒剤によって、若いアーティストたちや、殊に、トルーマン・カポーティやテネシー・ウィリアムズの生命が空しく失われていく姿が記されている。更に、『ポップイズム』では、ダンサーのフレディ・ハーコーが覚醒剤を常用してトランス状態になり、窓から飛び降り自殺するに至る場面が描かれている。この描写は、ミルチャ・エリアーデが『シャーマニズム』に描いたシャーマンの修行と幾分重なって見える。また、フレディの葬儀のときには会葬者は『チベットの死者の書』を朗読するが、これはシャーマンの死と再生の儀式を想起させる。それにまた、寺山自身も独自に自家版『死者の書』を書いている⁹⁾。

ところで、先にも触れたがウォーホルと寺山修司の世界は、幾つかの点で類似性がある。2008年劇作家の登り山美穂子氏は、『さらば映画よ』の名古屋公演で寺山が引用した夥しい数の映画シーンをウォーホル的なコラージュ感覚で演出した。たとえば批評家のガイルズは『ウォーホルの伝記パーティの後の孤独』で、ウォーホルには複製感覚があると述べている¹⁰⁾。更に、萩原朔美氏は「ニューヨークの出来事」(『寺山修司研究』第3号)の中で、寺山が『マリリン』を購入したときのエピソードを書いている。だが、先に触れたように日向あき子は自著『アンディ・ウォーホル』で、「ウォーホルは現代のシャーマン」と語っている。けれども、本稿では、日向が書かなかった、ウォーホルと寺山との芸術やシャーマンの関係を論及することにする。

また、ウォーホルがシルクスクリーンやアンダーグラウンドフィルムを制作したファクトリーは、寺山が家出少年を使って実験演劇映画を制作した天井桟敷と好対照を成している。けれども、イーディ・セジウィックの活動とカルメン・マキさんの活動と表面的に比較すること

はある程度できるとしても、芸術活動として、ウォーホルとイーディとの関係を天井桟敷の関係者に当て嵌めて見ることは軽々に論じることは出来ない。確かにウォーホルとジュリアの母子関係と寺山とハツの母子関係はある程度似ているが、ウォーホルは寺山のように母胎への回帰を詳しくエッセイに書いたり芸術作品に表したりはしていない。けれども、ウォーホルの場合、自分が母のジュリアになりたかったのであり、若い娘のイーディになりたかったのであり、従って或る意味でウォーホルとイーディとの関係を通してピグマリオンのような役割を見る事が出来るかもしれない。それから、ウォーホルは晩年になって、聖母子像の連作を際限なく描き続けたのであるから、その点が寺山の母胎回帰と似ているのかもしれない。しかしながら、寺山は、生涯一貫して女性を男性よりも逞しくて強い姿として描いている。少なくとも、そここのところが二人のアーティストの思いが幾分異なっているところである。

また、本稿では、寺山修司がウォーホルから影響を受けた実験映画フィルムを考察する。前述したように、日向あき子は「アンディ・ウォーホルを現代のシャーマン」と論じている。けれども、一方で、日向は寺山が『寺山修司演劇論集』で「俳優は現代のシャーマンだ」と述べたことについて何も論及していない。従って、本稿では、その点に焦点を当てその理由を解明していく。また、日向はエリアーデの『シャーマニズム』を批評しているが、レヴィ=ストロースが『悲しき熱帯』に描いた「母胎への回帰」を殆ど論及していない。しかも、寺山とウォーホルは母子関係が濃密でありながら、日向はウォーホルと寺山の母子関係の相関性についても殆ど論じていない。もしかしたら、その理由はウォーホルが寺山のように母子関係を俳句や短歌や映画や演劇で繰り返し描いたようには語っていないからかもしれない。しかしながら、ウォーホルが敬虔なカソリック教徒であり、晩年は聖母子像のイコンを曼陀羅の様に描き続けたことは注目しなければならない。従ってそこから見えてくるのは、結局根っ子では、二人が子宮回帰のコンセプトで繋がっているように思われる。そこで、ひとつの方法として、寺山とウォーホルの間に鏡を置いて、二人のアートを相互補完しあっている場所に焦点を当て考究することにする。そのきっかけになるのは、寺山がウォーホルから影響を受けたといわれる実験映画『ヘアカット』であろう。本稿では、寺山が、ウォーホルから影響を受けたと思われる『ヘアカット』と寺山の実験映画や『書を捨てよ、町へ出よう』の散髪のシーンや『田園に死す』の散髪台のシーンとの関連を比較しながら二人の実験映画を明らかにしていく。

02. ポップイズム：シルクスクリーンから実験映画フィルムへ

アンディ・ウォーホルは、マリリン・モンローが1962年8月5日に亡くなった直後に、映画『ナイアガラ』からモンローのスチール写真をシルクスクリーンに何枚も転写した。ウォー

ホルは既にニューヨークの行きつけのレストラン‘セレンビティ3’でモンローと偶然出会っていたかもしれない。だが、ウォーホルは多くの有名人毛沢東やエルビス・プレスリーらをシルクスクリーンに転写した。しかも、モンローの被写体は、ウォーホルが夥しい数のキャンベルスープ缶詰をコピーした時のように無機質で何の感情移入もしない作品であった。一方、モンロー研究家の中田耕治氏はモンローの死の直後連載中だったモンロー論を中断し、急遽それまでの論考を纏めて刊行したが、一部の批評家から「モンローに感傷的だ」と誤解された経緯を述べている。それに対してウォーホルの反応の仕方は中田氏と対照的であった。もっとも、注目しなければならないのはウォーホルがシルクスクリーンに使ったのも中田氏がモンロー論を書くきっかけとなったのもモンローの映画『ナイアガラ』であった。しかるにガイルズは、『ウォーホルの伝記』で映画『ナイアガラ』はマリリンの実像を映していないと批評している (p. 188)。後に、ウォーホルは、ケネディが暗殺されたときジャクリーヌ夫人の喪服姿をシルクスクリーンで描いたが、その時も、ガイルズによると、ウォーホルは、「人々がどうしてケネディ暗殺事件であんなに大騒ぎするのか分からない」 (p. 235) と反応したと述べている。そして、ガイルズは、その原因はウォーホルの病弱な幼年時代にさかのぼると指摘している。つまり、ウォーホルにとって幼いころ死への恐怖と同時にそれと相反するように映画スターモンローへの憧れがあったという (pp. 185-6)。或いはまた、ウォーホルの『ポップイズム』によると、ウォーホルの芸術と密接な関係があったフレディ・ハーコーが亡くなった時 (p. 104) や、イーディ・セジウィックが亡くなった時 (p. 377) も、ウォーホルは殆ど感情を外に表さなかったという。けれども、ウォーホルが『ポップイズム』の中で多くの頁を割いて、フレディやイーディについて詳細に語っていることは見落としてはならない。更に『ポップイズム』の中で、ウォーホルは、『チベットの死者の書』を朗読してフレディの死の追悼式を行った (p. 108) と書いている。ガイルズは『ウォーホルの伝記』で、「ウォーホルがフレディの空中飛躍を写真に撮っておけばよかった」 (p. 254) とファクトリーの誰かが語ったと書いている。

けれども一方で、『ポップイズム』の中で、ウォーホルは、メカスのためにイーディの出演作の回顧展を開催したと記している (p. 155)。また更にウォーホルは、以下のように述べた。

In the future everyone will be famous for fifteen minutes (p. 165)

将来、誰でも15分間は有名になれるだろう。

確かに、イーディは『タイム』や『ライフ』に写真が載った (p. 165)。だが、ガイルズは『伝記』で「イーディは1年足らずで一生を生きてしまった」 (p. 263) と述べている。それから、イーディが次第に狂い始めた。後に、1983年になって『イーディ』の自伝が刊行された

が、ウォーホルは『ウォーホルの日記』の中で「悪口が書かれた」と怒っている¹¹⁾。因みにハワード・スーンズの『ボブ・ディランの生涯』によると、少なくとも、モンローの芸歴と比べると明らかだが、イーディはハリウッドへの手掛かりをボブ・ディランと模索するが、結局成功しなかったという¹²⁾。だからイーディの失墜の原因はウォーホルだけの責任ではなかったのである。さて、ガイルズは『伝記』でウォーホルの芸術をウィリアム・ホガースの絵に譬えて高く評価している (p. 271)。更に、『ポップイズム』によると、やがて、イーディに代わってニコやヴィヴィが登場し (p. 184)、更にウルトラ・ヴァイオレットが加わった (p. 264)。そして、ニューマンはこの時代を総括して『フィルムコメント』を引用しながら、1960年代のイーディとウォーホルのアンダーグラウンドのポップ現象を1930年代のポニーとクライドのアンダーワールドの犯罪に比して論述している (p. 245)。また、ウォーホルは1967年カンヌ映画祭にアンダーグラウンド映画として初めて『チェルシー・ガールズ』を出品した。殊に1968年にはオカルトが流行った (p. 321)。やがてヴァレリー・ソラナスが現れ (p. 341) ウォーホルを狙撃した (p. 343)。こうして、ファクトリーの時代に幕が下りることになる (p. 359)。

ともかく、結局のところ、その後ウォーホルにしても亡くなる直前には、誰の付き添いもなくひっそりと亡くなったのである。そもそも、ウォーホルは生身の人間よりも機械の方が好きだと言ったり、生の人間よりも電話の方が好きだと言ったりした。実際、ウォーホルの『日記』もテープレコーダーや電話で交わした音声を録音した会話をトランスクリプトして書かれた本である。ところで、ウォーホルは『マリリン』を制作したがそのモデルのモンローも電話魔であった。アンソニー・ソマーズは『マリリン・モンローの真実』で、モンローが電話魔で生身の人間と話すよりもそれ以上に電話で他人と話したと書いている。言い換えれば、モンローは傍に話す生人間の相手が居なくなると孤独に陥り絶えず電話したのであり、精神科医は、ここにモンローの自殺願望を読み取っている¹³⁾。だが、このモンローの電話魔とウォーホルの電話魔には、どこか共通した類似点がみられる。ただし、二人の電話魔が幾分異なるのは、ウォーホルの電話内容とモンローの電話内容であろう。モンローはジャン・コクトーのドラマ『人間の声』を連想させる。いずれにしても、ウォーホルはモンローの写真だけでなく、電話魔や声音さえもコピーしようとした (p. 111)。またある意味では、モンローもウォーホルの電話魔も現代流行の携帯小説の先駆を成したとみてもいいかも知れない。いっぽうウォーホルの『日記』をトランスクリプトし編集したハケットは、「ウォーホルの『日記』は部分的には意味を成さないかもしれないが、『日記』を全て読めば、ウォーホルの人物像が分かるはずだ」と述べている。

... the diaries should be read in sequence. (p. xxiv)

言い換えれば、ハケットは、ウォーホルの『日記』全体を読めば分かるように編集しているので、信憑性に欠けるという批判的な批評がある。ともかく、ウォーホルが突然亡くなったので何のために電話録音を記録として残したのか、或いはウォーホルが死んだあとに残された膨大な録音テープを如何するつもりだったのか不明であった。また、ウォーホルは、書物ばかりでなく、映画に間接的に関与するだけで、シルクスクリーンさえも、助手のジェラード・マランガが刷るのをウォーホルはその場所に立ち会っただけであり、自分は関与していないと述べている。ガイルズが『伝記』で述べているように、ウォーホルのアートは、芸術家個人の制作というスタンスが消滅してしまい、従って、客観的に見てウォーホルが工房（ファクトリー）の一部に過ぎなくなると意識していたとすれば、ウォーホル自身も工房（ファクトリー）という機械の一部にすぎないと広言していたことと関連があったのかもしれない。ジェラードがアンディ・ウォーホルについて次のように述べている。

The secret to Andy's success was his own self-effacement (p. 199)

アンディの成功の秘密は自分自身を消滅させたことである。

つまり、ウォーホルは『ポップイズム』の中で自分はファクトリーという工房に居たが、共同作業を行っていた傍観者にすぎなかったと言わんばかりである。しかし、この遣り方は、演劇のアンサンブルの概念と幾分似ている。また、個を捨て集団で芸術を創造するというのは、ブレヒトのベルリーナアンサンブルのメソッドを思い出すが、もしかしたら、ウォーホルも、自分がファクトリーの一部として共同で仕事をしているという観念があったのかもしれない。むろん、ブレヒトが共産圏へ行って、自分のドラマを自由に作れず党に従って上演することに抵抗があったと言われる。けれども、ウォーホルの場合は、もしかしたらアンサンブルで仕事を制作することが自分の性格には合っていると思ったのかもしれない。この一面を見逃すと、ウォーホルがモンローやケネディやフレディやイーディの死に感情過多にならず非情とも思われるほどの無関心さで作業を続けた意味は分からなくなる。従って、やはり、ウォーホルの発言から見えてくるアートはブレヒトの異化効果と幾分似ているとも解釈できるかもしれない。日向あき子は、次のようにウォーホルの言葉を引用している。

ブレヒトは、誰もが同じように考えたらいいのだと言ったそうだ (p. 195)。

この点を考慮すると、ウォーホルは、フレディやイーディのように相手の特異な才能があることが分かっているにもかかわらず、覚醒剤に溺れ身を崩して集団作業に支障をきたした彼らを排除したの

はウォーホルが必ずしも冷酷だったからだとはいえない。とは言うものの、ウォーホルは、アンサンブルとは対極にあったモンローやイーディの弱さや弱点を憎み避けたけれども、反面駭しい『マリリン』やイーディの未完の膨大なフィルムを残した。恐らく、ウォーホルにとって、『マリリン』やイーディの未完のフィルムは、やはりウォーホルの理想の女性を表しており、ウォーホルは彼女らを造型したピグマリオンとしての役割を果たしたのであろう。ところでバーナード・ショーが劇作した『ピグマリオン』では、イライザはヒギンズによって改造された人形(=ロボット)となった。モンローがシルクスクリーンに転写され改造された映像はこのピグマリオンが造形した人形に似ている。ウォーホルは、スクリーンのモンローにしか興味がなかったと思われる。だから恐らくウォーホルにとって、イーディもまた、ちょうど、ビリー・ワイルダー監督が映画カメラで映しラッシュでみたモンローのようだったに違いない。つまりビリー・ワイルダーが言うように、ロケ中のモンローは麻薬中毒に侵されパラノイアで心を病んだ女優であった。或いは、モーリス・ゾロトフの『ビリー・ワイルダー イン・ハリウッド』によると、ワイルダーは映画のラッシュに映ったモンローを愛したが、麻薬中毒に侵されたモンローの日常を憎んだようだ¹⁴⁾。ウォーホルも、麻薬中毒に侵されたイーディを嫌い、イーディがファクトリーから一年後には出て行ったときウォーホルはイーディを探し求めようとしなかったようだ。

さて、ウォーホルの映画でも最高傑作のひとつだと評価されているのは『チェルシー・ガールズ』だが、スクリーンに二つの画面を繋げアットランダムに映写しただけで殆ど意味がない。或いは、例えば、ガイルズの『伝記』によれば、ウォーホルの映画が特異なのは、ビリー・ワイルダーのナンセンスなコメディ映画とは対照的であって、フェリーニ風であったからだという (p. 281)。また、絵画でいえば、ウォーホルの『マリリン』はマルセル・デュシャンのような芸術作品の痕跡を少しも残さず、殆ど芸術的な意味を削いだコピーにすぎないと評された。ガイルズによるとウォーホルは美大生の頃からデュシャンの影響を受けたが、デュシャンよりも徹底して既製の芸術性を削いだ (p. 224)。従って、ウォーホルのシルクスクリーンの『マリリン』が新しい芸術とみなされるには時間がかかり、なかなかスキヤンダル性を拭いきれなかったという。

また、ビリー・ワイルダー監督の映画に出演しているモンローは、ワイルダーのナンセンスなコメディ映画の中でも群を抜いていたという。しかし、ウォーホルの『マリリン』は一見するとモンローの同じ写真の被写体をコピーして機械的にシルクスクリーンとして並べただけ過ぎないように見える。

ところが見方を変えるとウォーホルがモンローの写真をシルクスクリーンに転写した作品『マリリン』やホテルの二部屋の窓をアットランダムにスクリーンに映写し続けた実験映画

『チェルシー・ガールズ』は、ウォーホル独自の芸術を考えるとときかなり重要である。というのはガイルズが述べているように、ウォーホルの『マリリン』と『チェルシー・ガールズ』とは、デュシャンがモナリザに髭を描いたり『泉』と題して便器を展覧会場に陳列したりした芸術作品とかなり好対照をなしており、しかもデュシャンの影響が幾分みられるとしても、究極的にはデュシャンが求めた芸術性さえも消去したところにインパクトがある (p. 166)。

さて、一見モンローとチェルシー・ホテルとは何の関係もないように見えるが、ガイルズによれば、チェルシー・ホテルはモンローの三番目の夫であったアーサー・ミラーがしばしば宿泊したホテルの名前であった (p. 296)¹⁵⁾。つまり、ウォーホルの代表作となった『マリリン』や『チェルシー・ガールズ』は、1960年代のアメリカ芸術文化の象徴として縮図となっていたのである。

1960年代のアメリカ生活の内実を知らない人にとっては、エジプト古代文明のミイラやマヤ文明の遺跡と同じように、チェルシー・ホテルは馴染みのない対象にすぎない。ところがエジプト文明やマヤ文明に隠れている未知の世界が古代研究によってそれまで隠れていた部分が少しずつ明らかになっていくような具合に、ウォーホルの『マリリン』や『チェルシー・ガールズ』は、最初は一見スフィンクスの謎のような趣を与えるが、ウォーホルの『日記』や『ポップイズム』や伝記『マリリン・モンローの真実』や『マリリン・モンローの生涯』を調べていくうちに、遂に『マリリン』や『チェルシー・ガールズ』の現実世界の全貌が見えてくるようになる。

だが、ウォーホル関連の文献を調べウォーホルが造形した『マリリン』や『チェルシー・ガールズ』の謎解きをすると、その結果それらはウォーホルの『マリリン』や『チェルシー・ガールズ』とは別物になってしまうかもしれない。確かに、ウォーホルの顔はスフィンクスの顔のようであり謎めいていると言われるが、ウォーホルの顔とスフィンクスの顔が違うのは「ウォーホルの顔には中身がなく空洞だ」¹⁶⁾と言われるように、ウォーホルのアートは被膜のように極薄いベールで覆われているからである。

一方、モンローの詳細な自伝が明らかになり、アーサー・ミラーがチェルシー・ホテルに宿泊していた生活が明らかになるに従い、ウォーホルが生きたニューヨークの生活も明らかになってきた。すると忽ち偶然が必然に変わる瞬間が生じた。例えば、モナリザの髭は既にシェイクスピアの『ベニスの商人』に登場する男装したポーシャの髭にも見られたし、便器の尿の化学作用が生み出す芸術作品も登場した。

さて、翻ってみるとリュミエールの映画は、短い期間であったが映画が発明された当時人々を驚愕させた。そこで、メカスはウォーホルがシルクスクリーンの『マリリン』や映画『チェルシー・ガールズ』で、人々をあっと言わせたのもリュミエールと狙いは同じだと見ている。

しかしながら、ウォーホルはリュミエールと同じように人々をあっという間に驚かせて一回生の妙味を蘇らせただけではない。つまり、ウォーホルは、リュミエールと同じワンショット・ワンシーンを繰り返しただけではない。というのは、ウォーホルはエリック・サティの「ヴェクサシオン」のような単調な繰り返しから驚愕を更新する映画作りを模索したからである。一方でウォーホルは複雑な映画手法を使って映画『バッド』や『ヒート』を作るけれども、ジョン・ケージの音楽に暗示を受けた鮮烈でインパクトのある映画『エンピア』を作って、商業映画にはない実験映画を産み出したことも事実である。

リュミエールは世界初という映画の珍しさに頼ってしまい、さらなる映画の実験を考えなかった。ウォーホルは、リュミエールと違って技術革新によるモンタージュ映画の時代にいたので、劇場映画と芸術作品的な映画の両方を比較できた。その結果、ウォーホルは、技術革新だけに頼るのではなく、リュミエールが捨てた、ワンショット・ワンシーンの実験映画に斬新なアートを見つけ出したのである。

元々、ウォーホルは、同じ絵を繰り返し繰り返し描き続けていた。また、映画でもカメラを移動せず、固定して映写したが、その方法は、ウォーホル自身の画法にも似ていた。だが、わたしたちが同じ絵画を繰り返し何度もよく見ると、つまり、ジョン・ケージの音楽のようにそれまで聴き落していた無声映画に音が聞こえてきたりする。或いは、ウォーホルは、同じモンローを描き続けたが、その作業は、同じシーンを繰り返し撮る実験映画と似ている。ここには、商業映画と異なって、映画という媒体を使って、新たな芸術作品としての絵や彫刻するのと同じ手法がみられた。

ウォーホルは『チェルシー・ガールズ』でチェルシー・ホテルの部屋を二つの画面にくっ付けて一つのスクリーンで撮り続けたが、この映写法は、モンドリアンが、同じキャンバスの上に同じ風景をそれぞれ塗り潰しては何度も繰り返し描き続け、ついに、新造形主義にいたる作業とどこかしら似ている。

ウォーホルが、シルクスクリーンの『マリリン』や映画『チェルシー・ガールズ』で、ニューヨークの現実生活を異化する手法は、幾分ブレヒトの異化効果を思い出させる。また、かつてウォーホルが演劇に関心がありブレヒトの芝居上演に関わったことは、ウォーホルの反復の原点と関わりがあるように思われる。確かにブレヒトが、劇で人間性を殺してまで資本主義社会を異化し、判で押したように社会主義体制を実現しようとしたようだ。そして、今度はウォーホルが、それと同じことを、人間の感情を全く殺してしまいアメリカ資本主義制度を異化し、シルクスクリーンや映画で実現しようとしたとみることができるのである。

或いはまた、ブレヒトが『三文オペラ』でアウトローがロンドン・ソフォーを支配した状況を社会主義理論で異化して舞台化したのとは異なって、或いは、また、オルグレインが『黄金の

腕』で1930年代にアル・カポネが麻薬でシカゴを支配した時代とも異なり、今度は、ウォーホルが、そうした1930年代の社会状況をひっくりかえして、『マリリン』や映画『チェルシー・ガールズ』を制作することによって、いわゆる、1960年代にマフィアが麻薬でアメリカ全土を支配した状況を、ポップカルチャーによって異化して描こうという姿勢が見える。

1960年代のポップカルチャーの世界では、ロイ・リクテンシュタールがマンガを使ってポップカルチャーをアートに昇華し続けた。だが、ガイルズの『伝記』によると、ウォーホルは、シルクスクリーンを使って古典的な方法で新しい芸術を生み出したにもかかわらず、途中で止めてしまい、実験映画に転向して、ロイ・リクテンシュタールのように自分の芸術を推し進めなかったといわれる (p. 216)。

確かに、ウォーホルがシルクスクリーンで開発した新しい芸術を途中で終えてしまって、実験映画に転身したことは、リクテンシュタインが成し遂げた芸術の完成度に比較して未完成の感がぬぐえない。だが、ウォーホルは、リクテンシュタインのように自分の作品を既存の芸術観にまでわざわざ高めようとはしなかったのである。

それにまた、ウォーホルが制作したシルクスクリーンの『マリリン』と実験映画『チェルシー・ガールズ』には、密接な繋がりがある。

エジプト古代文明のミイラやマヤ文明の遺跡は、生の古代社会を現さず、それらの痕跡を辛うじてその薄い被膜に留めているにすぎない。一方、ウォーホルも、またシルクスクリーンの『マリリン』や実験映画『チェルシー・ガールズ』だけでなく、レオナルド・ダビンチの『最後の晩餐』をシルクスクリーンに転写した作品も辛うじてその薄い被膜に留めたにすぎないのかもしれない。だが、次いで、オリジナルのモンローやチェルシー・ホテルやレオナルド・ダビンチの『最後の晩餐』を比較して見ていると、やがて奇妙な逆転が起こる。というのは、現在、生のマリリン・モンローもチェルシー・ホテルも『最後の晩餐』も失われてしまい、従って現物はこの世には全く存在しない。その結果、現物に代わってウォーホルの実験映画『チェルシー・ガールズ』やレオナルド・ダビンチの『最後の晩餐』をコピーしたシルクスクリーンが新たなアートとなって定着することになった。しかも一度、このウォーホルのポップアートを受け入れると、その途端に、眼が新たな世界に馴染んでしまいウォーホルのポップアートの中で新しく生活出来るようになる。

今日では、ポップアートの影響が遠因にあるせいなのか、携帯小説が現れてくると、今度は忽ち反対に「1960年代の寺山修司や唐十郎のアングラ演劇は饒舌でありすぎる」と批判されるようにさえなった。けれども、この種の批判は、元をただせば、ウォーホルのポップイズムの焼き直しのように思われる。というのは、昨今、「森鷗外や夏目漱石は難しく読めないが、太宰治の小説は読みやすい」という批評もあるが、この批判もどことなくウォーホルのポップ

ズムの二番煎じのように思われてくるからである。

それだけではない。鴻上尚司氏のドラマ『恋愛事件』では、リアリズム演劇や『新劇』に比べると台詞や所作が軽薄であり、殆ど「ぺらぺら」で「ひらひら」な台詞のやり取りで舞台が覆われている。しかし、鴻上氏の軽薄な台詞や所作に一度感染して、いわゆるウォーホル中毒症状を起こすと、ぺらぺらな会話やひらひらな動きの世界が堪らなくリアル染みて来る。この言語感覚も、実は、ウォーホルのポップイズムの焼き直しに思われてきてしまうから不思議である。

かつて18世紀にマルクスが『資本論』によって人間の尊厳を一個の労働力に還元したとき人間の尊厳はマヤ文明のエルドラード（黄金郷）のように失われてしまった。更に、今度はウォーホルのポップイズムが現れるとちょうどマクルーハンが『ゲーテンベルクの銀河系』で象徴したようにコンピューター革命のもたらした所産となって人間の尊厳を極薄の被膜に変えてしまった。それに『僕の哲学』の解説によると更に人間は労働力から電波に変わって更に、いっそう「ぺらぺら」で「ひらひら」¹⁷⁾になってしまったかのようなのである。

03. アンディ・ウォーホルの実験映画フィルム

ウォーホルの母ジュリアはチェコからの移民だったので、アメリカへ移民したとき、チェコ語と英語を混ぜて話したという。また、『ポップイズム』によると、メカスはリトアニア人なので英語を使って書物を書くよりも映画で表した方が表現し易いと考えたようだ (p. 62)。或いは、ウォーホルがデザインや映画や録音テープを使って自分の考えを表現したのも、メカスと似た動機があったからかもしれない。また、ウォーホルがインタビューで質問にあまり答えなかったり話さなかったりしたのは、スピーチよりもデザインや映画や録音テープを通して自分のプリミティブでアヴァンギャルドなアートを理解してほしいと考えたからかもしれない。

さて、日向あき子は『アンディ・ウォーホル』で、ウォーホルが「映画制作をする動機」を尋ねられたとき、「映画はカメラをスイッチ・オンにすれば、自動的に映画作品を撮ってくれるから、絵の制作よりも簡単だ」と答えたという (p. 198)。これは裏を返せば、映画で15分間人間を撮影し続ければ、誰でも15分間有名人になれることを意味しているかもしれない。確かに、美術館に展示されている無数の肖像画を一枚一枚15分も見る人はまれであろう。それに、映画は一秒間に24コマある写真を高速度に回転することによって、本来は静止画である筈なのだが、人間の目の錯覚によって、動いているように見える。しかも、映画は、画家が何年もかけて描いた一枚の絵画を、ほんの1/24秒以上の速度で撮ってしまう。ところが、ウォーホルは、再び、映画を静止画に戻すかのように、同じシーンを繰り返し繰り返し映写し

続けた。そしてウォーホルは映画の裏側に極薄の被膜のように隠れていたアートを探りあてようとした。

また、ウォーホルは外部に馴染めず内に籠る性格であったので、そこで生身を隠してしまい、機械の一部に成りたいと言ったのであり、またウォーホルの『僕の哲学』の中では、テープレコーダーと結婚した (p. 26) と言ったのも、結局、ウォーホルが外部に打ち解けられない性格だったからではないだろうか。『僕の哲学』の中で、ウォーホルは次のように言っている。

アンディは自分になりたいもの——機械——になった。彼は人々の身に起こる悲惨な出来事を淡々とテープレコーダーに記録する機械だった (p. 26)。

更にウォーホルは他人に身体の一部に触られると悲鳴を上げたという。或いはウォーホルが自閉症のような症状を呈したのは幼少から病弱で貧しい苦学生であったことと関係してくるかもしれない。ガイルズは『伝記』でウォーホルのような自閉症の性格を、コリン・ウイルソンが『アウトサイダー』で描いたアウトサイダーに見出そうという興味深い指摘をしている (pp. 120-121)¹⁸⁾。つまり、ガイルズはウォーホルをアウトサイダーだと述べている (p. 121)。しかも、ガイルズによると、先に述べたように「ウォーホルは自分を消去する」と指摘している。けれども、もしもガイルズがコリン・ウイルソンの『アウトサイダー』を引用するのであれば、ウイルソンの『オカルト』も引用すべきであった。というのは既に日向あき子が指摘したように、ウォーホルの自我の消去はエリアーデが論じるシャーマンに近いからである。それに、シャーマンは孤独である。

ともかく、ウォーホルは自分の意見を主張するよりも、他の人の意見を具象化しデザインした。こうして、他人のアイデアに身を隠し、他人のコンセプトで出来上がった作品を制作した。ウォーホルはシルクスクリーンの『マリリン』もジェラードが殆ど制作したものと断言したり、キャンベルスープ缶詰のレッテルをデザイン化したのも他人のアイデアから生まれたものと言ったりした。ウォーホルはインタビューを受けても一緒に居る仲間に質問を振り替えてしまって自分では殆ど答えなかった。絵のサインもウォーホルの母親ジュリアが書いたり、贋作が出回ってもさほど驚きはしなかった。極端な例は、講演を頼まれると、ウォーホルの体形に似た仲間がウォーホルのトレードマークであった白の鬘と黒の革ジャンパーを身につけて身代わりを演じた。しかも講演中にウォーホルの偽物だということが分かっても素直に謝罪した。或いは、ウォーホルは母親を真似たり、イーディと同じ出で立ちをしたり、更に、母親やイーディに同化しようとさえした。ウォーホルが自分を消そうとする行為は、中身を消して外観だけになってしまおうという願望の現れであった。またウォーホルは演劇に関心を持っ

たのは、自分ではなく他者になることが出来るからだったかもしれない。ところで、コリン・ウイルソンはアウトサイダーの典型としてバーナード・ショーを挙げている。ショーは、自分を「パブリック・ショー」と「プライベート・ショー」に別け、「パブリック・ショー」の仮面によって「プライベート・ショー」の自分自身を隠したという。ウォーホルは、いつも自分の周りに美男美女を侍らせて醜い自分自身の姿を目立たなくしたり、鼻の整形手術をしたり、鬘を被ったり、サングラスを掛けたりして醜い容貌を隠した。また、前述したようにシルクスクリーンの『マリリン』も照明の加減で見えなくなってしまう仕掛けがある。こうしてみると、ウォーホルには変身願望が根底にあったのかもしれない。いっぽう寺山も『さらば映画よ』でスクリーンは死んだ人の格好の隠れ家だと言っている。従って、ウォーホルも最初シルクスクリーンに死のイメージを追い求め続けたが、やがて誰もが死ななければならぬ運命からの隠れ家として、変身願望、他者として復活したいという願望をスクリーンに表したのかもしれない。

04. トルーマン・カポーティ

ウォーホルの『日記』には、ウォーホルとカポーティとの交流が頻繁に出てくる。カポーティが『ティファニーで朝食を』で描いたホリーのモデルは、1960年代のニューヨークに生活する若い女性たちであった。ジェラルド・クラークの『カポーティの伝記』によると、実際、カポーティは『ティファニーで朝食を』が映画化される時ホリー役をマリリン・モンローに演じさせたいと考えていた¹⁹⁾。というのは、実は、かつて、カポーティは1954年ジョン・ヒューストン監督からモンローを紹介されたからだ。だがホリー役はオードリー・ヘップバーンに決まってしまった。ともかく、元々カポーティ自身が女性的だったから、彼自身がホリーに一番近いモデルであったわけである。それにまた、ウォーホルは、マリリン・モンローが亡くなった時に、シルクスクリーンに『マリリン』を転写したのである。だから、もしも仮に、ウォーホルのファクトリーでモデルであったイーディ・セジウィックがモンローの面影を幾分か映していたとすれば、それでイーディがホリーの面影を反映していたとしても少しもおかしくないことにもなる。となると、カポーティが『ティファニーで朝食を』で描いたホリーのモデルの一人がイーディであったと仮定することも可能であった²⁰⁾。ウォーホルがグラフィックデザイナーの駆け出しの頃、若くて流行作家のカポーティが書く小説の挿絵画家になりたいと憧れていたから、今度は著名人となったウォーホルが若い素人同然のイーディを見て憧れの女性ホリーのイメージと重なっていったとしても不思議ではなかった。こうしてウォーホルにとって、ホリーはイーディとなり、イーディはウォーホルがピグマリオンとして生み出

したホリーに変身する。ジーン・スタインによると、『イーディ'60年代のヒロイン』の中で、結果的に、ある意味で、イーディはウォーホルでもあるのだから両性具有になると指摘している²¹⁾。実際、先に触れたようにウォーホルは、カポーティの小説の挿絵画家になろうとして、カポーティにファンレターを書き、カポーティの自宅の周りをうろつきまわりカポーティの母親を苛立たせたというエピソードがある。

ちょうど、ウォーホルとイーディはシェイクスピアの『十二夜』に出てくるセヴァスチャンとヴァイオラの双子兄妹のようであり、しかもヴァイオラが男装のセザーリオとなってこの双子兄妹が両性具有を表しているのとパラレルになっているのが分かる。こうしてみるとウォーホルが少年の頃母親になりたいと思ったり、更に成人してからイーディになりたいと思ったりした願望にはウォーホル自身が女性になりたいという願望を表していたからかもしれない。

また、イーディ自身も、ウォーホルの外見を模倣したといわれる。ウォーホルは銀色の髪に黒の革ジャンパー姿をトレードマークにしていた。ウォーホルは、自分の革ジャンパーはマロン・ブランドのコピーであり、ジェームス・ディーンのコピーとも言ったが、イーディもウォーホルのスタイルをコピーした。二人はよく一緒にいたが、遠くからイーディとウォーホルを見ると二人の区別がつかなかったという。もしかしたら、ウォーホルは、イーディを自分の化身のように考えていたのかもしれない。だから、ウォーホルは、『ティファニーで朝食を』を読んだとき、ホリーが、ウォーホルの化身であったイーディに重なったのかもしれない。つまり、かつて、ウォーホルがカポーティを追いかけた自分の姿とイーディの姿が重なったのかもしれないのである。

カポーティの初期の小説『遠い声 遠い部屋』は、エドガー・アラン・ポーのスタイルが読みとれるが、失われた少年の頃の時間を想起する試みは、カポーティが目標にしたプルーストの『失われたときを求めて』に描かれた少年の瑞々しいイマジネーションに溢れているといわれる。また、ウォーホルは、幼い時に失った父の面影を『遠い声 遠い部屋』に求める事ができるともいわれる。

さてクラークの『カポーティの伝記』によるとカポーティはプルーストの『失われた時を求めて』に匹敵する小説を書こうとしていたという (p. 275)。だからカポーティの小説のうち『冷血』は『ボヴァリー夫人』に譬えられるならば、カポーティの『叶えられた祈り』は、プルーストの『失われた時を求めて』に発展する予定だったといわれる。ちょうど、プルーストの『ジャン・サントウイユ』を含む一連の作品が『失われたときを求めて』のエチュードであったように、カポーティが書いた未完の『叶えられた祈り』はアメリカ社交界を現した『失われたときを求めて』として完結されるはずであった。実際プルーストの『失われたときを求めて』にしても最終稿ではなかった。プルーストは40代の時に『失われたときを求めて』の

結末にあたる『見出されたとき』の構想を得てから冒頭の『コンブレ』を書き始めたのであった。だからカポーティの『叶えられた祈り』はプルーストの『見出されたとき』に匹敵するロマンであると思われるのである。

ウォーホルは『日記』の中でカポーティにウォーホル自身の執筆スタイルを説明し、カポーティを励ました。ウォーホルはテープレコーダーで自分のスピーチを録音したり、或いは電話で秘書のパット・ハケットが自分のスピーチを記録し録音したりした。ウォーホルの電話録音を転写したハケットは『日記』だけでなく『ポップイズム』やシナリオ『バッド』を執筆した。『僕の哲学』も録音から転写された書物であるようだ (p. 94)。プルーストにも『失われたときを求めて』の口述筆記者セレスト・アルバレがいて重要な役割をした。ハケットはこの口述筆記者に相当する。因みに太宰治の小説も津島美智子が口述筆記して書かれた。ところでカポーティは日本に旅行したとき太宰の小説に興味を持っていると述べた。或いは、これはカポーティがウォーホルの口述筆記に関心があったことと関係があるかもしれない。それに、太宰は薬毒中毒にかかり、しかも無頼派であったから、カポーティは太宰の小説に『ヴィヨンの妻』に惹かれたのかもしれない。つまり、カポーティはフランク・ヴィヨンに関心があり、自作の『冷血』の冒頭にもヴィヨンの詩を引用している²²⁾。

『冷血』のラストシーンでは絞首刑の場面が描かれている。『冷血』は実際に起こった事件がルポルタージュ・スタイルで描かれているが、『冷血』の冒頭のヴィヨンの詩を思い起こせば、『冷血』が単なるノンフィクションではないことが分かる。

さて、ウォーホルは最初「死」をテーマにした『マリリン』や『電気椅子』をシルクスクリーンに描き続けた。いっぽうカポーティは『冷血』の中で電気椅子ではなく絞首刑として死刑を描いた。だが、『冷血』はやはり、ヴィヨン以来ブレヒトの『三文オペラ』に至る文学の伝統を踏まえたものと読みとれる。さて、病弱なウォーホルの場合、死は幼い頃から身近にあった。だから、「死」を象徴している『電気椅子』に魅入られるようにしてシルクスクリーンに描いたのかもしれない。

若い頃ウォーホルはカポーティのファンであった。だからウォーホルはカポーティが書いた小説の挿絵を描きたいと望んでいた。このウォーホルとカポーティの関係は画家のオーブリー・ビアズレーと作家のオスカー・ワイルドとの関係を思わせる。またウォーホルはマチスやピカソのようなタッチやコラージュで絵を描きたいと考えていた。さて、クラークの『伝記』によると、カポーティは、『叶えられた祈り』の中で、テネシー・ウィリアムズを思わせる登場人物を辛辣に描写している (p. 489)。『叶えられた祈り』は未完の小説なので速断はできないが、元々、カポーティがプルーストの『失われた時を求めて』に匹敵する小説を書こうとしていた。だから、クラークが『伝記』の中で例にひいているように、元来プルーストの描写が

「非情なまでの批判的な研究」であり辛辣でもあったのだから、カポーティの人物描写が個人の私生活を単に暴露した小説にすぎなかったと見るのには抵抗がある (p. 470)。かつて、アンドレ・ジッドがプルーストのレオニ叔母さんの描写が大げさだと評して『失われた時を求めて』をガリマール社から出版しなかった経緯を考えていくと、一概に『叶えられた祈り』の評価が不評であったからといって駄作だということにはならない。

また、クラークが『伝記』の中で、カポーティは、晩年、『失われた時を求めて』と格闘したが、結局、『叶えられた祈り』は断片にすぎず、晩年は作品に恵まれないまま、禿頭となり肥満で麻薬中毒に侵されていたと述べている (p. 491)。このようにみえてくると、カポーティは、ウォーホルとの地位が、後年逆転したと見えるかもしれない。しかし、『失われたときを求めて』に出てくるシャルリュス男爵がサロンの中心人物から最後に身体の自由が利かない老残の身をさらすのと似て、同じように、アメリカ文学界の寵児であったカポーティが薬物漬けになり転落して死地に赴く姿には、或る意味で、晩年のワイルドとも似た姿と重なって見えてくるのである。実際或る意味でカポーティがプルーストよりも壮絶な人生を送りながら、その体験を、薬物中毒を克服して、正気に戻って書けなかったことは残念であったろう。一方、ウォーホルは、チェコ移民の病弱で貧乏苦学生から、遂には、晩年には、名声がカポーティと逆転して、アメリカ社交界の寵児の栄光を昇りつめていった。

けれどもウォーホルにしても凶弾に倒れ九死に一生を得て晩年を送ったことも忘れてはならない。カポーティは『遠い部屋、遠い声』や『ティファニーで朝食を』や『冷血』で文壇の頂点に登り詰めたが晩年は作品に恵まれずしかもライフワークの『叶えられた祈り』は未完に終わってしまった。ウォーホルが『日記』の中で若い頃カポーティに憧れたがその後若さも作品の勢いも衰弱したカポーティを痛烈に批判したのは手厳しい。だが先に触れたようにウォーホルにしても銃弾に倒れながらも辛うじて死を免れた身だったのだからカポーティの態度に苛立ちを覚えたのかもしれない。1984年の『日記』でウォーホルはカポーティの死を記述している (p. 755)。更に1985年12月22日の『日記』ではウォーホルはカポーティが書こうとして録音した芝居のテープを見つけ聞き直すがそのテープではウォーホルばかりが喋っていて、肝心のカポーティの音が殆ど録音されてはいなくて役に立たなかったと回想している (p. 888)。

05. テネシー・ウィリアム

ウィリアムズの名前はウォーホルの『ポップイズム』や『日記』にしばしば出てくる。ウィリアムズはウォーホルの映画『ヒート』が気に入ったようだ。『ヒート』ではサマーセット・モームの『ジゴロ』に出てくる若い男のようなサンドロが老若男女を手玉に取る。ラストシー

ンで嫉妬に狂った元女優が若者をピストルで射殺しようとする。だがピストルには弾丸が入っていない。このラストシーンはウォーホルが、ヴァレリー・ソラナスに銃撃された場面のパロディーであり、もしかしたらジョン・レノンと異なって銃弾を受けても生き残ったウォーホルの想いをそこから読みとることができるかもしれない。ウォーホルは1980年12月9日の『日記』の中で「ジョン・レノンのニュースを観ていて怖くなった」(p. 443)と述べている。更にまた、ウォーホルが、映画『ヒート』で若い男が何もしなくて凶たく生きていく姿を描写している件は、ウォーホルのポップイズムのコンセプトを伺わせる。ドナルド・スポターの『伝記』によると、恐らく、ウィリアムズは、若者を演じたサンドロが放つ魅力に自然に関心が向いたのだらうと述べている²³⁾。というのは、サンドロに心引かれるホモセクシャルは、ウィリアムズの本質的なホモセクシャルのパロディーと読みとれるからである。つまり、ウィリアムズが自分のドラマに書いた『欲望という名の電車』に見られるブランチの重々しい心の苦悩に比べると、『ヒート』に描かれたホモセクシャルはパロディーになっていて、軽薄でペラペラなポップ調で描写されているが、かえって、そのシーンが痛快に思われたのかもしれない。また、ドットソン・レイダーの『伝記』によると、ウィリアムズの『小舟注意報』には、ウォーホルとキャンディが出演したと述べている²⁴⁾。更にスポターは『伝記』で、『小舟注意報』の上演について、ポール・モリセイの報告を紹介している (p. 302)。

スポターの『伝記』が指摘するように、ウィリアムズは『欲望という名の電車』に描かれたような死のテーマに惹かれていた (p. 358)。また、スポターの『伝記』では三島由紀夫の割腹自殺が論じられている (p. 295)。つまり、ウィリアムズは『回想録』の中でも、三島由紀夫が輪廻転生を信じていたことに懐疑的であったことを表明している²⁵⁾。しかも、批評家のスポターはウィリアムズが書いた『回想録』はウィリアムズがとりとめもなく書きとめたに過ぎず、また幾つかの思い違いがあると指摘している。だから、ウィリアムズの主張は信憑性に欠けるという。とはいえ、『回想録』を通して、少なくともウィリアムズの思考の一端を垣間見ることにはできる (p. 308)。結局、スポターの『伝記』によると、ウィリアムズは、モンローやカポーティのように薬物中毒に嵌り込み死ぬ (p. 262)。

さてこのようにしてみると、1960年代のアメリカ文化史の断面をウォーホルが集めた知人についての証言から俯瞰してみる事が出来るかもしれない。つまりウォーホルが収集した証言を起点にして60年代の全貌を見晴らす事が出来るかもしれないのである。ウォーホルはシルクスクリンを始めたがシルクスクリンの技法に行詰ると映画に転身した。次いでウォーホルが銃弾に倒れると今度は電話録音を使って日記を記録し死の直前まで続けた。或いはウォーホルの人生を見ていると案外寺山の人生とも似ているかもしれないのである。というのは寺山も俳句短歌に行詰ると映画に転身し最晩年にはビデオレターを残したからである。

無論アメリカのポップカルチャーと日本のポップカルチャーは随分異なる。だが少なくともウォーホルの『日記』の最後の部分と寺山のビデオレターにはある種の共通点がみられる。

ところで、ウォーホルはウィリアムズを『日記』にしばしば引用していて、しかもスポーターも『伝記』で引用しているが、ウィリアムズは、チェーホフのドラマにある死のテーマに惹かれていた (p. 125)。チェーホフは、元々医者であった。それにまた、ウォーホルの『日記』に、カポーティが出てくるが、カポーティは、フロベールやプルーストに惹かれた。彼らの両親も医者であった。だから少なくとも、医者視点から、カポーティやウィリアムズを解説しなおす必要があるかもしれない。また、医者視点からいえば、病気で苦しんだ寺山も医者視点から解説する必要がある。少なくとも、手掛かりとなるのは、デュシャンは『失われた時を求めて』を読まなかったけれども、またウォーホルも、もしかしたらチェーホフもフロベールもプルーストもあまり知らなかったかもしれないが、それでも徹底的に観察者の態度を取り続け、カポーティやウィリアムズを観察して『日記』に記録した。或いはまたロナルド・ヘイマンの『テネシー・ウィリアムズ』の伝記によると、カポーティは『叶えられた祈り』の中で、ウィリアムズをモデルにした男ウオーレス氏を辛辣に描写している²⁶⁾。このようなカポーティの視点はもしかしたら医者視点で見た視点であると言っていいかもしれない。

また、ウォーホルの一連の電話記録は一種のモノログにもみえる。というのは、ウォーホルはインタビューで他人との対話となると、殆ど自分からは話さず相手に話させた。それにもかかわらず、ウォーホルは電話記録では饒舌になり、しかも一方的に話続けたからである。しかも、ウォーホルの電話記録からは、カポーティやウィリアムズとの時間的な関係も教えてくれる。言い換えると、ウォーホルの電話記録は、或る意味では、医者視点のカルテに似ているかもしれない。つまり、医者視点のカルテのような具合に、ウォーホルの電話による記録を読むと、そのデータから、カポーティやウィリアムズや他にもエリザベス・テラーやジャクリーヌ・ケネディ未亡人などの心身の状態が伝わってくる。さて、これとは対照的に寺山が電話によって記録を残した録音テープは余り残っていない。むしろ、寺山の場合ウォーホルの『日記』とは異なり、夥しいエッセイから、幅広い寺山の交友関係を窺うことができる。例えば、寺山とオルグレンの交友関係は、記録としてエッセイの中に残っている。とにかく、少なくとも、ウォーホルの『日記』から、ウィリアムズの人生という時間の流れの一部を僅かであるが汲みとることができる。さて、ウォーホルは1983年3月3日の『日記』の中でウィリアムズの死について論述している (p. 620)。更にまた、ウォーホルは、数々の友人達の死んだ後になってから、ヨーコ・オノについての記述を『日記』の後半に頻繁に記録することになる。

06. ネルソン・オルグレンの『朝はもう来ない』と『黄金の腕』

1930年代アル・カポネがシカゴを麻薬で支配した時代をネルソン・オルグレンは『朝はもう来ない』や『黄金の腕』の中で描き市民が麻薬に支配され自滅していく姿を告発した。一方1960年代にはウォーホルは『僕の哲学』『ポップイズム』『日記』の中でアーティスト達が麻薬で自滅していく姿を告発している。この点でオルグレンとウォーホルの間には共通点が見られるが異なる面もある。その違いは1930年代に比べて、1960年代は、雑誌、写真、映画、テレビ等のメディアによって、人間の存在が全く希薄になってしまったことである。テレビのメディアはローマ法王のニューヨーク訪問を伝えたが、その画面ではローマ法王の中身が薄い皮膜になり軽くなってポップ現象に変わってしまった。

また1930年代オルグレンがシカゴの市民を克明に描いたどん底の闇の世界は、1960年代になると、ウォーホルが、メディアによって、薄い皮膜に写し撮ってしまう。オルグレンが『朝はもう来ない』で描いた電気椅子は、監獄の奥底に隠されて陽の目を見ることはなかった。だが、ウォーホルは、シルクスクリーンを使って、ぺらぺらの皮膜に微かに写し撮り、これでもかといわんばかりに、何枚も電気椅子をシルクスクリーンに表わして並べて観客に見せた。

つまりオルグレンが『朝はもう来ない』の中で描いた電気椅子は活字によって眼に見えないが、その代わりに読者の想像力を刺激して脳裏に死の刻印となって重くのしかかった。或いは、ヴォーボワールがオルグレンをインタビューして『アメリカの日々』に綴った電気椅子でさえも活字の背後に隠れていた。

ところが、ウォーホルは、電気椅子を、メディアのようにひらひらのシルクスクリーンに写し撮って観客に見せたのである。ウォーホルがシルクスクリーンに描いた電気椅子とヴォーボワールがエッセイに描いた電気椅子とオルグレンが小説に描いた電気椅子を比べると、ジャン・ジャック・ルソーが失われた黄金時代と虚無の近代とを対比したエッセイを想いうかべてしまう。無論、ウォーホルは敬虔なカトリック教徒であったから、興味本位で電気椅子をシルクスクリーンに描いたのではなく、むしろ現代の虚無感を写し取ったのである。

さて、オルグレンは『黄金の腕』の映画化で、小説と映画が違うことに抗議してハリウッドの映画監督オットー・プレミンジャーを裁判に訴えさせた。しかしながら、映画『黄金の腕』でフランキーを演じたフランク・シナトラの伝記を書いたキティ・ケリーやジェイムス・スパタやピート・ハミルによると、1930年代と1960年代では麻薬の被害は底辺の庶民だけでなくあらゆる層に感染し汚染が拡大していったことが分かってくる。

ところで、寺山のエッセイ『アメリカ地獄めぐり』によると、当時寺山修司はポップアートに調査にニューヨークへ訪れたが、その途中に1930年代のシカゴを知るオルグレンに会いに

行っていることが分かる²⁷⁾。或いは、また、寺山はシナトラの伝記をむさぶるように読んだと証言している²⁸⁾。当時、寺山がアメリカでオルグレンやウォーホルを調べてエッセイに残していたことは日本の実験映画やポップアートの変遷を辿るときに重要である。しかも、寺山は自分のアート作品の実験映画にもその技法を活かした。

07. 寺山修司の実験映画フィルム

寺山がウォーホルをどのように考えていたかは、萩原朔美氏のエッセイ「ニューヨークでの出来事」を読むとある程度予測ができる。寺山は、ニューヨークでウォーホルの『マリリン』を買い、同行した萩原氏にもウォーホルの『マリリン』を勧めた。当時、寺山は、自分の芝居をラママシアターで上演するために支配人のエレン・スチュアートとの会見を望んでいた。寺山は、『アメリカ地獄めぐり』の中で、エレンが主宰するパーティに参加した時の模様を次のように書いている。

バスケットが客席にまわされると、前方に坐っているミケランジェロ・アントニオーニや、アンディ・ウォーホルのスタジオの「ウォーホル・ガールズ」たちが紙幣をその中にぼんぼんと投げ込む (p. 40)。

ウォーホルは、集団で行動していたので、もしかしたら「ウォーホル・ガールズ」たちの中に居たと思われる。恐らく寄付金も、ウォーホルのお金であった可能性がある。多分、寺山は、ウォーホルの近くにいたのだろうが、生のウォーホルよりも、絵画や映画に描かれたウォーホルのアートの方に関心があったと思われる。従って、寺山は寡黙なウォーホルに会って話し合うよりも、むしろ、ニューヨークでウォーホルの『マリリン』を購入したり、実験映画『チェルシー・ガールズ』を見たりしたほうがウォーホルのアートをよりよく理解できると考えたのではないだろうか。それに、当時の寺山にとって、ウォーホル以外の他に多くのアメリカのアーティストたちと会ってみたいかと思われる。しかも、前述したように、同じ時期に、寺山は、オルグレンに会いに飛行機でニューヨークからシカゴに飛んでいる。

さて、寺山は、ウォーホルが実験映画『ヘアカット』の中で延々と床屋の散髪を続けるショットに影響されたと言われている。ガイルズの『伝記』によると、『ヘアカット』は観客を重要な媒体に考えていると指摘している (p. 243)。だが、寺山が、仮にウォーホルの実験映画『ヘアカット』に魅了されたとするなら、例えば、その一例を寺山の実験映画『じゃんけん戦争』で二人の男が延々とじゃんけんを続けるワンショット・ワンシーンにその影響を見るこ

とが出来るかもしれない。或いはまた、寺山は実験映画『書を捨てよ、町へ出よう』の冒頭シーンで、父親が息子の散髪をしている場面を描いている箇所にもその影響を観る事が出来るかもしれない。更にまた、寺山の実験的な映画『田圃に死す』でも、寺山が、田圃の真ん中に、理髪店の散髪台をコラージュしているのを確認することもできる。

他にも、寺山がウォーホルの映画ではなくて、シルクスクリン『マリリン』からではあるがそこから影響されて創作したと思われる作品がある。例えば、寺山の『毛皮のマリー』は、名前は異なるが、詩の頭韻のように「マリー」は「マリリン」とリズムが重なり、二人は容易に繋がる。またマリーの下男が憧れた女優にジーン・ハローがいる。下男が醜女のマリーに変装して語る話にジーン・ハローが出てくる。

下男 ジーン・ハローの映画、観たことある？ ジーン・ハローはとてもいい女でしたよ²⁹⁾。

こうして、寺山は巧みにマリリン・モンロー（ノーマ・ジーン）とジーン・ハローを自作に結びつけている。また、ガイルズの『伝記』によるとメトロがジーン・ハローのメダルを配ったようにウォーホルは『マリリン』を転写しアイコンに変えたと述べている（p. 186）。その意味で、ウォーホルが描いたマリリン・モンローの死のイメージは寺山が『毛皮のマリー』の中で描いた醜女のマリーが語るジーン・ハローの死のイメージと重なっているかもしれない³⁰⁾。さて、『毛皮のマリー』でマリーと欣也は母子関係である。また、カポーティが『ティファニーで朝食を』でホリー役にマリリン・モンローを使いたかったことは先に述べた。だが、寺山はエッセイ『さよならの城』でホリーのイメージを母親のハツに重ねて描いている。

ぼくはホリーの挿話の中に、若き日の母のことを思い出さずにはいられないのだ³¹⁾。

このようにして、寺山はホリーを母のハツに結びつけて子宮回帰を巧妙に仄めかしている。また、ウォーホルは、死のテーマを『マリリン』だけでなく、『リズ』や『ジャクリーヌ』でシルクスクリンに描き続けた。もしかしたら、ウォーホルはデュシャンの墓碑銘「死ぬのは他人ばかり」から死のイメージを着想したかもしれない。しかも、寺山自身も、自作にしばしば、デュシャンの「死ぬのは他人ばかり」をコラージュしている。

さて、寺山は、『暴力としての言語』所収の「第一章 走りながら読む詩」のなかで、ウォーホルの『チェルシー・ガールズ』について書いている。

ニューヨークにいた時、私はアンディ・ウォーホルの地下映画を二本観た。そして、「暴力としての映像」といったことについて考えてみようと思いついたのである³²⁾。

また、寺山はエッセイ『風見鶏は回るよ』所収の『『テレフォン・ブック』は悪魔の囁き』の中で、ニューヨークでウォーホルの実験映画『テレフォン・ブック』を見た時の印象を書いている³³⁾。

更にまた、寺山は雑誌『みずゑ』のウォーホル特集で、ウォーホルのリフレインの画像の右側に同じフレーズの文章を何度も繰り返しながらヴァリエーションを加え、全体としてウォーホル風に批評文を纏めている³⁴⁾。

或いは、寺山は、自分の実験映画『トマトケチャップ戦争』を国際ホモセクシュアル実験映画祭 (Premier Festival International de Homosexuel) にウォーホルの作品とともに出品している。

また、寺山は雑誌『美術手帖』所収の「聖なる百回性アンディ・ウォーホルの犯罪」の中で、ウォーホルの呪術性について、次のように述べている。

呪物というのは間接的で、類感的なものにすぎないと、マルセル・モース (魔術的素描) は言っている。それは、いかにも実体であるかのように見せて、実は不在であることによって、欲望を刺激する。「受身のアンディ」「自己消去のアンディ」の伝説は、実はウォーホルの呪術的性格の傍証にほかならない³⁵⁾。

前述したように寺山がしたウォーホル批評は、寺山の映画論や『寺山修司の演劇論』のシャーマニズムと深く結び付いているので興味深い。寺山の批評は、日向あき子が「ウォーホルは現代のシャーマンである」と評した言葉を思い出す。ともかく、いずれにしても、ウォーホルのアートは現代のシャーマンと結びついている。さて、寺山は、ウォーホルのアートを自分の演劇性に引き寄せて先ず、ウォーホルの一文を引用する。

僕の絵画や映画や、表面を見てごらん下さい。そこにはぼくがいます。その背後には、何もありません (p. 121)。

それから、寺山はウォーホルを引用した後で、次のように結論に纏めている。

ウォーホルは諸個人と一対一対応であるかのように向きあっている。アンディの神話は、諸個人の内面によって支えられ、そうすることによって諸個人の内面を支配する (p. 121)。

むろん、寺山はウォーホルが不死身であるというのではない。例えば、マクルーハンが『ゲーテンベルグの銀河系』の中で述べているように、コンピューターやテレビの発達により、人間は、電子となって自在に宇宙空間を飛翔するようになった。その光景は、まるで、マルセル・モースが、古代のシャーマンが魔術によって自在に宇宙空間を飛び回る魔術と似ている。けれども、実際には、ウォーホルはソラナスの狙撃を受けた直後、九死に一生を得たのであり、決して不死身ではなかった。現に、ウォーホルのように銃撃されたジョン・レノンが即死であったのであり、ウォーホルも、ソラナスの狙撃が遠因で間接的な原因とはいえ、その後胆嚢手術の際後遺症が併発して突然亡くなった。ウォーホルの場合は、ソラナスから銃撃を受けた時、ウォーホルの身体は光の粒子のようにスクリーンに映っていたわけではないし、鏡に映った虚像でもなかった。ウォーホルは『僕の哲学』で次のように言っている。

At the end of my time, when I die, I don't want to leave any leftovers. (p. 112)

いざ死ぬときになったら、後に何も残したくない。

とはいえ、寺山は、ウォーホルがメディア人間としての存在であった事に注目した。確かに、寺山はウォーホルの死の恐怖についてあくまでも暗示にとどめて詳しく書かなかった。しかしながら、寺山は、死のイメージを、デュシャンの墓碑銘「死ぬのは他人ばかり」からコラージュしていたのであり、また、別のエッセイ『誰か故郷を想はざる』の中では、「生が死んでしまえば、死も終わる」と書いたのである。

08. ま と め

寺山の『さらば映画よ』『ある男ある夏』『青ひげ公の城』は徹底した膨大な数の引用からなるドラマである。この寺山の技法はウォーホルの写真からそのままシルクスクリーンに転写した技法を思わせる。また寺山はデュシャンの墓碑銘「死ぬのは他人ばかり」をコラージュしたのであるが、更にウォーホルがデュシャンの影響を受けた足跡を辿っていくと今まで分からなかった寺山の未知の世界が見えてくるかもしれない。

ところで、メカスは、ウォーホルの『エンパイア』『眠る男』『ヘアカット』はリュミエールの時代に戻したと述べている³⁶⁾。いっぽう、寺山の実験映画『審判』には無限のリフレイン釘打ちシーンがみられる。殊に寺山は『青少年のための映画入門』で3面マルチ・スクリーンを使っている。これは、寺山がニューヨークで見たウォーホルの実験映画『チェルシー・ガールズ』の2面マルチ・スクリーンを拡張した実験映画である。松本俊夫氏も『つぶれかかった右

目のために』で同様に3面マルチ・スクリーンを使っている。更に松本氏は、ウォーホルがニューヨークを象徴した『エンパイア』に影響を受け、日本の京都の封建制度を表した『西陣』で屋根を延々と映し続けた。これはウォーホルの『エンパイア』がブレヒトの社会主義的なプロパガンダの対極にあるとすれば、松本氏の『西陣』の屋根はウォーホルのニューヨークの『エンパイア』の対極にある作品であろう。寺山がウォーホルから間接的な影響は映画よりもむしろ演劇に見られる。或いは、寺山はデュシャンの機械からヒントを得て『奴婢訓』の舞台装置を考えたようであるが、岸田理生によると、寺山はシャーマンの魔術から機械へ転換したと指摘している³⁷⁾。だが、既に『毛皮のマリー』でも、テープレコーダーから流れるマリーの声が登場する。このテープレコーダーはウォーホルが好んだ機械のテープレコーダーであった。

マリーの声 「いろんな学校があるんだよ、坊や」(p. 127)

テープレコーダーが自ら意志を持って話すのは魔術的でシャーマン風であり、寺山の独自性を表わしている。また、寺山のト書には、マリーの声はテープレコーダーの音声であるという指示が書いてある。

マリーの声はテープレコーダーから流れ出しているのである (p. 128)。

さて、ウォーホルはスタニスラフスキー・メソッドの演劇に興味を持ちブレヒトの異化効果にも偏見を持たなかった。ところが寺山はブレヒトの異化効果もスタニスラフスキー・メソッドも嫌っていた。その理由は、寺山が人間の理性よりもシャーマン風の不合理性に強く惹かれていたからだと思われる。しかし、ウォーホルはブレヒトもスタニスラフスキー・メソッドも好んだ。実際に、ウォーホルは画家から出発して途中から実験映画を撮るように変わっていった。いっぽう寺山は詩人として出発して途中から演劇や映画を始めた。寺山とウォーホルは詩人と画家の違いはあるが二人とも前衛芸術を目指した。そこに二人には共通点がある。また1967年にウォーホルはカンヌ映画祭に実験映画として初めて『チェルシー・ガールズ』の出品を企てたことがあったが、寺山も1975年にカンヌ映画祭に『田園に死す』を出品した。更に後になって、寺山の実験映画に触発されて映像作家になった安藤紘平氏は「アインシュタインは黄昏の向こうからやってくる」(1994)でハワイ国際映画祭銀賞を、「フェルメールの囁き」(1998)でスイス・モントルー国際映像祭アストロラビウム賞を受賞している。安藤氏は、「フェルメールの囁き」では、フィルムの代わりに一枚一枚写真を並べて貼り付け、高速回転

させて産み出した映像は平面に並べただけの映像ではなく重層的で立体的に奥行きを持った画面となり3D効果とも異なる実験映画の画期的な作品となっている。

ところで、ピカソはアカデミックな古典絵画を極めたうえでプリミティブで前衛的な絵画に向かった。詩人の馬場駿吉氏はゴーギャンのコラージュ方法はピカソにも受け継がれたと指摘しているが、更にこの趣向は寺山の俳句短歌のコラージュ方法とも類似性があると述べている。ウォーホルは、グリやデュシャンの芸術の影響を受けながらも、同時にマチスやピカソのプリミティブで前衛的な絵画を模範とした。この点でウォーホルや寺山の芸術は元々古典アートを踏まえたうえでシャーマン風な前衛アートに向かったという点からみていくと共通している一面があるかもしれない。

さてウォーホルがシルクスクリーンや実験映画で使ったリフレインは寺山の実験映画『審判』の釘打ちシーンに反映されている。殊に注目すべきことは詩人寺山が1970年代に構築したリフレインを、安藤紘平氏が制作した斬新な実験映画を経て、今度は天野天街氏が原作の『田園に死す』にない全く斬新なりフレインの脈を探り当て東京ザ・スズナリ劇場で2009年12月『田園に死す』を脱構築して演出した。因みに、天野氏はウォーホルのようにイラストレーターで映画監督でもあるが、天野氏が制作した実験映画『トワイライツ』の中で死んだトウヤ少年の遺影はよく見るとウォーホルが制作したシルクスクリーンの『マリリン』のアイコンを思わせる。このように見てくると寺山がリアルタイムで見つけたウォーホルのシャーマン的なリフレインを、安藤氏が受け継ぎ、やがて天野氏によって再びウォーホルのリフレインが新しく蘇り継承されていることが確認できるのである。

注

- 1) 東野芳明「ウォーホル——あるいは、何モシナイデ有名ニナル方法」(明日をひらく芸術家・1 『美術手帖』1969.2), p. 46.
- 2) ジョン・ケージ「1963年、ニューヨークにてエリック・サティの『ヴェクサシオン』を上演する。世界ではじめてサティの指示どおりに840回の反復を行ない、演奏は18時間にわたった。また、サティの『ソクラテス』から派生したピアノ曲『チープ・イミテーション』(1969年)を作曲している。」ja.wikipedia.org/wiki/ジョン・ケージ Cf. Cage, John, *For the Birds* (Marian Boyars, 1995), p. 80.
- 3) *I'll Be Your Mirror The Selected Andy Warhol Interviews* Edited by Kenneth Goldsmith (Carroll & Graf Publishers, 2004), p. 11. 以下同書からの引用は頁数のみを記す。
- 4) *Film Culture Reader* edited by P. Adams Sitney (Cooper Square Press, 2000), p. 4. Andy Warhol & Pat Hackett, *Popism* (A Harvest Book, 1980), p. 37. 以下同書からの引用は頁数のみを記す。
- 5) *The Andy Warhol Diaries* Edited by Pat Hackett (Pan Books, 1992), p. 429. 以下同書からの引用は頁数のみを記す。
- 6) 日向あき子『アンディ・ウォーホル』(リプロポート、1987), p. 94. 以下同書からの引用は頁数のみを記す。

す。

- 7) McLuhan, Marshall, *The Gutenberg Galaxy* (Toronto U.P., 1962), p. 8.
- 8) Warhol, Andy, *The Philosophy of Andy Warhol* (A Harvest Book, 1975), p. 113. 以下同書からの引用は頁数のみを記す。
- 9) Cf. 『チベットの死者の書』川崎信定訳 (筑摩書房、1993), p. 8. 寺山修司『死者の書』(土曜美術社、1974), pp. 208-9.
- 10) Guiles, Fred Lawrence, *Loner At The Ball The Life of Andy Warhol* (Black Swan, 1990), p. 165. 以下同書からの引用は頁数のみを記す。
- 11) *The Andy Warhol Diaries* Edited by Pat Hackett (Pan Books, 1992), p. 733. 以下同書からの引用は頁数のみを記す。参考：ウォーホルが『イーディ』に憤慨した論述は次の箇所であろう。Stein, Jean, *Edie American Girl* (Grove Press, 1982), p. 377. “Warhol! She was trying to get him out of her system. She hated the Factory because of the dope. ‘I hate them. I hate them!’ She said he got people screwed up until they were automation, robots, doing what he wanted them to do, and discarded them. She said: ‘The way those sons-of-bitches took advantage of me. Warhol is sadistic faggot.’ Big black boots and a motorcycle jacket and a whip ...”
- 12) Sounes, Howard, *Down The Highway The Life of Bob Dylan* (Black Swan, 2001), p. 202.
- 13) Summers, Anthony, *Goddess The Secret Lives Marilyn Monroe* (Sphere Books Limited, 1985), p. 256.
- 14) Zolotow, Maurice, *Billy Wilder In Hollywood* (Pavilion Books Limited, 1988), pp. 259-260.
- 15) Cf. Miller, Arthur, *Timebends A Life* (Penguin Books, 1995), p. 514. “*Edie American Girl*” by Jean Stein (Grove Press, 1982) の中で、ヴァージル・トムソンによると、チェルシー・ホテルには、テネシー・ウイリアムズ、トマス・ウルフ、ディラン・トマス、エドガー・リー・マスターズが住んでいたという (p. 307)。Cf. Elia Kazan は *A Life* (Anchor Books, 1989) でアーサー・ミラーとモンローのロマンスに冷やかであった (p. 415)。アーサー・ミラーは『転落の後で』でモンローが麻薬で自滅していく過程を赤裸々にドラマ化した。Miller, Arthur, *After the Fall* (Penguin Books, 1980), pp. 111-112. Maurice Zolotow も *Billy Wilder In Hollywood* で『転落の後で』について論評をしている (p. 261)。
- 16) 高島平吾、『ポピビズム』訳者後記 (リポート1992), p. 403.
- 17) 落石八月月、『僕の哲学』訳者あとがき (文藝春秋、1998), p. 333.
- 18) Wilson, Colin, *The Outsider* (Victor Collancz Ltd, 1956), p. 116.
- 19) Clarke, Gerald, *Capote A Biography* (ABACUS, 2006), p. 269. 以下同書からの引用は頁数のみを記す。
- 20) 諸岡敏行「ウォーホルの憧れた男と女カポティとイーディ」『ユリイカ』「特集 アンディ・ウォーホル」(青土社、1990、9、第22巻10号), pp. 73-78.
- 21) Stein, Jean, *Edie American Girl* (Grove Press, 1982), p. 259.
- 22) Capote, Truman, *In Cold Blood* (Penguin Books, 1967) Freres humains qui après nous vivez, N’avez les cuers contre nous endurcis, Car, se pitie de nous pouvez avez, Dieu en aura plus tost de vous mercies Francois Villons Ballade des pendus
- 23) Spoto, Donald, *The Kindness of Strangers The Life of Tennessee Williams* (Little Brown & Company, 1985), p. 302. 以下同書からの引用は頁数のみを記す。
- 24) Rader, Dotson, *Tennessee: Cry of The Heart* (Doubleday & Company, INC, 1985), p. 20.
- 25) Williams, Tennessee, *Memoires* (A Star Book, 1975), p. 252.
- 26) Hayman, Ronald, *Tennessee Williams Everyone Else Is An Audience* (Yale UP, 1993), p. 210.

- 27) 寺山修司『アメリカ地獄めぐり』(河出文庫、1993), p. 137. 以下同書からの引用は頁数のみを記す。
- 28) 寺山修司『勝者には何もやるな』(立風書房、1993), p. 110.
- 29) 『寺山修司の戯曲』第1巻(思潮社、1969), p. 137. 以下同書からの引用は頁数のみを記す。
- 30) 寺山修司がマリリン・モンローに言及したエッセイは数多い。参考寺山修司『死者の書』(土曜美術社、1974), p. 151. 寺山修司『アメリカ地獄めぐり』(河出文庫、1993), p. 36.
- 31) 寺山修司『さよならの城』(『寺山修司青春作品集: 4』新書館、1983), p. 74.
- 32) 寺山修司『暴力としての言語詩論まで時速100キロ』(現代の思想叢書9思潮社、1970), p. 28.
- 33) 寺山修司『風見鶏はまわるよ、あの日のようにヨーロッパ通信』(立風書房、1993) p. 220.
- 34) 寺山修司「ウォーホル論を複製する試み」(「特集: ウォーホル」『みずゑ』), pp. 22-28.
- 35) 寺山修司「聖なる百回性 アンディ・ウォーホルの犯罪」(『美術手帖』No. 500, 1982) pp. 120-121.
- 36) メカス、ジョナス「アンディはリュミエールに戻った」飯村照子訳(『季刊フィルム』no. 9., 1971.1), p. 22.
- 37) 『寺山修司の戯曲』第6巻(思潮社、1986), p. 378.

参考文献

- Mekas, Jonas, *Movie Journal* (Coller Books, 1973)
- McLuhan, Marshall, *Understanding Media: The Extensions of Man* (Sphere Books Limited, 1967)
- Ultra Violet, Famous for 15 Minutes My Years with *Andy Warhol* (Avon Books, 1988)
- Mary Harron & Daniel Minahan, *I Shot Andy Warhol* (Bloomsbury, 1996)
- Capote, Truman, *Breakfast at Tiffany's* (Penguin Books, 2000)
- Capote, Truman, *Music for Chameleons* (ABACUS, 1981)
- Capote, Truman, *Answered Prayers The Unfinished Novel* (A Plume Book, 1987)
- Grabel, Lawrence, *Conversations with Capote* (NAL Books, 1985)
- Peter Brown & Patte Barham, *Marilyn—The Last Take—* (Mandarin, 1993)
- Guiles, Fred Lawrence, Norma Jeane The Life & Death of Marilyn Monroe (Crafton Books, 1985)
- Stein Jean, *Edie An American Biography* (A Dell Book, 1983)
- Dalton, David, *Edie Factory Girl* (VHI Press, 2006)
- Ono, Yoko, *Memories of John Lennon* (Harper Entertainment, 2005)
- Hopkins, Jerry, *Ono Yoko, A Biography* (Sidowick & Jackson, 1987)
- Spada, James, Peter Lawford The Man Who Kept The Secrets (Bantam Books, 1991)
- Kelley, Kitty, His Way The Unauthorised Biography of Frank Sinatra (Bentam Books, 1986)
- Warhol, Andy, Love, Love, Love (監修 横尾忠則 日本ヴォーグ社、1997)
- Warhol, Andy, Cats, Cats, Cats (監修 横尾忠則日本ヴォーグ社、1994)
- 日向あき子『天才ウォーホルを精神分析する』(アートダイジェスト、1996)
- 日向あき子『ポップ・マニエリスム』(沖積舎、1993)
- 日向あき子『原始の心 共有と Be 感覚』(社会思想社、1972)
- 日向あき子『イメージを読みとる『カミ』的心性を求めて』(講談社現代新書781、1985)
- 日向あき子『ポップ・マニエリスムの画家たち』(PARCO、1977)

- 東野芳明『アメリカ虚像培養国誌』（美術出版社、1968）
『現代の美術』「ポップ人間登場」4 東野芳明編（講談社、1971）
『美術手帖』「特集 現代芸術とテクノロジー ウォーホル」（美術出版社、1969、2、第21巻309号）
『美術手帖』「特集 ウォーホル」（美術出版社、1982、12、第49巻749号）
『美術手帖』「特集 ウォーホル+ホックニー」（美術出版社、1982、8、第34巻500号）
『美術手帖』「総力特集 アンディ・ウォーホル」（美術出版社、1987、6、第39巻581号）
『おとなびあ』「特集 アンダーグラウンド三都物語」（ぴあ株式会社、2001、12第21号）
『芸術生活』「特集 アンディ・ウォーホル」（芸術生活社、1974、12、第12巻304号）

「日本語表現法」教育をめぐる問題点と課題(2)

伊豆原英子

1 はじめに

愛知学院大学総合政策学部では、2006年度から、1年次生を対象に春学期必修科目として「日本語コミュニケーションⅠ」を開講している¹⁾。「日本語コミュニケーションⅠ」は、初年次教育の一環として、日本人学生の基礎的な日本語表現力を育てることを目的に開講されたものである(以下、本稿では「日本語コミュニケーションⅠ」を、実際に行っている授業内容に即して「日本語表現法」と呼び、そのために開発した教材を『日本語表現法』と表記する)。

大学生の日本語力については、漢字が読めない・書けない、ことばを知らない、何が言いたいのかわからない文章を書く、といった点が取り上げられることが多い。

大学1年生に、初年次教育として日本語を教える試みは広く行われている(杉谷(2003))が、どのような日本語をどう教えるのかについては、さまざまな考えがあり、また方法があるようだ(筒井(2005)、伊豆原(2007)、大島(2009)など)。

本稿では、「日本語表現法」4年間の授業を振り返り、4年間の試みから得られたさまざまな点から学ぶことで、わずか半年という期間の中で「日本語表現法」ができることは何かを改めて考えてみたい。

2. どのような日本語力を養成するのか

2.1 多様な取り組み

大学で学ぶのに必要な基礎的な日本語表現力とはどのようなものかについての解答は一つで

はない。ここではまず、いくつかの教科書を取り上げ、「基礎的な日本語表現力」をどのようにとらえているかを紹介する。

橋本修他（編著）（2008）による『大学生のための日本語表現トレーニング』では、「はじめに」で、この本で学ぶことで、自己紹介やノートのとり方から、レポートの書き方に至るまで、幅広い表現力を無理なくスキルアップさせることができるとし、自己紹介、ノートのとり方、敬語の基礎、連絡メモやメールや手紙の書き方、調べ方、レポートの書き方、履歴書の書き方、面接の受け方、小論文の書き方などが全19章にわたって扱われている。ここでは、スタディ・スキルとともに、キャリア形成に必要なスキルまでが幅広く取り上げられている。

また、沖森卓也他（編）（2007）による『日本語表現法』では、「はしがき」で、基礎的な文章作法を学ぶことと、実践的な課題に取り組むことを繰り返しながら、実用文からレポート・論文に至るまでの書きことばの表現法をも習得することを目標としている、としている。扱われている内容は、日本語の表記法などの文を書くときの基礎から、実用文の書き方、レポートの書き方、口頭発表のしかたなどが取り上げられている。

野田尚史他（2007）『日本語を書くトレーニング』では、「この本を読んでもくださる方へ」の中で、原稿用紙の使い方や敬語、文の長さというような、ことばの表面的なことではなく、「こういう目的の文章を書くときには、どんな情報をどんな順序で書けばよいかというようなことを重視している」として、「お知らせのメール」「レストランのメニュー」「問い合わせのメール」「注意書きやサービス案内」といった15の項目を扱っている。

以上見てきただけでも、初年次教育としての日本語教育の内容にはさまざまなものがある²⁾。教育の内容がどのようなものであろうと、大切なことは、学生に取り組ませることであり、フィードバックにより、進歩の過程をつぶさに見とどけることだ、ということであろうか。

2.2 『日本語表現法』のねらいとその内容

ここでは、筆者らが作成した『日本語表現法』について紹介する³⁾。

2.1であげた教科書が目指している方向に対して、筆者らが作成した『日本語表現法』は、自らの考えや主張を根拠に基づいて論理的に述べる力の養成を主な目的にしている。最終的には、大学生活に必要なレポートや論文が書けることを念頭に、その基礎訓練として、論理的で、わかりやすく、人に納得してもらえ文章、自分の考えをわかりやすく人に伝えられる文章が書ける力を育てようとするものである。この「日本語表現法」は、杉谷（2003）が類型化している導入教育の6つの型のうちの2つ、つまり、①大学での勉学に欠けている知識や学力を補う「補習教育型」と②論文作成を中心としたスタディ・スキルの習得を目指した「スキル・方法論型」を融合させたものに当たる。

『日本語表現法』は、15課中、レポートや論文で使われる文体、句読点の打ち方など、文を書くうえで基礎的事項を扱っている第1、2課を除き、論理的文章が書けるようになるという目的に焦点をあてて構成されているところに特徴がある。

以下、『日本語表現法』を具体的に見ることで、「自らの考えや主張を根拠に基づいて論理的に述べる力を養成する」という目的に教材がどう関わっているかを示したい。

第3課～第5課は、文章の全体構成、段落の構成、接続表現を扱った課である。文章を、序論・本論・結論という3部構成にすること、序論・本論・結論にどのような内容を盛り込むとわかりやすい文章が書けるかということや、1つの段落に主題は1つ、段落は中心文と支持文で構成することで文章がわかりやすくなること、接続表現を用い、文章全体の流れや段落間の関係を示すことで文章の論理性を確認することの大切さを扱っている。

第3課～第5課の練習問題には、文章全体の構成をつかむこと、文章全体や段落のポイントをつかむこと、主題（何が言いたくて書かれている文章か）をつかむこと、キーワードをつかむこと、接続表現の役割を確認できるものなどがある。

第6課・第7課は要約である。文章全体の構成や筆者の主張をおさえること、段落のポイントをつかむことなど、3課～5課で学んだ知識を総合的に応用する課である。

第8課は、因果関係の読み取りを目的にした課である。レポートや論文を書き進めていくときには、なんらかのデータが用いられる。データをどのように利用してレポートを書いているのか、その方法や表現を学ぶことが目的である。

第9課は比較検討を扱っている。レポートや論文を書く際、2つあるいはそれ以上の項目を比較して優劣や相違を論じることは多い。練習問題では、比較されている項目や論点を読み取ったり、ある問題意識のもとに2つのものや事柄を比較して優劣や違いを論じる練習を取り入れている。

第10課では、事実と意見を書き分けることの大切さを扱っている。意見には裏付けが必要であること、推測や自分の判断をあたかも事実であるように扱っていないか、意見文に用いられる文末表現にはどのようなものがあるか、などが練習問題を通して学べるようになっている。

第11課は、定義と分類を扱っている。レポートや論文を書くときには、キーワードとなる語についてあらかじめ自分なりの定義をすることが必要になる場合が多い。また、テーマで扱う内容を分類して示すことはわかりやすい文章を書くうえで大切な技法である。

第12課・第13課は、意見文を批判的に読むことを扱っている。論点と根拠がどのように書かれているか、論点は根拠にどのように支えられてあるかを読み取り、論点について批判的に検討することで、複数の視点をもつことの大切さを伝えようとしている。

以上見てきたいずれの課も、論理的な文章を書くうえで大切な項目が扱われていることがわかる。

第14課・第15課では、意見文を書く。14課で意見文のモデルを示し、論点や根拠を書きぬく作業を通して、意見文の実際が学べるようになっている。また、ここでは根拠となるデータの読み取りや引用のしかた、アウトラインの作り方も学ぶ。15課では、アウトラインを基にして、実際に文章を書く。この2つの課は、最終課題文（春学期試験に代わるもの）を書くための準備として位置づけられる。

これらの内容で授業をしてきた4年間の評価については、次節で扱う。

3. 4年間の授業で見えてきたこと

「日本語表現法」が始まった4年前は、入学してくる大学1年生の日本語力の実態がわからないままの手探りのスタートであったが、4年間の時間が過ぎた今、見えてきたことは多い。

ここでは、その中から、4点を取り上げて説明する。学生の文章表現に見られた日本語力に関わる問題点については、すでに報告済み（伊豆原2007）であるので、本稿では割愛する。

3.1 読解力を養成することの重要性

「日本語表現法」は、基本的に、「書くこと」に焦点をあてた科目である。しかしながら、書くことの前に、まず、読む力をつけることの重要性・必要性を実感したことは4年間の経験で得たものの一つである。学生の中には、本や新聞をほとんど読まないという者もいて、授業では、読解力そのものというより、まずは、読みたくない、だから読めないという学生の、読むことへの抵抗感と闘わねばならなかった。

読むという経験の不足は、言葉を知らないこと、漢字が読めないこととつながっている。学生の語彙不足は、教師の話す言葉と学生の知っている言葉には乖離があることを痛感させもした。学生に語りかけていて、時に、どこまで教師の話す「ことば」が通じているのだろうか、話している内容が理解されているのだろうかと危ぶむこともあった。

また表現力をつけるといっても、それを支える語彙力、読解力がなければ「表現力」はつかない。これも読むことにつながっていることであり、読む力の養成は緊急の課題であると思われる。

3.2 最終課題の扱い

3.2.1 最終課題の扱い

4年間を通して、「日本語表現法」は、大枠、以下に示すような流れで授業を行ってきた。この中で、もっとも問題だったのは、最終課題の扱いである。ここではこれについて説明する。(なお、1クラスの学生数は平均22、3名である)

第1回目	オリエンテーション 小論文(小学校1年生からの英語教育の是非)を書く
第2回目～11回目	教材に沿った学習
第13回目	最終課題である意見文のアウトラインづくり
第14回目	意見文を書く

最終課題については、課題の設定に「ゆれ」がある。1年目は、オリエンテーションで書かせた小論文を、2回目～13回目で学んだ事柄を生かして書き直すというものであった。その際、「是非」の理由については、学生自らデータを収集し、根拠をもとに書くことが必要であるという指示を与えた。

2・3年目は、教師側が意見文のテーマとしていくつか(裁判員制度の是非など)を提示し、学生はの中から一つを選んでデータを収集し、最終課題文を書くことに改めた。最終課題文の内容を変えた大きな理由は、オリエンテーションで書かせた小論文のフィードバックはできるだけ早い時点ですべきだという考えからである。課題文のテーマは学期の半ばあたりに提示し、学生にはテーマを選び、資料を集めておくように指示した。

しかし、テーマを決めさせ、資料を集めておくように指示し、毎時の授業の初めには進捗状況を確認していたにもかかわらず、最終課題の意見文のアウトラインづくりのときに至っても資料が集められていなかったり、インターネットから出典の明らかな資料を取り出してきて、それに基づいて、あるいはそこから安易に文章を抜き出して意見文を書いたりという姿勢を防ぐことができなかった。

そこで、4年目は、総合政策学部の「リサーチ・プロジェクト」科目担当者と話し合い、最終課題に関して次のような変更を加えた。つまり、「リサーチ・プロジェクト」科目でテーマ探しと資料収集までを行い、日本語コミュニケーションでは、それを受けて、アウトラインおよび1000字の意見文を書くことを最終課題にするというものであった。しかし、この方式であっても、上で述べた問題の解決にはならなかった。

3.2.2 評価

「日本語表現法」は、半期の科目であり、14回の授業でできることは限られている。最終課題の設定にゆれが見られるのは、与えられた時間に比して課題が大きすぎることが大きな原因

だったと思われる。

最終課題に向かうためには、学生は、自らテーマを決め、問題提起をし、根拠となるデータを探するという過程を取らなければならない。それを考えると、学生が抱えたむずかしさは2点あると思われる。第1は、第1課から第15課までの授業内容と、最終課題をこなすことにはギャップがあることだ。確かに、14課、15課で最終課題のモデルを与え、実際に600字の意見文を書く練習をしてはいるが、それはあくまでも練習であり、実際に、選んだテーマについて学生自らが問題提起をし、必要な根拠を探すこととの間には大きな違いがある。与えられた材料を利用して、意見文を書くのではなく、自分でテーマを考え、自分で問題を提起し、データを探すことは学生にとって難しいことだったのだろう。問題提起をするためには、まずもって、テーマについてある程度の情報をもっていることも必要になる。それらなしに課題に取り掛かることが、安易なデータ利用につながっていたのだと思われる。つまり、最終課題に至る過程が学習者には見えにくかったのだろう。

第2は、14回の授業の中で、学生がテーマを決め、問題提起をし、資料を収集し、必要に応じて引用するという課題文作成の過程を指導する時間がとれなかったことである。学生が自らする作業に対して、アウトラインを書く段階で初めて教授側は手助けができたのだが、それだけでは時間的に不十分であった。14回の授業であることを考えれば、基礎的な学習に加えて、学生自らがテーマを決め、資料を探して根拠のある意見文を書くという課題は大きすぎたのだろう。

3.3 「読む・考える・書く」力を養成する場としての役割

4年間を通して見えてきたことの第3は、「書くこと」を中心に据えた「日本語表現法」であるが、読む力・考える力も同時に育てるものになっているということである。

『日本語表現法』は、文章表現つまり、「書く」ことに焦点をあてた教材であるが、「書く」ことの教育が、実は、いかに読むかの教育にもなっている。練習問題には、文章全体の構成をつかむこと、文章全体や段落のポイントをつかむこと、主題（何が言いたくて書かれている文章か）をつかむこと、キーワードをつかむことなどがある。これらの練習は「読むこと」の教育でもある。

さらに、考えないでは文章が読めず、また文章が書けないことを考えれば、『日本語表現法』は考えることを促す教材にもなっている。練習問題を解くにあたって、意見文を書くにあたって必要な根拠を探すときにも、まず考えることが必要となるからだ。まさに、読むこと、書くことは考えることなのである。

学生の中には、考えながら読む、読んで考える、書くために考えるという過程に拒否反応を

示すものもある。そのような学生にとっては、読むこと、書くこと、考えることはすべて「面倒くさい」のである。

しかしながら、授業を積み重ねていくうちに、ほとんどの学生がしっかりした文章が書けるようになってくる。4月と7月の時点では学生の書く文章におおきな違いが見られるのである。

3.4 理念と意思を持つことの大切さ

4年間で見てきたことの第4は、学生の授業への取り組みがどのようなものであろうと、学生の日本語力にどのような問題があろうと、学生を毎時の授業にきちんと向かわせることが、学生の日本語力を伸ばすことにつながるという当然といえば当然の事実である。それは、いわゆる日本語表現法科目にどのような内容を用意するかという問いへの答えでもある。内容を用意するにあたって大切なことは、初年次教育の対象者である学生に必要な力を想像し、その力をこそ、つけてやるのだという理念と意思ではないだろうか。日本語力がないから簡単なものを、ではなく、大学で必要とされる力をつけるよう、学生を引っ張り上げていくことが大切なのではないだろうか。

もちろん、わずか半年の「日本語表現法」でできることは限られているし、「日本語表現法」が、今ここにいる大学生の日本語力を高めるものとなっているのかについての評価はむずかしいことではあるにしても、である。

4. 学生評価とこれからの方向性

4.1 学生評価

それでは、学生は、この授業をどう受け止めているのだろうか。学生の評価を学生アンケート（平成21年7月に、筆者のクラスでのみ行ったもので、対象者は22名）から見てみよう。

「授業が役にたったか」という問いに対して「そう思う」と答えた学生が20名、「少しそう思う」が2名であった。また、この授業の結果、「文章力がついたと思うか」という問いには「そう思う」が17名、「少しそう思う」が4名であった。

「授業はどのような点が役に立ったか」を聞いた自由記述では、「文を書く力が身についた」、「文章構成や文献の引用の仕方など知らなかったことを多く知ることができた」「以前より、文の構成を考えるようになった」のような「文章の作り方が理解できた」ことを評価する者の他、「賛否の両側の観点から書くことで視野が広がった」ことを評価するものもいた。

また、「今まで文を書くということがなかったが、この授業のおかげでできた」という評価や「やりたいことが明確だった」という声もあった。授業で「たいへんだった」ことについて

は、「長い文章を書くこと」「最後の意見文を書くこと」などの他、「自分の意見を考えること」「全員同じ答えになるものではないので、自分の考えがあっているかどうか不安で大変だった」という、考えることについて述べた回答もあった。

その他、この授業が「楽しかった」という答え、「のちのち役に立つ」という答えなどがあり、学生は「日本語表現法」を肯定的に評価していることがわかった。

授業で大変だったこととして、最終課題をあげた学生がいた。これは、3.1でも述べたが、第1課から第15課までの授業内容と最終課題との間にはギャップがあり、学生にとってはわかりにくいものであったためだろう。

4.2 これからの方向性

読めない、考えたくないという学生の持つ問題に対して、授業では2つの大きな柱を意識することが大切だと思われる。

第1は、「読むこと」を柱の一つに据えることである。それは、考えながら読むこと、考えながら書くことを大切にすることである。つまり、授業のねらいを、読むこと、考えること、書くことのスパイラルによって達成する姿勢を明確にすることである。「表現法」という書くことに中心をおいた授業であるが、読むことは、きちんと読むための読み方を教えるものであり、また、自分の考えを、文を書くということで表現する際のモデルを示すこと、考えるよすがを与えることでもあるからである。

第2に、最終課題文の方法を考え直すことである。3.2でも述べたが、「日本語表現法」の授業のまとめとして、学生自身にテーマを決めさせ、問題提起と資料収集をさせ、意見文を書かせることには、コピーアンドペーストになってしまう、コピーアンドペーストにならざるを得ない学生の力という問題がある。そこで、この反省の上に立ち、次の期の授業では、テーマの一つに決め、教師が用意したデータを読み込み、問題提起をし、データを根拠として利用して書くという方向に変えたいと考えている。

5. 今後の課題と展望

論理的な文章を書くことを学ぶことは、すなわち考えることを学ぶことでもある。文章を読むということ、そして文章を書くということは、考えることなのだと強く感じた4年間であった。「日本語表現法」は、学生たちに考える時間を与える授業でありうる。

学生はさまざまな問題をもっているものの、担当者が一人一人の学生に誠実に対応することで、学生の取り組みの態度は変わってくる。教育は人と人とのぶつかり合いが基本である。教

授者側が真剣に取り組めば学生の取り組みも真剣になるものだというを感じさせられた4年間でもあった。

やる気がないから、あるいは能力がないからといって易きに流れるのではなく、やる気がないから、あるいは能力がないからこそ一段高い課題に挑戦させることが大事ではないかと感じた4年間でもあった。

半年の授業でできることは限られている。しかし、それだからこそ、自分で自分の書く文章を変えていける、自分の書く文章を振り返ることのできる自律的な学習者を育てることが必要であろう。

学生は授業を意外に評価している。つまらなそうな顔をして授業に出ていても、後になって「楽しかった」「一番よかった」などという。半年の授業ではあるが、学生評価に見るように、「日本語表現法」は大きな意義をもっている。どのような教材を使うにしてもそれを継続することで学生の日本語力は向上する。学生にわかりやすい教材、しかし、質の高い教材作りを目指しつつ、自信をもって授業にあたっていきたい。

注

- 1) 1年目の試みについては、すでに、伊豆原(2007)で報告した。
- 2) 出版という形をとっていない教材は数多くあると推測される。
- 3) 『日本語表現法』は、1年目と4年目終了後に改訂をしている。ここで示したものは4年目終了後の改訂版である。なお、『日本語表現法』の執筆者は、嶽逸子、椿由紀子、土肥治美、中川康子、藤森秀美、三輪 梶子、向井淑子、そして筆者である。

参考文献

- 伊豆原英子(2007)「日本語表現法」教育をめぐる問題点と課題『愛知学院大学教養部紀要』第54巻 第4号 pp. 1-12 平成19年版「国文学文献目録」に再録
- 井下千以子(2002)「考えるプロセスを支援する文章表現指導法の提案」『大学教育学会』第21巻 第2号 pp. 76-84
- 大島弥生(2009)「大学での日本語表現能力育成授業のデザインを考える」『日本語表現能力を育む授業のアイデア』 pp. 11-25 ひつじ書房
- 大島弥生他(2005)『ピアで学ぶ大学生の日本語表現法—プロセス重視のレポート作成』ひつじ書房
- 沖森卓也他(編)(2007)『日本語表現法』三省堂
- 杉谷裕美子(2003)「導入教育の実態—学部長調査の結果から(中間まとめ)—3」アルカディア学報 No. 137 私学高等教育研究所
- 筒井洋一(2005)『言語表現ことはじめ』ひつじ書房
- 野田尚史他(2007)『日本語を書くトレーニング』ひつじ書房
- 橋本修他(編著)(2008)『大学生のための日本語表現トレーニング スキルアップ編』三省堂

静岡県中・東部地方における 曹洞宗寺院の歴住世代(5)

木 村 文 輝

本稿は、『愛知学院大学教養部紀要』第57巻第1、2、3、4号に所収の拙稿「静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(1)、(2)、(3)、(4)」の続編である。本稿では、曹洞宗静岡県第1宗務所管内の第8、第9教区に属する寺院の調査結果を掲載する。ただし、調査票未回収の寺院については掲載を見送った。凡例に関しては、前掲の各拙稿に記載のものに従う。なお、同宗務所管内第10教区以下の寺院の結果については、次号以降に引き続き掲載する予定である。

追記、調査に御協力下さった各寺院御住職に対し、謝意を表します。また、本稿作成にあたり、調査票配布と資料整理には愛知学院大学大学院中村早栄氏の御助力を賜った。さらに、資料整理には静岡市在住村越健氏、谷田貝ちさと氏、山崎政美氏の御協力を賜った。記して謝意を表します。

8教区	こうそうざん	りんそういん	〒	425-0004
388番	高草山	林叟院	住所	焼津市坂本1400
			住職	鈴木包一
開山年	文明3(1471)		草創年	
本尊	如意輪観世音菩薩			
開基	林叟院殿宣庵法永大居士(長谷川正宣、永正13(1516)6・1没)			
旧名称	林雙院			
旧所在地	焼津市小川(旧乙女ヶ丘、海中へ水没)			
本寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)			
寺史等	『林叟院五百年史』(1971)			

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴任寺	大系譜
開山	崇芝性岱	明応5 (1496)10・27	勸請、三河出身、惣仲天間弟子、茂林芝繁法嗣、康正1・10・7遠江石雲院開創、世寿83歳	洞松寺(岡山28)5世、石雲院(607)開山、増善寺(60)開山、梅林院(390)開山、円成寺(582)開山、華嚴院(717)開山、無量寿寺(埼玉330)開山、文殊寺(同391)開山、淨牧院(東京89)開山、法幢寺開山?	384a 405a
2	賢仲繁哲	永正9 (1512)6・24	当院初住、備中出身、茂林芝繁弟子、開山法嗣、文明3当院開創、明応6当寺を小川より現在地へ移転、永正5退院・求慶寺へ隠棲・後に静居寺へ隠棲、在住37年、世寿75歳	石雲院(607)輪住(延徳3、明応4、永正2、永正7)、大洞院(1303)輪住(文亀1)、静居寺(493)開山、竜眠寺(869)開山、求慶寺(廢)開山、見性寺開山	405a 409a
3	兆山岱朕	享祿2 (1529)8・28	2世第1法嗣、永正1大永寺(心岳寺)開山、永正5入山、享祿1退院、在住20年、世寿65歳	石雲院(607)輪住(永正14)、心岳寺(461)開山、松雲寺(1049・廢)開山	409a
4	持転性受	永祿5 (1562)8・12	3世法嗣、享祿2入山、永祿4・9・18退院、在住33年	石雲院(607)輪住(天文21)	409b
	哉翁宋咄	天正17(1589)11・26	勅特賜天龍円鑑禅師(永祿2・8・28)、今川氏重臣朝比奈氏出身、俗名朝比奈俊元、増善寺3世徳林恵椿弟子、永祿2元長寺開山、永祿3一乗寺開山、永祿4・9・18入山、永祿12退院、在住7年、世寿69歳	当院6世、石雲院(607)輪住(天正11)、玖延寺(1227)2世、元長寺(7)開山、一乗寺(126)開山、永豊寺(555)開山、法運寺(571)開山、洞善院(628)開山	409d
5	大屋受賢	天正1 (1573)2・2 (元亀4)	4世弟子、永祿12入山、永祿13退院・北越耕雲寺へ転住(世代になし)、在住1年	法運寺(571)草創開山	409c
6	哉翁宋咄	天正17(1589)11・26	再住、再住に際し5世法嗣となる、永祿13入山、天正1・5・9焼失、天正10石雲院を中興、天正12・2・9退院、在住14年	当院先住、石雲院(607)輪住(天正11)、玖延寺(1227)2世、元長寺(7)開山、一乗寺(126)開山、永豊寺(555)開山、法運寺(571)開山、洞善院(628)開山	409d
7	吉州義門	慶長3 (1598)3・5	6世法嗣、天正12・2・9入山、慶長3退院、在住15年		409e
8	山齡宋潤	元和7 (1621)3・10	7世法嗣、慶長3入山、慶長13退院、在住10年	旭傳院(401)草創開山、糧堂院開山、長福寺開山?	409f
9	照山元春	寛永5 (1628)2・19	8世法嗣、慶長13入山、慶長16退院、在住3年	總持寺普蔵院輪住(慶長15)、十輪寺(391)開山、法号庵(廢)開山	409g
10	明天嶺察	寛永20(1643)1・5	9世法嗣、信香院在住中石雲院輪住、慶長16信香院より入山、寛永20退院、在住32年、世寿81歳	石雲院(607)輪住(慶長13)、十輪寺(391)2世、信香院(556)4世、全珠院(400)開山	409h 410b

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴任世代(5)

11	悦州準恰	承応2 (1653)10・25	10世法嗣、寛永20新豊院より入山、大殿・諸堂完備、慶安1退院・圓泉寺へ隠棲、在住5年、世寿80歳	新豊院(214)3世、圓泉寺(559)開山	
12	九山雪洲	寛文10(1670)9・12	11世法嗣、慶安1・1・5新豊院より入山、寛文9退院、在住21年、世寿68歳	新豊院(214)4世	
13	益山文州	貞享2 (1685)10・25	師僧不詳(梅林院の法系)、寛文9・8・3入山、貞享1退院・長福寺へ隠棲、在住15年、世寿64歳	石雲院(607)輪住(延宝9)、長福寺(395)開山、瑞應寺(410)開山	
前住	扛鼎秀拙		貞享1久保寺より入山、元禄8幕命で退院・住功廢、後に赦免、在住11年	久保寺(愛知274)3世	
前住	六堪纜竜		伊予出身、元禄8・10遠江新豊院より入山、元禄11永豊寺と本末論争、元禄12・2・27幕命で退院・住功廢、元文3赦免、在住4年	新豊院	
14	洪海竿鯨	正徳5 (1715)8・1	洞雲寺10世法明海円法嗣、元禄12・1・29遠江竜泉寺より入山、元禄15・1・15諸堂焼失、宝永2諸堂建立起工、正徳1再建達成、正徳3退院、在住14年	石雲院(607)輪住(元禄12)、竜泉寺(雲岩寺)6世	
15	猷峰胤宗	正徳4 (1714)5・1	正徳3伊勢長泉寺より入山、正徳4退院、在住1年	長泉寺(三重)3世	
16	九淵蟠竜	寛延2 (1749)11・12	正徳4入山、享保7退院、在住8年		
17	洪堂魯宗	享保18(1733)5・18	享保7・6・19遠江学園寺より入山、享保13・9禅堂再建、享保15・8大洪水による寺中荒廢を復旧、享保18退院、在住11年	大洞院(1303)輪住(享保15)、学園寺(1071)8世	
18	大用了義	寛延4 (1751)10・11	肥前高伝寺大光寂照法嗣、享保18・6・13伊豆長源寺より入山、寛保2退院・長福寺へ隠棲、在住9年、後に奥州関川寺に住し長福寺へ再隠棲、世寿66歳	石雲院(607)輪住(享保20)、大洞院(1303)輪住(元文2)、長源寺(246)、長福寺(395)前住、栄福庵(佐賀)4世?、関川寺(福島)25世	263a 273a
19	雷州惟黙	宝暦7 (1757)5・6	因幡出身、竹森氏、肥前高伝寺大光寂照法嗣、享保14石見浄土寺住職、享保16因幡大竜院住職、寛保1雲泉寺へ隠棲、寛保2・3・3当院入山、延享4退院、在住5年、延享4・10・7加賀天徳院住職、宝暦4・4松竜寺へ隠棲、宝暦7尾張黄竜寺開創、世寿67歳	黄竜寺(愛知141)2世、天徳院(石川)7世、浄土寺(鳥根)5世、大竜院(鳥取)15世、松竜寺、雲泉寺	
20	心牛祖印	天明8 (1788)3・25	奥州相馬出身、18世法嗣、延享4奥州白河関川寺会下称名寺より入山、寛延3諸堂葺替、宝暦1鐘楼建立、宝暦9開山堂新築、宝暦13諸堂再葺替、明和8経蔵建立、安永2退院・長福寺へ隠棲、在住26年、世寿82歳	石雲院(607)輪住(宝暦3)、(長福寺(395)前住)、寛沢寺(399)開山、称名寺(福島)	273a
21	齡州義宣	文化13(1816)10・20	榛原郡仁田長興寺衆寮、可睡斎副寺、長興寺14世海州慈容法嗣、安永2・10・24入山、寛政2退院・加賀某寺へ転住、在住17年、摂津で示寂	石雲院(607)輪住(寛政1)	273b

22	大転秀教	文化2 (1805)4・22	寛政2盤石寺より入山、法永居士石塔再建、文化2退院、在住15年、世寿56歳(または46歳)	盤石寺(528)20世	
23	佛州玉穎	文化8 (1811)1・18	九峰画堂法嗣、文化2・5源昌寺より入山、文化5庫裡・方丈新築、文化8退院、在住6年、世寿55歳	源昌寺(434)4世、六角庵(446)開山	
24	海運活隆	天保3 (1832)5・24	焼津市大住出身、曾根氏、23世法嗣、文化8・3・16光鏡院より入山、庫裡造築、天保3退院、在住21年、世寿59歳	石雲院(607)輪住(文政2)、光鏡院(90)11世、長福寺(395)法地開山	87b 88a
25	隆山祖弘	天保11(1840)4・25	甲斐出身、24世法嗣、天保3・8・2法幢寺より入山、天保6・6・29大洪水水害・復旧、天保7開山堂再建・位牌堂新築、天保10・9退院、在住7年、世寿57歳	法幢寺(97)14世、(長福寺(395)前住)	
26	祖海徹宗	明治14(1881)4・24	随意会地開闢(嘉永3)、志太郡志太村牧田市郎右衛門二男、24世法嗣、天保10・10・15法幢寺より入山(36歳)、安政6長福寺法地開闢、安政7・3・10退院・長福寺へ隠棲、在住21年、世寿75歳 [牧田]	總持寺普藏院輪住・大本山總持寺兼務(弘化4)、石雲院(607)輪住(天保14)、法幢寺(97)15世、長福寺(395)2世、圓泉寺(559)法地開山	88b 1041d
27	祖天珉童	明治25(1892)9・24	片法幢会地開闢(文久3)、26世法嗣、万延1・4源昌寺より入山、慶応1退院・寛沢寺へ隠棲、在住5年、世寿71歳	源昌寺(434)11世、寛沢寺(399)前住・2世	
28	義門良孝	明治30(1897)8・7	榛原郡色尾村池田弥十郎二男、26世法嗣、源昌寺・伊豆光月院・法幢寺・光鏡院を経て慶応1入山、開山堂葺替、小方丈新築、明治3退院・圓泉寺へ隠棲、在住5年、後に松壽院へ隠棲、世寿86歳 [池田]	光鏡院(90)17世、松壽院(96)前住、法幢寺(97)19世、源昌寺(434)10世、圓泉寺(559)2世、光月院12世、願成寺2世	88b
29	愚問活宗	明治6 (1873)12・2	榛原郡藤守吉川万六五男、26世法嗣、嘉永7・5法幢寺住職、明治3・11・27伊豆光月院より入山、明治6退院、在住3年、石雲院輪住中に示寂、世寿48歳 [吉川]	石雲院(607)輪住(明治6)、法幢寺(97)18世、光月院13世	
30	興庵恵宗	明治37(1904)9・22	常恒会地開闢(明治13)、26世法嗣、長福寺初住、源昌寺・光泰寺・源昌寺(再住)を経て明治7・3入山、明治22・9退院・石雲院へ転住、在住15年、世寿70歳 [青島]	光泰寺(389)18世、長福寺(395)3世、源昌寺(434)12世、圓泉寺(559)3世、石雲院(607)独住5世、報恩寺2世、岩昌寺2世	
31	真庵豊宗	大正15(1926)10・31	30世法嗣、明治23・4弘徳院より入山、明治29・2退院、在住7年、世寿74歳 [森]	弘徳院(393)28世、南叟寺(451)前住	
32	大演良雄	大正9 (1920)3・13	尾張出身、28世法嗣、万延1長福寺住職、慶應1光鏡院住職、明治29・4・25光鏡院より入山、明治31大洪水で裏山崩壊、開山堂・鐘楼・土蔵瓦葺替、石垣修復、明治39・10退院・長福寺へ隠棲、在住10年、世寿83歳 [中川]	大仙寺(68)開山、光鏡院(90)18世、長福寺(395)4世、圓泉寺(559)4世、松壽院(96)法地開山、全珠院(400)開闢	88c
33	大庵良潤	昭和9 (1934)12・26	32世法嗣、明治39法幢寺より入山、大正7退院・静岡へ隠棲、在住12年、世寿73歳 [大村]	法幢寺(97)25世、寛沢寺(399)4世、全珠院(400)2世	88d

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴世世代(5)

34	玉潤祖温	昭和9 (1934)5・11	森町蔵雲院佛門祖岳法嗣(明治34・9)、大正5蔵雲院住職、大正7蔵雲院より入山、禪堂・庫裡大改修、大正12草葺を瓦葺に改修、昭和9退院、在住16年、世寿57歳 [鈴木]	林興院34世、蔵雲院27世	474d
35	義山良演	昭和13(1938)2・16	勸請(昭和13・9・15)、焼津市田尻出身、32世法嗣、明治33泉龍寺住職、明治39法幢寺住職、世寿65歳 [青木]	法幢寺(97)26世、泉龍寺(558)9世	88d
36	祥岳俊隆	昭和46(1971)12・4	明治37・5神奈川県中郡土沢村出身、34世法嗣(大正15)、昭和4蔵雲院住職、昭和11・4・23蔵雲院より入山、昭和22本堂瓦葺改修、昭和34・5・22米国サンフランシスコ桑港寺住職、昭和41退院、昭和44米国タサハラ禅心寺開山、在住30年、世寿68歳 [鈴木]	瑞應寺(410)法地開闢、蔵雲院28世、林興院36世、桑港寺(米国サンフランシスコ)6世、禅心寺(米国タサハラ)開山	474e
37	満慶祖光	平成4 (1993)1・1	勸請(昭和34—昭和41当院代務の功による)、愛知県田原町出身、34世弟子、心岳寺29世舜光鉄禅法嗣、昭和13・12心岳寺住職、永平寺監院 [鈴木]	心岳寺(461)30世、法昌寺(482)3世、清林寺(484)2世	636e
38	牛岳包一	現住	森町出身、昭和41入山 [鈴木]	寛沢寺(399)12世、法運寺(571)現住	474g

8教区	るりさん	こうたいじ	〒	421-1131	
389番	瑠璃山	光泰寺	住 所	藤枝市岡部町内谷424	
			住 職	梶川泰山	
開山年	文禄年間(1592-1596)頃			草創年	不詳・真言宗
本 尊	延命地藏菩薩、(旧、阿弥陀如来(伝弘法大師作、真言宗時代))				
開 基					
旧 名 称	十楽院(十楽という地名による、真言宗時代)				
旧所在地					
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)				
寺 史 等					

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	圓洲舜光	慶長3 (1598)4・16		石雲院(607)輪住(文禄2)、梅林院(390)8世、観音寺(403)開山、福寿院(414)開山、持珠院(416)開山	438c
2	大翁恵晟	寛永11(1634)11・26	中興	梅林院(390)9世、南陽寺(397)2世、専念寺(407)開山、多福寺(409)開山	438d
3	拳山長昇	寛永12(1635)9・6		總持寺普蔵院輪住(寛永12)、石雲院(607)輪住(元和9)、梅林院(390)11世、常昌院(398)開山、東向寺(420)開山	438f
4	白洲門龍	寛文8 (1668)7・23	再中興、世寿70歳		
5	峯壽是雄	宝永1 (1704)5・25	重興、(諸堂再建、岡部町誌より)、世寿73歳	三星寺(411)開山	
6	祥侃峯吉	享保15(1730)3・29	元禄15・8・21繪旨拜戴、世寿59歳		
7	萬濤峯礪	延享2 (1745)8・9	世寿52歳		

8	英樹邦機	安永3 (1774)1・14	世寿71歳	梅林院(390)20世、弘徳院(393)11世、富洞院15世	438b
9	仙機賢道	天明7 (1787)10・21	宝曆2・3・19論旨拝戴、世寿67歳		
10	管強忍棧	文化3 (1806)10・10	明和6・3・19論旨拝戴、世寿72歳	永光寺(204)8世、永源寺(206)22世、多福寺(409)前任	
11	義棧獅勇	享和2 (1802)4・21	寛政1・4・8論旨拝戴、世寿42歳		
12	家山江邦	弘化4 (1847)10・11	世寿85歳	多福寺(409)前任、永源院8世	438e
13	祖峰勇道	天保3 (1832)11・1	文政2・5・1論旨拝戴		
14	海天恵山	元治1 (1864)4・27	文政5・2・24論旨拝戴	宝積寺(220)15世、多福寺(409)前任、正福寺、光永寺	438b
15	宏済方国	文久1 (1861)10・19			
16	洞中祖舜	安政6 (1859)6・19	文政5・3・10論旨拝戴		
17	良順恵温	慶応1 (1865)4・8	万延1・10・3論旨拝戴	永源院15世	438c
18	興庵慧宗	明治37(1904)9・24	[青島]	林叟院(388)30世、長福寺(395)3世、源昌寺(434)12世、圓泉寺(559)3世、石雲院(607)独住5世、報恩寺2世、岩昌寺2世	88b
19	黙庵寛山	明治6 (1873)10・5		利勝院(428)4世	
20	明庵恵哲	昭和4 (1929)2・14	葉梨村出身	東林寺(28)5世、永源院19世	438d
21	宗庵徹苗	昭和3 (1928)12・18	久能江雲寺で示寂 [八木]	源昌寺(434)16・18世	88c
22	文庵宗明	昭和18(1943)6・10	岡部町出身、20世弟子 [池田]	常昌院(398)2世、永源院	438b
23	文淵亮天	昭和39(1964)10・22	22世弟子		
24	玉巖源龍	昭和50(1975)6・5	愛知県渥美郡出身、22世弟子、世寿77歳、法齢64年 [鈴木]	源昌寺(434)21世	438c
25	浩月泰山	現住	24世弟子、昭和53・10・1晋山式 [梶川]	南陽寺(397)現住、三星寺(411)現住、源昌寺(434)22世	438d

8教区	やかわさん	ばいりんいん	〒	421-1113
390番	谷川山	梅林院	住 所	藤枝市岡部町桂島964
			住 職	加藤秀宣
開山年	長享2(1488)		草創年	不詳・真言宗
本 尊	十一面千手観世音菩薩			
開 基	朝比奈氏			
旧 名 称				
旧所在地	((真言宗時代)現在地より1里程谷奥、駿河記・新風土記より)			
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)			
寺 史 等	『梅林院史』			

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	崇芝性俗	明応5 (1496)10・27		洞松寺(岡山28)5世、石雲院(607)開山、増善寺(60)開山、林叟院(388)開山、円成寺(582)開山、華嚴院(717)開山、無量寿寺(埼玉330)開山、文殊寺(同391)開山、淨牧院(東京89)開山、法幢寺開山?	384a 405a
2	界巖繁越	永正7 (1510)4・27	開關開山	石雲院(607)輪住2世(延徳3)・7世(明応5)・13世(文亀2)	405a 437a

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴任世代(5)

3	和僧良穆	永正6 (1509)8・25	無学大休禪師	石雲院(607)輪住(永正3)、龍泉院(茨城13)開山、全龍寺(同18)開山、龍泉院(同151)開山	437a
4	心包玄契	天文4 (1535)6・29		萬松院(394)開山	437b
5	靈屋契鑑	永祿4 (1561)4・8		石雲院(607)輪住(天文8)、龍泉院(茨城13)2世、龍泉院(同151)2世、最林寺(422)開山、總善寺(426)開山、喜雲寺(431)開山、万年寺(443)開山、高寅寺(茨城16)開山	437b 437c 438a
6	来天瑛從	元龜1 (1570)9・1		石雲院(607)輪住(永祿3、元龜1)、萬松院(394)2世、常願寺(415)開山	438a
7	可屋芳察	文祿4 (1595)9		孝養院(402)開山	438b
8	円洲舜光	慶長3 (1598)4・16		石雲院(607)輪住(文祿2)、光泰寺(389)開山、観音寺(403)開山、福寿院(414)開山、持珠院(416)開山	438c
9	大翁恵最	寛永11(1634)11・26		光泰寺(389)2世、南陽寺(397)2世、専念寺(407)開山、多福寺(409)開山	438d
10	饒山存益	寛永12(1635)7・8		昌林寺開山	438e
11	拳山長昇	寛永12(1635)9・6		總持寺普蔵院輪住(寛永12)、石雲院(607)輪住(元和9)、光泰寺(389)3世、常昌院(398)開山、東向寺(420)開山	438f
12	家州長伝				438g
13	直州伝察				438b
14	鷲岩舒鷲			石雲院(607)輪住(万治1)	438c
15	機外智全			石雲院(607)輪住(延宝4)	438d
16	石牛徹春		中興		438e
17	捲室頓席			石雲院(607)輪住(元祿13)	438f
18	雄峯春英	寛延4 (1751)8・16	重興	石雲院(607)輪住(享保9)、永源院開山	438g
19	独嶠岱雄	宝暦9 (1759)2・23		石雲院(607)輪住(寛延1)	438b
20	英樹邦棧	安永3 (1774)1・14		光泰寺(389)8世、弘徳院(393)11世、富洞院15世	438b
21	覚智己靈	天明6 (1786)4・9		石雲院(607)輪住(明和9)	438c
22	雪庭疎山	文化3 (1806)10・22		十輪寺(391)9世	438d
23	道丕鳳玄	文政2 (1819)1・16		十輪寺(391)10世	438e
24	歛戒慧忠	天保3 (1832)9・26		石雲院(607)輪住(享和2)、永源院7世	438d
25	祖外恵岳	文政5 (1822)7・13			
26	興賢盛峰			石雲院(607)輪住(文政3)	
27	大賢察淵	嘉永4 (1851)10・21		松岳寺(211)24世	64e?
28	大雲泉龍				
29	釣月嶺翁	明治7 (1874)11・20		常楽院(425)19世	
30	牧岩見牛			石雲院(607)輪住(天保15)	
31	右方恵天	慶応1 (1865)4・20		極楽寺25世、圓成寺25世	440c
32	恵良光吟	明治23(1890)8・23	[杉本]	石雲院(607)輪住(嘉永3、慶応4)、圓成寺27世	440b
33	透関宗禪	明治37(1904)2・16	[加藤]	(孝養院(402)前住)	440c
34	雄峰楚雲	大正14(1925)3・25		永源寺(206)31世	

35	透雲銀峯	昭和24(1949)10・21	中興 [加藤]	石雲院(607)独住9世、海蔵寺8世	440d
36	禅苑菊苗	昭和28(1953)6・29	[加藤]	岩昌寺11世	440d
37	大機曹雲	昭和49(1974)9・19		(孝養院(402)法地開山)、(福寿院(414)前住)	
38	透禅良範	平成17(2005)5・16	重興 [加藤]	観音寺(403)前住	440e
39	大寅秀宣	現住	[加藤]	孝養院(402)現住、観音寺(403)現住、専念寺(407)現住、福寿院(414)現住、持珠院(416)現住、東向寺(420)現住、大仲寺(444)現住	

8教区	ほうじゅさん	じゅうりんじ	〒	421-1132
391番	寶珠山	十輪寺	住 所	藤枝市岡部町三輪925
			住 職	柴田芳憲
開山年	寛永1(1624)		草創年	不詳
本 尊	延命地藏菩薩			
開 基	嘯山虎公和尚(寛永1(1624)示寂)			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一林叟院(388)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	照山元春	寛永5 (1628)2・19		總持寺普蔵院輪住(慶長15)、林叟院(388)9世、法号庵(廢)開山	409g
2	明天嶺察	寛永20(1643)1・5		石雲院(607)輪住(慶長13)、林叟院(388)10世、信香院(556)4世、全珠院(400)開山	409h 410b
3	大庵寅壮	寛文10(1670)4・12			409c
4	心眼快傳	宝永4 (1704)4・13			409d
5	龍舟文快	享保13(1728)8・29	中興、元禄年間に火災で焼失した諸堂再建		409e
6	癡外白純	明和1 (1764)11・12			409f
7	熊嶽文芸	安永6 (1777)2・20			
8	関充積門	宝暦13(1763)5・16			
9	雪庭疎山	文化3 (1806)10・23	安永9・11・2火災、寛政12木喰上人が子安地藏菩薩と虚空蔵菩薩2躰を造る	梅林院(390)22世	438d
10	道丕鳳玄	文政2 (1819)1・16		梅林院(390)23世	438e
11	見外宜道	文化8 (1811)8・1	重興、藤枝市藪田出身、享和3本堂再建		438f
12	正山格庭	嘉永4 (1851)6・11			438g
13	大安玉道	天保9 (1838)11・1			438c
14	月山瑞光	慶応2 (1866)6・24			
15	祖英寒道	安政6 (1859)2・23		弘徳院(393)22世、興福寺(396)法地開山、永源院12世	438d
16	雲中東嶺	明治10(1877)5・13	岡部町桂島出身 [近藤]	当寺18世、興福寺(396)2世、永源院14世	438e
17	宗嶺禅提		(出奔、西駿曹洞宗史より)		
18	雲中東嶺	明治10(1877)5・13	再住 [近藤]	当寺16世、興福寺(396)2世、永源院14世	438e

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴任世代(5)

19	英傳実雄	大正11(1922)11・27	中興、岡部町岡部出身、明治18庫裡再建 [柴田]	興福寺(396)3世、南陽寺(397)3世、慈眼寺(432)8世	438f
20	祖傳雲嶺	大正14(1925)4・16		興福寺(396)4世	
21	大宏貫禪	昭和40(1965)6・5	[水谷]	興福寺(396)5世、南陽寺(397)4世	438c
22	哲英雄傳	昭和51(1976)3・20	静岡市横内町出身、大正14住職、昭和24山門建立、昭和50退董 [柴田]	慈眼寺(432)9世	438c
23	覚心力雄	平成10(1998)9・16	藤枝市横内出身、昭和55開山堂・位牌堂建立 [柴田]	興福寺(396)8世、慈眼寺(432)10世	438d
24	泥鶴芳憲	現住	藤枝市横内出身、平成14庫裡新築 [柴田]	興福寺(396)9世、慈眼寺(432)11世	

8教区	えにちざん	こうとくいん	〒	425-0012
393番	恵日山	弘徳院	住所	焼津市浜当目3丁目14-7
			住職	松永芳信
開山年	永正16(1519)			草創年
本尊	薬師如来			
開基	祖堂岱越大和尚			
旧名称				
旧所在地	(益津郡野秋村野秋、明治23・8・15現在地へ移転、東益津村誌より)			
本寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)			
寺史等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴任寺	大系譜
開山	祖堂岱越	永正16(1519)4・16			409b
2	龍山昌白	天文17(1548)2・11		龍珠院(廃)開山	
3	勢岩全胡	文禄2(1593)8・6		勢岩寺(404)開山、香集寺(405)開山	
4	洞廓存達	寛永3(1626)12・6		石雲院(607)輪住(慶長2)、海雲寺(418)開山、全昌院(廃)開山	
5	大室長偉	寛永20(1643)3・9			
6	肝慶關龍	元禄3(1690)10・29		常楽寺(412)開山	
7	香峰是薫	正徳5(1715)8・8			
8	祖峯覺禪	正徳2(1712)4・26			
9	鳳山賢瑞	享保19(1734)6・3			
10	石峰太嚴	明和2(1765)10・15			
11	英樹邦棧	安永3(1774)1・14		光泰寺(389)8世、梅林院(390)20世、富洞院15世	
12	勇鳳恭麟	安永8(1779)7・18			
13	護國海寧	天明8(1788)8・5		寿昌院(廃)開山	
14	海屋添籌	文化3(1806)12・3		石雲院(607)輪住(安永7)、成道寺(551)13世、栖源寺(廃)隠棲	
15	祖岳本来	寛政2(1790)11・15			
16	鬚勇喚虎	天保1(1830)6・18(文政13)			
17	雪庭秀山	天保5(1834)10・5			
18	恭應越山	文政5(1822)7・28		桃源寺(89)18世	
19	豊國文教	弘化1(1844)12・26			
20	雪梅闇英	弘化3(1846)12・4			

21	透禪關明	嘉永1 (1848)11・16			
22	祖英實道	安政6 (1859)2・23		十輪寺(391)15世、興福寺(396)法地開山、永源院12世	438d
23	大道祖教	明治3 (1870)10・21			
24	大安魯道	明治20(1887)5・8			
25	大用夏山	明治29(1896)6・12	[鍋田]	長福寺(395)5世、寛沢寺(399)前任・3世、慶雲寺18世	
26	獨歩曇山	明治9 (1876)8・22			
27	瑞國芳年		(出奔、西駿曹洞宗史より) [増田]	龍泉寺(千葉103)18世	503b
28	真庵豊宗	大正15(1926)11・30	[森]	林叟院(388)31世、南叟寺(451)前任	
29	花岳泰眼	大正4 (1915)8・11	(現在地へ移転、西駿曹洞宗史より) [松永]	宗徳院(124)27世	276b
30	大玄希道	昭和7 (1932)9・20	[松永]	宗徳院(124)29世、海岸寺開山	276e
31	鏡外素圓	昭和8 (1933)6・19	[大賀]	宗徳院(124)28世、冷泉院(130)6世、見性寺(131)3世、龍興寺(138)2世	276b
32	禪巖弘道	昭和57(1982)5・4	[松永]		276d
33	(大器)芳信	現住	[松永]	勢岩寺(404)前任、香集寺(405)現住、常楽寺(412)現住	276e

8教区	しゆくゆうざん	ばんしょういん	〒	421-1122
394番	祝融山	萬松院	住 所	藤枝市岡部町子持坂501
			住 職	三浦信孝
開山年	大永年間(1521-1528)		草創年	(不詳・真言宗、駿河記・駿河志料より)
本 尊	薬師如来			
開 基	(草創)行基菩薩、(曹洞宗)天桂芳祐大禪定門(岡部出羽守)			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	心包玄契	天文4 (1535)6・29		梅林院(390)4世	437b
2	来天瑛從	元龜1 (1570)9・1	永禄3常願寺開山	石雲院(607)輪住(永禄3、元龜1)、梅林院(390)6世、常願寺(415)開山	438a
3	大惠麟撮	天正19(1591)3・4		大学寺(529)開山	
4	春山全意	11			
5	天柱麟香	慶長19(1614)9・25		大学寺(529)2世	
6	明庵秀水	寛永20(1643)10・22		大学寺(529)3世	
7	心翁峯伝	23			
8	盧洲守岳	寛文3 (1663)3・8		石雲院(607)輪住(寛永15)、大学寺(529)4世	
9	行山泰周	天和3 (1683)2・23			
10	信庵秀音	寛文4 (1664)7・8			
11	清堂敬国	元禄11(1698)12・7		石雲院(607)輪住(寛文10)	
12	円海定水	寛保1 (1741)9・14		石雲院(607)輪住(元禄7)、中正寺(406)開山	

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴世世代(5)

13	珉山巖嶺	元文3 (1738)1・2		石雲院(607)輪住(享保3)	
14	悟山文省	天明2 (1782)10・28		石雲院(607)輪住(寛保2)	
15	清屋巖浄	寛政1 (1789)10			
16	光円覚明	寛政2 (1790)4・7			
17	石毛俊岳			石雲院(607)輪住(寛政2)	
18	黙宗泰禪			顕光院(1)16世、洗耳寺(36)20世	461b
19	海印喜運	弘化4 (1847)8・24		石雲院(607)輪住(天保9)、宗参寺(563)7世	
20	翠巖智英	天保14(1843)3・24		長光寺(愛知363)3世	747b
21	牧翁看牛	明治9 (1876)5・4	嘉永1・12・7火災で諸堂宇記録等焼失		747d
22	恵学看禪	大正12(1923)11・3	[三浦]	宗参寺(563)9世	747e
23	乾外通天	昭和33(1958)3・31	中興、昭和15本堂再建、世寿86歳 [三浦]	慶龍寺(20)9世	747f
24	大顕信雄	平成16(2004)5・4	大正13・2・23生まれ、23世弟子(昭和9・4・8)、昭和27冬晋山式、平成9庫裡再建、中正寺で示寂、世寿80歳 [三浦]	中正寺(406)前住、常願寺(415)前住	747g
25	大鑑信孝	現住	昭和25生まれ、昭和57・7中正寺住職、平成11・10当院入寺、平成12・4・30晋山式 [三浦]	中正寺(406)現住、常願寺(415)現住	

8教区	しんりゅうざん	ちょうふくじ	〒	425-0006	
395番	神龍山	長福寺	住 所	焼津市関方412	
			住 職	濱田義道	
開山年	寛文12(1672)			草創年	天正2(1574)真言宗
本 尊	大日如来				
開 基	益山文洲				
旧 名 称					
旧所在地					
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)				
寺 史 等					

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	益山文洲	貞享2 (1685)10・25	(林叟院より隠居、東益津村誌より)	石雲院(607)輪住(延宝9)、林叟院(388)13世、瑞應寺(410)開山	
前住	大用了義	寛延3 (1750)10・12	(肥前出身、林叟院より隠居、在住3年、奥州関川寺へ転住、5年後当寺帰住、当寺で示寂、東益津村誌より)	石雲院(607)輪住(享保20)、大洞院(1303)輪住(元文2)、林叟院(388)18世、長源寺(246)、崇福庵(佐賀)4世?、関川寺(福島)25世	263a 273a
(前住)	(心牛祖印)		(林叟院記録より)	石雲院(607)輪住(宝暦3)、林叟院(388)20世、寛沢寺(399)開山、称名寺(福島)	273a
(前住)	(隆山祖弘)		(林叟院記録より)	林叟院(388)25世、法幢寺(97)14世	
法地開山	海運海隆	天保3 (1832)5・24	法地開闢(安政6)、(勸請、林叟院記録より)、曾根氏出身	石雲院(607)輪住(文政2)、林叟院(388)24世、光鏡院(90)11世	87b 88a

2	祖海微宗	明治14(1881)4・24	(安政6・4林叟院より隠居、東益津村誌より) [牧田]	總持寺普藏院輪住・大本山總持寺兼務(弘化4)、石雲院(607)輪住(天保14)、林叟院(388)26世、法幢寺(97)15世、圓泉寺(559)法地開山	88b 1041d
3	興庵慧宗	明治37(1904)9・24	(初住、林叟院記録より) [青島]	林叟院(388)30世、光泰寺(389)18世、源昌寺(434)12世、圓泉寺(559)3世、石雲院(607)独住5世、報恩寺2世、岩昌寺2世	88b
4	大演良雄	大正9 (1920)3・13	[中川]	林叟院(388)32世、大仙寺(68)開山、光鏡院(90)18世、圓泉寺(559)4世、松壽院(96)法地開山、全珠院(400)開關	88c
5	大用虔三	明治29(1896)7・22	林叟院27世祖天珉童の上足 [鍋田]	弘徳院(393)25世、寛沢寺(399)前住・3世、慶雲寺18世	
6	海門良宗	明治24(1891)10・20	林叟院28世義門良孝の二子 [増田]		88c
7	拙庵宗孝	明治29(1896)1・18	3世の上足 [海老原]	源昌寺(434)13世	
8	禅庵咄宗	昭和25(1950)1・15	明治29晋山 [青島]		438b
9	大仙幸雄	昭和39(1964)9・3	昭和28・4南陽寺から転住 [熊谷]	南陽寺(397)7世	
10	祖心亮寛	平成15(2003)10・1	[水口]		416e
11	大豊義道	現住	[濱田]	源昌寺(434)24世、六角庵(446)現住、永源院22世	438d

8教区	るりこうざん	こうふくじ	〒	421-1132
396番	瑠璃光山	興福寺	住 所	藤枝市岡部町三輪474
			住 職	柴田芳憲
開 山 年	寛永年間(1624-1644)		草創年	皇極天皇3(645)式大社神社とともに草創
本 尊	薬師如来(伝聖徳太子作)			
開 基	嘯山虎公和尚(寛永1(1624)示寂)			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一林叟院(388)一十輪寺(391)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
前往	大峯祖闍	安永4 (1707)9・27			
前往	俊山繁秀	安永5 (1708)7・25			
前往	丹山玄瑞	享保1 (1716)10・7			
前往	得水雲龍	享保3 (1718)12・2			
前往	覚庭巨範	宝暦12(1762)6・18			
前往	孤州百隣	明和2 (1765)8・11			
前往	定山要禅	明和6 (1769)9・14			
前往	岳雄春山	文化2 (1805)8・21			
法地開山	祖英実道	安政6 (1859)2・23		十輪寺(391)15世、弘徳院(393)22世、永源院12世	438d
2	雲中東嶺	明治10(1877)5・13	[近藤]	十輪寺(391)16・18世、永源院14世	438e
3	英傳実雄	大正11(1922)11・27	[柴田]	十輪寺(391)19世、南陽寺(397)3世、慈眼寺(432)8世	438f

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴任世代(5)

4	祖傳雲嶺	大正14(1925)4・16		十輪寺(391)20世	
5	大宏貫禪	昭和40(1965)6・5	[水谷]	十輪寺(391)21世、南陽寺(397)4世	438c
6	大機宏道				
7	一貫貞雄	昭和57(1982)8・20	岡部町三輪出身 [水谷]	源昌寺(434)23世	438d
8	覚心力雄	平成10(1998)9・16	藤枝市横内出身 [柴田]	十輪寺(391)23世、慈眼寺(432)10世	438d
9	泥鶴芳憲	現住	藤枝市横内出身 [柴田]	十輪寺(391)24世、慈眼寺(432)11世	

8教区	しんこくさん	なんようじ	〒	421-1131
397番	神谷山	南陽寺	住 所	藤枝市岡部町内谷2170
			住 職	梶川泰山
開山年			草創年	天正17(1589)頃・真言宗
本 尊	延命地藏菩薩 (脇仏)如意輪観音菩薩			
開 基				
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一光泰寺(389)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴任寺	大系譜
開山	茂山谷榮	文禄3 (1594)1・19	草創開山、真言宗		
2	大翁惠最	寛永11(1634)11・26	改宗開山	梅林院(390)9世、光泰寺(389)2世、専念寺(407)開山、多福寺(409)開山	438d
前往1	一樹繁公	慶長2 (1597)7・14			
前往2	大麟知公	寛永7 (1630)10・18			
前往3	文叟最公	寛永19(1642)11・28			
前往4	鐵漢宗樹	天和3 (1683)9・2			
前往5	淵心宗龍	享保3 (1718)12・31?			
前往6	志外宗州	元文5 (1740)3・25			
前往7	觀海宗音	安永5 (1776)7・22			
前往8	本翁格明	安永9 (1780)9・25			
前往9	獨川木橋	文化11(1814)7・1	丸子出身、世寿79歳		
3	英傳実雄	大正11(1922)11・26	傳法始祖 [柴田]	十輪寺(391)19世、興福寺(396)3世、慈眼寺(432)8世	438f
4	大宏貫禪		[水谷]	十輪寺(391)21世、興福寺(396)5世	438c
5	無関泰宗	昭和48(1973)12・19			
6	大心道雄	昭和44(1969)9・14	[濱田]	永源院21世	438c
7	大仙幸雄	昭和39(1964)9・3	[熊谷]	長福寺(395)9世	
8	文明仙秀	昭和41(1966)9・18			
9	大安龍仙	昭和50(1975)8・16	光泰寺24世弟子 [池田]		438d
現住	浩月泰山	現住	[梶川]	光泰寺(389)25世、三星寺(411)現住、源昌寺(434)22世	438d

8教区	とうこくざん	じょうしょういん	〒	421-1131
398番	東谷山	常昌院	住 所	藤枝市岡部町内谷1967
			住 職	若山弘明
開山年	寛永年間(1624-1644)		草創年	
本 尊	聖観世音菩薩			
開 基	大塚長清長者			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)—光泰寺(389)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	舉山長興	寛永12(1635)9・6		總持寺普藏院輪住(寛永12)、石雲院(607)輪住(元和9)、梅林院(390)11世、光泰寺(389)3世、東向寺(420)開山	438f
(前往)	(祖庵玄榮)		(伽藍建立発願、東林寺記録より)	養秀寺(66)6世、東林寺(69)7世	
2	文庵宗明	昭和18(1943)6・10	[池田]	光泰寺(389)22世、永源院	438b
3	悦巖良意	明治29(1896)12・12	法地開山 [原]	洞雲寺(愛知185)15世、陽春院(同299)4世	302c
4	悦学良瑞	大正14(1925)10・27	[原]	洞雲寺(愛知185)17世、全昌寺(同203)18世	302d
5	悦聞良道	大正8 (1919)3・30	4世弟子	洞雲寺(愛知185)18世	
6	乙堂良彦	昭和27(1952)2・8	[原]	洞雲寺(愛知185)19世	302g
7	大忍義重	昭和40(1965)4・16	愛知県仁昌寺弟子		
8	大安弘明	現住	6世(洞雲寺19世)弟子 [若山]		302h

8教区	かざおさん	けんたくじ	〒	425-0015
399番	風尾山	笥沢寺	住 所	焼津市石脇上423
			住 職	鈴木俊呉
開山年	万治年間(1658-1661)		草創年	
本 尊	阿弥陀如来			
開 基	右谷左公首座			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開基	右谷左公 (有國左公)		(万治年間に阿弥陀如来像を背負って来住、当寺開創、東益津村誌より)		
開山	心牛祖印	天明8 (1788)3・25	勸請(大正6)、奥州相馬出身、林叟院18世大用了義法嗣、宝曆3林叟院より石雲院輪住、世寿82歳	石雲院(607)輪住(宝曆3)、林叟院(388)20世、(長福寺(395)前往)、称名寺(福島)	273a
前往	祖天珉童	明治25(1892)9・24	林叟院26世祖海徹宗法嗣、慶応1入山、明治25退院、世寿71歳?	当寺2世、林叟院(388)27世、源昌寺(434)11世	

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴任世代(5)

前任	大用虔三	明治29(1896)7・22	[鍋田]	当寺3世、弘徳院(393)25世、長福寺(395)5世、慶雲寺18世	
2	祖天珉童	明治25(1892)9・24	勸請(大正6)	当寺前任、林叟院(388)27世、源昌寺(434)11世	
3	大用虔三	明治29(1896)7・22	勸請(大正6) [鍋田]	当寺前任、弘徳院(393)25世、長福寺(395)5世、慶雲寺18世	
4	大庵良潤	昭和9(1934)12・26	勸請(大正6)、林叟院32世大演良雄法嗣、世寿73歳 [大村]	林叟院(388)33世、法幢寺(97)25世、全珠院(400)2世	88d
5	東宗賢光	昭和21(1946)3・22	勸請(大正6) [伊藤]	耕春院(424)21世、源昌寺(434)19世	88d
6	竺岩仏天		勸請(大正6)	西岩寺(114)7世	204d
7	天岩潭竜	昭和18(1943)1・30	勸請(大正6)	西岩寺(114)8世	204e
8	絶応普学	大正11(1922)1・16	法地開闢(大正6)、7世法嗣		
9	東傳瑞光	昭和51(1976)8・13	[渡邊]	耕春院(424)23世、真福寺(442)前任、南叟寺(451)前任、如法寺(458)前任	88e
10	春屋穆山	昭和59(1984)4・10	世寿62歳 [大橋]	龍泉寺(92)7世	925f
11	(泰岳)弘義	東堂	平成8退任 [澤田]	増福寺(99)11世、清水寺2世	27g
12	牛岳包一	東堂	林叟院36世祥岳俊隆法嗣、平成8・11・12就任、平成19・4・1退任 [鈴木]	林叟院(388)38世、法運寺(571)現住	474g
13	徹門俊良	現住	12世法嗣、平成19・4・1就任 [鈴木]		

8教区			〒	425-0088
400番		全珠院	住 所	焼津市大覚寺1204
			住 職	曾根宏規
開山年	弘治3(1557)		草創年	嘉祥3(850)真言宗 永延2(988)天台宗
本 尊				
開 基	(真言宗)大覚寺殿世仁親王、(天台宗)從五位下右兵衛尉源盛信(横田氏)			
旧 名 称	(真言宗)大覚寺、(天台宗)善修庵			
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)			
寺 史 等				

世代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴任寺	大系譜
開山	明天嶺察	寛永20(1643)1・5		石雲院(607)輪住(慶長13)、林叟寺(388)10世、十輪寺(391)2世、信香院(556)4世	409h 410b
	(梅翁)		(貞享3・3・28当寺裏の原野より薬師如来像発掘、西益津村誌より)		
	(國友)		(明治24当時住職、西益津村誌より) [鳥居]		
開闢	大演良雄	大正9(1920)3・13	尾張出身、瀬名中川東太夫養子、世寿83歳 [中川]	林叟院(388)32世、大仙寺(68)開山、光鏡院(90)18世、長福寺(395)4世、圓泉寺(559)4世、松壽院(96)法地開山	88c
2	大庵良潤	昭和9(1934)12・25	開闢弟子、世寿73歳 [大村]	林叟院(388)33世、法幢寺(97)25世、寛沢寺(399)4世	88d
3	月皎良潭	昭和19(1944)5・1	2世弟子、(大正2当時住職、西益津村誌より)、世寿64歳 [山口]		88e

4	眞順俊孝	平成13(2001)10・26	3世弟子、昭和25夏前晋山、 世寿88歳 [山口]		88f
現住	大融宏規	現住	4世弟子、平成13・11・29晋山 [曾根]	耕春院(424)26世、真福寺 (442)現住、南叟寺(451)現 住、大覚寺	

8教区	でんちゅうざん	ぎよくでんいん	〒	425-0087
401番	田中山	旭傳院	住 所	焼津市保福島680
			住 職	青木浄翁
開山年			草創年	
本 尊	延命地藏菩薩			
開 基	月山賀公和尚			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開基	月山賀公				
草創開山	山齡宗潤			林叟院(388)8世、糧堂院開 山、長福寺開山?	409f
前往	鯤翁鯨公		元禄年間頃、堂を建てて林叟 院8世山齡宗潤を迎え、草創 の法要を営んだとの伝あり		
前往	台雄止山		(以下の前往世代順不詳)		
前往	亀禪爲鏡				
前往	就山天成				
前往	佛關禪透	明治29(1896)12・8			
前往	實應完成				
開山	眠芳惟安	昭和30(1955)3・26	世寿91歳 [岸澤]	法光寺(青森)35世、安泰寺 (京都)、清法寺(埼玉)14世、 永源寺(兵庫221)24世	101b 102a
2	正覺知等	平成2(1990)11・25	世寿87歳 [岸澤]	永源寺(兵庫221)26世	102a
3	泰心慶道	東堂	[田中]		102b
4	穆舟浄翁	現住	[青木]		

8教区	くないさん	こうよういん	〒	426-0003
402番	宮内山	孝養院	住 所	藤枝市下当間542
			住 職	加藤秀宣
開山年	永禄11(1568)			
本 尊	大日如来			
開 基	松巖高公首座			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	可屋芳察	文禄4(1595)9		梅林院(390)7世	438b
(前往)	(透関宗禪)		(大系譜より)	梅林院(390)33世	440c

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴世世代(5)

(法地開山)	(大機曹雲)		(西駿曹洞宗史より)	梅林院(390)37世、(福寿院(414)前住)	
前住	(禅岳)芳賢	平成4(1992)1・13	[加藤]		440e
現住	大寅秀宣	現住	[加藤]	梅林院(390)39世、観音寺(403)現住、専念寺(407)現住、福寿院(414)現住、持珠院(416)現住、東向寺(420)現住、大仲寺(444)現住	

8教区	ふもんさん	かんのんじ	〒	426-0003
403番	普門山	観音寺	住 所	藤枝市下当間4
			住 職	加藤秀宣
開山年	文禄2(1593)5・17			草創年
本 尊	聖観世音菩薩			
開 基	安達盛宗			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	圓洲舜光	慶長3(1598)4・16		石雲院(607)輪住(文禄2)、梅林院(390)8世、光泰寺(389)開山、福寿院(414)開山、持珠院(416)開山	438c
前住	透禅良範	平成17(2005)5・16	[加藤]	梅林院(390)38世	440e
現住	大寅秀宣	現住	[加藤]	梅林院(390)39世、孝養院(402)現住、専念寺(407)現住、福寿院(414)現住、持珠院(416)現住、東向寺(420)現住、大仲寺(444)現住	

8教区	たにくみざん	せいがんじ	〒	425-0015
404番	谷汲山	勢岩寺	住 所	焼津市石脇上680
			住 職	松永善弘
開山年	寛永2(1625)			草創年
	(不詳・真言宗・高草山法華寺12坊の1つ、東益津村誌より)			
本 尊	不動明王			
開 基	谷山白現和尚(文禄年間8・13示寂)			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)—弘徳院(393)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	勢岩全劫	文禄2(1593)8・6		弘徳院(393)3世、香集寺(405)開山	
開基	谷山白現	文禄 8・13			
前住	快翁善慶	文禄 8・3			
前住	不山椿秀	文禄 8・3			

前住	大圓順智	享保2 (1717)1・21			
前住	石刻知禪	享保18(1733)7・9			
前住	了翁秀覺	宝曆7 (1757)6・3	中興		
前住	梅雲蘭香	享保3 (1803)7・27			
前住	大宅賢秀	文化2 (1805)6・27			
前住	隨應恭順	明治1 (1868)12・28			
前住	壽山圓明	明治15(1882)8・3			
前住	(大器)芳信	東堂	[松永]	弘徳院(393)33世、香集寺(405)現住、常楽寺(412)現住	276e
前住	善弘	現住	[松永]	海雲寺(418)現住	

8教区	とうめざん	こうしゅうじ	〒	425-0012
405番	当目山	香集寺	住所	焼津市浜当目1727
			住職	松永芳信
開山年	(元和2(1616)、東益津村誌より)		草創年	弘仁6(815)
本尊	虚空蔵菩薩			
開基	弘法大師			
旧名称				
旧所在地				
本寺	大本山總持寺一大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―弘徳院(393)			
寺史等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開基	弘法大師	承和2 (835)3・21	真言宗		
前住	一叟壽天				
前住	巨川春駟				
前住	慶屋龍春				
前住	花翁春洞				
前住	運道玄達				
前住	香巖存芳				
前住	一光叟天				
前住	籌豊了運				
前住	玉翁春光				
前住	明叟鑑公				
(開山)	勢岩全昫	文禄2 (1593)8・6	(開山、東益津村誌より)	弘徳院(393)3世、勢岩寺(404)開山	
前住	擻叟玄泉	寛永3 (1626)2・20	(弘徳院3世全育法嗣、元和2当寺再興志願、本堂再建、山寺号制定、全育を開山に招請、同上)		
前住	松岩源長	寛文3 (1663)3・17	(宝永4梵鐘鑄造・鐘樓堂再建、同上)		
前住	月山松鶴	宝永2 (1705)6・16	(延宝8天災、天和3復興、同上)		
前住	月岑竊圓	正徳2 (1712)2・5			
前住	桂巖楊璘	寛保3 (1743)8・5			
前住	祖庭柏宗	宝暦11(1761)10・10			
前住	祥雲瑞龍	明和6 (1769)7・7			
前住	元亨大運	明和7 (1770)1・5			

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(5)

前住	徳翁有隣	文化6 (1809)10・21			
前住	鐵顔祖牛	弘化3 (1846)5・24			
前住	大安祖道	元治1 (1864)8・10			
前住	佛海本龍	明治7 (1874)5・19			
現住	(大器)芳信	現住	[松永]	弘徳院(393)33世、勢岩寺(404)前住、常楽寺(412)現住	276e

8教区	じげんざん	ちゅうしょうじ	〒	426-0001
406番	慈眼山	中正寺	住 所	藤枝市仮宿938
			住 職	三浦信孝
開山年	1700年代			草創年
本 尊	十一面千手観音			
開 基				
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一萬松院(394)			
寺史等				

世代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	円海定水	寛保1 (1740)9・14		石雲院(607)輪住(元禄7)、萬松院(394)12世	
前住	徳全修吾	昭和55(1980)5・14	萬松院23世弟子 [岡村]		747g
前住	大顕信雄	平成16(2004)5・4	平成11・4・10萬松院より入寺 [三浦]	萬松院(394)24世、常願寺(415)前住	747g
現住	大鑑信孝	現住	[三浦]	萬松院(394)25世、常願寺(415)現住	

8教区	さいぎょうさん	せんねんじ	〒	421-1121
407番	西行山	専念寺	住 所	藤枝市岡部町岡部775
			住 職	加藤秀宣
開山年	慶長5(1600)			草創年
本 尊	阿弥陀如来			
開 基	岡部宿伊藤嘉平家先祖			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)			
寺史等				

世代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	大翁恵最	寛永11(1634)11・26		梅林院(390)9世、光泰寺(389)2世、南陽寺(397)2世、多福寺(409)開山	438d
現住	大寅秀宣	現住	[加藤]	梅林院(390)39世、孝養院(402)現住、観音寺(403)現住、福寿院(414)現住、持珠院(416)現住、東向寺(420)現住、大仲寺(444)現住	

8教区	めいしょうざん	たふくじ	〒	421-1131
409番	明照山	多福寺	住 所	藤枝市岡部町内谷2360
			住 職	梶川正則
開山年	寛永年間(1624-1644)?		草創年	
本 尊	地藏菩薩			
開 基				
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)—光泰寺(389)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	大翁恵最	寛永11(1634)11・26		梅 林 院(390)9世、光 泰 寺(389)2世、南陽寺(397)2世、専念寺(407)開山	438d
前往	管強忍棧	文化3(1806)10・5	号「三穴峯」	光 泰 寺(389)10世、永 光 寺(204)8世、永源寺(206)22世	
前往	家山江邦	弘化4(1847)10・11	号「掃号軒」、世寿85歳	光泰寺(389)12世、永源院8世	438e
前往	海天慧山	元治1(1864)4・27	宝積寺・正福寺・光永寺・光泰寺の四ヶ寺住職	光 泰 寺(389)14世、宝 積 寺(220)15世、正福寺、光永寺	438b
現住	正種広則	現住	俗名「正則」、光泰寺25世弟子 [梶川]		

8教区	るりさん	ずいおうじ	〒	425-0092
410番	瑠璃山	瑞應寺	住 所	焼津市越後島114
			住 職	杉山隆元
開山年	弘治1(1555)?		草創年	
本 尊	瑠璃光葉師如来			
開 基	山田新左衛門			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	益山文州	貞享1(1684)10・29		石雲院(607)輪住(延宝9)、林叟院(388)13世、長福寺(395)開山	
法地開闢	祥岳俊隆	昭和46(1971)12・4	[鈴木]	林叟院(388)36世、蔵雲院28世、林興院36世、桑港寺(米 国サンフランシスコ)6世、 禪心寺(米国タサハラ)開山	474e
3	太流宗鑑	昭和26(1951)2・21	4世の師匠 [立松]	洞照寺(廃)、雨宮寺(山梨)20世	606f
4	太翁鑑道	平成14(2002)8・12	開闢初住 [杉山]	法運寺(571)前往	606g
5	隆元	現住	[杉山]		

8教区	さいぎょうざん	さんせいじ	〒	421-1121
411番	西行山	三星寺	住 所	藤枝市岡部町岡部641
			住 職	梶川泰山

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(5)

開山年	寛文年間(1661-1673)頃	草創年	不詳・真言宗
本尊	聖観世音菩薩		
開基	蒼光院殿心屋三星居士(今川家臣・内野兵部政矩)		
旧名称			
旧所在地			
本寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一光泰寺(389)		
寺史等	(西行法師が諸国行脚の際に当庵に留錫したため西行山と号す、弟子の西住は当庵で示寂、西住の墓あり)		

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
前住	鏡山察公	4・2 (元禄壬辰(1622)4)	(中興開山、巡見記より)		
前住	参應傳達	壬寅・6・2 (寛文2(1662)?)			
開山	峯壽是雄	宝永1(1704)5・25		光泰寺(389)5世	
前住	間外門公	元禄2(1689)6・20			
前住	枯峰達榮	元禄15(1702)7・4			
前住	了道智玄	正徳2(1712)6・11			
前住	智岳是繁	享保11(1726)1・25			
前住	丹桂圓壽	享保18(1733)6・25			
前住	俊山繁秀	安永5(1776)7・25			
前住	祥雲豊瑞	天明5(1785)6・12			
前住	確翁斧禪	文化11(1814)5・5	一色村出身		
前住	覚翁智本	文政4(1821)2・22			
2	賢能俊達	明治31(1898)11・24			
3	超穩宗道	大正5(1916)7・23	榛原郡地頭方村出身、矢野松喜三男、世寿77歳 [矢野]		
4	天山宗暁	昭和35(1960)7・11	世寿74歳		
現住	浩月泰山	現住	[梶川]	光泰寺(389)25世、南陽寺(397)現住、源昌寺(434)22世	438d

8教区	まつおざん	じょうらくじ	〒	425-0015
412番	松尾山	常楽寺	住所	焼津市石脇上563
			住職	松永芳信
開山年			草創年	天平年間(729-749)
本尊	薬師如来			
開基	肝慶關龍大和尚			
旧名称				
旧所在地				
本寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一林叟院(388)一弘徳院(393)			
寺史等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	肝慶關龍	元禄3(1690)10・29		弘徳院(393)6世	
前住	育翁慶春	元禄12(1699)4・8			
前住	洞巖玄達	正徳2(1712)9・26			
前住	鏡山良智	享保5(1720)8・8			

前住	天室泉公	元文9? 5・22			
前住	玉翁本瑞	享保15(1730)8・22			
前住	策道祖巡	享保17(1732)9・16			
前住	士山寅達	宝暦2(1752)2・25			
前住	蘭溪麟秀	宝暦8(1758)8・3			
前住	大通喚應	天明4(1784)1・5			
前住	大意石道	文化3(1806)6・10			
前住	元道孝善	天保6(1835)7・27			
前住	大豊智仙	文久2(1862)1・20			
前住	来應嶺純	明治24(1891)12・19			
現住	(大器)芳信	現住	[松永]	弘徳院(393)33世、勢岩寺(404)前住、香集寺(405)現住	276e

8教区	むりょうさん	ふくじゅいん	〒	421-1121
414番	無量山	福寿院	住 所	藤枝市岡部町岡部3471
			住 職	加藤秀宣
開山年	文禄2(1593)3		草創年	
本 尊	聖観世音菩薩			
開 基	福寿院殿玉容祐鱗大姉(仁藤氏先祖、正保2(1645)12・16没)			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	圓洲舜光	慶長3(1598)4・16		石雲院(607)輪住(文禄2)、梅林院(390)8世、光泰寺(389)開山、観音寺(403)開山、持珠院(416)開山	438c
2	卯天寅公	慶長17(1612)1・5			
3	中奥昌岩	慶安4(1651)9・30			
4	来室長傳	慶安4(1651)12・6			
5	長雲僊達	明暦2(1656)2・2			
6	蘭室本仍	安永3(1774)6・5			
7	松山大樹	文政10(1827)3・6			
8	榮山石雄	明治13(1880)3・27			
(前住)	(大機曹雲)		(西駿曹洞宗史より)	梅林院(390)37世、(孝養院(402)法地開山)	
現住	大寅秀宣	現住	[加藤]	梅林院(390)39世、孝養院(402)現住、観音寺(403)現住、専念寺(407)現住、持珠院(416)現住、東向寺(420)現住、大仲寺(444)現住	

8教区	えんめいざん	じょうがんじ	〒	421-1122
415番	延命山	常願寺	住 所	藤枝市岡部町子持坂35
			住 職	三浦信孝
開山年	天文4—永禄年間(1535-1570) (永禄3(1560)萬松院記録より)		草創年	
本 尊	阿弥陀如来			

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴世世代(5)

開基	
旧名称	
旧所在地	
本寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)—萬松院(394)
寺史等	

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	来天瑛從	元龜1 (1570)9・1		石雲院(607)輪住(永禄3、元龜1)、梅林院(390)6世、萬松院(394)2世	438a
前往	大顯信雄		[三浦]	萬松院(394)24世、中正寺(406)前往	747g
現住	大鑑信孝	現住	[三浦]	萬松院(394)25世、中正寺(406)現住	

8教区	たいせきざん	じしゅいん	〒	421-1114
416番	大石山	持珠院	住所	藤枝市岡部町羽佐間115
			住職	加藤秀宣
開山年	元禄3(1690)4		草創年	
本尊	千手觀世音菩薩			
開基	不詳			
旧名称				
旧所在地				
本寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)			
寺史等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	圓洲舜光	慶長3 (1598)4・16		石雲院(607)輪住(文禄2)、梅林院(390)8世、光泰寺(389)開山、觀音寺(403)開山、福寿院(414)開山	438c
現住	大寅秀宣	現住	[加藤]	梅林院(390)39世、孝養院(402)現住、觀音寺(403)現住、専念寺(407)現住、福寿院(414)現住、東向寺(420)現住、大仲寺(444)現住	

8教区	おばまさん	かいうんじ	〒	425-0011
418番	小浜山	海雲寺	住所	焼津市小浜542
			住職	松永善弘
開山年	寛永3(1626)		草創年	
本尊	地藏尊			
開基	輝堂元旭首座(天正2(1574)3・3示寂)			
旧名称				
旧所在地				
本寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)—弘徳院(393)			
寺史等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開基	輝堂元旭	天正2 (1574)3・3			
前往	雲涼玄積	天正2 (1574)3・3			
前往	透關芳徹	天正2 (1574)3・4			
前往	順巖祖翁	文禄1 (1592)6・20 (天正20)			
開山	洞廓存達			石雲院(607)輪住(慶長2)、 弘徳院(393)4世、全昌院(廢) 開山	
前往	名岩林誉	元禄1 (1688)2・14 (貞享5)			
前往	天室林秀	元禄14(1701)6・6			
前往	勝雲法最	享保1 (1716)2・17 (正徳6)			
前往	策翁國禪	享保15(1730)12・28			
前往	石樹雪巖	元文1 (1736)9・13			
前往	法山泰仙	宝暦1 (1751)8・12 (寛延4)			
前往	呑海魯州	宝暦11(1761)7・25			
前往	舌法戒言	安永2 (1773)5・15			
前往	奩学天従	天保13(1842)9・17	龍雲寺より転住	龍雲寺14世	
前往	雷天唯黙	明治28(1895)12・4			
現住	善弘	現住	[松永]	勢岩寺(404)現住	

8教区	にっしょうざん	とうこうじ	〒	421-1308
420番	日照山	東向寺	住所	静岡市葵区黒俣1883
			住職	加藤秀宣
開山年	天和2(1682)12・28			草創年
本尊	薬師如来			
開基	天叟高和尚			
旧名称				
旧所在地				
本寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)			
寺史等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	擧山長昇	寛永12(1635)9・6	梅林院10世饒山存益弟子	總持寺普蔵院輪住(寛永12)、 石雲院(607)輪住(元和9)、 梅林院(390)11世、光泰寺 (389)3世、常昌院(398)開山	438f
現住	大寅秀宣	現住	[加藤]	梅林院(390)39世、孝養院 (402)現住、観音寺(403)現 住、専念寺(407)現住、福寿 院(414)現住、持殊院(416)現 住、大仲寺(444)現住	

9教区	ほうじゅざん	ばんぎやくいん	〒	426-0211
421番	寶樹山	盤脚院	住所	藤枝市西方16
			住職	山田康夫
開山年	約400年前(但し文明17(1485)の記録あり)			草創年
本尊	聖観世音菩薩			

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴任世代(5)

開基	不詳
旧名称	日遺山盤脚寺(開山以前、文明17(1485)当時、「梅花無尽蔵」『群書類集』17巻下より)
旧所在地	
本寺	大本山總持寺—最乗寺(神奈川374)—最勝院(298)—興因寺(山梨12)—恵運院(山梨14)
寺史等	

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴任寺	大系譜
前住	無方相		文明17・9・15万里集九が曹洞宗日遺山盤脚寺に3日間滞在(群書類集17巻下より)		
開山	國洲天越	寛永6(1629)6・14	当山再興、現在の山号・寺号制定、徳川家康の帰依を受け当寺寺領と静岡市浄元寺を拝領	恵運院(山梨14)6世、藏前院(同493)2世、浄元寺(5)開山	606d
2	日童雲昨	慶安3(1650)1・10		浄元寺(5)2世、善昌寺(453)開山	606c
3	巨洲梵鯨	天和2(1682)10・5	中興	補陀落寺(438)開山、大澤寺(439)開山、瑞光院(廢)開山、自春寺(廢)開山、自徳院(廢)開山、慈眼寺(廢)開山、光源寺(廢)開山	606d
4	峯智巨雄	貞享5(1688)3・17			606e
5	菊巖天秀	享保3(1718)5・21			606f
6	教山本戒	宝暦6(1756)12・3			606g
7	黍屋長運	宝暦10(1760)4・20	浅島村出身、世寿59歳		606h
8	寛洲岱宥	天明4(1784)1・14	重興	浄元寺(5)3世	606d
9	古田岱教	文政6(1823)12・11			606e
10	然山大廓	享和3(1803)4・14	遠江比叡村出身		606f
11	悦宗岱善	天保4(1833)7・17	洞雲寺より転住	洞雲寺(459)21世	411b
12	石中黍珉	弘化3(1846)6・23	静居寺へ転住	静居寺(493)23世	411b
13	右天嵩道	天保6(1835)8・22			
14	積應岱然	文久2(1862)4・30		洞雲寺(459)22世	411c
15	雪堂祖桂	慶應3(1867)3・25	静居寺より転住(世代になし)	信香院(556)22世	410f
16	大年乾豊	明治4(1871)6・11	世寿65歳		
17	悟山轍道	文久1(1861)1・6(万延2)	世寿54歳	信香院(556)23世	410g
18	石底珉龍	明治25(1892)4・8	桃原寺より転住、世寿59歳	桃原寺	412a
19	雲嶽画龍	昭和11(1936)8・7	世寿88歳 [石上]		412b
20	雲涯秀峰	昭和20(1945)9・22	焼津市保福島出身 [山田]	東林寺(28)6世	412c
21	大仙義道	昭和59(1984)4・8	再中興、徳川家臣加藤家出身、本堂屋根替、橘幼稚園開設、曹洞宗宗務総長 [山田]		412d
22	丈山康夫	現住	永平寺副監院、道元禪師750回大遠忌局長 [山田]	当寺25世、徧照寺(430)22・24世	412f
23	大光勇賢	平成16(2004)1・28	世寿46歳 [山田]	徧照寺(430)23世	
24	一法博彰	東堂	在住2年 [山田]		
25	丈山康夫	現住	再住、本堂地震対策・屋根替、位牌堂・檀信徒会館・藤枝霊園建設、大観音建立 [山田]	当寺22世、徧照寺(430)22・24世	412f

9教区	ふくでんざん	さいりんじ	〒	426-0201
422番	福田山	最林寺	住所	藤枝市下藪田322
			住職	加藤佳秀

開山年	天文5(1536)	草創年	
本尊	聖観世音菩薩		
開基	功德院喜雲道随居士		
旧名称			
旧所在地			
本寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)		
寺史等			

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	靈屋契鑑	永祿4(1561)4・8		石雲院(607)輪住(天文8)、梅林院(390)5世、龍泉院(茨城13)2世、龍泉院(同151)2世、總善寺(426)開山、喜雲寺(431)開山、万年寺(443)開山、高寅寺(茨城16)開山	437b 437c 438a
2	智覚舜翁	天正13(1585)6・25		總善寺(426)2世、(万年寺(443)開山)、西樂寺(448)開山	438a
3	歛室長怡	文祿3(1594)6・3		石雲院(607)輪住(天正11)、灌溪寺(433)開山	
4	洪巖伊範	寛永2(1625)8・7			
5	虎山宝貌	寛永8(1631)1・11		灌溪寺(433)2世	
6	雲庵順鶯	正保2(1645)4・3		灌溪寺(433)3世	
7	石山牛鉄	万治1(1658)1・3 (明暦4)		石雲院(607)輪住(慶安1)	
8	匠天如周	元禄7(1694)2・6	中興	灌溪寺(433)中興開山	
9	助峯養宣	享保14(1729)9・24			
10	門庭良樹	享保5(1720)7・13			
11	楊山良宣	延享1(1744)11・15		石雲院(607)輪住(元文1)	
12	雲岩周殷	宝暦3(1753)9・6			
13	俊山本英	寛政6(1794)2・28			
14	物先祖香	天明5(1785)3・16			
15	任山東雲	寛政11(1799)3・16		石雲院(607)輪住(天明4)	
16	大岩寛量	享和3(1803)2・5			
17	音光寿山	文化2(1805)3・19			
18	密山笠様	文政10(1827)10・11			
19	徳翁泰忍	弘化2(1845)12・25		石雲院(607)輪住(天保3)	
20	廓翁大然	安政6(1859)6・8			
21	昌運泰榮	嘉永3(1850)7・21			
22	興宗禅隆	明治31(1898)10・9	[高田]	信香院(556)25世、昌泉院(561)法地開山	409e 410b
23	徳明智宣	明治18(1885)7・22		昌泉院(561)2世	409f
24	泰順恵謙	明治32(1899)3・2	[鈴木]	灌溪寺(433)法地開山、信香院(556)27世、昌泉院(561)4世	409g 410d
25	志道泰賢	昭和29(1954)9・5	[前川]	当寺27世、灌溪寺(433)2世、信香院(556)28世	409h 410e
26	謙山泰道	大正11(1922)7・26		灌溪寺(433)3世	
27	志道泰賢	昭和29(1934)9・5	再住 [前川]	当寺25世、灌溪寺(433)2世、信香院(556)28世	409h 410e
28	(空位)				
29	富山憲文	平成18(2006)8・22	重興 [加藤]		636g
30	柴峰佳秀	現住	29世弟子 [加藤]		

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(5)

9教区	こずざん	こうぜんじ	〒	426-0019
423番	牛頭山	向善寺	住 所	藤枝市天王町1丁目5-30
			住 職	伊村知義
開山年	寛文2(1662)		草創年	不詳・真言宗
本 尊	延命地藏菩薩			
開 基	(寛永年間)全宗、(中興開基)鐵心良肝(市川忠五郎、明治14(1881)9・12没)			
旧 名 称	泉陽山向善寺(開山時より)			
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一林叟院(388)一洞雲寺(459)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開基	全宗		寛永年間に真言宗寺院跡地に小庵を結び地藏菩薩を供養		
開山	大洲重撮	寛永19(1642)7・24		洞雲寺(459)6世、釣学院(583)3世、芳林寺(埼玉91)4世、源昌寺(434)開山、光明寺(472)開山、延命寺開山?	410d 411a
(前往)	(大安)		(寛政4火災、文化8本堂再建、藤枝町誌より)		
(前往)	(嶺順)		(安政2庫裡建立、同上)		
2	祖林愚道			林昌院2世、龍雲寺4世	411h
3	関室元啓		[伊村]	洞雲寺(459)27世、延命寺(466)法地開山、龍雲寺5世、林昌院	411c
4	終南卓成		(法地開闢(明治28・12)、明治17本堂再建、同上)	延命寺(466)4世、積善寺21世	
5	仙峰啓壽	昭和18(1943)3・23	中興、世寿69歳 [伊村]	洞雲寺(459)29世、延命寺(466)3世、龍爪寺開山、林昌院4世	411c
6	桂山綏靈				
7	大仙隆恵	平成14(2002)11・5	重興、5世弟子、世寿86歳 [伊村]	龍爪寺2世	411d
8	寿仙知善	現住	7世弟子、平成12・10・15晋山 [伊村]		

9教区	にっしょうざん	こうしゅんいん	〒	426-0009
424番	日照山	耕春院	住 所	藤枝市八幡967
			住 職	曾根宏規
開山年	天正15(1587)		草創年	不詳・真言宗
本 尊	釈迦牟尼如来			
開 基	不詳			
旧 名 称				
旧所在地	八幡山大谷中腹(草創時)			
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一總善寺(426)			
寺 史 等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
前任	耕春		真言宗行者、八幡山大谷の中腹に庵を結び、後に麓(現在地)に移って耕春院と名づけたという(寺伝より)		
開山	積翁長善	文禄3 (1594)8・20	藤枝市岡部町朝比奈玉伝寺開山後、当院開山、師の智覚舜翁の後継として藤枝市岡部町總善寺へ転住	石雲院(607)輪住(慶長8)、總善寺(426)3世、大仲寺(444)開山、善能寺(447)開山、梅窓寺(452)開山、清養寺(457)開山、玉伝寺(廃)開山	438b
2	嶺山全鷲	元和7 (1621)7・5	開山弟子、末寺7ヶ寺開山	全居寺(440)開山、真福寺(442)開山、南叟寺(451)開山、如法寺(458)開山、玉傳寺(455)開山、智光院(廃)開山、大仲寺開山?	438c
3	松山闇龍	承応2 (1653)11・16	2世弟子	蔵福寺(441)開山	438d
4	三鶴宗頌	正徳1 (1711)		大林寺(岩手)9世?	438e?
5	修外頓漸	享保5 (1720)2・17	中興、宝永2隣接する青山八幡宮と境界争い(後に解決)、延宝8堂宇再建		438f?
6	定翁唯禪	宝暦3 (1753)9・14			
7	海運龍城	宝暦6 (1756)11・6	坐禅堂建立、修行僧育成に尽力		
8	寶州光海	天明7 (1787)5・18			
9	聖山龍堂	文化9 (1812)4・3			
10	靈殷龍川	安永7 (1778)9・4	明和8豊田(現焼津市)岡村氏より山門寄進(月舟宗胡筆の額あり、現存)		
11	玉潭龍早	文化9 (1812)5・29	本堂再建着手、總善寺へ転住	石雲院(607)輪住(文化5)、總善寺(426)17世、伝心寺5世	
12	青運恩山	天保7 (1836)4・12	寛延8・12本堂落成		
13	徹関孝本	文久4 (1864)1・22		大永寺(553)16世	
14	報運泰恩	安政2 (1855)10・19			
15	鳥山義篆	嘉永3 (1850)5・15		香福寺(491)21世	
16	愚道太禪	明治13(1880)3・21	「再住」との控えあり		
17	一山貫之	明治38(1905)8・9	[石川]	普濟寺、宝蔵寺	639g
18	禅岩一定	明治39(1906)8・9	(明治12当時住職、広幡村誌より)、甲斐で示寂		
19	覚道泰栄				
20	定岩恵謹	明治43(1910)9・22	甲斐で示寂		
21	東宗賢光	昭和21(1946)3・22	中興、三重県桑名郡多度村出身、明治38入山、諸堂壊れ寺勢衰退した当寺を改修、世寿70歳 [伊藤]	寛沢寺(399)5世、源昌寺(434)19世	88d
22	康道裕健	昭和21(1946)9・4	21世息子、同弟子、世寿39歳 [伊藤]		
23	東傳瑞光	昭和51(1976)8・13	21世弟子、山梨県出身、世寿84歳 [渡辺]	寛沢寺(399)9世、真福寺(442)前任、南叟寺(451)前任、如法寺(458)前任	88e
24	東階穎之	昭和62(1987)7・29	重興、23世息子、同弟子、幼名「穎司」、昭和53釣鐘新鑄、昭和54山門大改修、昭和58本堂・鐘楼堂大改修、世寿60歳 [渡辺]	真福寺(442)前任、南叟寺(451)前任、如法寺(458)前任	88f

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(5)

25	東水知之	平成17(2005)8・12	再重興、24世二男、同弟子、平成1庫裡新築・白壁築造・境内地整備、24世以来の昭和 大改修完成、世寿47歳 [渡辺]	真福寺(442) 前住、南叟寺(451) 前住、如法寺(458) 前住
26	大融宏規	現住	[曾根]	全珠院(400) 現住、真福寺(422) 現住、南叟寺(451) 現住、大覚寺

9教区	ふくしゅうざん	じょうらくいん	〒	426-0221
425番	福聚山	常楽院	住 所	藤枝市高田424
			住 職	大石博道
開 山 年	明応9(1500)		草創年	不詳
本 尊	釈迦如来			
開 基	(常楽院殿義山玄道居士、永正1没、駿河記より)			
旧 名 称				
旧所在地	(小持坂、曹洞宗開山時に現在地へ移転、駿河記より)			
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	華中宗舜	永正12(1515)3・10	崇芝性岱の第3法子界巖繁越の弟子	石雲院(607) 輪住(永正8)	437a
2	乾翁祖良	天文6(1537)7・13	(示寂月日は西駿曹洞宗史より、以下同)	石雲院(607) 輪住(大永5)	437b
3	報室周恩	弘治3(1557)5・24		石雲院(607) 輪住(天文15)	437c
4	月州秀隣	永禄12(1569)11・18		石雲院(607) 輪住(永禄10)、用雲寺(450) 開山、成道寺(551) 開山	437d
5	観容宗悦	4・5			
6	学翁宗参	慶長17(1612)2・19	慶長4慈眼寺開山	慈眼寺(432) 開山	
7	玉山長眠	正保3(1646)11・2	寛永11竜谷寺開山	大洞院(1303) 輪住(寛永11)、竜谷寺(449) 開山	
8	厭山周石	貞享2(1685)1・8			
9	金州門僚	元禄12(1699)10・7			
10	龍象益門	享保16(1731)8・2		石雲院(607) 輪住(宝永3)	
11	朴山了実	寛保3(1743)2・10			
12	揚宗大宣	宝暦5(1755)9・8			
13	天壽然亮	天明8(1788)10・15	宝暦2・2・26 綸旨拝戴	石雲院(607) 輪住(宝暦4)	
14	虎獄慧紋	享和3(1803)5・8			
15	法運元燈	寛政9(1797)9・19		石雲院(607) 輪住(寛政8)	
16	掌巖英本	文化15(1818)3・8			
17	盛運大道	文化15(1818)3・3			
18	金嶺恵門	天保12(1841)8・18			
19	釣月嶺翁	明治7(1874)11・20		梅林院(390) 29世	
20	佛山大梁		[大久保]?	龍巢院27世? 大福寺2世?	464c?
21	大光元麟	慶応4(1868)5・18			
22	桂庵大芳	明治5(1872)12・10	元治1・5・2 綸旨拝戴	慈眼寺(432) 2世	
23	石峰凸頑	明治29(1896)			
24	祖獄天從	明治37(1904)8・27	[岡村]	龍雲院(128) 21世、成道寺(551) 24世、泰善寺(560) 法地開山、興源寺(562) 8世	326b

25	志学篤禅	明治44(1911)5・31		慈眼寺(432)3世	
26	大真百能	昭和15(1940)3・17	世寿59歳 [谷]	慈眼寺(432)7世	462g
27	誠庵一哲	昭和43(1968)	[大石]	永源院20世	438b
28	性庵博道	現住	27世弟子、昭和60本堂大改修、平成17庫裡再建 [大石]	西方寺(445)現住、竜谷寺(449)現住、用雲寺(450)現住	

9教区	きゅうほうざん	そうぜんじ	〒	421-1112	
426番	九峯山	總善寺	住 所	藤枝市岡部町殿 167	
			住 職	成田泰生	
開 山 年	天文23(1554)			草創年	文安1(1444)
本 尊	聖観世音菩薩				
開 基	功德院喜雲道瑞居士(朝比奈氏)				
旧 名 称					
旧所在地					
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)				
寺 史 等					

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	靈屋契鑑	永禄4 (1561)4・8		石雲院(607)輪住(天文8)、梅林院(390)5世、龍泉院(茨城13)2世、龍泉院(同151)2世、最林寺(422)開山、喜雲寺(431)開山、万年寺(443)開山、高寅寺(茨城16)開山	437b 437c 438a
2	智覚舜翁	天正12(1584)6・25		最林寺(422)2世、(万年寺(443)開山)、西楽寺(448)開山	438a
3	積応長善	文禄3 (1594)8・20		石雲院(607)輪住(慶長8)、耕春院(424)開山、大仲寺(444)開山、善能寺(447)開山、梅窓寺(452)開山、清養寺(457)開山、玉伝寺(廃)開山	438b
4	天関伝竜	承応2 (1653)1・22		全珠庵(456廃)開山、(清養寺(457)開山)	
5	天岸本僚	天和2 (1682)10・2			
6	大宝意聞	貞享1 (1684)6・15		石雲院(607)輪住(寛文4)	
7	家亭泉国	貞享4 (1687)12・22			
8	班林官虎	享保2 (1717)6・15			
9	大家一牛	享保5 (1720)10・18		石雲院(607)輪住(正徳2)、芙蓉庵(454)開山	
10	衛箭虎巖	寛保3 (1743)4・2		(芙蓉庵(454)開山)	
11	照山儀策	元文5 (1740)1・22			
12	鳳山龍宿	明和4 (1767)11・13		香橘寺(497)11世	
13	北溟萬星	宝暦11(1761)1・6		伝心寺2世	
14	大然伝量	天明1 (1781)5・28		石雲院(607)輪住(宝暦10)、伝心寺3世	
15	道察達玄	安永2 (1773)1・24			
16	義諦廓聖	文化9 (1812)5・30			
17	玉潭龍章	文化10(1813)5・30		石雲院(607)輪住(文化5)、耕春院(424)11世、伝心寺5世	
18	龍山恵国	天保3 (1832)1・25			
19	庸道太恵	文久2 (1862)8・14			

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(5)

20	貴宝章胤	安政3 (1856)10・25		石雲院(607)輪住(安政3)、 貞善院(552)18世、大永寺 (553)18世	177d
21	玄宝恵山	慶応3 (1867)4・19		石雲院(607)輪住補席(安政 3)、良富院(94)17世、宗徳 院(124)23世	
22	禅量恵門	明治26(1893)9・22			
23	戒全恵俊	明治38(1905)9・21		桃林寺(139)2世、永光寺 (204)23世、永源寺(206)30世	177b
24	恵海真龍	昭和13(1938)2・28	中興、世寿71歳 [堀田]	喜雲寺(431)開創	177c
25	照山貞亮	昭和58(1983)5・20	重興 [堀田]	喜雲寺(431)2世	177d
26	大順博道	平成2 (1990)1・13	[堀田]	清養寺(457)1世	177e
27	大明光志			清養寺(457)2世	
28	大仙廣郁	平成17(2005)2・24			
29	照山泰生	現住	[成田]	喜雲寺(431)4世、万年寺 (443)現住、善能寺(447)現 住、西楽寺(448)現住、梅窓 寺(452)現住、芙蓉庵(454)現 住	409d

9教区	しちとうざん	かくそうじ	〒	426-0015
427番	七嶋山	岳叟寺	住 所	藤枝市五十海4丁目8-34
			住 職	辻田博道
開山年	天正2(1574)		草創年	
本 尊	釈迦牟尼如来			
開 基	明浦玖公座元			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)—洞雲寺 (459)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	信屋聚哉			石雲院(607)輪住(永禄2)、 洞雲寺(459)3世、利勝院 (428)開山、竜雲寺(470)開 山、用心院(568)開山、慈濟 寺(廢)開山、用雲寺(廢)開 山、峰叟院(廢)開山、竜泉寺 (廢)開山、林昌寺3世	410a
前住1	明浦玖公	天正20(1592)10・19	開基		
前住2	不山存公	慶長5 (1600)4・9			
前住3	嶽翁春鶯	慶安3 (1650)8・2			
前住4	罽譽靈廓	寛文4 (1664)10・11			
前住5	回珠海浦	寛文7 (1667)12・7			
前住6	本安文智	貞享1 (1684)10・19			
前住7	義天諦了	元禄6 (1693)4・26			
前住8	臣翁鶯鯨	元禄7 (1694)2・5			
前住9	宗眼龍禪	正徳1 (1711)7・24			
前住10	林峰浦禪	享保5 (1720)7・10			
前住11	安庭法禪	享保18(1733)12・8			
前住12	聯桂祖芳	元文2 (1737)7・12			

前住13	栞天官宗	寛保1 (1741)10・9			
前住14	白巖洞禪	安永2 (1773)6・16			
前住15	本秀慧光	享和1 (1801)11・3			
前住16	佛山智光	文化14(1817)8・8			
前住17	大圓鏡道	天保14(1843)8・18	中興、文政3・10本堂再建		
前住18	信産明山	嘉永4 (1851)2・2			
前住19	一透祖関	明治5 (1872)12・3			
2	却外實能	文久1 (1861)12・17	世寿64歳	瑞光院(長野)20世	
3	夏目泰山	大正5 (1916)8・21	法地起立(明治18・9・19)		
4	奇嶼梅秀	昭和12(1937)2・22	中興 [辻田]		38d
5	仙嶺道苗	昭和21(1946)5・13	[辻田]	白麟寺開關開山	38e
6	實源正道	平成10(1998)11・27	世寿88歳 [辻田]		38f
7	禅岳正苗	平成17(2005)6・20	6世長男、同弟子、平成7庫裡・客殿・開山堂・位牌堂再建、平成7・11・10晋山式、世寿65歳 [辻田]		38g
8	正諦博道	現住	7世長男、同弟子、平成19本堂屋根替、平成20・11・9晋山式 [辻田]		

9教区	しゅうふくざん	りしょういん	〒	426-0202
428番	修福山	利勝院	住 所	藤枝市上藪田669
			住 職	久保寺隆志
開山年	永禄7(1564)		草創年	
本 尊	聖観世音菩薩			
開 基	豊室常術(衍)居士(内藤三太夫)			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一林叟院(388)一洞雲寺(459)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	信屋聚哉	元亀4 (1573)1・18	開山(永禄7)	石雲院(607)輪住(永禄2)、洞雲寺(459)3世、岳叟寺(427)開山、竜雲寺(470)開山、用心院(568)開山、慈濟寺(廢)開山、用雲寺(廢)開山、峰叟院(廢)開山、竜泉寺(廢)開山、林昌寺3世	410a
1	壽嶽鳳瑞	8・4			
2	大白天牛	嘉永4 (1851)6・9			
3	堯運天舜	安政6 (1859)2・2			
4	黙庵寛山	明治6 (1873)10・5		光泰寺(389)19世	
5	祖嶽鳳宗	大正3 (1914)10・20	明治22・12・13金剛山万福寺を合併、世寿84歳 [久保寺]		
6	佛門孝道	明治 4・2			
7	一應快心	昭和18(1943)3・25	世寿62歳 [久保寺]		
8	泰應心壹	昭和60(1985)8・31	昭和48・11本堂新築、昭和49観音堂改築、昭和55・3鐘楼堂屋根替・鐘鑄造、世寿64歳 [久保寺]		409c

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴任世代(5)

9	心岳隆志	現住	平成7・12庫裡・客殿新築、平成21秋永代供養塔建立 [久保寺]		
---	------	----	----------------------------------	--	--

9教区	けぞうざん	へんしょうじ	〒	426-0205
430番	華蔵山	徧照寺	住 所	藤枝市花倉397-1
			住 職	溝口擴道
開 山 年	元龜2-3(1571-1572)		草創年	延文1(1356)真言律宗・京都泉涌寺末
本 尊	釈迦牟尼如来			
開 基	慶壽寺殿雲峰信慶大禪定門(今川範氏)			
旧 名 称	(真言律宗)徧照光寺			
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)—心岳寺(461)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
草創開山	朴艾思惇		律師、京都泉涌寺12世		
開山	蒲山孝順	天正1(1573)11・29		心岳寺(461)4世、正泉寺(464)開山、正岳寺(465)草創開山、満蔵寺(471)開山、養源院(474)、常元寺(574)開山、大竜寺(575)開山、高山寺開山、普光寺(廃)開山、心月寺(廃)開山	409d
2	学叟昌文			心岳寺(461)3世、新豊院(214)開山	409c
3	日州超頓				
4	喬山貴雲				
5	広観道公		開山嫡子、禪風大いに振う		
6	悦道良観			信香院(556)12世	410c
7	雲光周瑞				
8	十州素鶴				
9	大雲林溪				
10	曆洲順応			心岳寺(461)10世、法泉寺開山	409d
11	開洲道円				
12	大闇悦道				
13	南国異山		山崩で墓地・建造物埋没		
14	黙山善応		墓地移転、墓地に仮本堂を建て元境内を田畑とする		
15	林峯泰禪		文化13・2・13繪旨拝戴		
16	寛良泰山		参道の石段寄進	慈眼寺(432)前往12	
17	愚問痴禪				
18	岱宗金全				
19	志岩通門	明治25(1892)2・20			
20	恵宗岱門				
21	釈氏泰音		晩年茨城県高雲寺に住す	高雲寺(茨城198)26世	
22	丈山康夫	東堂	[山田]	当寺24世、盤脚院(421)22・25世	412f

23	大光勇賢		[山田]	盤脚院(421)23世	
24	丈山康夫	東堂	再住 [山田]	当寺22世、盤脚院(421)22・25世	412f
25	天山擴道	現住	[溝口]	正寿寺(539)3世	

9教区	にしゅうざん	きうんじ	〒	421-1114
431番	日照山	喜雲寺	住 所	藤枝市岡部町羽佐間755
			住 職	成田伸明
開山年	天正年間(1573-1592)			草創年
本 尊	薬師如来			
開 基	功德院善雲道瑞居士(朝比奈備中守泰能)			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)—總善寺(426)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	靈屋契鑑	永祿4 (1561)4・8		石雲院(607)輪住(天文8)、梅林院(390)5世、總善寺(426)開山、龍泉院(茨城13)2世、龍泉院(同151)2世、最林寺(422)開山、万年寺(443)開山、高寅寺(茨城16)開山	437b 437c 438a
開創	呑海眞龍	昭和13(1938)2・26	勸請 [堀田]	總善寺(426)24世	177c
2	照山貞亮	昭和58(1983)5・20	法地開闢(昭和8)、後に總善寺住職 [堀田]	總善寺(426)25世	177d
3	義山泰道	昭和52(1977)7・27	最林寺志道泰賢弟子 [成田]	龍雲寺4世	409c
4	照山泰生	東堂	3世弟子、昭和58開山堂新築、平成1本堂再建、平成2客殿新築、後に總善寺住職 [成田]	總善寺(426)29世、万年寺(443)現住、善能寺(447)現住、西樂寺(448)現住、梅窓寺(452)現住、芙蓉庵(454)現住	409d
5	龍室伸明	現住	4世弟子、平成17庫裡再建 [成田]		

9教区	せいりょうざん	じげんじ	〒	426-0002
432番	西了山	慈眼寺	住 所	藤枝市横内179
			住 職	柴田英憲
開山年	慶長4(1599)			草創年
本 尊	阿弥陀如来			
開 基	龍谷秀泉和尚			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)—常樂院(425)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	学翁宗参	慶長17(1612)2・19	勸請(龍谷秀泉による)	常樂院(425)6世	
前住1	龍谷秀泉		開基、寺を建立		

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴任世代(5)

前住2	秀岩岱處	延宝2 (1674)5・24	中興、本堂建替		
前住3	天室良訓	享保1 (1716)4・2 (正徳6)	前住2弟子		
前住4	堅志禅悦	享保3 (1718)2・28	前住3弟子		
前住5	見海				
前住6	聯山紹芳	明和8 (1771)5・15	前住4弟子		
前住7	達忍俊道	安永1 (1772)12・22	越前府中大塚氏出身		
前住8	雪岩梅嶺				
前住9	圓心春山				
前住10	浪方				
前住11	活應租眼		焼津市貞善院17世辨宗弟子、 文政1入寺、後に貞善院住職	貞善院(552)19世	
前住12	寛良泰山		徧照寺隠居して入寺、庫裏倒壊	徧照寺(430)16世	
前住13	春山		前住12弟子、安政4入寺		
前住14	恒山		登福寺隠居	登福寺	
前住15	定観		重興、尾張海東郡和井原村井田茂右衛門長男、元治1から明治24まで住持、明治3庫裡再建、明治18本堂再建		
2	桂庵大芳		勧請	常楽院(425)22世	
3	志学篤禅		勧請	常楽院(425)25世	
4	天嶺玄童		勧請	成因寺(585)16世、積雲院15世、可睡齋(1302)42世	412c 462b
5	恵海龍卵		勧請		
6	靈嶽雪静		法地開闢、明治24から明治40まで住持 [加藤]		
7	大真百能	昭和15(1940)3・17	明治41から明治45まで住持、常楽院へ転住 [谷]	常楽院(425)26世	
8	英傳実雄		勧請 [柴田]	十輪寺(391)19世、興福寺(396)3世、南陽寺(397)3世	438f
9	哲英雄傳	昭和15(1975)3・20	静岡市横内町出身、8世弟子、大正1から昭和19まで住持、十輪寺へ転住、同寺で示寂 [柴田]	十輪寺(391)22世	438c
10	覚心力雄	平成10(1998)9・16	9世弟子、昭和19から昭和50まで住持、十輪寺へ転住、同寺で示寂 [柴田]	十輪寺(391)23世、興福寺(396)8世	438d
11	泥鶴芳憲	東堂	10世弟子、昭和50から平成15まで住持、十輪寺へ転住 [柴田]	十輪寺(391)24世、興福寺(396)9世	
12	法学英憲	現住	11世弟子、平成15・6住職 [柴田]		

9教区	せきりゅうざん	かんけいじ	〒	426-0213
433番	石龍山	灌溪寺	住 所	藤枝市中ノ合68
			住 職	加藤澄道
開山年	貞享2(1685)		草創年	承久年間(1219-1222)真言宗 後に浄土宗
本 尊	阿弥陀如来			
開 基	蕃松院殿節叟良筠大禪定門(依田信藩)、灌溪寺殿月山良秀大禪定門(依田信春)			
旧 名 称				
旧所在地				

本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―梅林院(390)―最林寺(422)
寺史等	

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	歛室長怡	文禄3 (1594)6・3		石雲院(607)輪住(天正11)、最林寺(422)3世	
2	虎山宝貌	寛永8 (1631)1・11		最林寺(422)5世	
3	雲庵順鶯	正保2 (1645)4・3	中興	最林寺(422)6世	
中興開山	画天如周	元禄5 (1692)7・13	中興開山(貞享2)	最林寺(422)8世	
初住	鶚峯鶯公	甲子 6・5 (貞享1(1684)?)	初住		
前往	金屋銀公	・9			
前往	堂安鐵尊	享保1 (1716)7・21			
前往	祖外玄門	享保17(1732)閏5・13			
前往	得安宗鐵	元文2 (1737)3・1			
前往	祖翁宗鑑	宝暦4 (1754)10・19			
前往	法山慧雲	宝暦10(1760)10・17			
前往	奇峯春了	寛政5 (1793)11・9			
前往	祖苗秀峰	寛政9 (1797)9・8			
前往	祖外玄燈	寛政12(1800)7・13			
前往	大慧探洲	天保4 (1833)9・28			
前往	禅應本宗	明治4 (1871)1・4			
前往	祖岳亮禅	明治27(1894)12・17			
前往	瑞門吉祥	大正15(1921)3・10		法谷寺4世	
法地開山	黍順恵謙	明治32(1899)3・2	[鈴木]	最林寺(422)24世、信香院(556)27世、昌泉院(561)4世	409g 410d
2	志道泰賢	昭和29(1954)9・4	[前川]	最林寺(422)25・27世、信香院(556)28世	409h 410e
3	謙山泰道	大正11(1922)7・26		最林寺(422)26世	
4	法潤泉龍	大正9 (1920)11・9		観天寺19世	762g
5	照嶽澄水	昭和45(1970)5・7	[塩崎]	観天寺20世	762h
6	殊燦澄音	昭和37(1962)10・19	昭和25本堂改築、昭和26・3晋山式 [加藤]	観天寺21世	762d
7	覺法澄道	現住	昭和49・3晋山式、平成2本堂新築、平成21・6観音堂・大慈殿落慶、平成21・8・17庫裡・客殿新築 [加藤]		762e

9教区	はんりんざん	げんしょうじ	〒	426-0017
434番	繁林山	源昌寺	住 所	藤枝市大手1丁目14-10
			住 職	濱田義道
開山年	慶長7(1602)			草創年
本 尊	聖観世音菩薩			
開 基	酒井忠利(初代田中藩主)			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―洞雲寺(459)			
寺史等				

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴任世代(5)

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴任寺	大系譜
開山	大洲重振	寛永19(1642)7・24		洞雲寺(459)6世、釣学院(583)3世、芳林寺(埼玉91)4世、向善寺(423)開山、光明寺(472)開山、延命寺開山?	410d 411a
前住	法山鯨官	天和2(1682)4・20		洞雲寺(459)8世	411b
前住	珀浦尊重	元禄14(1701)8・14			
前住	石山雪筍	宝永3(1706)12・24			
前住	教海立義	享保5(1720)5・29			
前住	天洲靈祥	享保11(1726)7・7			
前住	碩梁海	寛延2(1749)9・4		南叟寺(64)6世	
前住	国穩大京	天明1(1781)12・1			
2	丹山五鳳	文化5(1808)1・15		洞雲寺(459)18世	411e
3	春耕田牛	天明7(1787)7・2	(中興開山、法地開闢(天明年間)、駿河記、新風土記、駿河志料より)	瑞光寺(2)12世、石蔵院(112)8世、怡泉寺(120)6世	86a 87a
4	佛州玉穎	文化8(1811)1・18	(法地初住、林叟院記録より)、(寛政6諸堂再建・梵鐘鑄造、西益津村誌より)	林叟院(388)23世、六角庵(446)開山	
5	月海享州	文化10(1813)1・23			
6	禅観宏宗	弘化3(1846)6・12			
7	珠山元宝	文化9(1812)9・13	4世弟子		
8	太寧義勇	文政10(1827)5・15	3世弟子	石蔵院(112)14世、怡泉寺(120)12世	
9	観悦義毛		8世弟子、文政9進山、天保6・1退院		
10	義門良孝	明治30(1897)8・7	林叟院へ転住 [池田]	林叟院(388)28世、光鏡院(90)17世、松壽院(96)前住、法幢寺(97)19世、圓泉寺(559)2世、光月院12世、願成寺2世	88b
11	祖天珉童	明治25(1892)9・24		林叟院(388)27世、笈沢寺(399)前住・2世	
12	興庵慧宗	明治37(1904)9・22	万延1・10・3論旨拝戴 [青島]	林叟院(388)30世、光泰寺(389)18世、長福寺(395)3世、圓泉寺(559)3世、石雲院(607)独住5世、報恩寺2世、岩昌寺2世	88b
13	拙庵宗孝	明治29(1896)1・18	[海老原]	長福寺(395)7世	
14	廓庵達宗	大正4(1915)2・1	12世弟子(上足)		
15	悟庵宗全	明治19(1886)1・18	12世弟子 [小柳]		
16	宗庵徹苗	昭和3(1928)12・18	12世弟子、(明治19当時住職、西益津村誌より) [八木]	当寺18世、光泰寺(389)21世	88c
17	瑞心玄道	明治30(1897)10・3	[富田]		
18	宗庵徹苗	昭和3(1928)12・18	再住、久能江雲寺(世代になし)より転住 [八木]	当寺16世、光泰寺(389)21世	88c
19	東宗賢光	昭和21(1946)3・22	18世弟子、耕春院へ転住、世寿70歳 [伊藤]	笈沢寺(399)5世、耕春院(424)21世	88d
20	洞巖弥白	昭和14(1939)3・21	東益津法号庵より転住、(大正2当時住職、西益津村誌より)、世寿63歳 [竹林]	華蔵寺20世?	486f
21	玉巖源龍	昭和50(1975)6・5	光泰寺へ転住 [鈴木]	光泰寺(389)24世	438c
22	浩月泰山	東堂	21世弟子、光泰寺へ転住 [梶川]	光泰寺(389)25世、南陽寺(397)現住、三星寺(411)現住	438d
23	一貫貞雄	昭和57(1982)8・20	昭和52・7就任 [水谷]	興福寺(396)7世	438d

24	大豊義道	現住	永源院より転住、平成2晋山 [浜田]	長福寺(395)11世、六角庵 (446)現住、永源院22世	438d
----	------	----	-----------------------	-----------------------------------	------

9教区	ちがんざん	ぜんきよじ	〒	426-0005
440番	池巖山	全居寺	住 所	藤枝市水守16
			住 職	松本宏幸
開山年	元和3(1617)		草創年	鎌倉時代
本 尊	釈迦牟尼如来			
開 基	正屋順公			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一總善寺(426)一耕春院(424)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開基	正屋順公		開基		
開山	嶺山全鷲	元和7 (1621)7・5		耕春院(424)2世、真福寺(442)開山、南叟寺(451)開山、如法寺(458)開山、玉傳寺(455)開山、智光院(廢)開山、大仲寺開山?	438c
2	泉翁清公				
3	名庵宗譽	元和6 (1620)12・27	中興		
4	盛山全隆	寛文5 (1665)3・13	中興		
前往	智山修源	元禄1 (1688)10・15	5世弟		
5	喜翁全悦	宝永3 (1706)3・4			
前往	岳瀨龍海	元文3 (1738)8・21			
前往	禪翁壽門	寛保2 (1742)4・2	龍瀨老父		
8	長山禪光	宝曆4 (1754)10			
前往	禪岩龍機	天明5 (1785)9・10			
前往	然聖忍廓	宝曆8 (1758)1・13			
前往	黙山智格	宝曆8 (1758)1			
前往	龍山一心	宝曆8 (1758)9・13	観音堂(山ノ堂)庵主		
前往	徳翁為隣	文政1 (1818)10・15			
前往	祖岳達宗	天保14(1843)10・1			
前往	活翁天山				
前往	嶺山大勇	嘉永2 (1849)9・30			
前往	隨雲智用	明治14(1881)7・14	世寿83歳		
前往	喚應是三	明治15(1882)6・7			
前往	魯嶽雄虔	大正12(1923)10・10	明治16春住職、世寿76歳 [松本]	円通寺(愛知92)25世	28d 909h
1	英峯忍雄	昭和43(1968)5・17	法地開闢(昭和23)、昭和33・10・21晋山式、世寿86歳 [松本]		909b
2	英嶽宏雄	平成14(2002)12・24	中興、1世弟子、昭和43・10・6晋山、昭和56本堂・開山堂改修、昭和61観音堂改築、平成2庫裡新築、世寿83歳 [松本]		909c
3	俊嶽宏幸	現住	2世弟子、平成15・10・19晋山 [松本]		

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(5)

9教区	はんにやざん	しんぶくじ	〒	426-0004
442番	般若山	真福寺	住 所	藤枝市上当間178
			住 職	曾根宏規
開山年	元和6(1620)		草創年	
本 尊	葉師如来			
開 基	不詳			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一總善寺(426)一耕春院(424)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	嶺山全鷲	元和7(1621)7・5	耕春院開山積翁長善弟子、耕春院末寺7カ寺開山	耕春院(424)2世、全居寺(440)開山、南叟寺(451)開山、如法寺(458)開山、玉傳寺(455)開山、智光院(廢)開山、大仲寺開山?	438c
前住	(英山)碩雄		[三輪]	光西寺(569)前住、惠鏡院6世、高德寺18世	251e
前住	(元興)道顯		耕春院21世東宗賢光弟子、後に朝比奈村玉取梅窓寺・京都某寺・永平寺東京別院に移る、茨城県銚田町吉祥寺高津憲乗実父 [仲田]	安楽寺(京都396)23世	88e
前住	(祚天)博貫		藤枝市源昌寺門前山口家出身、後に富士市碧雲寺住職 [石上]	碧雲寺(209)32世	412e
前住	東傳瑞光	昭和51(1976)8・13	山梨県出身、耕春院21世弟子、世寿84歳 [渡辺]	耕春院(424)23世、箕沢寺(399)9世、南叟寺(451)前住、如法寺(458)前住	88e
前住	東階穎之	昭和62(1987)7・29	耕春院23世息子、同弟子、世寿60歳 [渡辺]	耕春院(424)24世、南叟寺(451)前住、如法寺(458)前住	88f
前住	東水知之	平成17(2005)8・12	耕春院24世二男、同弟子、世寿47歳 [渡辺]	耕春院(424)25世、南叟寺(451)前住、如法寺(458)前住	
現住	大融宏規	現住	[曾根]	耕春院(424)26世、全珠院(400)現住、南叟寺(451)現住、大覚寺	

9教区	ちくおうざん	ばんねんじ	〒	421-1115
443番	竹翁山	万年寺	住 所	藤枝市岡部町新舟1232
			住 職	成田泰生
開山年	永禄3(1560)		草創年	
本 尊	地藏菩薩			
開 基	湧岩正泉記室(永禄12・9・12没)			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一總善寺(426)			
寺 史 等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	靈屋契鑑			石雲院(607)輪住(天文8)、梅林院(390)5世、總善寺(426)開山、龍泉院(茨城13)2世、龍泉院(同151)2世、最林寺(422)開山、喜雲寺(431)開山、高寅寺(茨城16)開山	437b 437c 438a
(開山)	(智覚舜谷)	(天正13(1585)6・25)	(駿河記、新風土記、駿河志料より)	總善寺(426)2世、最林寺(422)2世、西楽寺(448)開山	438a
現住	照山泰生	現住	[成田]	總善寺(426)29世、喜雲寺(431)4世、善能寺(447)現住、西楽寺(448)現住、梅窓寺(452)現住、芙蓉庵(454)現住	409d

9教区	やくしざん	だいちゅうじ	〒	421-1124
444番	薬師山	大仲寺	住所	藤枝市岡部町村良薬師堂562
			住職	加藤秀宣
開山年	慶長1(1596)		草創年	
本尊	聖観世音菩薩			
開基	不詳			
旧名称				
旧所在地				
本寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一總善寺(426)一耕春院(424)			
寺史等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	積翁長善	文禄3(1594)8・20		石雲院(607)輪住(慶長8)、總善寺(426)3世、耕春院(424)開山、善能寺(447)開山、梅窓寺(452)開山、清養寺(457)開山、玉伝寺(廢)開山	438b
前住	修吾		[岡村]		
現住	大寅秀宣	現住	[加藤]	梅林院(390)39世、孝養院(402)現住、観音寺(403)現住、専念寺(407)現住、福寿院(414)現住、持珠院(416)現住、東向寺(420)現住	

9教区	げっこうざん	さいほうじ	〒	421-1123
445番	月光山	西方寺	住所	藤枝市岡部町入野87
			住職	大石博道
開山年	不詳		草創年	
本尊	阿弥陀如来			
開基				
旧名称				
旧所在地				
本寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一常楽院(425)			
寺史等				

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴世世代(5)

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山?	止雲宗泊				
開山?	珍岩定珠				
現住	性庵博道	現住	[大石]	常楽院(425)28世、竜谷寺(449)現住、用雲寺(450)現住	

9教区	みょうこうざん	ろっかくあん	〒	426-0019
446番	妙高山	六角庵	住所	藤枝市天王町2丁目7-41
			住職	濱田義道
開山年	文政2(1819)		草創年	不詳
本尊	地藏菩薩			
開基	智岩妙高尼和尚			
旧名称				
旧所在地				
本寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一林叟院(388)一洞雲寺(459)一源昌寺(434) (旧本寺、一林叟院(388)一心岳寺(461)一徧照寺(430))			
寺史等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	仏州玉穎	文化8(1711)1・18		林叟院(388)23世、源昌寺(434)4世	
開基	智岩妙高尼		開山弟子		
前住	慧林法春尼	明治9(1876)3・15	中興、開基弟子、81歳まで留錫60余年、(文政3堂宇建立、六角堂妙高庵と称す、藤枝町誌より)		
前住	仏専招法尼	明治9(1876)6・1			
前住	蓮月専明尼	昭和39(1964)9・29			
現住	大豊義道	現住	[濱田]	長福寺(395)11世、源昌寺(434)24世、永源院22世	438d

9教区	にゅうぶねざん	ぜんのうじ	〒	421-1115
447番	新舟山	善能寺	住所	藤枝市岡部町新舟271
			住職	成田泰生
開山年	天正18(1590)		草創年	
本尊	庚申菩薩			
開基	不詳			
旧名称				
旧所在地				
本寺	大本山總持寺一大洞院(1303)一洞松寺(岡山28)一石雲院(607)一梅林院(390)一總善寺(426)			
寺史等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	積応長善			石雲院(607)輪住(慶長8)、總善寺(426)3世、耕春院(424)開山、大仲寺(444)開山、梅窓寺(452)開山、清養寺(457)開山、玉伝寺(庵)開山	438b

現住	照山泰生	現住	[成田]	總善寺(426)29世、喜雲寺(431)4世、万年寺(443)現住、西樂寺(448)現住、梅窓寺(452)現住、芙蓉庵(454)現住	409d
----	------	----	------	--	------

9教区	てんのうざん	さいらくじ	〒	421-1101
448番	天王山	西樂寺	住 所	藤枝市岡部町玉取近又135-2
			住 職	成田泰生
開山年	天正11(1583)			草創年
本 尊	阿弥陀如来			
開 基	西方院宗源居士			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)—總善寺(426)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	智覚舜翁			總善寺(426)2世、最林寺(422)2世、(万年寺(443)開山)	438a
現住	照山泰生	現住	[成田]	總善寺(426)29世、喜雲寺(431)4世、万年寺(443)現住、善能寺(447)現住、梅窓寺(452)現住、芙蓉庵(454)現住	409d

9教区	だいちざん	りゅうこくじ	〒	426-0222
449番	大池山	竜谷寺	住 所	藤枝市中藪田510
			住 職	大石博道
開山年	寛永14(1637) (常楽院記録では寛永11(1634))			草創年
本 尊	聖觀世音菩薩			
開 基				
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)—常楽院(425)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	玉山長眠	正保3 (1646)11・2		大洞院(1303)輪住(寛永11)、常楽院(425)7世	
現住	性庵博道	現住	[大石]	常楽院(425)28世、西方寺(445)現住、用雲寺(450)現住	

9教区	にちぎょうざん	よううんじ	〒	426-0001
450番	日行山	用雲寺	住 所	藤枝市仮宿1172
			住 職	大石博道
開山年	弘治3(1557)			草創年
本 尊	地藏菩薩			

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴世世代(5)

開基	
旧名称	
旧所在地	
本寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)—常樂院(425)
寺史等	

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	月州秀隣	永禄12(1569)11・18		石雲院(607)輪住(永禄10)、常樂院(425)4世、成道寺(551)開山	437d
現住	性庵博道	現住	[大石]	常樂院(425)28世、西方寺(445)現住、竜谷寺(449)現住	

9教区	あさひさん	なんそうじ	〒	426-0007
451番	朝日山	南叟寺	住所	藤枝市潮595
			住職	曾根宏規
開山年	元和5(1619)		草創年	
本尊	地藏菩薩			
開基	不詳			
旧名称				
旧所在地				
本寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)—總善寺(426)—耕春院(424)			
寺史等				

世代	尊名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	嶺山全鷲	元和7(1621)7・5	耕春院開山積翁長善弟子、耕春院末寺7ヶ寺開山	耕春院(424)2世、全居寺(440)開山、真福寺(442)開山、如法寺(458)開山、玉傳寺(455)開山、智光院(廢)開山、大仲寺開山?	438c
前任	蜜伝?		[小宮]		
前任	眞庵豊宗	大正15(1926)10・31	[森]	林叟院(388)31世、弘徳院(393)28世	
前任	黙仙樸定尼	昭和16(1941)10・25	藤枝市前島退文庵弟子、上当間真福寺前任仲田道顕実母、世寿59歳 [仲田]		
前任	東傳瑞光	昭和51(1976)8・13	山梨県出身、耕春院21世賢光弟子、世寿84歳 [渡辺]	耕春院(424)23世、箕沢寺(399)9世、真福寺(442)前任、如法寺(458)前任	88e
前任	東階穎之	昭和62(1987)7・29	耕春院23世東傳瑞光息子、同弟子、世寿60歳 [渡辺]	耕春院(424)24世、真福寺(442)前任、如法寺(458)前任	88f
前任	東水知之	平成17(2005)8・12	耕春院24世東階穎之二男、同弟子、世寿47歳 [渡辺]	耕春院(424)25世、真福寺(442)前任、如法寺(458)前任	
現住	大融宏規	現住	[曾根]	耕春院(424)26世、全珠院(400)現住、真福寺(442)現住、大覚寺	

9教区	ふくじゅざん	ばいそうじ	〒	421-1101
452番	福聚山	梅窓寺	住所	藤枝市岡部町玉取1295
			住職	成田泰生
開山年	文禄1(1592)		草創年	

本尊	地藏菩薩
開基	明岩良公和尚
旧名称	
旧所在地	
本寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)—總善寺(426)
寺史等	

世代	尊名	示寂年月日	經歷等	歴住寺	大系譜
開山	積翁長善			石雲院(607) 輪住(慶長8)、總善寺(426)3世、耕春院(424)開山、大仲寺(444)開山、善能寺(447)開山、清養寺(457)開山、玉伝寺(廢)開山	438b
開基	明岩良公				
現住	照山泰生	現住	[成田]	總善寺(426)29世、喜雲寺(431)4世、万年寺(443)現住、善能寺(447)現住、西栗寺(448)現住、芙蓉庵(454)現住	409d

9教区	るりこうさん	ふようあん	〒	421-1102
454番	瑠璃光山	芙蓉庵	住所	藤枝市岡部町宮島1488
			住職	成田泰生
開山年	享保7(1722)		草創年	
本尊	薬師如来			
開基	水月是舜和尚			
旧名称				
旧所在地				
本寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—梅林院(390)—總善寺(426)			
寺史等				

世代	尊名	示寂年月日	經歷等	歴住寺	大系譜
開山	大家一牛	享保5(1720)10・18		石雲院(607) 輪住(正徳2)、總善寺(426)9世	
(開山)	(衛箭虎岩)		(駿河記、駿河志料より)	總善寺(426)10世	
開基	水月是舜				
現住	照山泰生	現住	[成田]	總善寺(426)29世、喜雲寺(431)4世、万年寺(443)現住、善能寺(447)現住、西栗寺(448)現住、梅窓寺(452)現住	409d

9教区	みやじまさん	せいようじ	〒	421-1102
457番	宮島山	清養寺	住所	藤枝市岡部町宮島894
			住職	前島志朗
開山年	天正18(1590)		草創年	
本尊	阿弥陀如来			
開基	中嶽翁驚公僧			
旧名称				
旧所在地				

静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴任世代(5)

本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―梅林院(390)―總善寺(426)
寺 史 等	

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	積応長善	文禄3 (1594)8・20		石雲院(607)輪住(慶長8)、總善寺(426)3世、耕春院(424)開山、大仲寺(444)開山、善能寺(447)開山、梅窓寺(452)開山、玉伝寺(廢)開山	438b
(開山)	(天關傳盛)		(駿河記、新風土記、駿河志料より)	總善寺(426)4世、全珠庵(456)開山	
(前住)	(至道祖仙)		(常安寺へ転住、同寺記録より)	常安寺(45)6世	
1	大順博道	平成2 (1990)1・13	法地開關開祖 [堀田]	總善寺(426)26世	177e
2	大明孝志		愛知県雲居寺弟子	總善寺(426)27世	
3	徹玄志朗	現住	歙昌院前島後哉弟子、昭和60・3晋山、平成9・11・13晋山式 [前島]		

9教区	おにじまさん	によほうじ	〒	426-0008
458番	鬼島山	如法寺	住 所	藤枝市鬼島46
			住 職	岡田善雄
開山年	元和7(1621)		草創年	
本 尊	阿弥陀如来			
開 基	不詳			
旧 名 称				
旧所在地				
本 寺	大本山總持寺一大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―梅林院(390)―總善寺(426)―耕春院(424)			
寺 史 等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	嶺山全鷲	元和7 (1621)7・5	耕春院開山積翁長善弟子、耕春院末寺7ヶ寺開山	耕春院(424)2世、全居寺(440)開山、真福寺(442)開山、南叟寺(451)開山、玉傳寺(455)開山、智光院(廢)開山、大仲寺開山?	438c
前住	明運眠光				
前住	得山義嶽		[麻蒔]?	龍源院(愛知823)16世?	270d?
前住	制峯來止	明治39(1906)2・6	在住9年		
前住	壽仙一道	大正10(1921)2・19	世寿96歳 [小林]		
前住	大寛清光	昭和9 (1934)4・19	世寿29歳 [大島]		
前住	リョウショウ		焼津市保福島旭伝院より来寺、後に西方へ移る [本田]		
前住	陽山大成	昭和20(1945)8・17	耕春院21世東宗賢光弟子、満州で戦死 [神谷]		
前住	東傳瑞光	昭和51(1976)8・13	山梨県出身、耕春院21世東宗賢光弟子、世寿84歳 [渡辺]	耕春院(424)23世、筑沢寺(399)9世、真福寺(442)前住、南叟寺(451)前住	88e
前住	東階穎之	昭和62(1987)7・29	耕春院23世東傳瑞光実子、同弟子、世寿60歳 [渡辺]	耕春院(424)24世、真福寺(442)前住、南叟寺(451)前住	88f

前住	東水知之	平成17(2005)8・12	耕春院24世東階額之二男、同弟子、世寿47歳 [渡辺]	耕春院(424)25世、真福寺(442)前住、南叟寺(451)前住	
現住	祖耕善雄	現住	[岡田]	光鏡院(90)23世、松壽院(96)4世	

明治期以降曹洞宗人物誌（二）

川口高風

はじめに

本稿は「愛知学院大学教養部紀要」第五十四巻第四号（平成十九年三月）に所収の拙稿「明治期以降曹洞宗人物誌（一）」の続編で、「あ」項の続きである。全項の人物誌が完成した時は『近・現代曹洞宗人名辞典』と題して刊行する予定で、一日も早い完成をめざしている。しかし、集中力と精力をかなり費す仕事のため、自分の生命があるうちに完成できるか心配している。何とか無事刊行できるように精進したい。

凡例

〔見出し項目〕

- 一、収録人物は明治期以降の顕著な業績を示した人物で、既没者のみを採用した。
- 二、見出しの人名は当時用いた旧漢字とした。事歴の本文は新字体を用いたが、旧字体を使用したものもある。

- 三、見出しの項目はかな見出しを太字で示し、次に漢字を掲げた。
- 四、かな見出し項目は姓と名の間にダッシュを挿入して読みやすくした。

〔見出し項目の配列〕

- 一、五十音順に配列した。
- 二、同音同字の漢字項目は時代順（没年順）に配列した。
- 三、同音異字の漢字項目は第一字目の画数の少ないものからの順とした。また、第一字目が同画数の時は第二字以降の画数の少ないものから配列した。

〔本文の記述とその順序〕

- 一、本文の記述は敬語、敬称の使用を避けた。
- 二、収録にあたっては居住地、号、字、生年月日、父母、誕生地、受業師、本師、学歴、僧堂安居歴、宗門役職歴、社会的職歴、著作類、示寂（没）年月日、行年、参考文献の順とした。不明な場合は記していない。
- 三、編集するにあたり、基本的には直接、居住地に問い合わせした返書にもとづいて執筆した。それ以外に参考とした文献は末尾に掲げた。
- 四、伝記中の元号の一番最初（初筆）に西暦を入れた。ただし、伝記中の生没年には西暦を入れない。
- 五、寺院の所在地は平成の大合併による新市町村名への変更は行っていない。
- 六、居住地は歴住の順序通りでないものもあり、何世か不明な場合は記していない。

あかまつーじたん 赤松慈潭

一 昭和十六年(一九四一)

大田市栄泉寺二十二世。号は刻舟。兵庫県に生まれる。受業師、本師は和田慈穩。関市龍泰寺や京都建仁寺に安居し、竹田黙雷に参随した。宗務支局長、宗務所長、邇摩郡保護会長などを務め、昭和十六年八月三十日に六十六歳で示寂した。〔現代仏教家人名辞典〕

あかまつーぶつかい 赤松佛海

一 昭和三十年(一九五五)

岡山県小田郡禅源寺二十八世、井原市善福寺三十一世。号は為船。広島県に生まれる。受業師、本師は赤松正道。赤松月船、赤松暁三に参随した。昭和六年(一九三一)四月に長田暁玄とともに『洞松寺住職後任候補植田即法師辞退要求理由と事情並意見』を著わす。地方布教部委員長、後月那仏教会長などを務め、昭和三十年九月二十八日に八十五歳で示寂した。〔現代仏教家人名辞典〕

あがわーだんでい 阿川断泥

天保五年(一八三四)―大正四年(一九二五)

徳山市興元寺二十五世、徳山市保安寺十三世、山口市福厳院十七世、山口市泰雲寺独住一世、鹿児島県福昌寺、萩市亨徳寺十八世、信州長国寺、杵岐華光寺二十七世、福岡県龍国寺。号は卍鏡。姓は滝ともいう。天保五年十一月一日に徳山藩毛利家の家臣の家に生まれる。受業師は興元寺の黙淵、本師は祖学黙禪。龍海院の突堂にも参随している。弘化二年(一八四五)の夏、興元寺に首先安居し、嘉永二年(一八四九)四月から翌年夏まで江戸駒込の梅檀林に掛錫した。安政四年(一八五七)五月に保安寺に首先住職、文久元年(一八六一)十二月に福厳院へ転住し、明治三年(一八七〇)十二月に泰雲寺へ住職する。明治十年に第一次末派総代会議員を務め、十二年十月に鹿児島県の福昌寺に住職した。十四年に第二次末派総代会議員を務め、十五年七月に興元寺、二十一年四月に亨徳寺、二十七年二月に長国寺に住職し、二十八年に『周防

龍文寺三世中興器之為禪師行巻』二巻を刊行した。三十三年四月に杵岐華光寺に住職する。總持寺の侍者、後堂を務めた。『参同契宝鏡三昧解』を出版しており、興元寺で大正四年一月十六日に八十二歳で示寂した。〔曹洞宗名鑑〕、『龍国寺歴住世代記録』、橋本隆哉「諸嶽山版坐禅用心記并三根坐禅説不能語の再版と阿川断泥和尚」(『宗学研究』第十六号)

あきなりーけんどう 秋成賢道

天保二年(一八三一)―明治三十一年(一八九八)

岡山県苫田郡宝樹寺八世、岡山県久米郡円通寺十六世。号は獨明。天保二年十月二十日に大分県西国東郡羽根村の秋成茂右衛門の三男に生まれる。受業師は守謙、本師は隆瑞。龍海院の突堂に隨身し、江戸駒込吉祥寺学寮で修学した。教導職試補、權訓導に拜命され、天保十二年(一八四一)十月十七日に大分県国東郡宝泉寺の守謙について得度し、十四年冬に大分県速見郡の長流寺住職孝天の初会に入衆した。安政元年

(一八五四)三月より同四年七月まで龍海院の奕堂に隨身、四年冬に大分県宇佐郡定林寺の丹法の初会で立職、五年十二月十九日に大分県速見郡の宝福寺の隆瑞の室に入つて嗣法、六年八月十三日に永平寺で転衣し上京する。六年九月より慶応元年(一八六五)十一月迄駒込吉祥寺学寮において修学し、慶応元年十一月二十日に円通寺へ住職し、明治九年(一八七六)七月十九日に宝樹寺へ転住、十年夏、同寺において初会結制を修行した。三十一年九月二日に六十九歳で示寂している。

あきのーこうどう 秋野孝道

安政五年(一八五八)ー昭和九年(一九

三四)

總持寺独住第七世、天徳院、大洞院、可睡齋に住職する。号は大忍。禪師号は黙照円通禪師。安政五年四月十八日、静岡県榛原郡相良町浪津の秋野新七の三男に生まれる。受業師は伊藤慶道、本師は加藤玄裔。明治十二年(一八七九)浜松市天林寺専門支校に入る。十三年に同支校の学監とな

る。十五年十月二十五日には駒込吉祥寺内の曹洞宗大学林専門本校に入学し十九年に卒業した。西有穆山に就て、十三年間『正法眼蔵』の研究を行った。二十二年四月十三日に天徳寺、四十年七月二十九日に大洞院、大正五年(一九一六)六月十三日に可睡齋などを歴住し、昭和四年(一九二九)十二月四日に總持寺の貫首に就任した。明治二十三年には天徳寺認可僧堂を開単し、曹洞宗大学林学監、静岡県第一号訓導取締、静岡県甲号総教会展長、続洞上聯燈録編纂材料蒐集委員、第五区末派総代正員議員、第三中学林監理、大学林教頭、曹洞宗大学総監代辨、同大学林長代辨、曹洞宗議會特選議員、曹洞宗教育會議員、永平寺後堂、眼蔵会講師、曹洞宗大学長、總持寺西堂などを務めた。著作には『禅宗綱要』

『教授戒文纂解』『五位要訣』『禅の安心』『正法眼蔵聴講筆記』『坐禅箴・三根坐禅説講話』『坐禅用心記』『參同契』『宝鏡三昧』『從容録』『雪竇禪師頌古称提』『般若心経』『普勸坐禅儀』『碧巖集』『曹洞宗意』などの講話、『正伝三昧の大意』『洞上

安心の妙訣』『禅学入門』『禅戒の大意』『此処に道あり』『修養禅』『味禅の活用』『禅の骨髓』『禅の要諦』『徹底禅』『黙照円通禪師語録』などがある。昭和九年二月二十日に七十七歳で示寂した。(『大乘禅』第十一卷第四号、大塚洞外『秋野孝道禪師略繪傳』、『曹洞宗名鑑』、『總持寺誌』)

あきひらーとくじょう 秋平徳乘

明治四年(一八七二)ー昭和三十四年(一九五九)

兵庫興禪寺十四世。号は大運。明治四年一月一日に兵庫県養父郡出石町の中島家に生まれる。受業師、本師は秋平改禪。二十二年(一八八九)に洞仙寺の小出海心初会に入衆、二十五年に養源寺の紫安石雲の隨意会にて立職、同年、秋平改禪に嗣法。三十三年、永平寺に瑞世。明治二十年には兵庫県の聯芳学林に入学し、その課程を卒へて曹洞宗大学林に入学。三十五年に卒業。三十九年に内地留學生に選拔せられ宗乘を専攻し、同年に興禪寺へ住職した。初会結制修行後、第三中学林教授となり、台湾布

教師にも就く。昭和三十四年十二月十五日に八十九歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』)

あきやまーごあん 秋山悟庵

文久三年(一八六三)ー昭和十八年(一九四三)

上越市真慶寺三十三世、上越市賞泉寺二十世、上越市顕聖寺三十三世。号は雄道。文久三年九月一日に新潟県東頸城郡安塚村石橋の秋山新左衛門とキセの次男に生まれる。受業師は単道雄傳、本師は諦応良観。

信州長国寺の鶴沢古鏡にも参随した。哲学館の井上円了、村上專精の下で学び、さらに三宅雪嶺、新渡戸稲造とも親交した。明治三十八年(一九〇五)十二月には現代名家の武士道に関する時局講話や論説、日露戦争に関する時局講話や評録し、将来の国民道德教育に役立つものとした『現代大家武士道叢論』を編集したのをはじめ『禅と武士道』、『禅と修養』、『坦山和尚全集』、『力ある修養禅林講話』、『奥義解説禅学講話』、『青年と禅』、『和訳聖典十種』、『禅と英雄』、『禅の簡易生活』などを著わした。

大正五年には顕聖寺へ帰り、顕聖寺僧堂で雲衲教育に尽力した。十一年には本師の後任として賞泉寺二十世の法燈を継ぎ、昭和五年には顕聖寺三十三世に昇住し僧堂の運営と教育に努め、昭和十八年九月六日に八十一歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』、川口高風『明治前期曹洞宗の研究』)

あきらーりようざん 明楽梁山

ー明治四十年(一九〇七)

益田市妙義寺二十五世、島根県浜田市禅床院十三世。号は洞屋。本師は瑞香梅山。曹洞宗議員を務め、妙義寺の本堂屋根替、千休地藏及びその堂宇、山門などの建立を行った。犬養毅とも親交があり、禅談を交していた。明治四十年一月二十九日に示寂した。

あくらーしゅうえん 阿蔵秀真

明治二十七年(一八九四)ー昭和三十五年(一九六〇)

静岡県磐田郡玖延寺二十世、静岡県周智郡極楽寺二十一世、二十四世。号は大峰。明

治二十七年八月二十一日に愛知県海部郡富田村字千音寺の横井林右エ門の三男に生まれる。受業師、本師は阿蔵寛宗。横井恵超に参随した。昭和三十五年五月十日に六十五歳で示寂した。(『玖延寺歴住世代帳』)

あけみーじせん 明翫慈船

安政六年(一八五九)ー昭和十六年(一九四一)

神戸市北区光明寺十世、福井県坂井郡正瑞寺、滋賀県高島郡宝光寺、大津市葛川村桂昌寺。号は洞嶺。安政六年二月三十日に福井県丹生郡白山村の寺尾久太夫の二男に生まれる。沙弥戒を満岡慈舟に受く。受業師は山田全牛。本師は明翫大俊あるいは山田秀全。明治四年(一八七二)冬、今立郡高瀬村の宝円寺高瀬聖道の初会に入衆。五年より九年迄、武生町龍泉寺の慈舟に随侍して、内外典を学習する。九年夏、近江國犬上郡里根村の天寧寺福岡涼琴について立職し、十年二月より十三年一月迄、彦根清涼寺の長森良範に随侍する。十三年二月より十五年二月迄、越前南條郡春日野村の西応

寺の上野瓶城に随侍し、二十一年八月より二十三年三月迄、近江高島郡朽木村の興聖寺橋本台嶺に随侍、三十年二月より三十二年二月迄、名古屋市東区安齋院の野々部至游に随侍。『曹洞宗大鑑』によれば、明治九年九月に山田秀全の室に入って嗣法し、同年九月、永平寺で転衣、十年七月、正瑞寺へ首先任職した。二十一年三月、宝光寺へ転住し、二十三年夏に初会結制を修行した。二十四年十二月、桂昌寺へ特選により転住し、三十二年六月、永平寺の推薦により光明寺に転住する。三十三年に兵庫県第一支局管内布教師、三十四年から大正三年迄、同県宗務所長、明治四十四年から大正十五年(一九二六)迄、同県布教教長を務める。昭和十六年五月二十三日に八十五歳で示寂した。〔曹洞宗名鑑〕、「明翫慈船自伝」)

あさいーたいざん 浅井泰山

明治七年(一八七四)―大正七年(一九一八)

名古屋市熱田区月笑寺五世。号は積成。明

治七年八月十日に名古屋市中区打出に生まれる。受業師、本師は大島天珠。杉本道山、白鳥鼎三、鷹林冷生、信叟仙受らに参随した。二十八年二月に大島天珠に嗣法し、二十九年九月二十六日に永平寺へ瑞世、同年十二月に月笑寺へ住職した。愛知県派出布教師、組長、所長、宗会議員を務めた。大正七年十一月十四日に四十五歳で示寂した。〔曹洞宗名鑑〕)

あさいーだいせん 浅井大仙

明治二十四年(一八九二)―昭和五十二年(一九七七)

名古屋市瑞泉寺三十三世、静岡県田方郡最勝院四十七世、薬師寺十二世、大泉寺寺号開山。号は無外。明治二十四年四月二十一日に名古屋市天白区天白町大字植田字北屋敷の浅井亀次郎と母ふじの長男に生まれる。受業師及び本師は浅井蜜成。明治三十八年(一九〇五)に高等小学校を卒業、大正元年(一九一二)七月曹洞宗第三中学林を卒業、六年七月曹洞宗大学を卒業し、曹洞宗宗乗研究生として引き続き在学した。

昭和五年(一九三二)最勝院の後席を継

ぎ、二十五年十二月十日に瑞泉寺に住職する。二十八年に名古屋市南区天白町に布教所を建立し、幼稚園も設立して大泉寺と寺号した。曹洞宗准師家、静岡県第三宗務所長、特派布教師、朝鮮布教師、總持寺顧問、總持寺授戒会の教授師などに任命され、五十年に曹洞宗大教師に補任され赤紫恩衣を許可されている。五十二年八月二十四日に八十七歳で示寂した。同日、總持寺より贈監院を受けている。〔曹洞宗現勢要覧〕、浅井大仙・川口高風『鳴海瑞泉寺史』)

あさいーばいみょう 浅井梅明

天保元年(一八三〇)―明治三十一年(一八九八)

愛媛県瑞応寺二十四世、愛媛県新居浜市真光寺十二世、愛媛県今治市大雄寺二十六世。号は圓山。天保元年二月九日に愛媛県新居浜市一宮町に生まれる。受業師及び本師は瑞応寺十七世一兮満三。真光寺に住して瑞応寺歴代の会の役寮を務めた。明治十九年(一八八六)十月二十八日に瑞応寺へ

晋住し、同二十九年五月に退董して隠寮に入った。その間、掛搭の雲衲を提撕した。三十一年九月二日に示寂した。(『瑞応寺誌』)

あさいーみつじょう 浅井蜜成

安政四年(一八五七)ー昭和五年(一九三〇)

名古屋市瑞泉寺三十一世、薬師寺十世、全久寺法地開山、円道寺、金剛寺号開山。号は道本、安政四年三月九日に名古屋市天白区天白町植田の浅井善十郎の二男に生まれる。受業師は悟山哲心、本師は杉本道山。明治七年(一八七四)三月より十三年九月まで生駒円之、十四年より十五年まで鷹林冷生に随侍した。十七年三月、教導職試験に任ぜられ、十八年に愛知県第一曹洞宗専門支校卒業。三十六年十二月には師家、四十年、瑞泉寺開山五〇〇回忌に森田悟由、石川素重戒師の戒会を務めた。大正七年(一九一八)には小作争議の調停を行っている。開山堂、位牌堂、方丈、茶室を新築し、昭和五年五月二十日に七十四歳

で示寂した。(『曹洞宗名鑑』、浅井大仙・川口高風『鳴海瑞泉寺史』)

あさくらーしんりゅう 朝倉真隆

ー明治二十七年(一八九四)

福井県武生市盛景寺二十四世、瑞林寺十四世、禅興寺二世。号は紹嶽。福井県南條郡南條町清水村の伊兵衛の次男に生まれる。受業師及び本師は寿山益聳。天保五年(一八三四)十月一日に寛天寺の益従について得度し、安政四年(一八五七)冬、天徳院の奕堂の下で首座を務め、文久元年(一八六一)十二月九日に盛景寺の益聳の法を相続した。翌二年正月、永平寺で転衣し、元治元年(一八六四)五月十五日に瑞林寺十四世として住職し、明治三年(一八七〇)八月二十四日に盛景寺に住職した。禅興寺を法地開闢して自ら勧請二世となっている。二十七年一月十八日に六十二歳で示寂した。(山口正章『春日山盛景寺小史』)

あさくらーせつりゅう 朝倉雪立

明治三年(一八七〇)ー昭和七年(一九

三二)

福井県武生市盛景寺二十六世。号は寒巖。

明治三年、福井県丹生郡織田町赤井谷の山岸弥左衛門の長男に生まれる。興泉寺の是禅について読み書き、漢字を学ぶ。受業師及び本師は守拙瓶城。比叡山、高野山などにも修学求道しており、いつも白ひげを長く垂れ、眼光鋭く無欲淡泊で檀信徒からの信望は厚かった。昭和七年十一月二日に六十二歳で示寂した。(山口正章『春日山盛景寺小史』)

あさくらーとうかん 朝倉透閑

ー昭和十七年(一九四二)

福知山市円浄寺五世、福知山市昌宝寺五世、舞鶴市即心寺九世、綾部市高台寺六世。号は普屋。京都府綾部市高津町の朝倉武左エ門の三男に生まれる。本師は大貫祖猷。京都府第四曹洞宗務所長を務め、円浄寺の本堂、庫裡再建に二千五百円を自附し、高台寺本堂再建をはたした。昭和十七年七月十六日に示寂した。(『現代仏教家人名辞典』)

あさだーこうがい 浅田高外

弘化二年(一八四五)―大正六年(一九一七)

秋田県由利郡竜門寺三十六世、本莊市松ヶ崎光禪寺、秋田県由利郡正眼寺三十三世、本莊市赤田長谷寺八世。号は慧雲。弘化二年五月二十五日に能登国羽咋郡富木村に生まれる。受業師は長野県大町市靈松寺の義順、本師は平等覚宗。萬延元年(一八六〇)夏に加州大乘寺に首先入衆し、その後、慶応元年(一八六五)まで六年間、總持寺に安居した。明治九年(一八七六)、秋田中教院にて試験を了畢し、十九年秋に大学林学課五級の證明状を受ける。慶応元年夏、山形県村山郡泉蓮寺の仙龍再会において立身し、翌二年秋、龍門寺の前住平等覚宗の室に入て嗣法する。同年八月、總持寺に瑞世転衣し、慶応三年に光禪寺へ首先住職し、明治元年に正眼寺へ、七年に長谷寺へ、三十五年二月に龍門寺へ昇住する。長谷寺時代に楼門、経蔵を新築し落慶式をあげたが、二十一年に烏有に帰した。しかし、二十三年より三十二年までに諸堂のす

べてを再建し、二丈六尺の大仏を建立している。宗務所長、組長などを務め、県下の事情をよく知っていると看做され、秋田県史とも称された。大正六年七月二十九日に示寂している。(『曹洞宗名鑑』)

あさだーだいせん 浅田大泉

大正七年(一九一八)―平成七年(一九九五)

埼玉県東松山市浄空院二十七世、長野県飯田市増泉寺二十五世。号は月庭。受業師は浅田大宗。本師は今枝法宗。大正七年十二月十九日に長野県飯田市大瀬木の浅田大宗の長男に生まれる。駒澤大学専門部高等師範科国漢科を卒業し、永平寺に安居、沢木興道らに参随した。浄空院参禅道場師家、宗務庁書記、課長、管内布教師、青少年教員、宗門公認伊賀良保育園を開設し、同園長。養護施設慈恵園を創設、民生委員、保護司などを務めた。平成七年十月六日に七十六歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』)

あさのーぜんじょう 浅野善成

―明治三十年(一八九七)

新潟県南魚沼郡正眼寺二十六世。号は大器。濃州武儀郡関町の浅野家に生まれる。近くの正武寺で得度したと思われ、受業師、本師は不詳。正眼寺は幕末に本堂改築を起こすが、幕末の動乱や凶作、住職の急逝によって事業は停滞し、田畑の質入借金のため破産した。そのため雲洞庵の南木国定の命により、破産再建を旨として善成が明治九年(一八七六)三月十五日に入院し、借財整理、授戒会修行、大蔵経を購入するなど大いに活躍した。十五年九月に美濃関の正武寺へ行き、その帰路に信州松本の中教院下で新寺建立のことがあり、中教院の依頼を受けて徒弟五名とともに十六年六月に出立し、十月に正眼寺を退院した。三十年八月五日、長野県松本町の善光寺別当大勧進説教所にて示寂した。(『大応山正眼寺什物校割簿』)

あさのーてつぜん 浅野哲禅

明治三十年(一八九七)―昭和五十五年

(二九八〇)

静岡県周智郡大洞院独住九世、掛川市最福寺三十四世、島田市普門院、袋井市香勝院、朝鮮郡山府錦江寺。号は大忍。明治三十年四月六日に愛知県海部郡八開村開治に生まれる。本師は河合椽音。大正十年に曹洞宗大学を卒業し、内地留学生として秋野孝道に参随する。永平寺教育係、宗乘研究学生、両大本山巡回布教師、両大本山京城別院院代、特派布教師、満洲派遣軍慰問布教師、朝鮮郡山府駐在布教師（錦江寺住職）、總持寺単頭、准師家、報国会指導講師、戦力増強教化練成動員執行補佐員講師、僧侶勤労働員適格者修練会講師、決戦報国会常会講師、第十二指定専門僧堂主（准師家）、両大本山特派布教師、教学審議会委員、駒澤大学同窓会評議員、大洞院専門僧堂主（准師家）、大政翼賛会常任委員、大日本戦時宗教報国会県支部顧問、内閣印刷局嘱託講師、帝国在郷軍人会郡支部副会長、帝国在郷軍人会町分会長、国民義勇隊郡別隊長、県戦後対策協議会委員、民主警察協議会委員、大日本報徳社特任講

師、町警察署顧問などを務める。喜寿祝賀として昭和四十八年十一月に『橘谷余韻』を出版する。昭和五十五年四月十六日に八十三歳で示寂した。『曹洞宗現勢要覧』『橘谷余韻』

あさのーふざん 浅野斧山

慶応二年（一八六六）―大正元年（一九

一一）

名古屋市天年寺十六世、茨城県稲敷郡管天寺三十一世、水戸市祇園寺二十二世、静岡県田方郡最勝院十三世。号は打睡庵、提鈿。慶応二年四月二十四日に名古屋市南鍛冶屋町の浅野束穂の三男に生まれる。受業師、本師は大島天珠。明治十二年（一八七九）四月八日、洗月院三世の天珠について得度し、それ以来、白鳥鼎三、鷹林冷生に随侍すること十二年間にわたり、十八年に法持寺の天珠の下で立身して、二十二年十一月三日に天珠の室に入って嗣法した。二十四年五月一日に永平寺で転衣出世し、二十六年三月に天年寺に首先住職した。二十八年に曹洞宗大学林へ入学し、三十二年七

月に卒業した。その後、内地留学生となり、京都へ行き浄土宗専門学院長大鹿啓成について俱舍論、唯識、因明などを学んだ。続いて東大寺戒壇院長老の上田照遍について華嚴、天台の講義を受け、京都では臨済宗五山の摂心会にも出席し橋本峨山、宮裡東昱らに参じた。三十五年八月には曹洞宗大学林教授に任ぜられ、「和融誌」「禅」などに多くの論稿を発表している。三十七年九月には管天寺に転住し、四十一年には祇園寺へ昇住した。四十四年六月には祇園寺開山東臯心越の遺稿を収集した『東臯全集』を刊行し、七月には最勝院へ転住した。その晋山記念として『妙高山最勝院縁起』、『最勝院歴代御伝記』を刊行、続いて『首楞嚴経』の五十魔境を説示した『禅病論』を著わした。綿密なる行持、博覧の学識は当代稀有の善知識といわれ、大正元年六月一日に四十七歳で示寂した。（川口高風「浅野斧山の伝記と論稿、著作」（圭室文雄編『日本人の宗教と庶民信仰』）

あさのーりようかん 浅野良閑

明治二十年(二八八七)ー昭和四十一年(二九六六)

輪島市蓮江寺三十一世、宮城県仙台市龍沢寺二十六世、宮城県仙台市宝船寺。号は蓮峰。明治二十年十一月二十九日に石川県羽咋市千代町に生まれる。受業師、本師は幕井宗閔。大正四年(一九一五)、曹洞宗立名古屋中学院を卒業し、八年には国学院大学を卒業して昭和四年(一九二九)まで仙台梅檀中学教員、總持寺祖院都寺及び講師を務める。大正六年に宮城県龍沢寺に首先住職し宗務所副所長、県社会教育講師、方面委員、小作調停委員、金銭債務臨時調停委員、町社会教育委員、県出征軍人遺族慰問教化講師、司法保護委員、金沢地方裁判所防犯協会委員、人事調停委員なども務めた。昭和二十一年より病床に伏し、四十一年八月十八日に示寂した。(『曹洞宗現勢要覽』「葬儀用辞」)

あさひなーけんしゅう 朝比奈顕宗

明治二十年(二八八七)ー昭和二十七年

(二九五二)

埼玉県秩父郡正永寺十八世、静岡市浄元寺十九世。号は瑞巖。明治二十年五月十七日に静岡県志太郡焼津町鯛ヶ島の朝比奈喜平の子に生まれる。受業師は増田芳年、本師は丹羽仏庵。明治三十二年十二月八日、千葉県龍泉寺の増田芳年について得度し、四十一年三月に千葉県立佐倉中学校を卒業した。四十三年二月より四十五年二月まで永平寺に安居した。四十二年冬、静岡県洞慶院の増田瑞明について立職し、翌四十三年二月には洞慶院の丹羽仏庵の室に入って嗣法した。大正元年(一九一二)に浄元寺十九世に就いたが、三年十月に退董している。曹洞宗宗務所長、管内布教師、特派布教師、不老閣随行布教師、高祖大師七百回遠忌社会教化運動布教師を務め、その他、機業工場布教師、司法保護委員会常務委員、県仏教社会事業協会常務理事なども務めた。昭和二十七年十月二十日に六十六歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覽』「朝比奈顕宗履歴書」)

あさひなーしほう 朝比奈資芳

大正十五年(一九二六)ー昭和五十九年(二九八四)

埼玉県秩父郡正永寺十九世。号は佛印。大正十五年十月四日に静岡県清水市庵原の長沢虎吉の四男に生まれる。受業師、本師は丹羽廉芳。昭和二十五年(一九五〇)駒澤大学文学部仏教学科を卒業。二十六年まで永平寺に安居す。五十八年より曹洞宗宗務庁審事を務めた。五十九年八月二十一日に五十八歳で示寂した。

あさまーかんざん 浅摩喚山

嘉永五年(一八五二)ー大正元年(一九一一)

厚木市興教寺二十二世。号は春應。嘉永五年十月十日に神奈川県中郡豊田村の片倉作右エ門の次男に生まれる。受業師は知道能忍。明治四年(一八七二)津久井郡津久井村の功雲寺にて立職し、大正元年十月十二日に示寂した。

あさましゆんえい 浅間俊英

一明治二十二年(一八八九)

米沢市林泉寺五十世、米沢市桃源院十八世。号は月山。俳人でもあり、明治二十二年四月十三日、米沢市岩松院にて示寂した。

あさまきーぜつけい 麻蒔古溪

天保六年(一八三五)―大正七年(一九

一八)

愛知県渥美郡長興寺独住二世、静岡県周智郡大洞院独住一世、愛知県豊田市広済寺二十五世、豊田市祐源寺十四世、埼玉県北葛飾郡迦葉院十五世。号は浄山。天保六年正月十九日に愛知県に生まれる。本師は超光陽宗。能本山東京出張所副監院、永平寺東京出張所監院、明治十一年(一八七八)三月二日の二代尊六百回大遠忌の法堂都管兼戒会中直壇、十八年一月十三日に能本山大禅師の巡化侍者、愛知県第一号曹洞宗務支局事務取扱などを務め、大正七年十二月二十四日に示寂した。(『洞上高僧月旦』)

あしうらーもくおう 蘆浦黙應

天保二年(一八三一)―明治二十六年

(一八九二)

兵庫県川辺郡福祥寺六世、三田市心月院二十一世。号は機外、別号を愷雲。天保二年十一月二十二日に周防玖珂郡今津邑の岩国藩土蘆浦次右衛門の四子に生まれる。受業師は立文字禅。本師は宜参黙禅。天保十年(一八三九)春、岩国市大応寺の万仰について沙弥となり、仏教を学ぶとともに藤村三貞について漢字を学んだ。十一年、松山市の宝林寺の愚囑に参じて『正法眼蔵』を書写し、十三年万仰の導きで岩国市の洞泉寺の立文字禅について得度した。弘化二年(一八四五)、行脚に出て諸師に参じ、嘉永元年(一八四八)には宇治市の興聖寺の回天慧杲に参じ、その後、兵庫福祥寺に転住した師の字禅に随侍した。四年冬、亀岡市の苗秀寺の結制で鴻雪爪に参じて大悟し印可を受け、六年再び回天慧杲に参じたが、回天、字禅が相次いで遷化したため、江戸に出て施檀林に掛錫し、大訥愚禅らに学んだ。安政四年(一八五七)、法兄野坂黙禅

を大阪府池田市の陽松庵に訪ね、翌五年夏

に同寺で立身し、六年三月に黙禅の室に入って嗣法した。同年八月には摂津福祥寺に首先住職し、翌七年春に永平寺で転衣した。明治二年(一八六九)四月には心月院に転住しており、大学林教授や縮刷大蔵經校警委員なども務め、二十六年六月二十四日に六十二歳で示寂した。四十二年十一月には弘津説三によって『黙應和尚遺稿』が刊行された。(弘津説三『黙應和尚遺稿』)

あじおかーぶんりゅう 味岡文龍

明治元年(一八六八)―昭和十八年(一

九四三)

名古屋市香積院十八世、尾西市鳳洲寺六世。号は旭山。明治元年十一月十五日に愛知県の小木家に生まれる。受業師は孝岳文忠。本師は本田賢光。明治十五年(一八八二)八月から十七年二月まで愛知県日進市の龍谷寺に安居し、十七年三月から二十年十月まで、二十一年三月から二十四年八月まで、二十五年三月から二十七年八月までは石川県金沢市の天徳院に安居し、押野太

寿の侍者を務めた。三十年一月に香積院へ
 住職し、大正三年（一九一四）に辞職した
 が、六年七月二十五日には再任職した。昭
 和十八年六月二十六日に七十六歳で示寂し
 ている。

あしかが 一 つみょう 足利哲苗

文化八年（一八一二）―明治二十年（一
 八八七）

府中市高安寺二十六世、東京都観栖寺十九
 世。文化八年四月八日に古河藩土宮本準人
 の子として江戸に生まれる。受業師、本師
 は祖岩哲道。号は祖傳。文政六年（一八二
 三）十三歳の春、哲道の弟子となり、天保
 五年（一八三四）に西多摩郡の明白院へ住
 職して法幢をたて、ついで南多摩郡恩方村
 の観栖寺に移り、本堂を再建した。弘化元
 年（一八四四）八月に三十四歳で高安寺に
 転住した。当時の高安寺は財政が悪く、住
 職の移動も激しく諸堂の荒廃ははなはだし
 かったが、哲苗は諸堂の営繕や整備を行っ
 て多くの徒弟を養成した。野村瓜州ら文人
 墨客との交遊があり、明治十五年（一八八

二）には曹洞宗大学林の開校式に列席して
 紫幕の寄付者に加わり、十八年に高安寺を
 退董し二十年三月二十五日に七十七歳で示
 寂した。〔高安寺もの語り〕

あしざわ 一 せきじょう 葦澤碩定

元治元年（一八六四）―明治三十八年
 （二九〇五）

長野県上水内郡長秀院二十二世、長野県常
 松寺十四世。号は禅山。本師は祖峰堅宗。
 元治元年六月十五日に長野県上水内郡豊野
 町の栗田弥惣治の二男に生まれる。弟子に
 仁、義、礼、智、信の五定を教え、地方の
 名刹に法縁を厚くした。明治三十八年十月
 六日に五十歳で示寂した。

あしな 一 しゅんせい 葦名俊清

明治四十一年（一九〇八）―昭和六十二
 年（一九八七）

仙台市妙心院三十四世。宮城県栗原郡館山
 寺二十九世。多賀城市法性院兼務住職、
 七ヶ宿町東光寺兼務住職。号は大智。明治
 四十一年一月二十日に仙台市に生まれる。

受業師は三宅俊雄、本師は葦名徳隣。昭和
 五年（一九三〇）三月に曹洞宗立梅檀中学
 校を卒業し、十五年九月十六日に永平寺に
 瑞世、同十七日に總持寺に瑞世した。十六
 年十二月十七日に栗駒町館山寺に首先住職
 し、二十年九月に東北学院高等商学部を卒
 業した。二十年十一月から宮城県宗務所に
 勤務し、二十四年一月には宮城県宗務所
 事、二十九年一月に梅檀学園学監を務め
 た。三十五年十月には仙台市新寺小路地区
 区画整理審議会審議員、四十四年九月には
 梅檀学園東北福祉大学評議員、四十九年十
 一月より五十三年十一月まで宮城県宗務所
 長を二期務めた。五十一年二月には曹洞宗
 東北管区長を二期務め、五十二年十一月に
 は宮城県宗教学法人連絡協議会会長を二期務
 めている。五十三年三月には宗門護持会副
 会長を、五十四年二月には東北福祉大学理
 事、五十四年三月に全国宗務所長会会長を
 務め、五十六年六月に曹洞宗宗務所出版部長
 五十七年十二月には曹洞宗宗務所出版部長
 などを務めた。六十一年六月には仙台市市
 政功労者の表彰を受け、六十二年十月十四

日に八十歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』、「本葬菜」)

あしはらぎつてい 足羽雪艇

明治二十年(一八六九)―昭和三十年(一九五五)

鳥取県気高郡中興寺二十世、鳥取県八頭郡龍徳寺二十五世、兵庫県氷上郡圓通寺四十三世、神戸市福昌寺八世。号は黙庵。明治二十年二月四日、鳥取県東伯郡上北条村に生まれる。受業師は松井黙霆、本師は福井適水。三十三年(一九〇〇)二月十五日、兵庫県永源寺の松井黙霆について得度し、三十五年二月より三十七年一月まで可睡斎僧堂に安居する。三十七年一月に愛知県の曹洞宗第三学林第一学年に編入し四十一年に卒業した。同年九月には東京の曹洞宗大学に入学し、大正二年(一九一三)七月に卒業した。また、同年九月に京都帝国大学文科哲学部に入学し、四年十一月に退学した。五年十一月から七年十一月まで永平寺に安居し、丘宗潭について『正法眼蔵』を参究した。丘宗潭示寂後は岸沢惟安につい

て『正法眼蔵』を参究している。明治四十三年に名古屋市万松寺の吉川義道について立身し、大正五年三月一日に大阪府長徳寺の福井適水の室に入り嗣法した。翌六年十一月四日には永平寺で瑞世している。昭和八年二月二十三日に鳥取市天徳寺専門僧堂の准師家、十八年二月十七日には神戸市満福寺禅林の師家、十一年四月二十三日には永平寺の眼蔵会講師になり、十五年十月五日には永平寺後堂職に就任した。二十八年六月には再び永平寺眼蔵会講師を依頼され、三十年四月十一日に六十九歳で示寂した。(『足羽雪艇全集』)

あしはらぎしょう 葦原義正

大正二年(一九一三)―昭和四十四年(一九六九)

あしはらぎしょう 葦原義正
大正二年(一九一三)―昭和四十四年(一九六九)
山形市長源寺三十世。号は諦観。大正二年十月二十四日に山形市七日町に生まれる。本師は葦原義道。昭和十一年(一九三六)駒澤大学仏教学科を卒業し永平寺に安居する。宗務院書記、教区长、大遠忌県支部督励委員、山形県第一宗務所長、山形市市会

議員、民生委員、児童委員、少年司法保護司、町選挙管理委員長、町各宗仏教会理事長、慈眼寺日曜学園長などを務めた。昭和四十四年一月十三日に五十五歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』、「傘松」第三一五号)

あしはらぎどう 葦原義道

明治十七年(一八八四)―昭和三十二年(一九五七)

あしはらぎどう 葦原義道
明治十七年(一八八四)―昭和三十二年(一九五七)
山形市長源寺二十九世。号は泰嶽。明治十七年十二月一日に生まれる。本師は葦原道円。明治三十七年(一九〇四)曹洞宗第二学林を卒業し、四十四年(一九一一)に曹洞宗大学を卒業した。同年に長源寺へ住職し、龍源寺兼務、慈眼寺代務を務めた。曹洞宗宗会議員、宗会議長、永平寺顧問を務め、東北地方における宗門の重鎮の一人であった。昭和三十二年十月九日に示寂したが、永平寺より監院位を贈られている。(『曹洞宗現勢要覧』、「傘松」第二五七号)

あしべーけんぜん 芦辺鎌禪

大正三年(一九一四)―平成十年(一九九八)

東京都世田谷区耕雲寺六世、愛知県豊川市安昌寺三世、埼玉県三郷市慈眼寺二十世。

号は立道。幼名を「武」といい、後に「鎌禪」に改名した。大正三年一月十二日に京都市下京区紛川町の芦辺竹二郎の長男に生まれた。受業師は福山白麟、本師は福山界珠。昭和十一年(一九三六)三月に駒澤大学専門部仏教科を卒業し、十一年四月に永平寺に安居した。二十年十一月より豊川稲荷東京別院執事、永平寺布教部長、永平寺門僧堂視學員、布教教化審議会委員、参禅道場師家会副会長、駒澤大学評議員、駒澤大学駒澤会会長、駒澤大学野球部OB会名誉会長などを務めた。四十年より耕雲寺で仏教文化講話会や参禅会を開催している。著書に『煩惱に遊ぶ』『仏壇供養のわかる本』などがあり、機関誌「耕雲」を発刊して布教にあたった。寺域を再度移転して本堂再建、伽藍復興事業に務め、平成十年十

一月二十一日に八十四歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』、「傘松」第六六四号)

あすきーそどう 遊城祖道

天保五年(一八三四)―明治三十二年(二八九九)

大宮市高城寺十五世、大宮市東光院十七世、川越市正光寺。号は覚城。天保五年埼玉県に生まれる。受業師、本師は祖英。明治十九年(一八八六)六月、曹洞宗専門支校学課第五級を卒業する。慶応三年(一八六七)七月に任職以来、寺子屋を開き児童の教育に尽した。明治五年学制が發布された時、六十名ほどの生徒を引継がれたといわれ、翌六年六月一日より本堂を校舎として学校を創設した。それを遊馬学校と称し、校章には寺紋の五七桐を用いた。特に地区社会教育に尽瘁した。明治三十二年五月二十四日に六十八歳で示寂している。

あずまーけんえい 東憲英

明治二十九年(一八九六)―昭和四十年(二九六五)

松江市桐岳寺二十四世、松江市宝林寺十五

世、島根県飯石郡万善寺二十一世、松江市安養寺七世、島根県簸川郡潮音寺。号は覚

雄。明治二十九年一月一日に島根県邑智郡高原村大字高見の東国成の三男に生まれる。本師は慧光泰憲。名古屋市円通寺、島

根県退休寺の陸鉞巖に随侍する。管内布教師、島根県第二宗務所長、松江刑務所教誨

師、方面委員、社会教育委員、民生委員、山陰家庭学院常置評議員などを務めた。昭和

四十年二月十四日に七十歳で示寂した。(『洞門龍象要覧』)

あずまーけんりゅう 東賢隆

明治十年(一八七七)―大正十五年(一九二六)

東京都多摩市高西寺二十一世、東京都多摩郡清光院。号は紹山。明治十年五月十四日に秋田県由利郡下濱村に生まれる。受業師、本師は東賢英。二十三年(一八九〇)四月に清光院の東賢英について得度、二十七年夏に普門院の松戸祖栄について立身、同年八月に東賢英の法を嗣いだ。高等中学

林、日本中学校国学院、学習院高等部に学んだ後、東京帝国大学に入学し、政治法律を学んだ後に哲学科を修了する。この間、

根本通明に随って漢学も研鑽した。三十一年四月、永平寺で転衣し、三十二年一月には清光院に首先任職した。大学を卒業するや支那留学生收容の学校を起して活動したが支那事変のために頓挫した。稀にみる才子と称されたが、大正十五年十月十一日に南洋麻尼刺の南天寺にて病気で示寂した。〔曹洞宗名鑑〕

あずまーこうどう 東耕道

ー 明治二十四年(一八九一)

長崎県北松浦郡東光寺二十三世。号は佛圀。両親の菩提のため、平戸の勝尾岳にあった松浦家菩提寺の臨濟宗普門寺が明治維新の際廢寺となり、その本堂を金二百十円で買受け、明治十年(一八七七)四月に東光寺本堂として移転建立した。明治二十四年二月二十四日に示寂している。

あずまーしゅうこう 東秀孝

ー 明治十六年(一八八三)ー昭和三十八年(一九六三)

長野県南安曇郡の金松寺五世、長野県南安曇郡の正真院五世。号は至道。明治十六年十月二十二日に長野県南安曇郡梓川村に生まれる。受業師は東秀道、本師は東秀山。近藤秀顕や東幹雄、東健三らに参随した。

長野中学校を卒業後、東京外国語学校に入学した。管内布教師、郡仏教会長、保護司などを務める。昭和三十八年(一九六三)十二月一日に示寂した。〔曹洞宗現勢要覧〕

あずまーそしん 東祖心

ー 明治十六年(一八八三)ー昭和四十一年(一九六六)

佐賀県小城郡福田寺徒弟。号は大応。明治十六年八月五日に佐賀県小城郡牛津町の大島家に生まれる。受業師、本師は東大心。宇治市興聖寺の西野石梁に参随した。二十九年(一八八六)八月に福田寺の東大心について得度し、同年冬、長崎県諫早市の天

祐寺松山大定の随意会に入衆し、三十七年夏、興聖寺において立身して、続いて興聖寺僧堂に五年間、大阪市陽松庵僧堂に四年間安居した。中国公主嶺市の仏心寺の初代開山で、日本人や中国人に対する布教活動及び関東軍軍人に対する参禅指導を行った。昭和四十一年十月二十六日に八十四歳で示寂した。〔曹洞宗名鑑〕

道元禪師伝記史料集成（十一上）

吉田道興

【解題】

今回は、本シリーズ（一）において試論的に分類した伝記の内容・形式でいえば、「戯曲伝奇類」に属する異本の四本対照と「和讃類」の五本対照を行う。

前半で取り上げる「戯曲伝奇類」とは、江戸中期（宝永年間）から後期（文化年間）までに成立した撰者不詳の高祖道元禪師（以下「高祖」と略称）の伝記（「仮称」道元禪師行状伝聞記）中の異本四種を指す。すなわち①『永平開山元禪師行状伝聞記』（宝永六年写、静岡県旭伝院蔵の一本）、②『勅賜佛法禪師永平開山道元大和尚行状伝聞記』（享和二年写、東京泉岳寺、小坂機融師蔵）、③『永平開山元禪師行状伝聞記』（文化二年刊、元山梨県興因寺蔵、『曹洞宗全書（以下「曹全書」と略称）』史伝下所収本）、④『永平開山道元禪師行状伝聞記』（江戸末期写、京都盛林寺蔵）を対照する。なお、この他に⑤『外題』日域曹洞高祖伝聞記（享和二年写、静岡県旭伝院蔵の一本）、⑥圖睡快庵（丘宗潭）隨筆『日域曹洞高祖伝聞記』（年月不詳、『新纂禪籍目録』23頁所収。これは題名が⑤と同じであることに留意しておきたい。）が知られ

道元禪師伝記史料集成（十一上）

る。しかし、⑤は現在、原本が現在行方不明であり、⑥はその所在・内容が不明である。従って今回は所収掲載が不可能で除外する。また同種の「戯曲伝奇類」には結城孫三郎等記『越前国永平寺開山記』（元禄二年五月、新版。横山重編『説経正本集』第一所収）がある。しかし、諸般の事情もあり割愛する。ただし、この「道元禪師行状伝聞記」の成立と内容との関連において、後で若干触れることになる。

次に後半で取り上げる「和讃類」五本とは、江戸中期（享保年間）から後期（弘化年間）までに成立した「偈」や「贊（讃）」の比較的短い詩文の刊本五本である。すなわち①面山瑞方撰『永平祖師年譜偈』（享保二年撰、延享元年刊）、②面山撰『永平祖師贊』（享保十七年刊）、③万切道坦撰『高祖禪師和讃』（寛保二年撰、昭和四九刊「続曹全書」）、④玄透即中撰『永平高祖行実紀年略』（天明八年刊）、⑤撰者不詳『永平和讃』（弘化四年刊）である。

一、「道元禪師行状伝聞記」中の異本四種

1、永平開山元禪師行状伝聞記 一冊（写本）

外題―（題箋）ナシ

内題―永平開山元禪師行状傳聞記（同書目録）

永平開山禪師之行状傳聞記卷之上

撰者―不詳

筆写者―（一）宝永六年、赤城 龍源閑虚聲 謹書

（二）宝曆九年、普門 謹拜写之

法量―28・1cm×19・1cm

成立―（一）宝永六年（一七〇九）己丑端午日〔原本「寛永六年」

は干支からみて誤写〕

(二) 宝暦九年(一七五九) 戊卯十月七日(原本「宝歴」の

歴は単純な誤記。干支の「戊卯」は「己卯」の誤り)

所蔵—静岡県焼津市旭伝院「岸沢文庫」

備考—前述のごとく旭伝院「岸沢文庫」には、外題「日域曹洞高祖

傳聞記」(新題「永平開山道元禪師行状伝聞記」、内題「道

元禪師行状伝聞記」、享和二年(一八〇二) 毒海慧舟(三重

県福聚山海禪寺十三世) 筆の写本を所蔵し、駒澤大学図書館

(駒図一四・四—W一五七。(MN) F一〇—一五) には、

複写本とマイクロフィルムを所蔵する。なお享和二年は「高

祖正当五百五十年遠諱」に相当する。

2、勅賜佛法禪師永平開山道元大和尚行状伝聞記 一冊(写本)

外題—勅賜佛法禪師永平開山道元大和尚行状伝聞記

内題—勅賜佛法禪師永平開山道元大和尚之行状伝聞記

撰者—不詳

筆写者—南海之散人 胡乱齋

法量—26・1 cm×19・3 cm

成立—享和二年(一八〇二) 夏安居日於布施氏草庵書写(冒頭「序文」

所蔵—東京都港区泉岳寺、小坂機融師蔵

備考—本書は、小生が内地研修中の平成三年度、小坂先生のご厚意

で複写本をご提供頂いたものである。享和二年は前述のごと

く「高祖正当五百五十年遠諱」。

3、永平開山元禪師行状伝聞記 一冊(刊本)

外題—永平開山元禪師行状伝聞記

内題—永平開山元禪師行状伝聞記

撰者—不詳

成立—文化二(一八〇五) 乙丑歳夷則吉辰 萬松山宗泉院主宰

所蔵—元は、山梨県(現、甲府市下積翠寺町) 興因寺蔵書

備考—本書は、当初「曹全書」史伝下(昭和十三年一月初刊) に所

収された原本(底本)である。ところが、その後、昭和四十

七年一月二十日付けの「翻刻凡例」には「当初の」『史傳

下』の翻刻に際し原本との校合を行ったが、次の収録本(再

刊)は校合用底本を探りえず、未校合のまま翻刻した」と記

している。

4、永平開山道元禪師行状伝聞記 一冊(写本)

外題—(題箋) ナシ

内題—永平開山道元禪師行状伝聞記

撰者—不詳

筆写者—不詳

法量—27・5 cm×20・4 cm

成立—不詳(江戸末期)

所蔵—京都宮津市宇喜多 盛林寺蔵

備考—本書は『曹洞宗文化財調査目録解題集5 近畿管区編』中の

盛林寺所蔵本。許可番号06—1。平成十八年五月二十六日

付)。

1、永平開山元禪師行状伝聞記 一冊(写本)

まず序説として本書より前に元禄二年(一六八九) 五月に刊行されて

いた結城孫三郎等記（説経本、庶民芸能の一）「説経節」、『越前国永平寺開山記』のあらすじを述べておきたい。当該書は、高祖の父を「中納言

道忠」、高祖の幼名を「神道丸」、実母の死後、継母（金道卿の姫君）は連れ子「金若丸」可愛さから、家臣木下将監行正に命じ「神道丸」を亡きものにしよとすが、「金若丸」はそれを知り身代わりになって殺される。行正はそれを知り自害する。行正の子「梅王」は父の首を持ち、「神道丸」と共に比叡山に逃れる。このように当該書に「御家騒動」的な話も含む。一方、継母は益々「業」が募っていく。「金若丸」の妹（神道丸の義妹）は「松よ」と称し、義父「道忠」より系図（御守り）を与えられる。「道忠」の没後、神道丸と梅王の二人は出家し、「道元」と「道正」と各々改名し修行することになる。その後、入唐（宋）し、「彈虎拄杖」「血脈授与」等の逸話、さらに龍女より道正へ妙薬「神仙解毒万病圓」を授け、帰朝後、宇治の地に「光照寺」を建立する話等が所載する。帰朝後、大原の奥に住む落ちぶれた貧女母娘が住み、母が病に罹っていた。道正が「神仙解毒万病圓」を授け一命を取りとめ、庵に連れ帰る。二人は高祖より授戒する。その際、娘より布施の代わりとして出された系図から義妹の「松よ」と分かり、涙の「兄妹再会」の話となる。まことに荒唐無稽な筋書である。高祖に随伴したと伝えられる「道正」は浄瑠璃風に脚色され、史実とは異なるが、道正庵側の説く元祖像に近い。

当該書の出版年が本書（宝永六年写）の二十年前という点や本書と相似する登場人物名から類推して、恐らく道正庵から浄瑠璃作家の太夫結城孫三郎へ「説経節」の台本を創作依頼し、庶民への布教と仙薬の普及を狙ったものと思われるが、それを裏付ける資料はない。推定するに道正庵側の思惑（願望）を担って結城側の出版という側面が強い。

本論である本書『永平開山元禪師行状伝聞記』の「奥書」には次のように記されている。

寛永六年己丑五月端午日 赤城龍源閑虚聲 謹書

又寶歴九戊卯年十月七日 普門 謹拜写之

「寛永」は干支の上から「寶永」の誤写、「寶歴」は「寶曆」の誤記であるが、宝永六年（一七〇九）と宝曆九年（一七五九）の二度にわたり書写されてきたことが知られる。この「奥書」によれば、はじめ赤城（群馬県）勢多郡の龍源寺僧「閑虚聲」が書写し、次に半世紀後、「普門」が再写したことが判る。その後、どのような経路をたどったのか不明ながら、岸沢惟安老師の永年にわたる探索とその外護者門脇聴心（章太郎）居士の援助により、旭伝院に所蔵されるに至ったものである。本書は、後述するように前掲書と共に道正庵と永平寺との関係を探る上で貴重な資料となる古文書であるといえる。

本書は、奥書の年記より昭和五十三年、曹洞宗全書刊行会で蒐集した旭伝院「岸沢文庫」所蔵の享和二年（一八〇二）・毒海慧舟筆写『（外題）日域曹洞高祖傳聞記（内題）「永平開山元禪師行状伝聞記」』から数えて九十三年ないし四十三年ほど古いものである。本書の撰者と成立年代は不明ながら、その年記「宝永六年」より元禄十五年（一七〇二）の「高祖正当四百五十年遠諱」を期した記念文化事業として宗門内外の有力者により企画・制作され、次いで書写されたものと思われる。但し、本書が実際に刊行されたかどうか、それを証明する資料がなく全く不明である。後掲の文化二年刊本に付す「目録」と同種のもが本書にもあるので、その点から刊行の可能性も考慮できる。

次に本書のあらすじを述べておく。

本書には、「花見の宴」など内容の一部に鎌倉時代ではなく江戸時代

当時の武家・町人の文化を反映した「世話物」風の情景描写を含み、淨瑠璃や歌舞伎の戯曲的脚色が施されている。高祖が入宋する前後に父（通親）の采配により文武両道の猛者「木下将監高充」が高祖の「ヲモト（御許）人」として配される。高充は、入宋前後、悪人・悪僧たちが現れるたびに縦横無尽の働きで彼らを蹴散らし退治する。中でも入宋直後、怪しげな「黒島」で高祖が五体不如意で難儀中、翁（岩清水神）が現れ「神仙」解毒円を授けられ服薬し回復、同時に処方書一卷も授けられるところがポイントである。「この下りの描写は前掲の『越前永平寺開山記』とは大いに異なる。」帰朝後、高充は高祖より「優婆（塞）戒」を受け、名を「道正」と号し、草庵を「道正庵」と称し、「解毒円」の処法も授けられ、それを販売し繁盛した旨を記している。いわば「高充（後の木下道正）」が、この物語の重要人物として描かれていると評してよからう。なお、本書では高祖は幼名を「神童丸」、舎弟（別腹の弟）を「兼若丸」と称し、後日、成人し家督相続する。前掲書では高祖を「神道丸」、舎弟を「金若丸」と称し、若くして殺される。

また、高祖の両親である父は「源ノ亜相公通親」、母は「執行能圓の御女（むすめ）」とある。これは後述する3「永平開山元禪師行状伝聞記」（刊本・曹全書本）と同じであるが、2「勅賜佛法禪師永平開山道元大和尚行状伝聞記」（写本）と4「永平開山道元禪師行状伝聞記」（写本）では、父を「源ノ亜相公通忠」、母は同じ「執行能圓の御女」としている。つまり、当該書の異本四種には、父親の「通親」と「通忠」説が併存しているのである。また、いずれもその父は入宋前に生存し、入宋中（帰朝前）に没している。

一般の伝記史料では、古くより高祖の父として「育父源亜相」（『永平広録』巻五・巻七）から「村上天皇九代之苗裔、後中書王八世之遺胤」

（『三排行業記』等）を経て「源亜相通忠」、次に「源亜相通親」、そして現在の有力説「堀川大納言通具」と変遷している。次に各伝記に高祖の「父親三説」（①通忠、②通具、③通親）を略号として付し挙げてみよう。

懶禪舜雄撰『日域曹洞列祖行業記』寛文十二年撰、同十三年刊。①通忠

撰者不詳『道元和尚行録』寛文十三年識語、延宝元年刊。①通忠

高泉性激撰『禪林僧宝伝』延宝三年撰、貞享五年刊。①通忠

大了愚門撰『永平佛法道元禪師紀年録』延宝六年刊。①（忠通は誤

記）通忠、②通具「或名家譜」、③通親（元禄二年刊本）

止元師蛮撰『延宝伝灯録』延宝六年撰、宝永三年刊。①通忠

（筆者不明）『延宝本建撕記』延宝八年。①通忠

安州玄貞撰『永平語録標指鈔』元禪師行状記』貞享二年刊。①通忠、②通具「或家伝譜」

版橈晃全撰『僧譜冠字韻類』貞享二年撰、元禄元年刊。③通親

結城孫三郎等記『越前永平寺開山記』元禄二年刊。①通忠

湛元自澄撰『日域洞上諸祖伝』元禄六年撰、同七年刊。③通親

『道元禪師行状伝聞記』（旭伝院蔵。宝永六年閑虚聲写・宝曆九年普門

再写）③通親

面山瑞方撰『永平開山和尚実録』宝永七年。③通親

嶺南秀恕撰『洞上聯灯録』享保十二年序、寛保二年刊。③通親

古谿秀蓮撰『日本洞宗始祖道元禪師伝』享保十五年撰、同十六年刊。

③通親

面山瑞方撰『訂補建撕記』宝曆三年撰、同四年刊。③通親

『日域曹洞高祖伝聞記』（旭伝院蔵。毒海慧舟、享和二年写）①通忠
 『勅賜佛法禪師道元大和尚行状伝聞記』（泉岳寺蔵。胡乱齋、享和二年写）①通忠

『永平開山元禪師行状伝聞記』文化二年刊。③通親

面山瑞方撰『訂補建斯記図会』文化三年刊・文化十四年刊。③通親

『永平開山道元禪師行状伝聞記』（西林寺蔵。筆者不明、幕末写）①通忠

この中「通忠」説の初出は、寛文十二年（一六七二）・懶禪撰『（略称）列祖行業記』を経て、延宝六年（二六七八）・大了撰『（略称）永平紀年録』等に至るとされる。さらに次の「通親」説の初出は、貞享二年（二六八五）・〔永平寺三五代〕版橈晃全撰、元禄元年（一六八八）刊『僧譜冠字韻類』巻八八「宋 道元」所載の「亜相通親之季子、通光之弟、通忠之伯父」である。ちなみに同書では、母を「師之母者基房公之女」としている。

前掲の大了〔永平寺三五代〕撰『永平紀年録』では、初めに「亜相忠通（通忠）の誤記」之子也」とし、続く文に「又或名家譜曰、村上天皇第六王子、具平親王十代内大臣通親之孫、堀川源大納言通具之第三王子。母法性寺執行能圓之女、八條二位殿之女姪也」としているが、『僧譜冠字韻類』の影響を受けてか、大了の没後に門人が編述した元禄二年刊本において「亜相通親」と訂正、そこに二転三転してやや錯綜があるといえる。

この『永平紀年録』の文中「或名家譜」と同じく、また『永平語録標指鈔』にも初め「源亜相通忠」とし、その後「或家傳譜曰」として右と同文の「内大臣通親之孫、堀川源大納言通具之第三王子」があるこ

道元禪師伝記史料集成（十一上）

とに注目しておきたい。その「或名家譜」と「或家傳譜」とは、おそらく「久我家系譜」を指すものと思われる。

ところが宝永七年・面山撰『（略称）永平実録』には、「按久我家譜曰、永平元禪師者、通親之季子、通光之弟、通忠之伯父也」と通親の子とし、同じく文化三年『訂補建斯記図会』の「補注」にも帰するところ内相府「通親」の子とする（後掲）。これは、前掲の『僧譜冠字韻類』の説と同じである。その「久我家系譜」と前掲の「或名家譜」・「或家傳譜」とは別本なのであろうか。久我家に異なる二本の系譜を所持していたのであろうか。それとも『僧譜冠字韻類』が版橈禪師の撰述という「権威」に屈しての記述であらうか。

寛延四年（一七五一）六月、永平寺四三代央元密蔵が道正庵に滞在中、「久我家系譜」を拝覧。その央元が道正庵十九世庵主ト順（既に延宝五年没）の所有していたそれを権中納言久我通名（享保八年卒）に書写させ、時の庵主三三世省順より宝曆三年（一七五三）三月、永平寺へ納入させている（『道正庵備忘集』）。その永平寺所蔵「久我家系譜」の該当箇所を次に掲げる。

〔越前州吉祥山永平禪寺初祖道元大和尚者 村上之皇別而我先内相府源通親公之支子相國通光公之令弟也 世稱俗譜者以爲右幕下通忠 卿通忠公之卿之息或謂亜相具房卿通忠卿二男號愛石之子也 雖不宜強辨 然移於浮辭者已尚矣〕

これは面山が寛保三年に道正庵を訪ね庵主承順より拝覧したものであり、『訂補建斯記』補注（二）とほぼ同じ文章である。これは、前掲の「内大臣通親之孫、堀川源大納言通具之第三王子」（通具説）と全く異なる。面山は補注（二）の後半部で版橈の「亜相通親之季子、通光之弟、通忠之伯父」説と一致したのであるが、果たしてそれが正しかったの

か。それ以後、その「通親説」は版橋と面山の説示により決定的な流れになっていく。

これら「伝記」諸本と同様に当該書の異本四種は、右の諸本の説に影響を受け、書写者が何故か「通具説」を排し、高祖の父を「通親」とか、「通忠」としているものと思われる。

本書の副主人公といえる「木下将監高充」は道正庵元祖木下隆英（一一七一〜一二四八）をモデルに設定されていることにより、その活躍を世の人びとに知らせ、合わせて同庵の特効薬「神仙解毒万病円」の販売を促進する意図が窺える。

ちなみに前掲の道正庵徳幽卜順が寛永六年（一六三九）に撰述した『道正庵元祖伝』には、高祖（当該本では「道玄」）の入宋した際、元祖（道正）も入宋し、ある広野において高祖が身体困羸、魂魄を失いかけた時に白髪のお嫗（稲荷神）が出現し、神仙解毒万病円を与えられ蘇生した旨を述べている。これをそっくり受容しているのが、前掲の版橋晃全撰『僧譜冠字韻類』であり、高祖伝中に道正庵側の資料を使った嚆矢といえる。その後、『越前永平寺開山記』と『道元禪師行状伝聞記』、さらに面山瑞方撰『永平開山和尚実録』等へと引き継がれていくのである。

さて永平寺・總持寺を含む曹洞宗と道正庵との関係が密接になったのは、正確には不明であるが江戸期の初め、幕府の寺院統制の一環として慶長ないし元和・寛永年間頃からと思われる。それは、道正庵が主に曹洞宗の寺院住職に関わる出世・瑞世・転衣等、朝廷の寺社伝奏家である勸修寺家への請奏を取り次ぐ役職をしていたからである。曹洞宗の大本寺（永平寺や総持寺）の住職になるには、まず幕府の許可を得た後、上京し宿坊として道正庵に数日間滞在し、礼式作法を予修し参内の準備をす

るのである。必然的に僧侶は道正庵に種々頼ることになり、必然的に大事にせざるを得なかったわけである。時代は多少下るが、延宝年間の頃、出世・瑞世等に関わらず永平寺僧が上落した際には、宿所を道正庵衆寮とすることが定められていた（洞寿院文書）。

慶長五年（一六〇〇）三月付けの「永平寺門鶴寄進状」と寛永十二年（一六三五）の「木下道正庵衆寮造営帳序」（秀察代）の史料は、道正庵の本屋ならびに衆寮の造営に関するものであり、總持寺とともに曹洞宗の一宗の勸化によって援助したことが記されている。また佛山秀察が寛永十六年（一六三九）三月五日付けの「道正庵掟五条」を発している。道正庵には曹洞宗僧侶が恒常的に安居・滞在している状態であったのである。

道正庵中興とされる十九世庵主法眼徳幽卜順（元禄三年卒）は、寛永十六年（一六三九）七月に『道正庵元祖伝』と『道正庵神仙解毒万病圓記』を撰述・刊行していることが知られる。その徳幽卜順と万治三年（一六六〇）八月に永平寺へ昇住した鉄心御洲（寛文四年没）が後述するように道正庵の政治的役割等から相方の互恵関係が一致し、密接になっていったように推定できるのである。それは、万治四年三月に徳幽卜順が定め作成し、鉄心御洲が認証した「日本曹洞宗永平開山大禪師派流出世之次第附官物之覚」（十三条中の第十二条）は、前掲の寛永十二年「木下道正庵衆寮造営帳序」を追認するものであり、曹洞宗側が道正庵の役割を踏まえ、道正庵の衆寮造営は曹洞宗一宗の勸化によって行うこと、要するに金銭等の保証をするむねの内容条目が入っているのである。

高祖の四百五十年遠諱を準備し始めたのは、三六代融峰本祝（一七〇〇没）であるが、その正当忌直前に遷化し、実際にその正当法要を厳修

したのは三七代石牛天梁である。なお道正庵元祖の四百五十回忌は元禄十一年（一六九八）であった。その際の法要は融峰が大導師となり、古庵主木像の点眼供養を行っている。その状況を道正庵二一世隆守貞順（二七〇〇没）が『道正庵備忘集』に記録し、その後代々受け継がれている。このように高祖と道正庵元祖の遠忌が相前後していることも本書の成立と無関係ではあるまい。

永平寺との関係は特に道正庵十九世徳幽卜順（元禄三年八月卒）から二三世省順の頃までの時代がさかんであったようである。永平寺住持では二十代門鶴（元和元年没）ないし三代佛山秀察（寛永十八年没）、二代鉄心御洲（寛文四年没）以降の歴代住持である。中でも三代大了愚門（貞享四年没）と三五代版曉晃全（一六二三〜九三）は「高祖伝」（『紀年録』・『僧譜冠字韻類』巻八八）を撰述している点が注目される。また既述のごとく四三代密巖史元（宝暦十一年没）は、宝暦三年三月、省順を通し「久我家系譜」（久我通名撰）を永平寺へもたらしている。

これら道正庵と永平寺の密接な関係より、恐らく寛永から元禄年間の頃、徳幽卜順とその周辺にいた人びと、およびその後の庵主たちが自然発生的に元祖の木下降英を顕彰し、あわせて「神仙解毒万病圓」の販路を拡張する一助として『越前国永平寺開山記』と本書の企画出版を画策した可能性が想定できるのである。

参考 永平寺史 第五章「幕府の統制と永平寺」・第三節「江戸期の瑞世」廣瀬良弘

中野東禪「高祖伝における庶民芸能の影響——『越前国永平寺開山記』」（『宗学研究』11）所収

廣瀬良弘「曹洞宗と朝廷——中世から近世にかけての禪師号・紫衣・出世・勅書・繪旨・勅願書」（『曹洞宗人権擁護推進本部紀要』）

第一号」所収。一九九四年三月）

圭室文雄「江戸時代における勅許紫衣・転衣の展開」（同上）

圭室文雄『道正庵文書』について（『傘松』622〜624）

熊谷忠興「大遠忌と道元禪師の伝記（その一）——木下卜順撰『道正庵系譜』」（『傘松』690）

熊谷忠興「大遠忌と道元禪師の伝記（その二）——木下卜順所持の『久我家系譜』」（『傘松』691）

皆川義孝「解説」『道正庵文書』（その12）「永平寺門鶴寄進状」（『傘松』699）

拙稿「版曉晃全撰『僧譜冠字韻類』所載の『道元伝』考」（『印度学佛教学研究紀要』54巻2号）

同右「『永平開山元禪師行状伝聞記』における「伝説・説話」の類型」（『宗学研究』40号）

2、勅賜佛法禪師永平開山道元和尚行状傳聞記 一冊（写本）
まず異本四種中、本書の題名は多少仰々しい感がするのは否めない。

その語句「勅賜佛法禪師」とは、所謂古本「建搦記」（明州本）の後半部「道元禪師縁記」の諱号中に見えるものであり、天台四教五時の名目中に天竺震旦日本佛法興起次第にある一般的敬称で必ずしも特定しているものではない。高祖が曹洞宗の宗名を嫌い、「正伝の佛法」と称した（『正法眼蔵』仏道巻）ことが想起できる。なお比叡山において修行中に「佛法房」（『兵範記』紙背裏打文書。京都東山文庫蔵）と称されていたとも伝える。それが後嵯峨院より高祖の道誉を聞き紫衣と共に禪師号を下賜されたという記事になり、懶禪舜雄撰『日域曹洞宗列祖行業記』（寛文十二年。同十三年刊）や撰者不詳『永平開山道元和尚行録』（延宝元年刊）等に引き継がれていくが、史実としてというよりも崇敬の念か

ら生じた記述といえる。本書の筆者もその念を抱き、冠称として付け加えたものと思われる。それは、大了撰『永平佛法道元禪師紀年録』の命名「佛法道元禪師」にもつながる。

本書では、高祖の名を「希玄」、両親の血筋（家柄）を通し「姓ハ源氏、村上天皇九世之孫、源ノ亜相公通忠ノ御長子、御母ハ執行能圓ノ御女也」とあり、父親を「通忠」としていることは前述したとおりである。次に本書が他の異本と異なる点は、構成の上で第十三項目「十三ニハ勅シテ号并ニ紫衣ヲ賜フ事附時頼寺ヲ建テ師ヲ請スル事并師亡靈ヲ救玉フ事」の部分である。その初めに設定している項目「勅シテ号并ニ紫衣ヲ賜フ事」は、他の異本では末尾に付いている。すなわち、この点からも高祖への崇敬心は、題名の付け方と軌を一にしているといえよう。

序文の末尾に「于時享和二年夏安居日於布施氏草庵書写ノ南海之散人胡乱齊」とある。これにより本書の成立（書写）は、享和二年（一八〇二）である。前述したようにこの年は高祖の没後「五百五十年」の大遠忌の年に該当する。従って筆者は高祖への報恩の念を深めながら真摯に筆写したに相違ない。ところでその筆者は「南海之散人 胡乱齊」と記し、あえて実名ではなく謙譲を込めた仮の名（雅号）にしている。ここで「南海之散人」とは、伊勢・志摩・紀伊半島か、淡路か、四国の阿波・讃岐・土佐か地域は全く不明ながら、そのいずれかの地域を東奔西走していた行脚中の僧と思われる。「散人」の意味は、一般に「役に立たない人」や「文人（風流人）」であるが、ここでは「安居日於布施氏草庵書写」とあるので当然「出世間の人」出家者であろう。

3、永平開山元禪師行状伝聞記 一冊（刊本）

本書は、『曹洞宗全書 史伝下』（昭和十一年初刊・昭和四十七年再

刊）に収集されている刊本を便宜的に用いた。その奥書に「文化二乙丑歳夷則吉辰ノ萬松山宗泉院主宰」とあり、元は山梨県興因寺（現、甲府市下積翠寺町）に所蔵されていたものである。

文化二年（一八〇五）陰曆七月、宗泉院（現、葦崎市円野町上円井）において、当時の住職 某 が主宰して刊行されたものである。その刊本は、再刊版の「覆刻凡例」には『史伝下』の覆刻に際し原本との校合を行ったが、次の収録本は校合用底本を探りえず、未校合のまま復刻した」と記され、その校合のできなかった複数本の中に本書が含まれている。つまり現在のところ、その底本は行方不明になっている。しかし、今後、その刊本が発見される余地を残している。

本書の冒頭には、「永平開山元禪師行状伝聞記目録」が付いていて、「巻之上」に七章、「巻之下」にも七章の章題が並べられている。それは、1の旭伝院藏「永平開山元禪師行状伝聞記」も同様に「目録」があり、この点から同書も刊行された可能性が大いにある。

本書では、これも前述の通り、高祖の名を「希玄」、両親は「姓ハ源氏、村上天皇九世之孫、源ノ亜相公通親ノ御長子、御母ハ執行能圓ノ御女也」とあり、父親を「通親」と記す。

参考 『曹洞宗全書 解題・索引』384頁、竹内道雄師「解題」

4、永平開山道元禪師行状伝聞記 一冊（写本）

本書は『曹洞宗文化財調査目録解題集5 近畿管区編』中の京都盛林寺にその所蔵が記されているものである。それを小生が曹洞宗文化財調査委員会に当該史料の提供を申請すると同時に、所蔵元の盛林寺様の許可を得て、提供頂いた「複写」本を用いた。

本書では、2「勅賜佛法禪師永平開山道元大和尚行状傳聞記」と同じ

く高祖の名を「希玄」、両親の素姓は「姓ハ源氏、村上天皇九世ノ孫、源ノ匝相公通忠ノ御長子、御母ハ執行能円公ノ御女也」とあり、その父親を「通忠」としている。

本書の末尾には、「若州遠敷郡田野村／大光寺去外／荒木三秀 拝主」とある。これは、恐らく本書の元の所持者が署名したものである。「目録解題集」の解説では「荒木三秀筆」としているが、本文の字と奥書の字とは全く異なるので別人と思われる。「若州遠敷郡田野村（現、福井県小浜市遠敷郡田縄）大光寺」は、現存する。地名の「田野村」は江戸期に多縄城たのじょうがあり、後（昭和二十六年）に「口名田村」「中名田村」と「口田縄」が合併し「田野」と改名した。「大光寺去外／荒木三秀」とは、若狭（小浜市）日輪山大光寺山内僧の名・荒木三秀であり、また去外は道号か諱で荒木去外・去外三秀とも称した人物と思われる。なお盛林寺蔵の明治十七年写『無尽蔵』一巻一冊の筆者「盛林寺飯頭寮、明治一七年正月写、荒木天外筆」とは別人と思われるが、よく似た名前であるので何らかの関係があった人物と想定できる。小浜大光寺から京都盛林寺へ移ってきた僧の縁者か。また盛林寺の本寺は、福井県武生市大虫町の瑞洞院である。そうした「地縁」もあり、追及の余地を残す。しかし、ここではその指摘にとどめておきたい。

本書の末尾には、「奥書」・「識語」類もなく、また所持者の書名箇所にも年記がないので、いつ書写したのか不明であるが、体裁や文字の具合から恐らく江戸末期か明治初期のものだと推定できる。

二、「和讃類」の五本

1、永平祖師年譜偈 一巻一冊（刊本）

外題―永平元祖師語録

道元祖師伝記史料集成（十一上）

内題―永平祖師年譜偈
別名―年譜偈（版心・奥題）

永平和尚年譜総頌

撰者―面山瑞方（二六八三〜一七六九）撰

成立―享保二年（一七一七）八月二十八日撰

延享元年（一七四四）刊、京都柳枝軒小川多左衛門、

所蔵―駒図一三一・五一六

備考―同書には元文四年（一七三九）の刊本がある。本書は『永平

元祖師語録』（延享元年刊本）と合綴（駒図一三一・五一

六）。これは『続曹洞宗全書』『史伝』に所収。同じく『永平

家訓（内題「永平家訓綱要」）（延享元年・元文四年刊本）と

も合綴。いずれもその末尾等に付されている。さらに寛政七

年写・江藤昌綱筆『永平祖師年譜吟』（中峯和尚座右銘・永

平仮名法語・明峯和尚法語と合綴。旭伝院岸沢文庫蔵、駒図

一一四・四一W一五五）がある。また写本には明治十七年書

写の宮城県繁昌院所蔵本等がある。

2、永平祖師贊并序 一冊（刊本）

外題（題箋）―永平祖師贊 全

内題―永平祖師贊并序 一冊（刊）

別名―祖師贊（版心）

撰者―面山瑞方「北海若雲濱城空印禪寺老梅室謹」撰

成立―享保十七年（一七三二）壬子八月二十八日、京都具葉書院刊

所蔵―駒図魯一九

備考―後刷本として享保十七年（駒図一一四・四一W九）がある。

また愛知県豊川市西明寺には、冒頭に「高祖贊」(十言四句の二首)、奥書に「嘉永七年甲寅閏七月二十八日／長山隨時之節／釋氏禪透謹書」とある写本を所蔵する。

3、高祖禪師和讃 一冊(刊)

外題―句雙紙

内題―高祖禪師和讃

別名―永平元禪師和讃

撰者―伝、万切道坦撰

成立―寛保二年(一七四二)撰

所蔵―駒図一三三―W九二(群馬県長学寺所蔵、大正十二年再写本)。これが『統曹洞宗全書』「法語・歌頌」に所収された。

備考―関連書には、後掲の弘化四年刊、折本の『永平和讃』(江戸谷中玉林禅寺、現住蘭關秀叟印施)重松辰四郎編、明治四五年刊『承陽大師和讃』(『傘松道詠』と合綴、駒図一一四・九一三八)や百々百箭編(編集兼発行人)、昭和五三年刊『永平祖師和讃』(駒図魯一〇)がある。

4、永平高祖行実紀年略

外題―辨道話

内題―永平高祖行実紀年略

撰者―玄透即中撰

成立―摂州佛眼禅寺空華室中、天明八年(一七八八)正月序刊
所蔵―駒図一三二・二一八(『統曹洞宗全書』史伝所収)

備考―『辨道話』と合綴(駒図一三二・二一八)

序文の「刊刻辨道話縁起」末尾には「昔天明第八歳龍次戊申春王正月／幻寓佛眼玄透即中拝稽首／書於空華室中」とある。また末尾の「識語」には、「天明八年歳次戊申雪安居日摂州熊耳山佛眼禅寺院蔵版／幹事比丘 尊古謹誌」と記す。その後には本書の所持者「英道持持」との筆字署名がある。

5、永平和讃 折本(一冊)

外題―永平和讃

内題―永平和讃

撰者―不詳

成立―弘化四年(一八四七)丁未中春刊、江戸谷中玉林禅寺、現住蘭關秀叟印施

備考―駒図折一六(登録番号 一一三二一三)所蔵―末尾に「釋迦歎偈」を付す。同書の別刷本(小型版)もあり、それには冒頭に椅上に坐す「高祖像」が付いている。しかし、末尾に「釋迦歎偈」がない。
この他には、内容は別であるが、同種のものに以下のものがある。

①『承陽大師和讃』(『傘松道詠集』と合綴)、明治四十五年春、森田悟由贊。

冒頭に「懺悔文」「三帰依文」、以下に「南無承陽大師年譜和讃」の本文十三章が始まり「十方三世一切佛諸尊菩薩摩訶薩摩訶般若波羅密 三拝」で終わる。
その後「傘松道詠集」が付き、末尾に「吉祥講々員心得」(二三条)曹洞宗大本山永平寺とあり、編集発行兼印

刷者の住所と氏名「浜松市鍛冶町九番地 乗松辰四郎」とある。

② 『永平祖師和讃』は、昭和五年三月、編集兼発行人の雅号「百々百箭」編と住所「三重県一志郡八知村三一七八」が記されている。恐らく宗門の僧侶と思われる。内容は、所謂「年譜和讃」である。文章は流麗な和文で綴られている。

印刷人は池田栄次郎（東京市浅草区千束町）、印刷所は櫻や印刷所（同右）。

本書は「非売品」となっているが、有縁者に配られたものであろう。

1、永平祖師年譜偈 一卷一冊（刊本）

本書は『永平元禪師語録』（延享元年刊）や『永平家訓綱要』（同上）と合綴され、その後部についている。また『統曹洞宗全書』『史伝』に所収する。本書（年譜偈）の末尾には、面山瑞方（一六八三〜一七六九）の法嗣である一人、環堂慧中による「識語」があり、次に掲げておく。

「前年、師海東に在りし日、随徒に訓誨し、此の年譜偈を述ぶ。其の後、叢林にて往々展転書写される。今、また但だ烏焉（誤写の恐れ）に非ずや。痛むべし。故に此に附して考讎（考正）を便ぜしむる者なり。侍者慧中謹識」（原漢文）

これによると、面山が享保元年（二七一六）、海東（尾州萬松寺・小牧正眼寺「面山年譜」）に滞在中、随徒（門人）たちに教示して、この「年譜偈」を述べたものであり、後に広く叢林（寺院）で書写され広

道元禪師伝記史料集成（十一上）

まったという。なお本文では、その末尾に「享保二年丁酉八月二十八日／遠孫相州老梅菴沙門面山瑞方謹撰」と認めている。慧中は師面山の作に対し、謙遜して誤写等があるかもしれないので、それを正してほしい旨を述べている。なお「八月二十八日」は高祖の入寂日であり、面山は高祖の冥福を祈ると同時に報恩の念を込め撰述したことが判る。

本書の本文は「七字八四句」の偈に加えて遺偈「五十四年、照第一天、打箇踣跳、觸破大千、咦、渾身無著處、活陷黄泉」を付けている。

題名が似ているが内容は別であると思われるものに面山の法嗣三洲白龍・正徳六年撰『承陽古佛年譜吟』（『新纂禪籍目録』所収、212頁）がある。しかし、その所在が不明であり比較できず、面山の「年譜偈」との内容やその関連も判明しない。

本書の関連書には以下のごとく数種ある。いずれもその注釈書といえよう。

撰者不詳『永平祖師年譜和偈』一卷（岸沢文庫蔵、『禅目』23頁）

機鋒良尖撰、享和元年写・泰嶺筆『永平祖師年譜和偈補注』一卷

（岸沢文庫蔵、駒図（MN）F 〇一—二〇）

智顔白逢撰『永平祖師年譜偈注解（外題「註永平年譜偈」）（明和

二年刊、駒図一一四四—W一九）

智顔白逢撰『永平祖師年譜偈注解訂議』明和五年序刊、駒図〇八四

一一六。『統曹洞宗全書』「注解一」に所収）

黄泉無著撰、文化十三年写『永平祖師年譜鈔』（岸沢文庫蔵）

参考 『曹洞宗全書』 解題・索引 597頁、桜井秀雄師「解題」

2、永平祖師贊并序 一冊（刊本）

本書は『曹全書』には収集されていない。本書の末尾に「于崑／享保

十七壬子八月二十八日／北海若雲濱城空印禪寺老梅室謹撰」とあるように、面山瑞方が享保十七年（一七三二）八月、小浜市空印寺の方丈「老梅室」において撰述したものである。

前半に日本に伝わった禅宗二十四流の中、三家として第一に千光（栄西禪師）、第二に高祖道元禪師、第三に聖一（円爾）禪師を採り上げ、その行状・行録・年譜を元に分析しつつ、高祖の行実を推揚する比較的長い「序」文を置き、高祖への敬慕の念を縷々のべている。その後「五言百句」の偈を列挙している。前掲の「年譜偈」とは多少相違し、時系列的に列挙しているものではない。行実の主要事項を達意的に述べ讃嘆している内容であり、末尾には「達磨あつてより後、誰か此れと鴻なるを比せん。二萬四千の寺、悉く一鉢の中に飯す。謂う事なかれ、鼎足の如しと。その徳、廻として同じからず。云々」（原漢文）とあり、文字通り遠孫の「永平祖師贊」である。

3、高祖禪師和讃

本書は、萬仞道坦撰『句雙紙』に合綴されているものの一つである。なお流布本の俳諧集『句雙紙』とは全く異なる別本である。この『句雙紙』は明和六年（一七六九）撰であるが、所収されている本書「高祖禪師和讃」は、末尾の本文「寛保二年己二至り、四百九十七年ト、流ヲ汲テ河、一派ノ児孫カソウレバ、恒河沙数ニ餘リケル」とある個所から寛保二年（一七四二）の撰述であると伝える。この「高祖禪師和讃」の後には「イボノマジナイ」等が付いていて、萬仞の撰述したものが沢山含まれている。

本書では、高祖の両親を「源氏ノ苗裔通親ノ二男」「母ハ九条ノ関白之基房公之娘」としている。前述した版橈晃全や面山瑞方による説の踏

襲といえよう

その和文は、誠に流麗な美文調であり、声に出し読み上げると心地よい響きを持つている。種々の「逸話」「伝説」も盛り込んでいるが、木下道正の逸話はない。

4、永平高祖行実紀年略

本書は、玄透即中撰『辨道話』（天明八年刊）と合綴し、その後についているものである。これも『統曹洞宗全書』『史伝』に所収。

冒頭に「刊刻辨道話縁起」（序文）があり、末尾に玄透即中の「識語」がある。

皆天明第八歳龍次戊申春王正月

幻寓佛眼玄透即中拜稽首

書於空華室中 角印・角印

原本『辨道話』末尾には、「助縁」記も付いていて多くの寄付者の名が連ねられている。その後の「刊記」には、次のように蔵版と刊行の責任者である弟子復庵遵古の名が記されている。

天明八年歳次戊申夏安居

攝州熊耳山佛眼禪寺蔵版（行書）

幹事比丘遵古謹誌（楷書）

円印・角印

また次頁の一紙の末尾に筆字で「英道拝持」と認めてある。これは本書の所持者である。

本文は、「永平高祖行実紀年略」の題名の後に縦横の野線が引かれ、上部に大きな字で「京兆誕生」から「示現圓寂」までの十五項目が記され、その下部に解説文が述べられている。

『統曹洞宗全書』「史伝」では、それを編集し、項目を本文より二字下げで前に出し、その後には解説文を並べている。また原本では、その本文に「返り点」の他に右横に「送り仮名」も付しているが、「統曹全書」ではその「送り仮名」は外している。

参考 『曹洞宗全書 解題・索引』596頁、桜井秀雄師「解題」

5、永平和讃 折本（一冊）

本書は、その末尾の「刊記」に次のように記されている。

弘化四年丁未仲秋

江戸谷中玉林禅寺

現住蘭關秀叟印施

本書の撰述者は、印施の玉林寺住持蘭關秀叟の可能性もあるが不明である。本書は弘化四年（一八四七）仲秋（陰曆八月）に折本の形で刊行され、広く流布された模様である。流布本の中には、冒頭に録に坐し拂子を右手に持つ高祖像のものがある（三重県東雲寺蔵）。これには「刊記」がない。

本文は、「帰命頂禮元古佛」に始まり、「南無永平元古佛」で終わる。その後に「釋迦歎偈」があり、その後には上掲の「刊記」が付く。また本文は、行書で書かれ、漢字の大部分にはルビ（読み仮名）が施されている。

【凡例】

一、本文対照の掲載は、刊本・写本に限らず基本的に成立順である。なお、『永平開山元禅師行状伝聞記』は文化二年に刊行されているが、他の三本はいずれも写本である。「和讃類」の五本は、いずれも刊本

である。

一、翻刻にあたり、いずれの史料においても原則として原文にしたが、組版上、便宜的に次のようにした。

①本文を対照する上で内容により各段および文節に分け、上蘭外に本文内容の小見出しを付けた。

②史料の原本にある異体字・略字・別体字・俗字類、および誤字は、原則として活字用漢字（常用漢字）に統一した。但し、原文の旧漢字はできるだけ残した。

「道元禅師行状伝聞記」は、文化二年の刊本を除き他の三本は「写本」であるので、多くの異体字類がある。また「和讃類」五本はすべて刊本であるが、その中の「高祖禅師和讃」の原本である「再写本」（大正十二年筆、駒込所蔵）の複写を入手した。

「曹全書」所収の分は、それを活字にしているが、ここでは敢えてそこに含まれる異体字をわずかの数であるが後方に挙げておく。

〔例一〕「永平開山元禅師行状伝聞記」（旭伝院蔵本）

亶（事）、若（若）、將監（將監）、惡（惡）、遁（遁）、獻山（獻山）、尋（尋）、法師（法師）、蒙（蒙）、旅（旅）、值（值）、臙・臙（臙）、惡僮（惡黨）、每（無）、以末（以来）、難（難）、故（故）、生死（生死）、怨（怨）、此兒（此兒）、喫（照）、奇異（奇異）、畏（畏）、難（歎）、凡（凡）、丸（丸）、稱（稱）、添（添）、樹（樹）、仰（仰）、隨（隨）、寵（寵）、自然（自然）、庶（庶）、稱（稱）、嘆、永（永）、御（御）、路（路）、踴（踴）、咷（咷）、氣（氣）、然（然）、喪處（喪處）、宋（叙）、靈・靈（靈）、供養（供養）、思（恩）、禱（禱）、幼（幼）、傷（傷）、勅宣（勅宣）、禅閣（禅閣）、

辱(書)、命(命)、貴賤(貴賤)、虧(虧)、內訌(內談)、密(密)、衰(衰)、別腸(別腹)、減少(減少)、棧嫌(機嫌)、亘(亘)、美(承)、效(敬)、顛(貌)、慈恩(慈恩)、競(競)、美(美)、種(種)、籠(籠)、珍菓(珍菓)、宴(宴)、歌舞(歌舞)、短冊(短冊)、堂(堂)、賴(賴)、再(再)、恣(戀)、羅(羅)、晷(晷)、降(降)、貪(貪)、穿(穿)、脇(脇)、禍(禍)、死(死)、蝸牛(蝸牛)、紆細(仔細)、臨薨(臨薨)、沉淪(沈淪)、極(極)、負(負)、嘉臚(嘉臚)、廿(廿)、初(初)、僧侶(僧侶)、縮素(縮素)、夙(夙)、歲(歲)、戒檀(戒檀)、聰(聰)、妬(妬)、肝冤(肝冤)、預(預)、經(經)、法器(法器)、壽(壽)、答(答)、圖(圖)、旨(旨)、佟(修)、定坐(定坐)、況(設)凶(聞)、盱(謂(所謂)、垂(垂)、潔(潔)、疑(疑)、決定(決定)、印(印)、蔭涼(蔭涼)、乞(乞)、遊(遊)、頌(頌)、冀(冀)、留(留)、獸(獸)、奏(奏)、麻(麻)、夙(夙)、隱(隱)、臍(臍)、難(難)、儀(儀)、凜(凜)、煎(煎)、菜(菜)、與(與)、呎(呎)、泥涅(泥涅)、边(辺)、寢(寢)、伏法(佛法)、讀(讀)、夏(夏)、梵網(梵網)、奴婢(奴婢)、卒(卒)、輩(輩)、鼻(鼻)、甲冑(甲冑)、奧(奧)、愕(愕)、還(還)、聽(聽)、俟(俟)、左(左)、恭慕(恭慕)、顛倒(顛倒)、倭國(倭國)、叢(叢)、茲(茲)、英(英)、徑山(徑山)、詰(詰)、寺(寺)、扶桑(扶桑)、老鐘(老鐘)、寧(寧)、詔(詔)、疾(疾)、隄(陰)、勤(勤)、鬱(鬱)、觸(觸)、甘美(甘美)、隔(隔)、幽(幽)、減(減)、飛未(飛來)、詔(詔)、寐(寢)、袂(袂)、椋梁(柱梁)、咲(咲)、佩(佩)、鉢囊(鉢囊)、道場(道場)、說法(說法)、灯燭(灯燭)、擎(擎)、法息(法息)、苾滿(苾滿)、頃(頃)、寓居(寓居)、正直

(正直)、方便(方便)、檀越(檀越)、平(聖)、貞(聖)、傘(傘)、澁(澁)、朽(朽)、囊(囊)、禱(禱)、悅(悅)、脫(脫)、蛇(蛇)、羅漢(羅漢)、降臨(降臨)、團扇(團扇)、榔(榔)、勝會(勝會)、彌(號)、雖(雖)、謬(謬)、根枕(根機)、膾炙(膾炙)、寐(寂)、澡浴(澡浴)、遮民(遮民)、輩(輩)、靈隱(靈隱)、契(契)、一滴(一滴)

〔例二〕「勅賜佛法禪師永平開山道元和尚行狀伝聞記」(泉岳寺藏本)

亘(事)、故(故)、直(直)、凡夫(凡夫)、旨(旨)、欲(欲)、衆生(衆生)、若(若)、閉(聞)、師(師)、葉(葉)、易(易)、擎(擎)、寫(寫)、永平(永平)、和尙(和尚)、斧心(斧心)、尋(尋)、庚申(庚申)、奇異(奇異)、畏(畏)、嘆(嘆)、丸(丸)、樹(樹)、將鑑(將鑑)、寵愛(寵愛)、左傳(左傳)、通達(通達)、庶人(庶人)、稱嘆(稱嘆)、兼(承)、取(取)、號咷(號咷)、表處(喪處)、子阜(子阜)、想像(想像)、嗟(嗟)、初世(初世)、難(難)、俱舍(俱舍)、誠(誠)、敵(敵)、叡(叡)、命(命)、盈顧(盈顧)、謀(謀)、五衰(五衰)、別腹(別腹)、華(華)、御只(御只)、鄉達(鄉達)、裝束(裝束)、競(競)、優美(優美)、遊(遊)、幕(幕)、花鬘(花鬘)、御宴(御宴)、舞(歌舞)、寔(實)、千顛(千顛)、再(再)、綉(綉)、疊(疊)、祇(袂)、映(映)、詔(詔)、鬢(鬢)、晷(晷)、降(降)、惡賊(惡賊)、奴等(奴等)、判(判)、眷屬(眷屬)、奪(奪)、與(與)、穩當(穩當)、勢(勢)、詰(詰)、鼎(鼎)、股膝(股膝)、足踏(足踏)、契約(契約)、挖鉢(挖鉢)、無益(無益)、蒙(蒙)、蝸牛(蝸牛)、遂(遂)、臨薨(臨薨)、沉淪(沈淪)、真(真)、愕(愕)、

賢慮（賢慮）、負（員）、積（積）、僕（僕）、戒壇（戒壇）、聰惠（聰惠）、魁（魁）、往復（往復）、文章（文章）、拒（拒）、憤（憤）、謀（謀）、覓（魂）、冥顯（冥顯）、法器（法器）、屬（屬）、答（答）、盡（盡）、滲漏（滲漏）、定坐（定坐）、虛空（虛空）、極（極）、灵應（靈應）、汚（濁）、不潔（不潔）、唐（唐）、旅（旅）、疑滯（疑滯）、公胤（公胤）、融（融）、頤（頤）、惡獸（惡獸）、葦原（葦原）、單刀（單刀）、說（說）、臙月（臙月）、忽然（忽然）、員（負）、煮（煮）、澤邊（澤邊）、蛇尾（蛇尾）、床（鹿）、喚（喚）、遲（遲）、驛（驛）、派（派）、奴婢（奴婢）、拈切（拈切）、頸（頸）、大平（大衆、潛）、奧（奧）、且過（且過）、傷（傷）、本郷（本郷）、還（還）、定坐（定坐）、珍布（珍布）、獨語（獨語）、怨（怨）、慙（慙）、饗應（饗應）、頓倒（頓倒）、歛（歛）、獅子（獅子）、虫（虫）、毀犯（毀犯）、宥（宥）、叢林（叢林）、徑山（徑山）、器（器）、寸陰（寸陰）、雜（雜）、服勒（服勒）、觸（觸）、耳美（甘美）、取困（取困）、貪（貪）、奴婢小婢（奴婢小婢）、駟（駟）、障（障）、忽（忽）、神咒（神咒）、免（免）、香風（香風）、虎（虎）、響虫（響虫）、韋將軍（韋將軍）、閔（閔）、怨敵（怨敵）、豹（狗）、振舞（振舞）、嗅異（嗅異）、鉢囊（鉢囊）、圖（圖）、河尻（河尻）、謹（謹）、幽冥（幽冥）、衷（衰）、神廟（神廟）、烟（烟）、隔（隔）、昼（晝）、天竺（天竺）、號（號）、銀（銀）、奈時（泰時）、写（蜀）、獸蛇蝎（獸蛇蝎）、羅漢（羅漢）、降臨（降臨）、礼謁（礼謁）、輩（輩）、灵骨（靈骨）、虚坐（虚坐）

〔例三〕「永平開山道元禪師行狀伝聞記」（盛林寺蔵本）

永（永）、叟（事）、難（難）、死（死）、若（若）、伏法（佛法）、師（師）、初（初）、兒（兒）、畏（畏）、玉杪（玉樹）、夏（夏）、

將鑑（將鑑）、仰（仰）、寵愛（寵愛）、以（此）、称嘆（称嘆）、有（有）、重（重）、兼（承）、取（取）、紅葉（紅葉）、哀（哀）、掃（掃）、喪處（喪處）、御勤（御勤）、想像（想像）、桑門（桑門）、幼（幼）、愁傷（愁傷）、喪齋（喪齋）、過（過）、深（深）、凡（凡）、取聞（取聞）、勅宣（勅宣）、命（命）、衰（衰）、結（結）、夢（夢）、別腹（別腹）、繼子（繼子）、賺（賺）、亘（亘）、處（處）、賢慮（賢慮）、本懷（本懷）、御只（御貌）、保類（保養）、棧（遊）、競（競）、傷美（優美）、惡（惡）、兼（承）、兩（兩）、口（圓）、劫奪（劫奪）、業（業）、鼎（鼎）、股（脇）、伊美（伊美）、嗚牛（嗚牛）、臨薨（臨薨）、亘（亘）、極（極）、不捫（不捫）、聰（聰）、戒檀（戒檀）、聰（聰）、魁（魁）、文章（文章）、降（降）、覓（魂）、答（答）、旅（旅）、公胤（公胤）、融（融）、頤（頤）、謹（謹）、葦原（葦原）、紆衣（紆衣）、濱（濱）、温類（温貌）、菜（菜）、帆（帆）、澤邊（澤邊）、蛇尾（蛇尾）、線（纒）、繇（繇）、躡（躡）、無道、妻（愛）、嗟（嗟）、含（含）、還（還）、圍（圍）、躡（躡）、慙（慙）、顛倒（顛倒）、欽（歛）、風相（風相）、輩（輩）、徑山（徑山）、叢社（叢社）、寸陰（寸陰）、服勒（服勒）、耳美（甘美）、小婢（小婢）、歸投（歸投）、深思（深思）、聚促織（聚促織）、韋將軍（韋將軍）、衆生（衆生）、穩（隱）、觀（觀）、鬱憤（鬱憤）、勅制（勅制）、聰（聰）、逐（逐）、道場（道場）、滿（滿）、壽永（壽永）、傘松（傘松）、結構（結構）、與（與）、烟（烟）、神廟（神廟）、隔（隔）、昼（晝）、鉢囊（鉢囊）、緇（緇）、禱（禱）、亡灵（亡靈）、傷（傷）、猿鶴（猿鶴）、膾炙（膾炙）、輩（輩）

〔例四〕「高祖禪師和讃」

凡（凡）、市匠（師匠）、予（弔）、建福（建福）、迂化（迂化）、叟

(事)、帆(帆)、兼陽(承陽)、數(數)

一、漢字は、原本を忠実に翻刻したいとの願いで、旧漢字と新漢字が混在するままにした。

一、固有名詞の人名については、これもできるだけ原本通りにした。

一、句読点については、読解に便利なようにすべて統一につけた。

一、返り点は、それぞれの原本のままにしたが、一部補ったり、修正した箇所もある。

一、送り仮名もそれぞれの原本のままに保つように努めた。

一、文中の仮名文字中、二字合体の仮名用字は必ずしも活字用正字に改めなかった。

「(コト)、氏(トモ)、ノ(シテ)、伝(ト云)、へ(ナリ)

なお写本の筆者の中には、「メ」の字を読めず「メ」と記している者もいるが、この扱いは難しく一律に「ママ」としたり、あえてその誤写を直している箇所もある。

【注記】

「道元禪師行状伝聞記」の第七話に太白(天童)山へ上る際、「山賤(やまがつ・やましづ)・樵」に出会い、その案内で景德寺へ到ることができたと記される。実はその「山賤」は太白星の使いであり、天童山の開山義興にまつわる逸話に由来する。しかし、日本の中世ないし近世で用いられる「山賤」は、「山窩」と同様、山間に住む獵師や樵を指し、差別語である。ここではそれに留意しつつ、歴史資料として用いたことをお断りしておきたい。

【前回の訂正】

通し番号10頁の上段にある見出し語「此巻を護持遵守すべき事」と一段目「元古佛縁記」の文章を9頁の方に移動する。通し番号22頁の上段にある見出し語「道元禪師の数多い諱号」を23頁に移動する。

【今回の御礼】

当該書に史料をご提供頂いた静岡旭伝院(青木浄翁師)、東京泉岳寺(小坂機融師)、京都宮津市盛林寺院(井笹良昭師)・曹洞宗文化財調査委員会に甚深なる感謝の意を表します。

『永平開山元禪師行状伝聞記』・『永平祖師年譜傷』・『永平高祖行実紀年略』の三冊は、『曹洞宗全書』『続曹洞宗全書』に所収されているものである。また『永平祖師贊并序』『永平和讃(折本)』の二冊は、駒澤大学図書館の所蔵書である。合わせて感謝申し上げます。また元学生の河合功一さんには、一部写本の異体字抜き出しと対照表作成の協力を頂き、厚くお礼を申し上げます。

外題（撰者）

内題（成立・刊写）

序文

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>寶永六年五月 閑虛聲・ 宝曆九年十月 普門</p> <p>⑤</p>	<p>勅賜佛法禪師 永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>勅賜佛法禪師 永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>享和二年夏安居日 南海之散人胡乱齊筆</p> <p>⑤</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p> <p>文化二年 萬松崇泉院主宰刊</p> <p>⑩</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p> <p>⑤</p>
<p></p>	<p>夫レ不立文字教外別傳トハ、我宗、 語句ニシテ佛心宗ノ方便説ナリ。 上根上智ノ者ハ、文字ノ文字ニア ラザル事ヲ知故ニ悟リ、中下根ノ 者ハ、迷悟ヲモ超越ス故ニ直指 人身見性成佛ナリ。迷悟ニ依ルカ 故ニ凡夫ナリ。不立文字旨開示セ ント欲シテ、佛ト説キ衆生ト説 キ、菩提ト説キ煩惱ト説キ、迷ト 説キ悟ト説キ、極樂ト説イテ、引 導シ成佛セシメ玉フ。若シ然ラズ ンバ、暗キヨリ暗キニ入テ佛法ノ 名字ヲダモ聞ザラン。</p> <p>茲ニ釋尊ヨリ五十一代曹洞元祖佛 法禪師、獨リ入宋ノ佛心宗ヲ傳テ、 此ノ方ヲ救イ玉フ事、誠ニ我等ガ 幸イナリ。</p> <p>今五百五十年ニナンナントシテ門 下已ニ二万五千餘院、其ノ枝葉ヲ</p>	<p></p>	<p></p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	
<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>榮ルモ根ヲ尋ルニ、禪師ノ厚恩ニアラズヤ。然ルニ我宗ノ道俗、其流ヲクンデ源ヲ知ラザル者多シ。嗟、喰ヘハ其味ヲ知ラザルガ如シ。ユエイカントナレバ、世ニ禪師行狀有リト云ヘハ、或文章或偈頌故ニ、一文不知ノ童蒙ニヨイテハ讀スル事アタハズ。此ニ行狀記二卷草書ニ似テ、文体イヤシクモ知リ易ク解シヤスキヲ以テ、童蒙ノ為ニ書寫シテ世ニフ。傳フ。若一度モヨミスル者、禪師ノ道德奇跡ヲ信スル則ニハ、面下元祖ノ教化ニ預ルト何ゾコトナラン。願ラクハ、流ニサカ上テ不立文字ノ旨ヲ得セシメン事ヲ。然ルトキンハ、觀ニ 彼久遠ニ猶如今日ニ末世ニシテ末世ニアラズ。心佛及衆生是三無差別ニナラン。實ニ我宗門ノ兒孫トモ釈氏トモ云ベキナリ。若然ラズンバ、文字ノ文字ナルマ、ニ、上佛祖ヲ慕フテ香花ヲ擎 供養シテ、報恩謝徳一分ヲ奉ルヘシ。是レ入法界ノ結縁ナラン。猶上四恩ニ報シ、下モ三有ヲ</p>
<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	
<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>	

目錄

<p>永平開山元禪師之行狀傳聞記目錄</p> <p>一 御誕生事附發心給事</p> <p>二 若君愁傷給事附將監慰奉事</p> <p>三 若君花見事附高充惡賊退治事</p> <p>四 若君夜半遁叡山附高充尋出申事</p> <p>五 蓮常法師神罰蒙事附三輪示現事</p> <p>六 師渡唐之事附旅行解毒圓之事</p> <p>七 師太白星值玉事附戒臘公事</p> <p>八 惡僧共神天之罰蒙事</p> <p>九 師臘質了如淨依事並亡靈救玉事</p> <p>十 虎齒痕之拄杖事並皈朝之路惡儻值玉事</p>	
	<p>救フノミ。</p> <p>于時享和二年夏安居日於布施氏草庵書寫</p> <p>南海之散人胡乱齋</p>
<p>永平開山元禪師行狀傳聞記目錄</p> <p>卷之上</p> <p>一 御誕生事付發心シ給フ事</p> <p>二 若君愁傷シ玉フ事付將監慰奉ル事</p> <p>三 若君花見付高充惡賊退治之事</p> <p>四 若君夜半遁叡山付高充尋出シ申ス事</p> <p>五 蓮常法師神罰蒙ル事付三輪示現之事</p> <p>六 師渡唐之事付旅行解毒圓之事</p> <p>七 師太白星ニ值玉フ事付戒臘公事ノ事</p> <p>卷之下</p> <p>八 惡僧共神天ノ罰ヲ蒙ル事</p> <p>九 師臘ヲ質シ了テ如淨ニ依ル事并亡靈ヲ救玉フ事</p> <p>十 虎齒痕之拄杖之事并歸朝之路惡儻ニ逢玉フ事</p>	

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>十一 龍天善神並一葉觀音現玉事 御父母生天事</p> <p>十二 師住弘之事並白山詣事</p> <p>十三 時頼師請寺建事附師亡靈救並勅受玉事</p> <p>十四 師疾由入洛之事附遷化示寂之事</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p> <p>十一 龍天善神并一葉觀音現玉事 玉事附師御父母生天之事</p> <p>十二 師住持弘法之事并白山詣之事</p> <p>十三 時頼師ヲ請シ寺ヲ建ル事 附師亡靈救并勅ヲ受玉事</p> <p>十四 師病ニ由テ入洛之事 附遷化示滅之事</p> <p>目錄終</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>永平開山禪師之行狀傳聞記卷之上</p> <p>一、御誕生之事附発心給事</p> <p>夫倩^{ソレツラク} 三界人物ノ有様ヲ觀スルニ、無始ヨリ以來愛欲ノ海ニ溺レ易ク、邪見ノ山ヲ出難シ。故ニ生死流轉ノイマワシキ六趣四生ノ怨ミ有リ。佛祖ノ出世ニ値ズンバ、誰カ解脱ヲ得ルナラン。</p>	<p>一ニハ御誕生之事附発心シ玉フ事</p> <p>夫倩^{ソレツラク} 三界人物ノ有様ヲ觀ズルニ、無始ヨリ以來愛欲ノ海ニ溺レ易ク、邪見ノ山マ出テ難シ。故ニ生死流轉ノイマハシキ六趣四生ノ怨アリ。若シ佛祖ノ出世ニ値ハズンバ、誰カ解脱ヲ得ルナラン。</p>	<p>一 御誕生事付發心シ給フ事</p> <p>夫倩^{ソレツラク} 三界人物ノ有様ヲ觀ズルニ、無始ヨリ以來愛欲ノ海ニ溺レ易ク、邪見ノ山ヲ出難シ。故ニ生死流轉ノイマワシキ六趣四生ノ怨有。佛祖ノ出世ニ値ズンバ、誰カ解脱ヲ得ルナラン。</p>	<p>發心シ給フ事付御誕生ノ事</p> <p>夫ツラク 三界人物ノ有様ヲ觀スルニ、無始ヨリ以來愛欲ノ海ニ溺レ易ク、邪見ノ山出難シ。故ニ生死流轉ノイマハシキ六趣四生ノウラミアリ。若シ佛祖ノ出世ニ値ズンバ、誰カ解脱ヲ得ルナラン。</p>
<p>家系・両親</p> <p>爰ニ我朝洞宗ノ元祖佛法禪師ノ遺跡ヲ尋奉ルニ、師初ノ御名ヲ希玄ト云。姓ハ源氏村上天王ノ九世ノ</p>	<p>爰ニ我朝禪曹洞宗ノ元祖ノ遺跡ヲ尋奉ルニ、師初ノ御名ヲ希玄ト曰。姓ハ源氏、村上天皇九世ノ孫、</p>	<p>爰ニ我朝洞宗ノ元祖佛法禪師之遺跡ヲ尋奉ニ、師初ノ御名ヲ希玄ト云フ。姓ハ源氏、村上天皇九世之</p>	<p>爰ニ我朝洞家ノ元、祖佛法禪師ノ遺跡ヲ尋子奉ルニ、師初ノ御名ヲ希玄ト云。姓ハ源氏村上天皇九世</p>

御元人木下高
充

<p>孫、源ノ亞相公通親ノ御長子。御母ハ執行能圓ノ御女也。正治二年庚申正月二日ヲ以テ御誕生有リ。御胎内ニ在マス事十三月也。</p>	<p>天告の神異 御母懐妊シ玉フ時、虚空ニ声アリ。告テ曰ク、此兒ハ五百年來ノ聖人也。法ノ為ニ托胎スト。然メ誕生シ玉フ時、清白ノ光御室ヲ照シ、異香薫ジケレバ、通親ヲ始侍從ノ人々奇異ノ思ヲナシケリ。</p>	<p>祖師の言 時ニ通親相人ヲ召テ、此若ニ名ヲ考エト有レバ、相人畏リ、侍若君ノ御容ヲ見奉テ歎ノ云、若君ノ御姿秀異ニノ凡ナラズ。御眼ニ重瞳有リ。實ニ神人ニテマシマストテ、神童丸ト稱シ奉ル。御父母由ヲ聞召、御悅限リ無キ際、乳母御守リ数添テ、芝蘭玉樹ノ御メクミ浅カラヌコソ道リナリ。</p>	<p>愛ニ木下將監高充トテ、生年二十ニ足ザリシカ、智仁勇ノ徳備リ、文武二道ノ好士ナリ。通親是ヲ召</p>
<p>源ノ亞相公通忠ノ御長子ナリ。御母ハ執行能圓ノ御女ナリ。師ハ正治二年庚申正月二日ヲ以テ御誕生、胎内ニ在 事十三月ナリ。</p>	<p>御母懐妊シ玉フ時キ、空ニ声アリ。告テ曰ク、此ノ兒ハ五百年來ノ聖人也。法ノ為ニ托胎スト。然メ誕生シ玉フ時キ、清白ノ光リ室ヲ照シ、異香薫シテケレバ、通忠ヲ始メ、侍從ノ人々、皆奇異ノ思ヲナシケル。</p>	<p>時ニ通忠相師ヲ召シ、此ノ若ニ名ヲ考エト有リケレバ、相師畏リ、侍若君ノ御容ヲ見上リ嘆曰ク、此君ノ御姿秀異ニシテ凡ナラズ。御眼ニ重瞳アリ。實ニ神人ニテマシマストテ、神童丸ト稱シ奉ル。御父母由ヲ聞食、御悅限無キ際、乳母御守ノカズソエテ芝蘭玉樹ノ御惠、浅カラズ社見エニケル。</p>	<p>愛ニ木下將監高充トテ生年二十ニタラザリシガ、智仁勇ノ徳ヲソナエ、文武二道ノ好士ナリ。通忠</p>
<p>孫、源ノ亞相公通親ノ御長子。御母ハ執行能圓ノ御女也。正治二年庚申正月二日ヲ以テ御誕生、御胎内ニマシマス事十三月也。</p>	<p>御母懐妊シ玉フ時、空ニ聲在リ。告テ曰、此兒ハ五百年來ノ聖人也。法ノ爲ニ托胎スト。然シテ誕生シ玉フ時、清白ノ光リ御室ヲ照シ、異香薫ジケレバ、通親ヲ始侍從ノ人々、奇異ノ思ヲナシテケリ。</p>	<p>時ニ通親相人ヲ召テ、此若ニ名ヲ考エト有リケレバ、相人畏リ、侍若君ノ御容ヲ見上リ嘆ジテ曰、此君ノ御姿秀異ニシテ、凡ナラズ、御眼ニ重瞳有リ。實ニ神人ニテマシマストテ、神童丸ト稱シ奉ル。御父母由ヲ聞召、御悅限リ無キ儘、乳母御守ノ數添テ、芝蘭玉樹ノ御メグミ浅カラヌ社理リナリ。</p>	<p>愛ニ木下將監高充トテ、生年二十ニ足ラザリシガ、智仁勇ノ徳備リ、文武二道ノ好士ナリ。通親是</p>
<p>ノ孫、源ノ亞相公通忠ノ御長子。御母ハ執行能圓ノ御女也。師ハ正治二年庚申正月二日ヲ以テ御誕生、胎内ニマシマス事スデニ三月。</p>	<p>御母御懐妊シ玉フ時、空ニ声アリ。告テ曰、此兒ハ五百年來ノ聖人ナリ。法ノ爲ニ托胎スト。然メ誕生シ玉フ。時清白ノ光室ヲ照シ異香薫ジケレバ、通忠公ヲ始メ、侍從ノ人々、奇異ノ思ヲナシテケリ。</p>	<p>時ニ通忠相人ヲ召レ、此ノ若ニ名ヲ考ヘヨト有リケレバ、相人畏リ、侍若君ノ御容ヲ見上リ嘆ノ曰、此ノ君ノ御姿秀異ニノ凡ナラズ。御眼ニ重瞳アリ。實ニ神人ニテマシマストテ、神童丸ト稱シ奉ル。御父母由ヲ聞食、御悅カギリナキ際、乳母御守ノ數ソヘテ、芝蘭玉樹ノ御メグミ浅カラヌ社理ナリ。</p>	<p>愛ニ木下將監高充トテ、生年二十ニ足ザリシガ、智仁勇ノ徳兼ソナワリ、文武二道ノ好士ナリ。通忠</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>出シ、若君ノヲモト人ニ附玉フ。 高充仰ニ隨テ、晝夜守護ヲ怠ラズ寵愛シ奉ル。</p>	<p>是ヲ召シ出シ、若君ノ御元人ニ付玉フ。高充仰ニ從テ、晝夜守護怠ラズ寵愛奉ル。</p>	<p>ヲ召出シ、若君ノオトモ人ニ附ケ玉フ。高充仰ニ隨テ、晝夜守護怠ラズ寵愛奉ル。</p>	<p>是ヲ召出シ、若君ノヲモト人ニ附玉フ。高充仰ニ從イ、晝夜守護ヲ怠ラズ寵愛奉ル。</p>
<p>カクテ若君四歳ニシテ、李巨山ガ百詠ノ詩ヲ讀ミ、七歳ニシテ毛詩左傳ヲ讀ミ、是ヨリ一切ノ文字、師ノ訓ニ不依ノ、自然ニ通達シ玉エリ。仍テ其名四方ニ響キ、上王公大臣ヨリ、下庶人ニ至ル迄、誠ニヤ名ニシアフ神童丸ノ生智トテ、稱嘆セザル方モ無シ。</p>	<p>カクテ若君四歳ニシテ、李巨ガ百詠ノ詩ヲ讀ミ、七歳ニシテ毛詩左傳ヲ讀ミ、此ヨリ一切ノ文字、師ノ訓ニ由ラズシテ、自然ニ通達シ玉ヘリ。仍テ其ノ名四方ニ響キ、上王公大臣ヨリ、下庶人ニ至ルマテ、誠ニヤ名ニシヲウ神童丸ノ生智トテ、稱讚セザル方ハナシ。</p>	<p>カクテ若君四歳ニシテ、李巨山ガ百詠ノ詩ヲ讀ミ、七歳ニシテ毛詩左傳ヲ讀ミ、此ヨリ一切ノ文字言句、師ノ訓ニ由スノ、自然ニ通達シ玉ヘリ。依テ其名四方ニ響キ、上ハ王公大臣ヨリ、下庶人ニ至ル迄、誠ニヤ名ニシヲウ神童丸ノ生智トテ、稱嘆セザル方モナシ。</p>	<p>然ノ神童丸八歳ニ成リ玉フ頃ハ、建永元年丙寅九月三日ノ事ナルニ、母上ノ不豫ノ重クシテ殆ク見エサセ給ハ、神童本ヨリ至孝ニシテ臆病ノ至レルヲ、恒ノ之發姐ノ有様ナリ。母人重キ枕ヲ揚玉イ、如何ニ神童ウチ玉ハレ、露ニ宿假ル有為ノ身ハ、誰モ繫ガヌ玉ノ緒ノ絶タル迹ノ孝行ニハ、御身凡夫ノ人ナラズ。生智不思議ノ人ナレバ、過ニ出家シテ母ガ菩提ノヨサ。寢タノシキワ桑門實ニタウ</p>
<p>○建永元年 悲母逝去 御遺言</p>	<p>然ノ神童丸八歳ニ成リ玉フ頃ハ、建永元年丙寅九月三日ノ事ナルニ、母上ノ不豫ノ重クシテ殆ク見エサセ給ハ、神童本ヨリ至孝ニシテ臆病ノ至レルヲ、恒ノ之發姐ノ有様ナリ。母人重キ枕ヲ揚玉イ、如何ニ神童ウチ玉ハレ、露ニ宿假ル有為ノ身ハ、誰モ繫ガヌ玉ノ緒ノ絶タル迹ノ孝行ニハ、御身凡夫ノ人ナラズ。生智不思議ノ人ナレバ、過ニ出家シテ母ガ菩提ノヨサ。寢タノシキワ桑門實ニタウ</p>	<p>然テ神童丸八歳ニ成玉フ頃ハ、建永元年丙寅九月三日ノ事ナルニ、母上不豫ノ重シテ危ク見エサセ給エバ、神童本來至孝ニシテ臆病ノ至レル事、恒之發姐ノ有様也。母上重キ枕ヲ揚ゲノ玉ヒケルハ、如何ニ神童ウケ玉ハレ、露ニ宿假ル有為ノ身ハ、誰モ繫ガヌ玉ノ緒ノ絶タル迹ノ孝事ニハ、御身凡夫ノ人ナラズ。生智不思議ノ人ナレバ、過ニ出家シテ母ガ菩提ノヨサシナレ。取タノシキハ、桑門</p>	<p>然ノ神童丸八歳ニ成リ玉フ頃ハ、建永元年丙寅ノ九月三日ノ事ナルニ、母上不豫ノ重病殆ク見ヘザセ給ヘバ、神童君本來至孝ニテ臆病ノ至レルヲ、恒之發姐ノ有様ナリ。母上重キ枕ヲアゲノ玉フヨフ、如何ニ神童承レ、露ニ宿假有為ノ身ワ、誰レモ繫ガヌ玉ノ緒ノ絶タル跡ノ孝事ニワ、御身凡夫ノ人ナラズ。生智不思議ノ人ナレバ、過ニ出家ノ母ガ菩提ノヨサシナレ。取タノシキワ尋門實貴キワ法ノ道ト、</p>

奠典

無常を観ず

<p>トキハ法ノ道ト、是ゾ最後ノ御言、三十字四年ノ御齡申セバ、人ノ花盛、秋ノ紅葉ト置露ト共ニ、御マカリマシマセバ、通親モ若君モ侍従アマタノ人々モ悲泣哀嘆限リナシ。</p>	<p>取タノシキ桑門實ニタウトキハ法ノ道ヲト、是ヲ最後ノ御言、三十字四年ノ御齡イ申セバ、人ノ花盛リ、秋ノ紅葉ニヨク露ト共ニ、御マカリマシマセハ、通忠モ若君モ侍従ノ人々マデ、悲泣哀嘆カギリナシ。</p>	<p>實ニトウトキ法ノ道ト。是レゾ最後ノ御言バ、三十字四年ノ御齡申セバ、人ノ花盛リ、秋ノ紅葉ニ置露ト共ニ、御マカリマシマセバ、通親モ若君モ侍従アマタノ人モ、悲泣哀嘆限リ無シ。</p>	<p>是ゾ最後ノ御言、三十字四十ノ御齡申セバ、人ノ花盛リ、秋ノ紅葉ニ置ク露ト共ニ御マカリマシマセバ、通忠公若君モ侍従アマタノ人々迄、悲泣哀嘆カギリナシ。</p>
<p>就中別路ノ深思ハ若君ニ留タリ。擗号踴號眺身ニアマリ、五体心肉モヤミ〜ト磨碎マスカト氣ツカワル。サレドモ歸ラヌ無常ノ道、終ニ葬送シ奉ル。然ノ若君ハ泣々喪處ノ御勤ノ如在。莫祭マシマセバ、子貢曾子ガ古エモカクヤト想像シツ、見ル人モ、共ニ感涙頻ナリ。</p>	<p>中ニ就テモ哀レノイク〜ハ若君ニ留リヌ。擗踴號眺身ニ餘リ、五内心膂モヤミ〜ト磨碎マスカト氣ツカハル、サレ共飯ラヌ悔ノ道ヲ、終ニ葬送シ奉ル、然シテ若君ハ泣々喪處ノ御務、如在ノ祭奠マシマスハ、子臯曾子ガ古エモカクヤト想像シツ、見ル人モ聞ク人モ、共ニ感涙シキリナリ。</p>	<p>就レ中別路ノ思イク〜ハ若君ニ留タリ。擗踴號眺身ニアマリ、五内心肉モヤミ〜ト磨碎マスカト氣ツカワシ、サレドモ歸ラヌ悔ノ道、終ニ葬送奉ル。然テ若君ハ泣々喪處ノ御勤如在ノ祭奠マシマセバ、子貢曾子ガ古モカクヤト想像ツツ見ル人々モ、共ニ感涙頻ナリ。</p>	<p>就レ中別テ哀ノイク〜ワ若君ニ留タリ。去レ共歸ラズ□□リ、五内心膂モ、ヤミ〜ト磨碎マスカト、氣ツカワル。去レ共歸ラヌ悔ノ道、終ニ葬送奉ル。然ノ若君ハ泣々喪處ノ御勤如在ノ祭奠マシマスハ、子臯曾子ガ古ヘモカクヤト想像レツ、見ル人モ聞人モ、共ニ感涙セザルワナシ。</p>
<p>カクテモノウキ夕陽ノ闌寂タル靈前ニ、灯ヒ少ク暁シツ、御香炷テ供養ス。煙リツヤ〜見玉フニ、火影ノ糸野馬ノ影、有カト見エテ無キ物ヲ、深ク嘆ジテノ玉フハ、嗟呼物ニヨキ人ニヨキ、世ハ</p>	<p>カクテ懶キ夕陽ノ闌寂タル靈前ニ燈火細明シツ、御香炷テ供養マス。烟ヲ寂々見給フニ、ヒカケノ絲野馬カゲ、有ルカト見ヘテ無キ物ヲ、深ク嘆メノ玉フハ、嗟呼物ニヨキ人ニヨキ、世ハ常ナラヌ理</p>	<p>カクテモノウキ夕陽ノ闌寂タル靈前ニ、燈捕捉暁シツツ、御香炷テ供養マス。煙ツヤ〜見玉フニ、火影ノ糸野馬ノ影、有カト見エテ無レ物ヲ、深ク嘆ジテノ玉フハ、嗟呼物ニオキ人ニヨキ、世ハ常ナラ</p>	<p>カクテ懶キ夕陽ノ闌寂タル靈前ニ、灯ホソク暁ツ、御香炷テ供養マス。煙リヨツヤ〜觀タマフ、ヒカゲノ絲野馬ノカゲ、有ルカト見ヘテ無キ物ヲ、深ク嘆ノ玉フワ、嗟呼物ニヨキ人ニヨキ、世ワ常</p>

*「去レ共歸」の右横に「ジャクユフコゴウ」とある。これは「擗踴眺(身ニアマリ)」の字句の一部と思われる。異本参照。

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>常ナラヌ理リヲ、今コソ悟リ知リヌトテ、乃チ一首ノ御詠アリ</p> <p>○世ノ中ハ市ノノ假屋ゾマテシバシ、誰モ残ラヌ秋ノ夕暮ト詠シ玉フテ、更ニ思召様ハ、カ、ル常無キ世ノ中ノ、夢ノ榮花ハ何ニナラズ。疾リ桑門ノ身トナリテ、生處ノ恩ヲ報ズベシ。一ニハ親恩深カ為メ。二ニハ利生限り無キ。三ニハ自證アヤマトズ。守ラセ玉エ三宝ト、禱マシマス御心底有リ難シト云フハカリ。是發心ノ始ニテ世ニ幼ケナキ若君ノカ、ル弘誓ノマシマス、タメシ希ナル御事也。</p>	<p>リヲ、今コソ悟リ知リヌトテ、一首ノ御詠アリ。</p> <p>世ノ中ハ市ノノ假リヤゾイマシバシ、誰カ残ラン秋ノ夕暮レト詠シ玉イテ、更ニ思召ヤウハ、カ、ル常ナキ世ノ中ニ、夢ノ榮花ハ何ニナラン。疾桑門ノ身ト成ルベシ。一ニハ親恩深カ為メ。二ニハ利生限無ク。三ニハ自證アヤマトズ。守ラセ玉エ三宝ト、祈念マシマス御心底アリガタシトモ云フハカリナシ。是レ發心ノ御初世ニ幼ナキノ若君ノカ、ル弘誓シマス事、タメシ希ナル御事ナリ。</p>	<p>又理リヲ、今コソ悟リ知リヌトテ、乃チ一首ノ御詠有リ。</p> <p>世ノ中ハ市ノノ假屋ゾマテシバシ、誰モ残ラヌ秋ノ夕暮ト詠ジ玉イテ、更ニ思召様ハ、掛ル常ナキ世ノ中ノ、夢ノ榮花ハ何ニナラズ、疾、桑門ノ身トナリテ、生處ノ恩ヲ報ズベシ。一ニハ親恩。二ニハ利生限り無ク。三ニハ自證アヤマトズ。守ラセ玉エ三宝ト、禱マシマス御心底有リ難シトモ云バカリナリ。是發心ノ御初世ニ幼キ若君ノカカル弘誓ノマシマス事、タメシ希ナル御事也。</p>	<p>ナラヌ理リヲ、今コソ悟リ知リヌトテ、乃チ一種ノ御詠歌アリ。</p> <p>世ノ中ワ市ノノ假ヤゾマテシバシ、タレモノコラヌ秋ノ夕暮レト詠シ玉イテ、更ニ思召様ワ、カ、ル常ナキ世ノ中ノ、夢ノ榮花ワナニナラン。疾桑門ノ身ト成ルヘシ。一ツニワ親恩深カ為。二ツニワ利生カギリナク、三ツニワ自證アヤマトズ。守ラセ玉ヘ三宝ト、祈念マシマス御心底難レ有シトモ云バカリナシ。是發心ノ御初幼キ若君ノカ、ル弘誓ノマスコトハ、タメシ希ナル御事也。</p> <p>*付箋に「世ノ中ワ市ノノ假ヤゾマテシバシ誰モノコラヌ秋ノ夕暮レ 八歳ノ時」</p> <p>人皇六十二代村上天皇九世ノ孫源ノ重相公通親ノ長男八歳時母死ス後チニ出家ス」とあり。</p>
<p>御詠 発心</p>			
<p>十歳、出家の 志念 俱舍論を読む</p>	<p>二、若君愁傷シ給事附將監慰奉ル事</p>	<p>二 若君愁傷シ玉フ事付將監慰奉ル事</p>	<p>二、若君愁傷シ玉フ事付將監慰奉ル事</p>
<p>カクテ歳月流ニ異ナラズ、三年ノ喪齋過タレバ、若君十歳ニ成給</p>	<p>カクテ歳月流ニ異ナラズ、三年ノ喪齋過キヌレバ、若君十歳ニ成リ</p>	<p>カクテ歳月流ニ異ナラズ、三年ノ喪齋過ギヌレバ、若君十歳ニ成リ</p>	<p>カクテ歳月流ニ異ナラズ、三年ノ喪齋過ヌレバ、若君十歳ニ成リセ</p>

松殿基房、猶
子に望む

<p>フ。父母難報ノ恩徳ヲ恒ニ感嘆浅カラズ。果ノ出家シ玉ント、誠誓深クマシマセバ、世間ノ書経ヲ習ハンヨリ、出世ノ教論学バントテ、去年ノ季春ノ初ヨリ、先ツ具舎論ヲ見玉エリ。人々奇異ノ思ヲナシ、誠ニ文義ヲ問奉ルニ、懸河ノ智辯ホトハシリ、世ノ智辨ヲ以テ敵スヘキアラズ。是凡ナラズ宿習ナリ。</p>	<p>玉フ。父母ノ報シ難キ恩徳ヲ恒ニ感嘆アサカラズ。果シテ出家シ玉ハント、試誠深クマシマス。故エ世間ノ書ヲ習ハンヨリ、出世ノ教論学バント、去來ノ季春ノ初ヨリ、先ツ俱舎論ヲ見玉エリ。人々奇異ノ思ヲナシ誠ニ文義ヲ問エハ懸河ノ智辨ホトハシル。世智辨以テ敵スベキヤ。是レ凡ナラズ宿習ナリ。</p>	<p>玉フ。父母難報ノ恩徳ヲ恒ニ感嘆浅カラズ。果シテ出家シ玉ント、誠誓深クマシマス。故世間ノ書経ヲ習シヨリ、出世ノ教論ヲ學バントテ、去年ノ季春ノ初ヨリ、先ツ俱舎論ヲ見玉エリ。人人奇異ノ思ヲナシ、試ニ文義ヲ問ヒ奉ルニ、懸河ノ智辯ホトバシリ、世智辨以テ敵スベキニ非ズ。是凡ナラズ宿習也。</p>	<p>玉フ。父母難報ノ恩徳ヲ恒ニ感嘆浅カラズ。果シテ出家シ玉フ。誠誓深クマシマス、故世間ノ書経ヲ習ワンヨリ、出世ノ教論学バントテ、去年ノ季春ノ初ヨリ、先ツ俱舎論ヲ見玉ヘリ。人々奇異ノ思ヲナシ、誠ニ文義ヲ問上バ、懸河ノ智弁ホトバシリ、世智弁以テ敵スベカラ。是凡ナラズ宿習ナリ。</p>
<p>依之名聲遠ク響キ、貴賤口々稱スレバ、朝廷叡聞マシマシテ、神童ハ希代ノ兒タリ、文殊ノ智恵ト勅宣アリ。是ニ依テ又稱ノ文殊童子ト申上ル。時ニ、松殿禪閣基房公九条殿ハ詩歌ノ道クラカラズ。学ハ内外ノ書ヲ兼テ、古今ニ通セルノミナラズ、五常四徳ノフルマイアリ。當世ノ摸楷トシテ、寔ニ名譽モ希ナレバ、御門賞命重々ニ貴賤仰ザルハ無シ。サレモ盈虧半ハアリ。六十字近齡マテ、御子一人モマシマサズ。神童丸ヲ才子トシテ、接家重職ヲ補ハント思召、通親エ内談アル。</p>	<p>名聲遠ク響キ、貴賤口々ニ事アゲス。朝帝叡聞マシマシテ、神童ハ希代ノ兒ニテ文殊ノ智恵ト勅宣アリ。是ニ依テ又タ稱シテ文殊童子ト申ケル。時ニ、松殿禪閣基房公九條殿也。ハ、詩歌ノ道暗カラズ。學ハ内外ノ書ヲ兼テ今古ニ通ゼルノミナラズ、五常四徳ノ行儀アリ。當世ノ模楷、寔ニ名譽希レナル故エ、御門賞命重々ニテ、貴賤仰ザルハナシ。サレドモ盈虧ナカバアリ。六十字近キ齡マテ、御子一人モマシマサズ。仍テ神童丸ヲ才子トシテ、接家ノ重職補ナハシ思召、通忠公ヘ内談アル。</p>	<p>名聲遠ク響キ、貴賤口々稱スレバ、朝帝叡聞マシマシテ、神童ハ希代ノ兒、文殊ノ智恵ト勅宣アリ。是ニ依テ又稱シテ文殊童子ト申上ル。時ニ、松殿禪閣基房公九條殿ハ、詩歌ノ道クラカラズ、學ハ内外ノ書ヲ兼テ古今ニ通ルノミナラズ、五常四徳ノフルマイアリ。當世ノ模楷トシテ、寔ニ名譽希ナレバ、御門賞命重々ニテ、貴賤仰ザルハナシ。サレドモ盈虧半バアリ。六十字ニ近キ齡イマデ、御子一人モマシマサズ。仍テ神童丸ヲ才子トシテ、攝家重職ヲ補ハント思召、通親エ内談アル。</p>	<p>名聲遠ク響キ、貴賤口々コトアゲズ、朝帝叡聞マシマシテ、神童ハ希代ノ兒、文殊ノ智恵ト勅宣アリ。是ニ仍テ又稱文殊童子ト申上ル。時ニ松殿禪閣基房公九條殿、詩歌ノ道クラカラズ。学ワ内典外典兼テ今古ニ通ゼルノミナラズ、五常四徳ノ行儀アリ。當世ノ模楷トシテ、寔ニ名譽希ナル御方故、御門賞命重々ニテ、貴賤仰カザルワナケレモ、盈虧ナカバアリ。六十字ニ近キ齡ニテ、御子一人モマシマサズ。依テ神童丸ヲ才子トシテ、接家ノ重職ヲ補ハント思召、通忠公ヘ内談アル。</p>

父、出家許さず

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>時ニ若君密カニ是ヲ聞召、悲泣シテノ曰ク、此ハ何事ヲ謀マス。接家ノ職ハ何ナラン。四王切利ノ福樂モ、五衰遷化ノ患アリ。マシテ人世ハ幾程ゾ。手ノ中ノ水ニ宿レル月影ノ、有力無キノ身ヲ忘レ、夢ノ榮花ハ何ナラン。出家社有レ、父上ト頻リニ願セ玉エトモ、通親許シ玉ハ子ハ、如何ハセント涙ニクレテ御在ス。</p>	<p>時ニ若君密ニ是ヲ聞キ玉イ、悲泣シテノ玉ハク、此ハ何事ヲ謀リマス。接家ノ職ハ何ニナラヌ、四王切利ノ福樂モ、五衰千化ノ患アリ。世ハ幾程ゾ。手ニ結フ水ニ宿ドレル月影ノ、有力無キカノ身ヲ忘レ、夢ノ榮花ハ何ニナラン。出家コソアレ、父上トテ頻ニ願ハセ玉ヘ共、通忠許シ玉ハ子ハ、如何セント涙ニクレテ御居。</p>	<p>于レ時若君密ニ是ヲ聞召、悲泣シテ曰、此ハ何事ヲ謀マス、攝家ノ職ハ切何ニナラヌ、四王切利ノ福樂モ、五衰遷化ノ患アリ。世ハ幾程ゾ。手ニ結ブ水ニ宿レル月影ノ、有力無カノ身ヲ忘レ、夢ノ榮花ハ何ナラン。出家社ソ有レ、父上トシテ頻ニ願セ玉エドモ、通親許シ玉ワネバ、如何ワセント涙ニクレテ御座ス。</p>	<p>時ニ若君密ニ是由ヲ聞シ召、悲泣マシマシテ曰ク、何事ヲ計マス、接家ノ職ハ何ナラン。四王切利ノ福樂モ、五衰遷化ノ患アリ。世ハ幾程ゾ。手ニ結フ水ニヤドレル月影ノ、有ルカ無カノ身ヲ忘レ、夢ノ榮花ワ何ナラン。出家コソアレ、父上トテ頻ニ願ワセ玉ヘトモ、通忠許シ玉ワ子ハ、如何ワセント涙ニクレテ御居。</p>
<p>高充の取なし 時ニ通親、將監ヲ召シ如何ニヤ將監此度神童ヲ松殿ノオ子トナシ、扱テ別腹ト云ナカラ、兼若モ智惠ニヨキ形相ニヨキ、更ニ仁恕ノ心込兄神童ニ劣ヌ弟ナレバ、吾ガ家ノ繼子トナシ、榮行末ヲ思ヘトモ、神童ガ心岩城ニシテ出家ヲ望ム志シ賺シテモ諫テモ、中々父ニ隨ハズ。近頃一家ノ者共カ擧テ強諫シ故ニ、愁傷轉々熾ニヤ、不豫ノ氣色ト相見エテ、四五ヶ月以來ハ飲食ヲ減少シ、ヤツレシ面ノ憐レマシ。汝チ彼ヲ慰テ、機嫌ヲ調エ得サスベシ。宜ク頼ムトノ玉</p>	<p>時ニ通忠、將鑑ヲ召シ、如何ニ將監此度神童ヲ松殿ノオ子トナシ、扱テ別腹ナレ共、兼若モ智惠ニ於キ形相ニ於キ、更ニ仁恕心マテ兄ニ劣ヌ弟ナレバ、吾家ノ繼子トナシテ、榮行ク末エヲ思ヒ氏、神童ガ心岩城ニシテ、出家ヲ望ム志シ賺シテモ諫テモ、泣ク父ニシタガハズ。近來一家ノ者共ガ擧テ強諫シ故エ、愁情轉々熾ニヤ、不豫ノ氣色ト相見ヘテ、四五日以來飲食ヲ減少シテ、ヤツレシ面ノ憐マル。汝彼ヲ慰問シテ、機嫌ヲ調ヘ得サスベシ。宜ク頼トノ</p>	<p>于時通親、將監ヲ召シ、如何ニ將監此度神童ヲ松殿ノオ子トナシ、扱テ別腹ト云イナガラ、兼若モ智惠ニヨキ形相ニヨキ、更ニ仁恕ノ心込兄ニ劣ヌ弟ナレバ、吾ガ家ノ繼子トナシ、榮エ行ク末ヲ思ドモ、神童ガ心岩城ニシテ、出家ヲ望ム志シ賺シテモ諫メテモ、中々父ニ隨ハズ。近比一家ノ者共ガ擧テ強ク諫シ故、愁傷轉熾ニヤ、不豫ノ氣色ト相見テ、四五ヶ月此方ハ飲食ヲ減少シテ、ヤツレシ面ノ憐レマシ。汝彼ヲ慰メテ、機嫌ヲ調エ得サスベシ。宜ク頼ムトノ玉</p>	<p>于時通忠、將鑑ヲ召サレ、如何ニ將監此度神童ヲ、松殿ノオ子トナシ、扱テ別腹トワ云ナカラ、兼若モ智惠ニ於形相ニ於、更ニ如ノ心込兄ニ劣ヌ弟ナレバ、吾家ノ繼子トナシ、榮行末ヲ思ヘ氏、神童ガ心岩城ニノ出家ヲ望ム志シ賺シテモ、ナカナカ父ニシタカワズ。近來一家ノ者共ガ擧テ強ク諫シ故、愁情轉熾ニヤ、不豫ノ氣色ト相見ヘテ、四五ヶ月以來ハ飲食ヲ減少メ、ヤツレシ面ノ憐マル。汝カレヲ慰問メ、機嫌ヲ調得サスベシ。宜ク頼ムトノ玉ヘバ、將鑑御意畏リ、即</p>

花見遊參

道元禪師伝記史料集成（十一上）

<p>エハ、將監御意ヲ承リ、即チ御前ヲ退出シテ、若君ノ御處ニ參上シ、敬テ告シ上ル條、此頃若君ノ高顔御不豫ノ至ヲ恐ナガラモ某ガ情感シ奉ルニ、御遁世ノ賢慮淺カラズ、出塵ノ御誓イ有難キ処ニ御本懷ナラズ。松殿ノ御願アナカチナルヲ以テカク御意傷シム。サノミ悲傷シ玉ワザレ。某愚案ヲ盡シ、父君ヲ勸メ奉リ、御本懷ヲ達スヘシ。カク閑居マシマシテワ、父君エ對シ御不孝也。先々出頭サムライテ、父君ノ御機嫌ヲ訪イ玉ヘト慰ヲナシ奉レバ、若君愁雨乍止ミ、本懷タニ開キナバ、何カワアラン將監トテ、御快ゲニ笑タマイ花香シキ御貌ニテ、父ノ御前エ出テ玉フ。通親怡悅マシマシテ、オコト此頃病恙ハ幾、覺束無リシカ平愈アル社嬉シケレ。</p>	<p>玉エバ、將監御意畏リ、即チ御前退出シテ、若君ノ御處ニ參上シ、敬テ告シ上ル條、此頃若君ノ高顔御不快ノ至リ恐ナカラ某甲情々感シ奉ルニ、御遁世ノ賢慮淺カラズ、出塵ノ御誓イ有難キ攸ニ御本意ニカナハン。松殿ノ御願イアナガチナルヲ以テ、カク御意ヲ傷シムサノミ悲傷シ玉ハサレ。某甲愚案ヲ盡シ、君ガ勸メ奉リ、御本意ヲ達スベシ。カク閑居マシマセバ、君父上エ對シ御不孝ナリ。先々出頭シ玉エテ、父上ノ御機嫌訪ヒ玉ヘト慰諭シ奉ルニ、若君愁雨乍止ミ、本懷ヲタニ開キナバ、何ニカハアラン將監トテ、御快ゲニ笑華ノイト香キ御貌ニテ、父ノ御前ニ出テ玉フ。通忠怡悅マシマシテ、ヲコト此頃病恙ハ幾ク、無覺束カ平愈アルコソ嬉シケレ。</p>	<p>ヘバ、將監御意ヲ畏リ、即チ御前ヲ退出シテ、若君ノ御所ニ參上シ、敬テ告シ上ル條、此頃若君ノ高顔御不快ノ至ヲ恐ナガラ某情感シ奉ルニ、御遁世ノ賢慮淺カラズ。出塵ノ御誓難有處ニ御本懷ナラズ。松殿ノ御願アナガチ成ルヲ以テ、カク御意ヲ傷マシム。サノミ悲傷シ玉ハザレ。某愚案ヲ盡シ、父君ヲ勸メ奉リ、御本懷ヲ達スベシ。カク閑居マシマシテハ、父君エ對シ御不孝也。先々出頭サムライテ、父君ノ御機嫌ヲ訪イ玉エト慰諭ヲナシ上レバ、若君秋雨乍止ミ、本懷タニ開キナバ、何カ憂ン將監トテ、御快ゲニ笑華ノイト香シキ御貌ニテ、父ノ御前エ出玉フ。通親怡悅マシマシテ、ヲコト此ノ比病苦如何ト、無覺束ノリシガ平愈アル社嬉シケレ。</p>	<p>御前ヲ退出ノ、若君ノ御處ニ參上シ、敬テ申上ル條、此頃若君ノ高顔御不快ノ至リヲ、恐レナカラ某甲ガツラノ感シ奉ルニ、御遁世ノ賢慮淺カラズ、出塵ノ御誓有難キ所ニ御本意ナラヌ、松殿ノ御願アナガチナルヲ以テ、カク御心ヲ傷マシム。サノミ悲傷シ玉ワザレ。某甲愚案ヲ盡シ、父君ヲ勸奉リ御本意ヲ達スベシ。カク閑居マシノテワ、御父君ヘ對シ御不孝ナリ。先々出頭サフライテ、父君ノ御機嫌御訪玉ヘト慰諭シ奉リケレバ、若君愁雨乍止ミ本懷ヲタニ開キナバ、何カワアラン將監トテ、御快ニ笑花ノ井ト香キ御貌ニテ、父ノ御前ヘ出玉フ。通忠公怡悅マシノテ、オコト此頃病恙ワ幾ク、無覺練リシガ平愈在リソ嬉ケレ。</p>
<p>猶保養ノ為ナレバ、花見ノ遊山セシメヨト、將監ニ仰付ラル。將監承リ然ル可キ御意ナリトテ、御遊ノ用意仕ル。頃ハ三月ノ上旬ノ五日ト聞エタリ。若君欣然淺カラズ、父上ノ御慈恩有難シトテ、御</p>	<p>猶保養ノ為メナレバ、花見ノ遊山セシメヨト、將監ニ仰セ付ケラル。將監承リ、然ルベキ御意ナリトテ、御遊山ノ用意仕ル項ハ、三月上旬ノ上ノ五日ト聞エタリ。若君忻然アサカラズ、父上ノ御慈</p>	<p>猶保養ノタメナレバ、花見ノ遊參セシメヨト、將監ニ仰付ラレ、將監承リ、然ル可キ御意ナリトテ、御遊ノ用意仕ル頃ハ、三月ノ上旬ノ上ノ五日ト聞エタリ。若君忻然淺カラズ、父上ノ御慈恩有難シト</p>	<p>猶保養ノ為ナレバ、花見遊山セシメヨト、將監承リ、然ルヘキ御意トテ、御遊ノ用意仕ル。頃ハ三月上旬ノ上五日ト聞ヘタリ。若君欣然アサカラズ、父上ノ御慈恩有難シトテ、御舍弟若殿ヲ始、御</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>舍弟兼若丸ヲ始メ、御一門ノ公子卿達御誘引、何レモ御年前後ノ少人ニテ一入自立裝束ハ、綾羅華錦ノ御裳花ヲ競フ御ヨソヲイ、御伴ノ人々マテ、キラヲ磨シ行列ニテ、吉野エ御駕ヲ進メラル。優美希ナル御風情ナリ。</p>	<p>御有リガタシト、御舍弟兼若殿ヲ始メ、御一門ノ公子卿達御誘引、レヅレモ御年前後ノ少人ニテ一入自立裝束ハ、綾羅華錦ノ御ツカヤ花ヲ競テノ御ヨソヲヒ、御伴ノ人々マテ、キラヲミガケル行列ニテ、吉野へ御駕ヲ進メラル。誠ニ優美希ナル御風情ナリ。</p>	<p>テ、恩舍弟兼若丸ヲ始メ、御一門ノ公子卿達御誘引、何レモ御年前後ノ少人ニテ、一入自立裝束ハ、綾羅華錦ノ御モスソノ花ヲ競フ御ヨソヲイ、御供奉ノ人々マデ、キラヲミガキシ行列ニテ、吉野へ御駕ヲ進メラル。優美希ナル御風情ナリ。</p>	<p>一門ノ公子卿達ヲ御遊誘引、イツレモ御年前後ノ少人ニテ、一入自立裝束ハ、綾羅華錦ノ御モソカヤ、花ヲ競御ヨソヲヒ、御伴ノ人々込キラヲミガケル行列ニテ、吉野へ御駕ヲ進メラル。此ヤ此優美希ナル御風情ナリ。</p>
<p>三、若君花見遊山事附高充悪賊退治之事</p>	<p>三二八、若君花見之事附將鑑高充悪賊退治之事</p>	<p>三 若君花見付高充悪賊退治之事</p>	<p>三、若君花見付高充悪賊退治ノ事</p>
<p>既ニ吉野ニ着玉エバ、先ツ高充カ案内ニテ御遊ノ佳景ヲ見分シ、八面四隅ニ幔幕打セ、美席花氈ノ御座清ク、小作筒破籠ノ色々ニ、種々ノ珍菓ヲ取揃エ、若君達ヲ饗應セリ。サテ御宴ノ慰ミワ、絲竹音楽歌舞ノ人、奇音雅曲ノ科ヲ尽シ奏スレバ、意モ浮立斗リナリ。然ノ若君達、去來、花コソ詠ントテ、色紙短冊処持セラレ、思イ思イノ口スサミ、色香争フ御風情、各々遊歩徐々トノ、此ニ吟シ彼コニ嘯キ、花ノ下ニ盤桓セリ。實ニ面白シ吉野山、花ハシケシケ枝ヲ</p>	<p>已ニ吉野ニ着キ玉フ、先ツ高充ガ前テ御遊ノ佳景ヲ見分シ、八面四隅ニ幕ヲウチ、美席花氈ノ御座清ク、小竹筒破籠ノ種々色々、珍菓ヲ取り揃へ、若君達チヲゾ饗應ケリ。扱テ御宴ノ慰ハ、絲竹ノ樂者歌舞ノ人、奇音雅曲ノ料尽シテ、意モ浮立バカリナリ。然ノ若君達、去來、花コソ詠ントテ、色紙短冊所持セラレ、各々遊歩徐々トシテ、花ノ下ニ盤桓セリ。實ニ面白ヤ吉野山、花ハシケシケ枝ヲナミ梢ヲ交、濃艶ハ、昔シ佳人ノ口吟、日々に營風ニ營、高底千</p>	<p>已ニ吉野ニ著キ玉フ。先ツ高充ガ先達テ御遊ノ佳景ヲ見分シ、八面四隅ニ幕ヲ打チ、美席華氈ノ御座清ク、小竹筒破籠ノ色々ニ、種種ノ珍菓ヲ取り揃エ、若君達ヲ饗應ケリ。サテ御宴ノ慰ハ、糸竹ノ樂者歌舞ノ人、奇音雅曲ノ科盡シ、意モ浮立計リ也。然而若君達、去來、花コソ詠メントテ、色紙短冊所持セラレ、各々遊歩徐々トシテ、花ノ下ニ盤桓セリ。實ニ面白シ吉野山、花ハシゲシゲ枝ヲナミ梢ヲ交エ、濃艶ハ、昔シ佳人ノ口吟、日ニ營風ニ營ク、高底千顆萬</p>	<p>已ニ吉野ニ著玉ウ。先高充カ先達テ御遊ノ佳景ヲ見分シ、四方八面ニ幕ヲ打、美席花氈ノ御座清ク、小竹筒破籠色々ニ、種々ノ珍菓ヲ取揃へ、若君達ヲゾ饗應ケリ。扱御宴ノ慰ワ、絲竹ノ樂者歌舞ノ人、奇音雅曲ノ科尽シ、意モ浮立斗也。然ノ若君タチ、去來ヤ花コソ詠メントテ、色紙短冊所持セラレ、各々遊歩徐々トノ、花ノ下ニ盤桓セリ。實面白ヤ吉野山、花ワシゲシゲ枝ヲナミ梢ヲ交、濃艶ハ、昔シ佳人ノ口吟、日ニ營風ニ營ク、高底千顆萬顆ノ玉、枝ヲ</p>

神童丸の姿

道元禪師伝記史料集成（十一上）

<p>中ニモ殊ニ妙ナル神童丸ノ御姿、</p>	<p>ナミ梢ヲ交ヘシ濃艶ハ、昔シ歌人ノ口吟ミ、日、ニ瑩風ニ瑩ク、高低千顆万顆ノ玉枝ヲ染メ浪ヲ染ム。表裏一入再入ノ紅イヤ、又花飛テ錦綉忽チ布ク如ク、幾濃莊ソ。織者ハ春ノ風未タ筒ニ疊ス、巧ニ綴ル人モアハレニ聞エケル。</p> <p>サレハニヤ世ノ中ニ、絶テ櫻ノ無リセバ、春ノ心ハ如何ナラス、等閑ナラマシ今日ノ中、見ルコソ見ヨト人毎ニ、花ノ情ニホダサレテ、散ナン后ノ戀シカルヘキ、謂レ有リ看テノミ止ズ、郷達ノ手コトニ花ノ枝折テ、土産ニサクラカザシテ遊ヒマス。時ニ遠近ノ遊人男女群集雲ノ如ク成リケルカ、此郷達ノ美貌ト云イ、羅綾ノ袂ト香ク、花ニ映 風情ヲ見テ、聲ヲ秘メ袖ヲ曳、相共ニ謂様ハ、如何ナル方ノ郷達ニテ御座ラン。誠ニヤ人華トテ、人モ花ノ数ナレト、是レコソ華ノ花ナリトテ、伏ツ仰ツ競忍テ、樹々ノ花ヲバ見ザリケリ。</p>
<p>中ニモ殊ニ妙ナルハ、神童丸ノ御</p>	<p>顆ノ玉、枝ヲ染メ浪ヲ染ム、表裏一入再入ノ紅ヒナド、又花飛デ錦ノ如ク、幾濃粧ゾ。織者ハ春ノ風未筒疊マズ、巧ミ綴ル人モアワレニ聞エケル。</p> <p>サレバコソ世ノ中ニ、タエテ櫻ノナカリセハ、春ノ心ハ如何ナラン。等閑ナラマシ今日ノウチ、見テコソ見ヨヤト人トゴトニ、花ノ情ニホダサレテ、チリナン后チゾ戀カレベキ、謂レアリ。見テノミ止ヌ、郷達ノ手ゴトニ折リテ、家ヅトニ櫻カサシテ遊ヒマス。時ニ遠チ近チノ遊人男女トモ群聚雲ノ如クナリケルガ、此郷達ノ美貌ト云ヒ、羅綾ノ袂ト香シク、花ニ映 風情ヲ見テ、声ヲ秘 袖ヲ曳、互ニ謂フヤウハ、如何成カタノ郷達ニテ御在ラン。真ニヤ人花トテ、人モ花ノ類ナレト、是コソ華ノ花ナリトテ、伏ツ仰ツ競イ忍テ、樹々ノ華ヲバ見ザリケル。</p>
<p>中ニモ殊ニ妙ナルハ、神童丸ノ御</p>	<p>染浪ヲ染。表裏一入再入ノ紅ヒナト、又花飛ンデ綿ノ如、幾濃粧ゾ。織者ハ春ノ風未タ箱ニ疊ズト、巧ニ綴ル人モアワレニ宛。</p> <p>サレバコソ世ノ中ニ、タヘテ様ノナカリセバ、春ノ心ワ如何ナラン。等閑ナラマシ今日ノ中、見テコソ見ヨト人毎トニ、花ノ情ニホダサレテ、散ナン后ノ戀シカルベキ、謂レアリ。見テノミ止マヌ郷達ノ手ゴトニ折テイヘズトニ桜カザシテ遊ヒマス。時ニ遠近ノ遊人男女トモ群聚雲ノ如クナリケルガ、此ノ郷達ノ美貌ト云ヒ、羅綾ノ袂ト香ク、ハナウツロフ風情ヲ見テ、声ヲ秘 袖ヲ引、相互ニ謂様ハ、如何ナル方ノ御郷達ニテ御座ラン。誠ニヤ人華トテ、人モ花ノ数ナレド、是コソ花ノ花ナリト、伏ツ仰ツ競忍テ、樹々ノ花ヲバ見ザリケリ。</p>
<p>中ニモ殊ニ妙ナルハ、神童丸ノ御</p>	<p>リ。</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>双ノ鬢ツラ八字ノ眉、青黛ヲ備エズシテサナカラ畫クニ異ナラズ。其ノ光御面ハ三五ノ月ニ依稀^{サセニタリ}。七處圓備マシマセバ、誰力愛敬セザルヘキ、是ハサテ置此ニ櫻ノ有リケルガ、風少^{フツカ}ニゾフキ来テ、ハラ／＼ト散ル華ヲ、神童丸倩々ト見玉イケルカ、感慨ヤ深く起リケン。愁色俄ニ面ニウカミ、御涙ソ、ロニ袖ヲ濕シ玉エルヲ、御舎弟兼若丸殿由ヲ見玉イ、是ハ如何コトヤマシマス、御意如何ト向シケレバ、神童丸ノ仰ニ、サレバニヤ古キ歌ニ</p>	<p>姿、雙ノ鬢ツラ八字眉、青黛ヲ借ズシテサナガ畫カクニ異ナラス。其ノ光御面テハ三五ノ月依稀シツ、七處圓備マシマセバ、誰力愛敬セサルベキ。是ハ扱^{ナゲ}テ置キコ、ニ櫻ノアリケルガ、風少^{フツカ}ニゾヨギ来テ、ハラ／＼ト散リケル花ヲ、神童丸ハ見玉ヒケルガ、慨ヤ深く起リマシケン。愁色俄ニ浮ビ、御涙ソ、ロニ袖ヲ濕シ玉ヘルヲ、御舎弟兼若丸殿由ヲ見テ、コハ何ニ事ヤマシマス。御心如何、ト問ハシケレバ、神童丸ノ仰ニ、サレバニヤ古キ歌ニ</p>	<p>姿、鬢ツラ八字ノ眉、青黛ヲ借ズシテサナガラ畫クニ異ナラズ。其ノ光御面ハ三五ノ月ニ依稀^{サセニタリ}。七處圓備マシマセバ、誰力愛敬セザルベキ。是ハ扱^{ナゲ}置此ニ櫻ノ有リケルガ、風少^{フツカ}ニゾヨギ来テ、ハラ／＼ト散ル花ヲ、神童丸見玉ヒケルガ、感慨ヤ深く起リマシケン。愁色俄ニウカミ、御涙ソ、ロニ袖ヲ濕シ玉エルヲ、御舎弟兼若丸殿ノ由ヲ見テ、是ハ何事ヤマシマス、御心如何ト問レケレバ、神童丸ノ仰ニ、サレバニヤ古キ歌ニ、</p>	<p>姿、双ノ鬢ツラ八字ノ眉、青タイヲカラズ、畫ニ異ナラズ、其ノ光御面ヲ三五ノ月ニ依稀^{イキ}シツ、七處圓備マシマセリ、誰力愛敬セザルマジ。是ハ先ツ置キ比ニ桜ノ在ケルガ、風少^{フツカ}ソヨギ来テ、ハラ／＼ト散ケル花ヲ、神童見玉ヒケルガ、慨ヤ深く作ケン。愁色俄ニウカビ、御涙ソ、ロニ袖ヲ濕シ玉ヘルヲ、御弟兼若丸殿、此由ヲミテコハ何事ヤマシマス。御心如何ト問ワシケレバ、神童ノ仰セニ、サレバコソ古キ歌ニ、</p>
<p>櫻散ル木ノ下影ハ寒カラテ空ニ知ラレヌ雪ゾ降ケル トヨメル心ヲ忍カ子テゾト言シハ、又無常ヲ思召、心傷シメ玉フナリ。</p>	<p>櫻チル樹ノ下風サムカラテ空ニシラレヌ雪ゾ降りケル トヨメル心ヲ忍ヒカ子テゾト言ハ、又夕無常ヲ思召ハナリ。</p>	<p>櫻散ル木ノ下風ハ寒カラデ空ニ知レム雪ゾ降りケル トヨメル心ヲ忍カネテ、ソト言シハ、又無常ヲ思召、心傷シメ玉フ也。</p>	<p>様ナル木ノ下風ハサムカラデ空ニ知レヌ雪ゾ降ケル トヨメル心ヲ、忍ヒカ子テ、ゾト言イシワ、又無常ヲ思食バナリ。</p>
<p>悪賊出現 カクテ御遊ヒモアカヌ間ニ、遠寺ノ晚鐘聞エレバ、去來皈ン方々トテ、御駕ヲ回シケル処ニ、此ニ布留熊安良熊トテ、惡賊ノ大將二人</p>	<p>カクテ御遊ビモアカヌ間ニ、遠寺ノ晚鐘キコユレバ、去來ヤ皈ラス方々トテ、御駕ヲ回シケル処ニ、布留熊安良熊トテ、惡賊ノ大將ニ</p>	<p>カクテ御遊モアカヌ間ニ、遠寺晚鐘聞エレバ、去來歸ン方方トテ、御駕ヲ回シケル處エ、布留熊安良熊トテ、惡賊ノ大將二人在リ。此</p>	<p>カクテ御遊モアカヌマニ、遠寺ノ晚鐘キコユレバ、イザヤ皈シ方々トテ、御駕ヲ回シケル処ニ、布留熊安良熊トテ、惡賊ノ大將二人有</p>

<p>在リ。此ノ奴等元ト信州伊那ノ生 レト承ル。布留熊ガ父ハ佐久ノ黒 鷹云フ、安良熊カ父ハ伊那ノ黒熊 トカヤ。此ノ二人ノ父ハ先年熊坂 長攀ガ着属タリ。熊坂已ニ御曹子 牛若丸ニ討レシ時、主ヲ失フ口惜 ケレト、叫叫テ渡リ合セシカ、 鬼神ヲ欺ク熊坂タニ屑、トモメサ レ子バ、何カワ以テタマルヘキニ 人モ則チ討レニケリ。今ノ兩人モ 其子共ニテ父ガ好ム悪事ヲ続キ、 小字ヨリ天窓勝ナル放逸者、殊ニ 盜殺ヲ好ム事、父等ニモ勝タリ。 布留熊ガ身ノ長六尺二寸一分、色 黒ク兩目ワ睜、逆、眼中ニ赤筋太 ク張り、口ハ鰐口ナリ。安良熊カ 身ノ長六尺一寸三分、色赤ク兩目 ハ圓クシテ、眼中ハ銅ヲ張ルニ似 タリ。サナカラ悪魔疫神カト聞ク サエ猶恐ロシ。一人劣又強力ニ テ、恐レ憚ル事モ無ク、數タノ悪 黨ヲ引率シ、在々處々ヲ經廻シ テ、家々ニ乱レ入り家財ヲ奪イ火 ヲ放チ、或曠原山路ニ横テ、常ニ 旅人ヲ劫苦ル事、幾多哉。今郷 達ノ御装束最妙ニ花声ナルヲ貪觀 テ、適レ今日ノ幸哉。切剥セン者</p>	<p>人アリ。此ノ奴等元トハ信濃国伊 那郡ノ生ニテ、安良熊ガ父ハ伊那 ノ黒熊ト云。布留熊ガ父ハ佐久郡 ノ生ニテ佐久ノ黒鷹トヤラ。二人 共ニ先年熊坂長判ガ眷屬タリ。熊 坂已ニ御曹子牛若丸ニ討シ時キ、 主ヲ失フ口惜ケレト、呼叫テハ タリ合シガ、鬼神ヲ欺ク熊坂タニ、 屑、トモメサレ子バ、何ニカハ以 テタマルベキ、二人モ即チ討レニ ケリ。今ノ兩人其ノ子共ニテヨク 父ガ悪事ヲ續キ、又小字ヨリ 天窓勝ナル放逸者ノ、殊ニ盜殺ヲ 好ノム事父等ニモ勝レタリ。布留 熊ガ身ノ長六尺二寸一分、色黒ク 兩目ハ睜、逆、テ、眼中赤筋大ク 張り、口チハ鰐口チナリ。安良熊 ガ身ノ長六尺一寸三分、色赤、兩 目マルクシテ、眼中ハ銅ヲハルニ 似タリ。二人劣ラン強力ニテ、憚ル 處トモナク、數多ノ悪黨ヲ卒シ、 在々處々ヲ經廻シテ、家々ニ乱レ入 テ家財ヲ奪、火ヲ放チ、或ハ曠原 山路ニ横タハリテ、常ニ旅人ヲ劫 メ苦ムル事、幾多ヤ。今卿達ノ御 装束最妙ニ花声ナルヲ貪リ觀テ、 適レ今日ノ幸イカナ。切剥者共ト</p>	<p>奴等モト信州伊那ノ生ト承ル。布 留熊ガ父ハ佐久ノ黒鷹ト云フ。安 良熊ガ父ハ伊那ノ黒熊トカヤ。此 二人ノ父ハ先年熊坂長攀ガ眷屬タ リ。熊坂已ニ御曹子牛若丸ニ討レ シ時、主ヲ失フ口惜ケレトテ、 叫叫テ渡リ合シガ、鬼神ヲ欺ク 熊坂タニ、屑、トモメサレネバ、 何カハ以テタマルベキ、二人モ則 チ討レニケリ。今ノ兩人モ其子共 ニテヨク父ガ悪事ヲツギ、小字ヨ リ天窓勝ナル放逸者、殊ニ盜賊殺 伐ヲ好ム事父等ニモ勝リタリ。布 留熊ガ身ノ長六尺二寸一分、色黒 兩目ハ睜、逆、眼中赤筋太ク張 ル、口ハ鰐口也。安良熊ハ身ノ長 六尺一寸三分、色赤ク兩目圓クシ テ、眼中ハ銅ヲ張ルニ似タリ。二 人劣又強力ニテ、恐レ憚ル事モ無 ク、數多ノ悪黨ヲ引率シ、在々 處々ヲ經廻シテ、家々ニ亂入シテ 家財ヲ奪ヒ、火ヲ放チ、或ハ曠原 山路ニ横リテ、常ニ旅人ヲ劫苦 ル事、幾多哉。今卿達ノ御装束最 妙ニ花声ナルヲ貪見テ、適レ今日 ノ幸哉。劫剥セン者共トシテ、二 百餘人ノ悪黨共勢ヒ掛テ執リ圍ム。</p>	<p>リ。此奴等元信濃ノ國伊那ノ生 レト承ル。布留熊父ワ佐久ノ黒鷹ト 云フ。安良熊カ父ワ伊那ノ黒熊ト カヤ。此ノ二人父ワ先年熊坂長判 カ眷屬タリ。熊坂已ニ御曹子牛若 丸ニ討レシ時、主ヲ失フ口惜ケレ バトテ、叫叫ワタリ合シガ、鬼 神ヲ欺ク熊坂タニ、屑、トモメサ レ子バ、何カハ以テタマルヘキ、 二人モ比ニ討レニケリ。今ノ兩人 其子共ニテヨク父カ悪業ヲ受續 ヌ。小字立ヨリ天窓勝ナル放逸 者、殊ニ盜殺ヲコノム事、父等ニ モ勝レタリ。布留熊カ身ノ長六尺 二寸一步、色黒ク兩目ハ睜リアガ ツテ、眼中赤筋大ク、口ハ鰐口也。 安良熊カ身ノ長六尺一寸三分、色 赤ク兩目圓ク、眼中ハ赤金ヲ張 ルニ似タリ。一人劣又強力ニテ、 恐レ憚ル氣色モナク、數多ノ悪黨 ヲ引率シ、在々所々ニ經廻シテ、 家々ニ亂入テ家財ヲ奪ヒ、火ヲ放 チ、或ハ曠原山路ニ横リテ、常々 旅人ヲ劫苦シムル、幾多ゾヤ。 今卿達ノ御装束最妙ニ花声ナルヲ 見テ、アツパレ今日ノ幸イカナ。切 剥セン者共トテ二百餘人ノ悪黨ト</p>
--	--	--	---

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>共トテ、二百余人ノ惡黨共執圍ム。</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>テ、二百余人ノ惡黨共執圍ム。</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p> <p>モ執圍ム。</p>
<p>時ニ布留熊進ミ出不畏氣ニ云様ハ、如何ニ花見ノ御冠者達、吾等ハ長キ穿人ニテ、匱乏カ為ノ當ミニ却奪ヲ業ト仕ル。疾ク各々ノ衣服ヲ脱テ賜レ。左ナクハ押ヘテ剥執ント云ケレバ、若君達膽ヲケシ、遂ニ見又強賊ノ大勢ニカコマレテ如何ハセントテアハテ二目氣玉イケル。中ニモ神童丸少モサハカセ玉ハズノ仰セケル様ハ、穿人ナラハ、哀ムベシ。金銀與エヨ高充ト、サモ穩堂ニノ玉エバ、高充畏リ若君達ヲ彼シコニ忍セ、供奉ノ人々ニ守護セサセ、其身ハ一人身ヲ固メ實ニ一文字ニ進ミ出、ヤア惡盜共我君ヨリ慈悲ノ惠ミノノ引出物、今高充カ引渡ス。近ク依テ頂戴セヨト云俣ニ、傍ヲ見レバ、岐路ノチマタ新キ立木有リ。八寸四角ノ新削リ、長サ土底カケテ一丈有餘アリケルヲ、隻手ニ拈テ、ツ、ト抜き、是ゾ賜ル引出物、依レ取セント云ケレバ、安良熊キツ</p>	<p>時ニ布留熊進出テ不畏氣ニ曰フヤウハ、如何ニ花見ノ御冠者タチ、吾等ハ長キ穿人ニテ、匱乏ガ為ノ經營却奪ノ業仕ル。各々呉服ヲ脱テ賜レ。左ナクハ押テ剥執ト曰ヒケレバ、神童丸ノ仰ケルハ、穿人ナラバ哀レム可シ。金銀與ヨ高充ト、サモ穩當ニノ玉ヘハ、高充畏リ卿達ヲ後ニマワシ挾テ、前ニ進ミ、ヤア惡黨共我ガ君ヨリ慈悲ノ惠ノ引出物、今高充ガ引渡ス。近キニ依テ頂戴セヨト曰俣ニ、傍リヲ見レバ、岐路ニマダ新キ立木アリ。横ハ、廣サ八寸余リ、四角ニ削、長サ土底カケテ一丈二尺バカリアリケルヲ、隻手ニ拈ンテ、ツ、トヌキ、是レソ賜ル引出物、倚レトラセント云ケレバ、安良熊キツト見テ、形ニ似セ又腕ダテカナ、先切リ剥キトレト下辞スレバ、賊黨一度ニ抽揃、勢カ、ツテ詰カクレハ、高充元ヨリモ葉流雄ノ、殊ニ力ハ石ヲ破鼎ヲ烈立木</p>	<p>于レ時布留熊進ミ出テ不畏氣ニ云様ハ、如何ニ花見ノ御冠者達、吾等ハ長ノ穿人ニテ、匱乏ガ為ノ經營ニ却奪ノ業仕ル。各々呉服ヲ脱テ賜レ。左ナクハ押テ剥取ムト云ケレバ、神童仰セケル様ハ、穿人ナラバ哀ムベシ。金銀與ヘヨ高充ト、サモ穩當ニノ玉エバ、高充畏リ卿達ヲ後エ廻シ狹デ、前ニ進ミ、ヤア惡盜共我君ヨリ慈悲ノ惠ノ引出物、今高充ガ引渡ス。進エ依テ頂戴セヨト云儘ニ、傍ヲ見レバ、岐路ニマダ新キ立ツ木有リ。横平廣サ八寸餘リ、四角ニ削リ、長ハ土ソコカケテ一丈二尺有ケルヲ、片手ニ拈ンデ、ツツト抜き、是ゾ賜ル引出物、ヨレ取セント云ケレバ、安良熊是ヲキツト見テ、形ニ似セ又腕ダテカナ。先ゾ切剝ト下知スレバ、賊黨一度ニ抽キ揃ヘ、勢イカ、ツテ詰メカクレバ、高充元ヨリ葉流雄ノ、殊ニ力ハ石ヲ破リ鼎ヲ引裂大力ナレバ、</p>	<p>時ニ布留熊進出テ不畏氣ニ云様ワ、如何ニ花見ノ御冠者達、吾等ワ長ノ穿人ニテ、匱乏ガ為ノ經營ニ却奪ノ業仕ル。各々呉服ヲ脱テ賜アレ。左ナクハ押ヘテ剥取ント云ケレバ、神童丸仰ケル様ハ、穿人ナラバ哀ムベシ、金銀與ヨ高充ト。サモ穩當ニノ玉ヘバ、高充畏リ卿達ヲ後ヘマワシ挾テ、前ニ進ミ、ヤア惡盜ドモ我君ヨリ慈悲ノ惠ノ引出者、今高充カ引渡ス。近クヘ依テ頂戴セヨト云俣ニ、傍リヲ見レバ、岐路ノマダ新キ立木アリ。横ヒラ廣サ八寸余リ、四角ニ削、長サハ土底カケテ一丈二尺アリケルヲ、隻手拈ンテ、ツ、トヌキ、是ゾ賜ハル引出物、倚取セント云ケレバ、安良熊キツト見テ形ニ似ヌ腕ダテカナ、先切剝ト下辞スレバ、賊黨一度ニ抽揃、勢カ、ツテ詰カクレバ、高充元ヨリ兼流雄ノ、殊ニ力ハ石ヲ破鼎ヲ裂、立木ハ折ヨ碎ヨト、縦横無尽ニ打テ廻</p>

<p>ト見テ、形ニ似セン腕タテヤ、物ナ云セゾ切剥ト下知スレバ、賊黨一度ニ抽キツレテ、勢イカ、ツテ話カクレバ、高充元トヨリ葉流雄ノ、殊ニ力ハ石ヲ破リ鼎ヲ裂ク勇士ニテ、立木ハ折ヨ碎ヨト、縦横ニ廻レハ、眉間頂キ双ノ眉、手クヒ高股膝ノ節、アタルヲ幸イ此世ノ名コリ死出ノ山路ノ獄卒ガ罪人セメル如クニテ、歎キ大セイトハ申セトモ、立木一本千手ノ働キ散々ニ打碎レテ、少ニ残ル奴等モ叶ハシモノト、後ヲ見バ社逃失セケリ。</p>	<p>アレ氏布留熊安良熊ノ大ニ怒リ、牙ヲカミ、噫呼無念ナリ。小冠者ニカクハ仕成サレタル事ヤ。倚シクマントテ大手ヲ開キ、足踏シテ飛テ掛ルヲ、高充ニツコト打晒イ、汝等モ逃ヤラデ運ノ究ノ不便サヨト、云間ニ布留熊掛テツ、ト入ル。互ニ劣ヌ大力ニテ推ツ推サレツ、少時勝負ハ見エサリケル。</p> <p>サレ氏高充ハヤワラ把手ノ名人ニテ、何カシツラン。布留熊ガ右ノ</p>
<p>ハ折ヨ碎ヨト、縦横ニ打テ廻レバ、眉間頂キ雙ノ肩、手クビ高股膝ノ、節サンノニ打碎レ、百五十四人ノ賊利那ガ間ニ殺ルレバ、少ニ残ル奴等ハ叶ハジトヤ思、後ヲモ見ズコソ逃失ニケリ。</p>	<p>アレ共布留熊安良熊ハ大ニ怒、牙ヲカミ、噫無念ナリ。小冠者メニカクハ仕成レタル事ヤ。倚レクマントテ大手ヒロゲ、足踏シトシテデカ、ル。高充莞爾ト打晒、汝等モ逃ヤラデ運ノ極メノ不便ヤナト布留熊カ、レトツ、ト入。互ニ劣ヌ大力ナレバ推ツ推レツ少時勝負ハ付サリシ。</p> <p>サレ氏高充ハヤハラ取リノ名人ニテ、何ニトヤシツラン。右ノ手ノ</p>
<p>右ノ立木ヲ折ヨ碎ヨト、縦横ニ打テ廻レバ、眉間頂キ雙ノカタ、手クヒ高股膝ノ節、散々ニ打碎カレ、一百五十餘人ノ賊利那ガ間ニ殺レテ、少ニ残ル奴原モ叶ハジトヤ思ヒケン。後ヲモ見バ社逃失ケリ。</p>	<p>サレ共布留熊安良熊大ニ怒リ、牙ヲカミ、噫呼無念ナリ。小冠者ニカクハ仕成サレタル事ヤ。倚ヤクマントテ大手ヲ開ケ、足踏シテ飛デ掛ル。高充莞爾ト打笑ヒ、汝等モ逃ヤラデ運ノ究メノ不便サヨト。聞ヨリ布留熊ツツト入ル。互ニ劣ヌ大力ノ推ツ推サレツ、少時勝負ハ見ヘザリケリ。</p> <p>サレドモ高充ハ柔術把手ノ名人ニテ、何トカシケン。布留熊ガ右手</p>
<p>レバ、眉間頂キ双ノ肩手クビ高股膝ノサラサンノ、キイニ打碎カレ、百五十四人ノ賊利那ガ間ニ殺サルレバ、少カニ残ルヤツバラワ叶ジトヤ思ヒケン。跡ヲモ見バコソ逃失ケル。</p>	<p>アレ氏布留熊安良熊大ニ怒リ、牙ヲカミ、噫無念ナリ。小冠者ニカクハ仕成サレタル事ヤ。倚クマントテ大手ヲヒロゲ、足踏ノ飛デカ、ル。高充ニツコト打笑イ、汝等モ逃ヤラデ運ノ極力不便サヨ。布留熊カ、レトツ、ト入ル。互ニ劣ヌ大力ヲ、推ツ推レツ少時勝負ハ付サリシ。</p> <p>サレ氏高充ヤワラ把手ノ名人ニテ、何トヤシツラン。右手ノ脇ヲ</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>脇ツヨキ當身ニ少シ緩ム処ヲ高充スカサズハ子ノホツテ、ウツ伏ニトウト抛付、馬駕シ頭執ントセシカバ、安良熊ハセ付、後ヨリ高充ヲ曳倒ス。危カリケル次第也。</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>ハキヲ痛少シ、緩ム処ヲ、高充スカサズ、ウツ伏シニドウト抛、馬駕ニシツカト駕頸ニ切ラントセシカバ、安良熊後ロヨリ高充ヲ拽倒ス。</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p> <p>ノ脇痛メシカバ、少シ緩ムト見ヘシ處ヲ、高充透サズヒツツカミ、ウツ伏ニドウト抛グレバ、安良熊後ヨリ高充ヲ曳キ倒ス。</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p> <p>痛少シ緩ム処ヲ、高充透サズウツ伏テフト抛、馬乗ニシテ、シツカトヲサへ、頭取トセシカバ、安良熊後ヨリ高充ヲ引倒ス。</p>
<p>サレモ高充金剛力、ムツクトモ動カバコソ、悪シキ汝カ助力カナ。同穴ノ約セヨト、後手手ニ抓拈テ、二人並ベテ引シキメ手ニ、二人カ髻ヲシツカト執テ押へ、右ノ手ニハ扇キヲ開キ、汗ヲ入レ、アラ面白ノ花見ヤ腰ヲ掛テ、今日ノ花見ハ是ゾ此ノ頭拔ンヤ、敷ツフサンヤ伝處ニ、神童丸兼若御立ヨリ、適レ伊美シキ働キ哉。日本童男ノ威勢アリ。</p>	<p>高充ガ金剛力 少モ動ズ、悪キ汝ガ助手カナ。同穴ノ契約ヲ結ハセント抓拈 二人ナラベテ引シキ左手ニハ、二人ガ髻ヲシカト執テ押へ、右ノ手ニ扇ヲ開キ、汗ヲ入レ、アラ面白ヤコシカケテ、今日ノ花見ハコレゾ、是レ頸拔ンヤ、シキ禿ント曰処へ、神童兼若御立ヨリ、適レ伊美シキ働キカナ。日本童男威力有。</p>	<p>サレドモ高充ガ金剛力、ムツクト起キ上リ、悪キ汝ガ助力哉。同穴ノ契リセヨト、抓拈テ二人並ベテ引シキメ手ニテ、二人ガ髻ヲシツカト執テ押エ、右手ニテハ扇ヲ開キ、汗ヲ入レ、アラ面白ヤ腰掛ケテ、今ノ花見ハ是ゾ此ノ頸拔ヤ、敷ツブサンヤト云所エ、神童兼若御立ヨリ、適レ伊美ジキ働キ哉。日本童男ノ威勢有リ。</p>	<p>高充ガ金剛力、ムツクトヨキ、動ゼバコソニツクキ汝ガ助手哉。同穴ノ約セヨト、抓拈テ人ナラベ引鋪々、左手ニテ二人ガ髻ヲツカト執テ押へ、右手ニワ扇ヲ開、汗ヲ入、アラ面白ヤ人円座、今ノ花見ワ是ゾ此レ頭拔ンヤ、シキツブサンヤト云処へ、神童兼若御立ヨリ適レ伊美シキキタイノ動キ、日本童男ノ威力アリ。</p>
<p>去リナガラ高充ヨ、唯希ハ命ヲ資ケテ追拂エ。存スル者ノ有ルゾトテ、重々慈言淺カラス。高充承リ、君命ナレバ力無シ。命ハ助ケ得サスベシ。去リ乍ラ其身ニテ放チナバ、重テ禍イ仕出サント、懷中剃刀取出シ、兩人ノ頭ヲウツフセ、</p>	<p>去リナカラ高充ヨ、願クハ命ヲ資テ追拂。存ズル旨ノ有ルゾトテ、重々慈言淺カラス。高充承リ、君命ナレバ是非ナシ。命ヲバ得サスベシ。去リナガラ其身ニテ放チナバ、重テ禍イ仕出サント、クワイ中ヨリカミソリ取り出シ、二人頭</p>	<p>去乍ラ高充ヨ、唯希ハ命ヲ資ケテ追拂エ。存ル旨ノ在ルゾトテ、重々慈言淺ズ。高充承リ、君命ナレバ力無シ、命ハ助ケ得サスベシ。去乍ラ其身ニテ放チナバ、重テ禍イ仕出サント、懷中剃刀取出シ、兩人ノ頭ヲウツフセ、毛際ヨ</p>	<p>去乍高充ヨ、唯命斗ワ資テ追拂へ。存スル旨ノ在ゾトテ、慈言淺カラズ。高充承ワリ、君命ナレバ力ナシ。命ヲ資得サスベシ。去乍其身ニテ放チナバ、重テ禍ヒ仕出サント。コシ刀ニテ二人ノ頭ヲ散落々ト剃コホチ、双ノ耳ブ切テ捨</p>

○建曆二年
比叡山良頭の
室に入る

<p>毛際ヨリ散落タト刺コボシ、双ノ耳タフ切テ捨テ、二人カ太刀ガ微塵ニ打碎キ、ヨ、見事ナル法師ブリ、托鉢シテ渡リセヨ。無道ノ業無益トテ辛キ命ハ捨子氏、耳ノタブマデ失エハ、人ノ交リ成難シ。二人目ト目ヲ見合テ、舌クイ切テ死失タリ。高充カ働キ適レ希代ノ勇士ヤト、貴賤上下讃嘆セザルハ無リケリ。</p>	<p>ヲウツブセ、毛涯ヨリ散落トソリコボシ、双ノ耳タフ切テ捨テ、二人帶シ太刀ガ微塵ニ打碎キ、ヨ、見事ナ法師ブリ、托鉢シテ世渡リセヨ。無道業ハ無益トテ突放タレ。辛キ命ハ捨共、耳ノタブマデ失ナハバ、人ノ交リナルベシヤトテ、二人目ト目ヲ見合テ、舌クイ切テ死ニ失セリ。高充ガ働キ希代ノ勇士ヤトテ、少子ノ連ガ勅ヲ蒙リ、天雷ヲ捉エ来リシモカクヤトテ、貴賤上下推ナエテミナク讃嘆セザ者ゾナシ。</p>	<p>リ散落トト刺コボシ、雙ノ耳タフ切テ捨テ、兩人ガ太刀刀細微塵ニ打碎キ、ヨヲ見事ナル法師ブリ、托鉢シテ世渡リセヨ。無道業ナ無益トテ突放サレテ、兩人ハ辛命ハ助カレ共、耳ノタブ迄失ナエバ、人ノ交リ成難シト、二人目ト目ヲ見合テ、舌クイ切テ死失タリ。高充ガ働キ適レ希代ノ勇士ヤト、貴賤上下讃嘆セザルハナカリケリ。</p>	<p>テ、二人ガ佩シ太刀刀細ナ微塵ニ打碎ヲ見事ナ法師ブリ、托鉢ノ世渡リセヨ。無道業ヲ無益トソ突放タレ、辛命ヲ捨ヘ耳ノタブ迄失ヘバ、人ノ交リ成ベキヤ。二人目ト目ヲ見合テ、舌クイ切テ死タリケリ。高充カ働キ適レ希代ノ勇士ヤト、貴賤上下讃嘆セザル者ゾナシ。</p>
<p>四、若君夜半ニ遁叡山附高充尋 出申事</p> <p>其時建曆二年壬申、若君十三歳ニ成リ玉フ。三月六日ノ夜半ニツラツラ、思惟在ル様ハ、昨日ノ遊覽ニ落花ヲ見テ、無常ノ切ナルヲ悟ル。近頃頻ニ父上ノ御意、松殿ノ子ト成サントテ、家ノ榮華ヲ思召。嗚呼蝸牛角上何事ヲカ争ン。急ギ本意ヲ遂ヘシ、夜ヲ冒シテ潜洛陽ヲ出テ玉フテ叡山ニ登リ、良顯法師ニ依リ玉フ。法師大ニ驚愕シ、未タ少年身ノ如何ナル仔細</p>	<p>四二ハ若君夜半遁叡山之事 附將鑑高充尋奉ル事</p> <p>其ノ時キ建曆二壬申、若君十三歳ニ成リ玉フ。三月六日ノ夜半ニ、倩々思惟在様ハ、昨日ノ遊覽落花ヲ見テ、無常ノ切ナルコトヲ悟リ、近頃頻ニ父上ノ御意、松殿ノ子ト成サントテ、家ノ榮花ヲ思食。御意噫蝸牛角上何ニ事ヲカ争ハン。急ギ本意ヲ遂ケベシト、夜ヲ冒テ洛陽ヲ出デ玉フテ獨リ叡山ニ登。良顯法師ニ依リ玉フ。是ハ一家ノ法師ナル由ニテ、未タ少年身ノ如何</p>	<p>四 若君夜半遁叡山付高充尋出 申事</p> <p>其時建曆二年壬申、若君十三歳ニ成玉フ。三月六日ノ夜半ニ、ツラツラ、思惟在ル様ハ、昨日ノ遊覽ニ落花ヲ見テ、無常切ナル事ヲ悟ル。近頃頻ニ父上ノ意、松殿ノ子ト成サントテ、家ノ榮花ヲ思召。嗚呼蝸牛角上何事ヲカ争ン。急ギ本意ヲ遂可シ、夜ヲ冒テ潜洛陽ヲ出玉フテ叡山ニ登リ、良顯法師ニ依リ玉フ。法師大キニ驚愕、未少年ノ身ノ如何成ル子細ニ</p>	<p>四、若君夜半遁叡山付高充尋 出申事</p> <p>其時建曆二年壬申、若君十三歳ニ成玉フ。三月十日ノ夜半ニ、ツラツラ、思惟マシマス様ワ、昨日ノ遊覽ニ落花ヲ見テ、無常ノ切ナル事ヲ悟ル。近頃頻ニ父上ノ意、松殿ノ子ト成サントテ、家ノ榮花ヲ思意。嗚呼蝸牛角上何事ヲカ争ン。急ギ本意ヲ遂ヘシトテ、夜ヲ冒シテ潜洛陽ヲ出玉フテ叡山ニ登リ、良顯法師ニ依リ玉フ。法師大ニ驚愕、未少年身ノ如何ナル仔細ニヤ、供奉</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>ニヤ、供奉モナク唯孤登山アルコ怪シケレト、由ヲ尋子サセケレバ、若君ノ仰ニ、我カ千母臨薨ノ時ニシテ余レニ囑シテ曰、自ラ終焉出家シテ下沈淪ヲ濟イ、上佛果ヲ得セシメヨト。真ニ父母ハ形生ノ本也。養ハ以テ親恩ヲ報ズルニ足ラズ。故ニ悉多太子輪王ノ位ヲ捨テ、苦行六年御座テ、正覺ヲ取玉フ。遂ニ徳ヲ以テ親恩ヲ謝シ玉イヌ。サルカラ余カ意、白刃ハ冒スベク、飲食ハナル可トモ、晝極リ罔キニ於テ、此豈忘ルヘケンヤ。故ニ登山シテ師ヲ頼マイラスル。願クハ本意ヲ遂ケシメ給ヘト有ケレバ、良顯聞食、至哉出塵ノ志シ、妙ナル哉報恩ノ思イ、感激スルニ堪エ難シ。去リ乍ラ父通親ノ御心、又松殿ノ以為如何ガアラント、小縁ナラヌ善事タリ共、前後ノ料簡アルベシト有リケレバ、</p>	<p>ナル子細ニヤ、供奉モナク唯孤登山アルコソ怪シケレド、尋サセケレバ若君ノ仰ニ、我母臨薨ノ朝ニ余ニ囑シテ曰ク、身ヲ終焉出家シテ下沈淪ヲ濟ヒ、上佛果ヲ得セシメヨト。真ニ父母ハ形生ノ本ナリ。養ヲ以テ親恩ヲ報ズルニ足ズ。故ニ悉多太子モ輪王ノ位ヲ捨テ、苦行六年マシマシテ、正覺ヲ取リ玉フ。故ニ徳ヲ以テ親恩ヲ謝シ玉イヌ。サルカラニ余カ意、白刃ハ冒スベク、飲食ハ無カルベク共、昊天ノ極リナキヲイテモ、是レ豈ニ忘ベケン。故ニ登山仕テ師ヲ頼ミマヒラスル願ハ、本意ヲ遂ゲシメ給ヘトアレバ、良顯聞之テ、至哉出塵ノ志、妙ナル哉謝恩ノ思氣、感激スルニ堪ガタシ。乍ラ去父通忠ノ心、又夕松殿ノ以為如何アラシ。小縁ナラヌ善事ナレ共、前後ノ料簡アルベシト有リケレバ、</p>	<p>ヤ、供奉モ無ク唯孤リ登山有ル社怪シケレト、子細ヲ尋サセケレバ、若君ノ仰ニ、我母臨薨ノ朝ニハ餘レニ囑シテ曰、自ラ終リ焉出家シテ下沈淪ヲ濟イ、上佛果ヲ得セシメヨト。眞如淨父母ハ形生ノ本也、養ハ以テ親恩ヲ報ズルニ足ラズ。故ニ悉忠太子輪王ノ位ヲ捨テ、苦行六年マシマシテ、正覺ヲ取玉ヒ、遂ニ徳ヲ以テ親恩ヲ謝シ玉ヒヌ。サルカラニ餘ガ意、白刃ハ冒ス可ク、飲食ハ無ル可クトモ、昊天極リ無キニ於テ、此豈忘ルベケンヤ。故ニ登山シテ師ヲ頼ミマイラスル願ハ、本意ヲ遂ゲシメ給エト有レバ、良顯聞食、至哉出塵之志シ、妙哉報恩ノ思、感激スルニ堪エ難シ。乍ラ去父通親ノ心、又松殿ノ以為如何ト、小縁ナラズ善事タリ共、前後ノ料簡アル可シト有リケレバ、</p>	<p>モナク唯孤登山アルコソ怪ケレト、由ヲ尋サセケレバ、若君ノ仰ニ我母臨薨ノ朝ニ余ニ囑ノ曰ク、自終焉出家シテ下沈淪ヲスクヒ、上佛果ヲ得セシメヨト。眞ニ父母ハ形生ノ本也。養ヲ以テ親恩ヲ報ズルニ足ズ。故ニ悉達太子モ輪王ノ位ヲ捨テ、苦行六年マシマシテ、正覺ヲ取玉ヒ、遂ニ徳ヲ以テ親恩ヲ謝シ玉ヒヌ。去カラニ余カ意、白刃ヲ冒ヘク飲食ハ無ル可トモ、昊天極罔於テ、此レ豈ニ忘ルヘケンヤ。故ニ登山シテ師ヲ頼マヒラスル願、本意ヲ遂シメ給ヘトアレバ、良顯聞之、至レル哉出塵ノ志、妙ナル哉報恩ノ思ヒ、感激スルニ堪エガタシ。去乍父通忠ノ心中、又松殿ノ以為如何ナラン。小縁ナラン善事タリトイヘ氏、前後ノ了簡アルベシト有ケレバ、</p>
<p>二人の老翁 (山王・客人) 出現</p>	<p>二人の老翁見レテ云ク、善哉ヤ小人ハ希有ニシテ来ル。真ノ佛子ノ菩薩也。宜ク以テ愛護セヨ。</p>	<p>二人の老翁見レテ曰、善哉、少人希布ニシテ来。是真ノ佛子ノ菩薩ナリ。宜ク以テ愛護セヨ。他</p>	<p>二人の老翁見レテ云ク、善哉々々、少人ワ希有ニシテ来ル。是真ノ佛子ノ菩薩ナリ。宜ク以テ愛護</p>

<p>化^{ワケ}ニ遊シムル事ナカレ。吾ハ是山主、我ハ是客人ト、言^{イハ}テ見エ玉ハズ。良顯奇異ノ思ヲナシ、御蹤ヲ伏シ拜ミ、若君諸トモニ感涙袖ヲ湿セリ。</p>	<p>父、高充を遣わし慰撫 時ニ良顯宿誓ノ大士成ル事ヲ知リ、先此方ニ御在トテ愛護斜メナラザリキ。扱テ洛陽ニ御座通親公ヤ、御一門ノ方々、角トワ夢知ロシメサテ、若ハ何地ヘ井ニシトテ、愕蹠^{ワロキ}歎敷、四方ヘ人ヲ遣シ、尋子玉フス道理ナル。高充告シケレハ、若君兼テ遁世ノ御志深ケレハ、三井寺ガ在無ハ叡山ニマシマス可シ。某申尋子奉ント告シ上レバ、通親聞食、言處然アルヘシ。急キタツ子ヨト仰セアル。高充ハ畏リ到^チ叡山ニ尋子シカバ、果ノ若君ニ値奉ル。高充恐悅限リ無ク、先申上ケルハ、サスガ賢慮トモ覺エス。乍レ恐道ニ戻セ玉フニツアリ。一ワ若君見エ玉ハ又故、父上ノ御心ヲ察シ玉エ。御一門ノ方々迄、人ヲ手分ニ尋子シメ、其嘆^{ナゲ}キ忍ヒ難クマシマス、積牛ノ母ヲ尋ルニ異ナラズ。何ゾヤ孝子</p>
<p>ニ遊バシムル事ナカレ。吾^{ワレ}是レ山王、吾ハ是レ客人ト、言^{イハ}ヘテ見ヘ玉ハズ。良顯奇異ノ思ヲナシ、御蹤ヲ伏シ拜ミ、若君諸共、感涙袖ヲ湿セリ。</p>	<p>時ニ即チ誓^{チカ}ノ菩薩ナルヲ知リ、先此ノ方ニ御在トテ、愛護斜ナラズ。扱テ洛陽ニ御在座通忠公、御一門ノ方々、カクトハ夢モ知シロシメサレズ、若シハ何地ヘイニシトテ、愕^{ワロキ}蹠^{サハキ}歎敷、四方ニ人ヲ遣シ尋玉フ道理ナリ。高充告シ上ケルハ、若君兼テ御遁世ノ御志シ深カリケレバ、三井寺カ左ナクバ叡山ニマシマスベシ。某甲尋奉ルラント告上ケレバ、通忠聞召、言處シカアルラン。急キ尋ヨト仰セラル。高充畏リ叡岳ニ到リ尋シカバ、果シテ若君ニ値奉リ、高充恐悅限リナク、先申上ケルハ、サスガ御賢慮共覺ヘズ。恐ナカラ道チニ戻ラセ玉フ事ニツニアリ。一ニハ君見ヘサセ玉ハ又故、父上ノ御心ヲ察シ玉ヘ、御一門ノ方々迄テモ、人ヲ手分ニ尋サシメ玉フ。其ノ御嘆^{ナゲ}、忍ガタクマシマス事、</p>
<p>ヨ。他ニ遊バシムル事無レ。吾ハ是山王、我ハ是客人ト、宣^{ノラ}テ見エ給ハズ。良顯奇異ノ思ヒヲナシ、御蹤ヲ伏シ拜ミ、若君モロ共ニ感涙袖ヲ濕セリ。</p>	<p>時ニ良顯宿誓ノ大士ナル事ヲ知リ、先此方ニ御在トテ、愛護斜ナラザリキ。扱テ洛陽ニ御座ス通親公オヤ、御一門ノ方々、角トハ夢ニモ知シメサテ、若ハ何地エキニシトテ、愕^{ワロキ}蹠^{サハキ}歎敷、四方エ人ヲ遣シ尋玉フ道理也。高充告シケルハ、若君曾テ御遁世ノ御志シ深ケレバ、三井寺カ左無バ叡山ニマシマス可シ。某シ尋奉ラント告上ツレバ、通親聞食、汝ガ言處左モ有ベシ、急キ尋ヨト仰ラル。高充ハ畏リ到^チ叡山ニ尋子シカバ、果シテ若君ニ値イ奉リ、高充恐悅限リ無ク、先ツ申上ケルハ、サスガ賢慮トモ覺ズ。乍レ恐道ニ戻ラセ給フ事ニ有リ。一ニハ君見エサセ給ハ又故、父上御案ジ御察シ有可シ。又御一門ノ方々迄、人ヲ手分ケニ尋ネシメ、其嘆^{ナゲ}キ忍ヒ難クマシマス事、積ノ母ヲ尋ヌルニ異ナラ</p>
<p>セヨ。他ニ遊バシムル事ナカレ。吾ワ是山王、吾ワ是客人ト言テ見ヘ玉ワズ。良顯奇異ノ思ヲナシ、御蹤ヲ伏シ拜キ、若君モロ共ニ感涙袖ヲ濕セリ。</p>	<p>時ニ良顯宿誓ノ大士ナル事知リ、先ス此方ニ御在マセトテ、愛護斜ナラザリキ。扱テ洛陽ニ御坐在ル通忠公ヤ、御一門ノ方々、カクトワ夢ニモ知ロシメサテ、若ワ何地エ井マシトテ、蹠^{ワロキ}愕^{サハキ}歎カセ玉ヒ、四方ヘ人ヲ遣シ尋玉フ道理ナリ。高充告シケルハ、若君曾テ御遁世ノ御志シ深カリケレバ、三井寺カ左ナクバ叡山ニマシマスベシ。某シ尋子奉ント告シ上ケレバ、通忠聞食言處然アル。急キ尋ヨト仰ラル。高充畏リ到^チ叡山ニ尋子シカバ、果ノ若君ニ値奉リ、高充恐悅カキリナク、先ツ申上ケルハ、サスガ賢慮トモ覺ヘズ、恐乍道ニ戻ラセ玉フ事ニアリ。一ワ君見ヘ玉ワ又故、父上ノ御意ヲ察シ玉ヘ。御一門ノ御方々迄、人ヲ手分ニ尋シメ、其嘆^{ナゲ}、忍ヒ難クマシマス事、積ノ母ヲ尋ルニ異ナラズ。</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>トシテ父ヲ泣シメ、親屬ヲ愁シメテ是子タルノ道ナルヤ。二ツニハ某甲ガ如キ真ニ無智不肖ニノ員ナラヌ身ナレト、父上ノ恩賞ヲ戴キ、御君ノ後見トノ一日モ御左右ヲ離レズ、身命ヲ惜マズ事ルベキ彼カ志明疎ミマスヤアルナト、芥子斗リモ知ラセ玉ハテ、カクハ在ラセ玉フ者カ。</p>	<p>憤ノ母ヲ尋ルニ異ナラズ。何ソヤ孝子トシテ父ヲ泣カシメ、親族ヲ愁シメ玉フ事、子タルノ道ナルヤ。二ニハ某甲シガ如キ真無智不肖ニテ員ナラン身ナレ共、父上ノ恩賞ヲ戴キ、君ノ御後見トシテ、一日モ御左右ヲハナレズ、身命ヲ惜ス事ルベキヤカレガ志疎マシマス事アル。芥子計リモ告テ知ラセ玉ハテ、カクハアラセ玉フ者カナ。</p>	<p>ズ。何ゾヤ孝子トシテ父ヲ泣シメ、親屬ヲ愁シメテ是子タルノ道ナルヤ。二ニハ某甲ガ如キ真ニ無智不肖ニシテ、員ナラヌ身ナレドモ、父君ノ恩賞ヲ戴キ、御後見トシテ、一日モ御左右ヲ離レズ、身命ヲ惜シマズ仕フマツル可キヤツガレガ志モ、疎ミマス事ヤアル。芥子計リモ告知ラセ給エテ、カクハ有可キ也。</p>	<p>何ゾ孝子トシテ父ヲ泣シメ、親族ヲ愁ヒシメテ是子タルノ道ナルヤ。二ニワ某カ如キ真ニ無智不肖ニノ、員ナラヌ身ナレト、父上ノ御恩賞ヲ戴キ、御君ノ後見トノ一日モ御左右ヲ離レズ、身命ヲ惜マズ、事ルベキヤツカレガ志モ、跡マズ事ヤアル。芥子計リモ告知ラセ玉ワデ、カクワアラセ玉フ者哉。</p>
<p>然レバ父上、父上エノ君臣ノ道欠ケタルニ似タリ。乍レ去今恩顔ヲ拜スルコト、飢テ嘉膳ニ會ウ如ク、渴シテ甘泉ヲ得タルニ似タリ。僕カ幸イ恐ラクハ、主従ノ約浅カラヌ故ナリ。唯願ハ速ニ洛ニ還御マシテ、父上ノ愁ヲ消シ、御一門ノ憂ヲ慰諭シ玉エトテ、世ニ猛キ武力眼蓋ニ泪ヲ包ミ、愁色面ニ忍カ子、伏敬ノ勸メマイラスルヲ、良頭ヲ初メ有會僧侶、通親ノ愁情又高充カ忠節ヲ感シ、各々衣ノ袖ヲ湿セリ。依テ緇素諸共ニ若君ヲ</p>	<p>然ラバ父子君臣ノ道欠タルニ似タリ。去ナガラ今恩顔拜シ奉ル事、飢テ嘉膳ニ會ガ如ク、渴シテ水ヲ得タルニ似タリ。僕ガ幸イ恐クハ、主従ノ約リ浅カラヌ故エナリ。唯願ハ速ニ洛へ還御マシマシテ、父上ノ愁火ヲ消シ、御一門ノ憂ヲ慰諭シ玉ヘトテ、世ニ猛キ武士ガ眼蓋泪ヲ包ミ、愁色面ニシノビ兼、伏敬テ勸マイラセスルヲ、良頭ヲ始メ有會ノ僧侶マテ、通忠ヲ愁情又夕高充カ忠節ヲ感シ、各々衣ノ袖ヲ湿シケリ。仍</p>	<p>然レバ兩道缺ケタルニ似タリ。乍レ去命恩顔ヲ拜スルコト、飢テ美膳ニ會フガ如ク、渴シテ水ヲ得タルニ似タリ。僕ガ幸ヒ恐ラクハ、主従ノ約リ浅カラヌ故ナリ。唯願ハ速ニ洛ニ還御マシマシテ、父上ノ愁ヲ消シ、御一門ノ憂ヲ慰諭シ玉エトテ、世ニ猛キ武士ガ眼蓋ニ泪ヲ包、愁色面ニ忍ビ兼、伏敬テ勸メマイラスルヲ、良頭ヲ初メ有會フ僧侶迄、通親ノ愁情又高充ガ忠節ヲ感シ、各々衣ノ袖ヲ濕セリ。依テ緇素諸共ニ若君ヲ誘</p>	<p>然レバ父子君臣ノ道欠タルニ似タリ。去乍今恩顔ヲ拜スル事ワ、飢テ喜膳ニ逢カ如ク、渴ノ水ヲ得タルニ似タリ。僕カ幸恐ク、主従ノチギリ浅カラヌ由ヘナリ。唯願ワ速洛陽へ還郷マシテ、父上ノ愁火ヲ消、御一門ノ憂ヲ慰諭シ玉ヘト、世ニ猛キ武者ガ眼蓋ニ涙ヲ包ミ兼、愁色面ニ忍ヒ兼、伏シ敬テ勸マヒラスルヲ、良頭ヲ初、有會僧侶マデ、通忠公ノ愁情又高充ガ忠節ヲ感シ入、各々衣ノ袖ヲ濕セリ。仍テ緇素諸共ニ若君ヲ誘テ</p>

誘テ洛ニ皈シマイラセント勸奉レト。

若君益々出家ノ信心固シテ、仰セケルハ、父上ノ憂イ一門ノ悲ミ亦ヲコトガ言フ處、皆人間ノ愛執生死ノ媒也。苟モ余的ニ有愛ノ家ヲ出テ真人ノ道明ニ極メナハ、六親九族生天ノ幸、當來ノ善因ナリ。乃イ却テ慮思セバ、是一旦ニ背ニ似テ、還テ報恩ノ道ヲ妨クヘシ。唯今忠節ヲ余ニ尽ス。何ゾ空ク捨ニ結縁ノ最淺カラヌ程、後日ニ思ヒ當ルヘシ。早ク洛エ立皈リ、此旨ヲ語ルヘシ。設日ハ涼カレハ、更ニ移サヌ余意ソト仰セケレバ、高充モ今ハ力無ク、先洛エ皈リ、由ヲ申シ上ヘシトテ、一首ノ歌ヲ讀ケリ。

○吾力アラリトナ云ゾ岩ヲナル君ノ意ヲ移シカタレバ
若君モ亦不レ摺 御返歌ニ
○吾心岩ヲト言ゾイタツラニ法ノ道ニモ拽レ來ヌレバ

テ縊素諸トモ若君ヲ誘テ洛ニ皈シマイラセントス。

若君出家信心堅固ニシテ、仰セケルハ、父上ノ憂イ一門ノ悲ミマタヲ事ガ言ウ心、ミナ人間ノ愛執生死ノ媒ナリ。苟モ余レ的ニ有愛ノ家ヲ出テ、真人ノ道明ニ極メナハ、六親九族生天ノ幸イ、當來ノ善因ナリ。イマシイアエテ恨ミ思イセゾ、是レ一旦親思ニ背ニ似テ、報恩ノ道ヲ廣シ。且イマシイ節ヲ余ニ尽ス。マタナンゾヤ。空ク捨ニ結縁ノ取淺カラヌ程、後日ニ思當ルベケン。早ク洛ニ回リ、コノ旨ヲ語ルベシ。設日ハ涼シカルベク、月ハ暑カルベク共、更ニ移サン吾カ心ソト仰セケレバ、高充今ハ力無ク覺エ、先ツ洛ニ皈リ、申由ヲトテ、一首ノ歌ヲ讀テ上リケル。

○我カ力アリトナ云ゾ岩ヲナル君ノ意ヲウツシカヌレバ
若君モ又タ不摺シテ御返歌有リ。
○吾カ意イハホト言ゾ徒ニ法ノ道ニモ拽レキヌレバ。

テ洛ニ歸シマイラセントス。

若君益々出家ノ信心固フシテ、仰ケルハ、父上ノ悲ミ一門ノ憂イ又ヲコトガ言フ處、皆人間ノ愛執生死ノ媒也。苟モ吾レ的ニ有愛ノ家ヲ出テ真人ノ道明ニ極メナハ、六親九族生天ノ幸ヒ、當來ノ善因成リ。乃チ却テ慮思イセバ、此一旦親思ニ背ニ似テ、還テ報恩ノ道ヲ廣シ。唯今忠節ヲ餘ニ盡ス。何ゾヤ、空ク捨ニ結縁ノイト淺カラヌ程、後日ニ思當ル可シ。早ク洛エ回リ、此旨ヲ語ルベシ。設日ハ冷カナル可ク、月ハ暖ナルベクトモ、更ニ移サヌ餘ガ意ソト仰セケレバ、高充今ハ力無ク先洛エ歸リ、此由申上可シトテ、一首ノ歌ヲ讀ケリ。

吾ガ力有トナ云ゾ岩ヲナル君ノ意ヲ移シ兼ヌレバ、
若君モマタサシヲカズ御返歌ニ、
吾ガ心岩ヲト言ゾイタツラニ法ノ道ニモ拽來ヌレバ、

洛ニ皈シマイラセントス。

若君マス々出家ノ信心固シテ、仰ケルワ、父上ノ憂イ一門ノ悲、マタヲコトガ言フ心、皆人間ノ愛執生死ノ媒ナリ。苟モ余的ニ有愛ノ家ヲ出、真人道明ニ極メナハ、六親眷属生天ノ幸、當來ノ善因ナリイマシイアヘテウラ思ヒセゾ、是レ一旦親ニ背ニ似テ、還テ報恩ノ道ヲ廣シ。且イマシ節ヲ余ニ尽ス。ナゾヤ、空ク捨ニ結縁ノ井ト淺カラヌ程、後日思當ケレ。早ク洛ニカヘリ此旨ヲ語ルヘシ。設日ワ涼カナルベク、月ハ暑カルベク共、更ニ移サヌ余心ソト仰セケレバ、高充今ハ力ナク覺。先洛ニ歸リ、此由申上ベシトテ、一首ノ歌ヲ讀ケリ。

吾力アリトナ云ゾイワホナル君ノ意ヲウツシカヌレバ
又若君モ不摺テ御返歌ニ
吾心イワホト言ゾ徒ニノリノ道ニ拽シキヌレバ

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>	
<p>出家許容 トアソバシケル。高充弥々感心シ、拜辭ノ洛ニ皈リ、様子具ニ言上シケレバ、通親松殿御一門ノ方々、其ノ羈絆スヘカラサルヲ知シメシ、遂ニ許シマス。故ニ若君今ハ出家ノ礙ナクテ、吾思俣トテ御怡限リ無シ。</p>	<p>高充弥々感心シ、拜辭申テ洛陽ニ皈リ、様子具ニ言上シケレバ、松殿通忠御一門ノ方々、其ノ羈絆スベカラサル事ヲ知シ食シ、遂ニ是レヲ許シマスナリ。故ニ若君今ハ出家ノ礙リナシ。思フ俣ニトテ御怡ハ限リナシ。</p>	<p>ト有リケレバ、高充彌々感心シ奉リ、拜辭シテ洛ニ歸リ、様子具ニ言上シケレバ、松殿通親御一門ノ方々、其ノ羈絆スベカラザル事ヲ知ロシメシ、遂ニ是ヲ許シマシケリ。故ニ若君今ハ出家ノ礙ナシ。是ヨリ我思フ儘ナリトテ御悦ハ限リナシ。</p>	<p>ト。高充イヨク感心シ、拜辭申ノ洛ニ皈リ、様子具ニ言上シケレバ松殿通忠御一家ノ方々、其羈絆スベカラザル事ヲ知シメシ、遂ニ是ヲ許シマスナリ。故ニ若君イマワ出家ノ礙ナシ。思フマ、ニトテ御怡ハ限リナシ。</p>	
<p>○建保元年 横川にて剃髮 戒壇院にて受戒</p>	<p>五、蓮常法師神罰ヲ蒙ル事附三輪示現事 于時人王八十四代須德天王ノ建保元年癸酉ニ、若君十四歳ニナリ玉フ。此年四月上旬ニツラツラ思召様ハ、悉多太子ノ御出胎及出家マシマス日ハ、共ニ四月八日トヤ。縁起宜ク思ナリト。則チ横川首楞嚴院ニ至テ剃髮染衣ノ体ニナリ、神童ヲ改テ希玄ト稱シ上ル。然シテ延曆寺ノ戒壇ニ登リ、具足戒ヲ受玉フ。聰惠人ニ絶レ、廣ク大小ノ三藏ニ通達マシマス故、台家ノ僧徒希玄ヲ以テ魁トス南都北京ニ秀タル碩学ノ倫ト問論往復スルニ、智箭言鈍ノ利キ事、邪ヲ折リ</p>	<p>五ニハ若君出家并ニ蓮常法師神罰ヲ蒙ル事附三輪示現之事 時二人王八十四代順德天皇ノ建保元年癸酉ニ、若君十四歳ニ成リ玉フ。此ノ年四月上旬ニ倩々思召ル、ハ、悉多太子ノ御出胎及ヒ出家マシマス日ハ、共ニ四月八日トヤ。縁起ヨロシク思フナリトテ、便チ横川首楞嚴ニ投リテ剃髮染衣トナラセテ、神童丸ノ御名ヲ改メ希玄ト稱シ奉ル。然シテ延曆寺ノ戒壇ニ登リテ、具足戒ヲ受ケ玉フ。聰惠人ニ絶レ、廣ク大小ノ三藏ニ通達マシマス故、台家ノ僧徒希玄ヲ以テ魁トス。南都北京ニ秀タル碩学ノ倫ト、問論往復ス</p>	<p>五 蓮常法師神罰ヲ蒙ル事付三輪示現之事 于時人王八十四代順德天皇ノ建保元年癸酉ニ、若君十四歳ニ成給フ。此年四月上旬ニツラツラ思召ハ、悉多太子ノ御出胎及ヒ出家マシマス日ハ、共ニ四月八日トヤ。縁起宣布思フ也トテ、則チ横川ノ首楞嚴院ニ到テ剃髮染衣ノ體キニ成リ、神童ヲ改テ希玄ト稱シ上ル。然テ延曆寺ノ戒壇ニ登リ、具足戒受給フ。聰惠人ニ絶シ、廣ク大小ノ三藏ニ通達マシマス故、臺家ノ僧徒希玄ヲ以テ魁トス。南都北京ニ秀タル碩学ノトモガラト、問論往復スルニ、智箭言鈍ノ利キ</p>	<p>五、蓮常法師神罰ヲ蒙事付三輪示現ノ事 于時人王八十四代順德天皇ノ建保元年癸酉ニ、若君十四歳ニ成玉フ。此年四月上旬ニツラツラ思召ル、ハ、悉多太子ノ御出胎及ヒ出家マシマス日ハ、共ニ四月八日トヤ。縁起宜ク思フナリトテ、便チ横川ノ首楞嚴院ニ投リテ剃髮染衣ナラセテ、神童ノ御名ヲ改メ希玄ト稱シ上ル。然ノ延曆寺ノ戒壇ニ登テ、具足戒ヲ受玉フ。聰惠人ニ絶レ、廣ク大小ノ三藏ニ通達マシマス。故台家ノ僧徒希玄ヲ以テ魁トス。南都北京ニ秀タル碩学ノ倫ト、問論往復スルニ、智箭言鈍ノ利事</p>

蓮常法師の悪
逆

<p>正ヲ立テ、敢テ敵シ中ル者無シ。</p>	<p>○建保二年 同建保二年甲戌ノ秋八月二日ノ事ナルニ、鞍馬寺ニ学僧在リ。其名ヲ蓮常法師ト云。大概ハ三藏ヲ閱シ粗文章ノ事モ得ニケリ。只名ヲ貪リ利ニ歛、憍慢降シ難ク、邪見伏セズ。故ニ希玄ノ性智超倫ノ名高ク、緇白共ニ貴ヒケルヲ、妬ミ増テ屈辱セシメント思ヒ、數回論席ニ臨テ鋒刃ノ舌ヲ振ウト云トモ、螢火力灯火ヲ嫉、蟻螂ガ龍車ヲ拒ムニ殊ナラス。却テ自ラ辱シメラル。然レ自慢止ズシテ、憤リ尚深ク毒ヲマイラセテ殺サハヤト謀リケレハ、天俄ニ攪曇、震動雷電シ、風林ヲ倒シテ寒シリ、車軸ノ雨岩ヲ碎ク計リニテ、其醜キ一肝魂モ滅スル氣色ナリケルガ、法師ハ忽チ面色變リ、身振シ手足縮リ嚙ンテ、言事叶ハズ。サモ苦ルシゲニ見エシガ、頸ハ何地エカ抜ウセケン。只ムクロノミアリケリ。時ノ人口号ニ、嗚呼畏ロシヤ慎レ之ヨ。天道ニ私無シ。善ヲ賞シ惡ヲ罰ス。無道ノ法師ハ次郎坊ニ非</p>
<p>ルニ、智箭言鈍ノ利キ事、邪ヲ折正ヲ立テ、敢テ敵シ中ル者ナシ。</p>	<p>同建保二年甲戌ノ秋八月二日ノ事ナルニ、鞍馬寺ニ学僧アリ。其名ヲ蓮常法師ト云。大概ハ三藏ヲモ閱シ、粗文章ノ事ヲモ得ニケレト只名ヲ貪リ利ニ歛リ憍慢降リシカタシ。邪見伏シ難シ故ニ、希玄ノ性智超倫ノ名高ク、緇白共ニ貴ヒケルヲ、妬僧テ屈辱セシメント思ルニ、數回論席ニ臨テ鋒刃ノ舌ヲ振ト云ト、子ガ燈火ヲ嫉、蟻螂ガ龍車拒ムニ殊ナラス。却テ自ラ辱メラル、事ヲ。然レ共自慢ヤマズシテ、憤リナヲ深ク、毒ヲマイラセテ殺サバヤト謀ケレバ、天俄ニカキクモリ、震動雷電シ、風モ林木ヲ倒シ寒ク、車軸ノ雨メ岩ヲ碎ク計ニテ、其ノ醜キ事魂イモ滅ル氣色ナリケルガ、法師ハ忽チ面色變リ、身振シ手足縮リ嚙ンテ、言事叶ハズ。サモ苦シゲニ見ヘシガ、頸ハ何國拔失シヤ。只ムクロノミアリケリ。時ノ人口号チ号ンテ、嗚呼畏ノ慎レ天道ニ私シナク善ヲ賞シ惡ヲ罰ス。無道</p>
<p>事ヤ、邪ヲ折キ正ヲ立テ、敢テ敵シ申者無シ。</p>	<p>同建保二年甲戌ノ秋八月二日ノ事成ガ、鞍馬寺ニ学僧在リ。其名ヲ蓮常法師ト云。大概ハ三藏ヲ閱シ、粗文章ノ事モ會得セリ。只名ヲ貪リ利ニ歛、憍慢降シ難ク、邪見甚シキ故ニ、希玄ノ性智超倫ノ名高ク、緇白共ニ貴ケルヲ、妬僧テ屈辱セシメント思ヒ、數回論席ニ臨テ鋒刃ノ舌ヲ振トイエドモ、螢ガ燈火ヲ嫉、蟻螂ガ龍車ヲ拒ムニ殊ナラス。卻テ自ラ辱シメラル。然レドモ自慢止ズシテ、憤リ尚深ク、毒ヲマイラセテ殺サバヤト謀リケレバ、天俄ニ攪曇リ、震動雷電シ、風鈴木ヲ倒テ寒ク、車軸ノ雨岩ヲ碎ク計ニテ、其恐シキ事肝モ魂モ消ル計也ケルガ、法師ハ忽チ面色變ジ、身振シテ手足縮リ嚙ンテ、言事叶ハズ。サモクルシゲニ見ヘケルガ、頸ハ何國ハ拔ウセシ、只ムクロノミアリケリ。時ノ人口号ニ、嗚呼恐ロシヤ慎メヨ。天道ニ私無ク善ヲ賞テ惡ヲ罰ス。無道法師ハ次郎坊ニ非則バ、太郎坊ノ</p>
<p>ヤ、邪ヲ折キ正ヲ立テ、敢テ敵シ中ル者ナシ。</p>	<p>同建保二年甲戌ノ秋八月二日ノ事ナルガ、鞍馬寺ニ学僧アリ。其名ヲ蓮常法師ト云。大概ハ三藏ヲモ閱シ、粗文章ノ事モ得ケレバ、只名利ムサボリ憍慢降シカタク、邪見伏セズ。故ニ希玄ノ生知超倫ノ名高ク、緇白共ニ貴ヒケルヲ、妬僧テ屈辱セシメント思ヒ、數回論席ニ臨テ鋒刃ノ舌ヲ振トイヘトモ、子ガ燈火ヲ、常ニ蟻螂ガ龍車ヲ拒ムニ殊ナラス。却テ自ラ辱ル。然レ自慢猶ヤマズシテ憤リ深ク、毒ヲマイラセテ殺サバヤト謀ケレバ、天俄ニカキクモリ、震動雷電シ、風林木ヲ吹倒ノ寒ク、車輪ノ雨山クズル計ニテ、其ヲソロシキ事肝魂モ滅ル氣色ナリケルガ、法師ハ忽チ頭ヲ何地ハ拔ウセシソ。只ムクロ計ゾノコリケル。時ノ人口号テ、ア、畏レ之慎メヨ。天道ニ私ナク善ヲ賞シ惡ヲ罰ス。無道法師ヤ次郎坊ニアラスンバ、太郎坊ノワザナラントゾ云ケルナリ。希玄危キ</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>ラズンバ、太郎坊ノワサナラント云ケル。希玄危キ毒害ヲ免レ玉フ事ハ、単エニ自善ノ力、亦ハ冥顯ノ加護、恆ニ新ニマシマセバナリ。</p>	<p>法師也、次郎坊ニ非ズンハ、太郎坊ノ業ナラントソ云ケルナリ。希玄危キ毒害ナランヲ免カレ玉フ事ハ、單ニ自善ノ力、且冥顯ノ加護、恆ニ新ニマシマセバナリ。</p>	<p>ワザナラントゾ云ケル。希玄危キ毒害ヲ免レ玉フ事ハ、單ヘニ自善ノ力、又ハ冥顯ノ加護、恆ニ新ニマシマセバ也。</p>	<p>毒害ノ難ヲ免レ玉フ事ワ、單ニ自善ノ力、且冥顯ノ加護、恆ニ新ニマシマセバナリ。</p>
<p>○建保三年 建仁寺栄西の 室に入る</p> <p>同建保三歳乙亥ノ正月ノ十日、密ニ思召ケルハ、吾歳早ヤ十六歳、既ニ入学以來内外ノ經傳、凡ソ古今ニ暗カラヌト雖モ、法心法性ノ迷イ言外ニ超然タル。更ニ是ヲ明メガタシ。聞バ此頃建仁榮西禪師ハ、台密禪ノ三宗ヲ兼主サトリ、實ニ希代ノ明師タリトテ、遂ニ往テ西公ニ參ジ玉フ。一見マシマシテ法器ト稱シ、便チ侍者ニ任セラレタリ。希玄親ク西公ニ事エテ、參話入室精誠ヲ尽シ玉エバ、倍々智見猛利ナリ。</p>	<p>同建保三年乙亥正月ノ十日ニ、密ニ思食ケルハ、吾歳早ク十六歳ニ、入学以來内外ノ經傳、ヨソノ暗カラヌト雖モ、法心法性ノ迷イ言外ニ超然タルヤ。更ニ是ヲ明メガタシ。聞ハ此頃建仁ノ榮西禪師ハ、台密禪ノ三宗兼主ト。實ニ希代ノ明師タリトテ、遂ニ往テ西公ニ參ズ。公一見シテ法器ト稱シ、便チ侍者ニ任ゼラル。希玄親ク西公ニ事テ、參話入室精誠ヲ尽シ玉ヘハ、倍々智見猛利ナリ。</p>	<p>同建保三年乙亥ノ正月ノ十日、密ニ思食シケルハ、吾年早ヤ十六歳、既ニ入学以來内外ノ經傳、凡ソ古今ニ暗カラズト雖モ、法心法性ノ迷ヒ言外ニ超然タルヤ。更ニ是ヲ明メ難シ、聞バ此頃建仁ノ榮西禪師ハ、臺密禪ノ三宗ヲ兼主サドリ、實ニ希代ノ明師也トテ、遂ニ往テ西公ニ參ジ玉フ。公一見マシマシテ法器ト稱シ、便チ侍者ニ任セラレタリ。希玄親ク西公ニ事テ、參話入室精誠ヲ盡シ玉ヘバ、倍々知見猛利也。</p>	<p>同建保三年乙亥ノ正月ノ十日、密ニ思食ケルワ、吾歳早ク十六歳也。已ニ入学以來内外ノ經傳、凡古今ニ黒カラズト雖モ、法心法性ノ迷ヒ言外ニ超然タル也。更ニ是ヲ明メガタシ。聞バ此頃建仁ノ榮西禪師ワ、台密禪ノ三宗ヲ兼主リ、實ニ希代ノ明師タリトテ、遂ニ往テ西公ニ參シ玉フ。西公一見マシテ法器ト稱シ、便チ侍者ニ任ゼラル。希玄親ク西公ニ事テ、參話入室精誠ヲ尽シ玉ヘバ、倍々知見猛利ナリ。</p>
<p>栄西の入寂 明全に随侍 師資相伝</p> <p>アレヒ時ニ恨ラクハ、此年七月五日、西公相州ノ壽福寺ヲ營シ了テ微疾ヲ示シ、法ヲ明全ニ屬シテ入寂セリ。然ジテ後ハ明全和尚ニ隨侍ノ、辨道參禪マシマセリ。一日</p>	<p>アレヒ此ニ恨之、此年七月五日、西公相州ノ壽福寺ヲ營シ了テ微疾ヲ示シ、法ヲ明全ニ屬シテ入寂セリ。然ノ後チハ明全和尚ニ隨侍ノ、雜道參禪マシマセリ。一日因ニ全和</p>	<p>去ドモ于レ時恨ムラクハ、此年七月五日、西公相州ノ壽福寺ヲ營了テ微疾ヲ示シ、法ヲ明全ニ屬シテ入寂セリ。然シテ後ハ明全和尚ニ隨侍シテ、辨道參禪マシマセリ。</p>	<p>アレヒ于此恨之、此年七月五日、西公相州ノ壽福寺ヲ營了テ微疾ヲ示シ、法ヲ明全ニ屬ノ入寂セリ。然後ワ明全和尚ニ隨侍ノ、辨道參禪マシマセリ。一日因ニ全和</p>

大藏經周覽二
遍
希玄と号す
三輪明神出現

<p>因ニ全和尚二問、法性何為迷悟アル。和尚答云、三世ノ諸仏モ有レ知レ有、狸奴白狐却テ知有ト、言下ニテ玄有レ肖三玄四喝盡ク通達セリ。仍テ和尚宗派ノ圖乃菩薩戒ヲ以テ希玄ニ授マス。希玄ハ是楊岐山ヨリ九世孫ト成リ玉フ。</p>	<p>尚二問、法心法性何為迷アル。和尚答テ曰ク、三世ノ諸國佛不レ知レ有、狸奴白狐却テ知レ有。希玄言下ニ省之三玄四喝盡ク通達セルナリ。仍テ和尚宗派ノ圖及ビ菩薩戒ヲ以テ希玄ニ授ケマス。希玄楊岐ヨリ九世ノ孫ト成ル。</p>	<p>一日因二問、法心法性何為迷ヒアル。和尚答テ曰ク、三世之諸佛不レ知レ有、狸奴白狐却テ知レ有ト。言下ニ玄有レ省、三玄四喝盡ク通達セリ。仍テ和尚宗派之圖及ビ菩薩戒ヲ以テ希玄ニ授ケ玉フ。希玄ハ是揚岐ヨリ九世ノ孫ト成玉フ。</p>	<p>尚二問、法身法性何為迷アル。和尚答曰、三世ノ諸仏不レ知レ有、狸奴白狐却知レ有。希玄言下ニ省之。三玄四喝盡ク通達セルナリ。仍テ和尚宗派ノ圖及菩薩戒ヲ以テ、希玄ニ授ケ玉フ。希玄ハ是楊岐ヨリ九世ノ孫ト成玉フ。</p>
<p>凡ソ建仁寺ニ留錫アル前後六年、大藏ヲ見玉フ事二遍、十三ヨリ十八年ニ到ルト聞アルケル。曾テ濟家ノ宗旨ヲ了リ玉フト云トモ、深ク自ラ顧レバ、未タ滲漏ノ無ニ非ズ。猶悟ルヘキ旨アラント。更ニ自己ヲ容シ玉ハテ、増々修心練行アリ。</p>	<p>凡ソ建仁寺ニ留錫アル前後六年、大藏ヲ見玉フ事二返。十三ヨリ十八歳ニ到ト聞エケリ。曾テ濟家ノ宗旨ヲ了リ玉フト雖モ、深ク自顧ス、未タ滲漏ノ無キニアラズ。猶ヲ悟ルベキ旨アリヌベシト、更ニ自己ヲ容シ玉ハテ、マスマス修心練行アリ。</p>	<p>凡ソ建仁寺ニ留錫アルコト前後六年、大藏ヲ見玉フ事二遍、十三ヨリ十八年ニ到ト聞エケル。曾テ濟家ノ宗旨ヲ悟リ玉フト雖ドモ、深自顧リ見レバ、未ダ滲漏ノ無ニ非ズ。猶悟ル可キ旨在ント。更ニ自己ヲ容レ玉ハデ、増々修心練行アリ。</p>	<p>建仁寺ニ留錫シ玉フ前後六年、大藏ヲ見玉フ二返。十三歳ヨリ十八歳ニ到ルト聞ヘケリ。曾テ濟家ノ宗旨ヲ了リ玉ト雖モ、不覺自顧ハ、未タ滲漏ノ無キニアラズ。猶ヲ悟ルベキ旨アラン。更ニ自己ヲ容シ玉ワデ、マス／＼修心練行アリ。</p>
<p>一夜寂々トノ定坐純心ナラセケルニ、虚空ニ声アリ。告テ曰、樂哉定坐、至哉純心。道ハ夫レ極リ無シ。設イ到ルモ猶有ル在リ。務乎君勿レ怠ト。希玄仰テ問イ玉ハク、如何ナル神仙ニテ如此示現マシマスゾヤ。神答曰、我ハ元ト常世神、為ニ迹ヲ垂ルト言テ、重テ御音マサザリキ。希玄神語ヲ聞食シ、奇哉常世ノ神トハ所謂國常立</p>	<p>一夜寂々トシテ定坐純心ナラセケル。虚空ニ超アリ。告テ曰ク、樂哉定坐、至哉純心ノ道ハ、夫レ極リナシ。設ヒ到ル者モ尚ヲモアルアリ。務ヨヤ君勿怠。希玄仰テ問言ク、如何ナル神仙ニテ如此ハ示現シ玉フソ。神答テ、我ハ元トヨリ神為ニ迹ヲ垂ル、トノ玉ヒテ、重テ御音マサザリキ。希玄神語ヲ聞食、奇哉常世ノ神ト</p>	<p>一夜寂々トシテ定坐純心ナラセケルニ、虚空ニ聲有リ。告テ曰、樂哉定坐、至乎純心。道ハ夫レ極リ無シ。設ヒ到モ猶有ル在リ。務ヨヤ君勿レ怠ト。希玄仰テ問ヒ玉ハク、如何ナル神仙ニテ如此示現マシマスヤ。神答曰、我ハ元ト常世ノ神、為ニ迹ヲ垂ルトノ玉イテ、重テ御音マサザリキ。希玄神語ヲ聞食シ、奇哉、常世ノ神トハ</p>	<p>一夜寂々トノ定坐純心ナラセケルニ、虚空ニ声在。告テ曰ク、樂哉定坐、至哉純心。道ハ夫レ極リナシ。設ヒ到ルモ尚天ノ在アリ。務乎君勿レ怠ト、希玄仰テ問玉フ、如何ナル神仙ニテ如此示現マシマスゾ。神答テ曰ク、我ハ元トコヨノ神、為法ニ迹ヲ垂ルトノ玉ヒテ、重テ御音マシマサザリキ。希玄神護ヲ聞食シ、奇哉常世</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>尊、三輪ノ明神是ナリ。本ハ古佛ニテマシマスガ、迹ヲ神明ニ垂レ、未タ本覺ニ皈リ玉ハデ、護法利人シ玉フト、感歎浅カラズ、隨喜ノ涙頻ニテ三輪ノ方ヲ礼拜シ玉ヘリ。然シテ尚ヲ有リ在ルトノ神ノ教エ争カ怠ルヘキヤトテ、弥々細行深切ナリ。嗟末代ノ我等、恒ニ神ヲ祈ルト云トモ、曾テ靈應ニ預ラザルハ、身心不潔ニシテ、障悪重ク道心ノ祈少ニシテ利欲ノミ是ヲ祈ル。己ニ水レ、心濁リナハ、神明ノ影何ヨリ移ル可シ。信心清淨ナリシカバ、祈ラジトテモ神ヤ護ラセケルトカヤ。是ヲ思フニ可慎トモナリ。</p>	<p>ハ、イハユル國常立ノ尊三輪明神是レナリ。本ハ古佛ニマシマスガ、迹ヲ神明ニ垂、未タ本覺ニ皈給テ護法安人シ玉フト、感歎アサカラズ、隨喜ノ涙頻リニテ、三輪ヲ禮拜シ玉フ。然シテ尚ヲアルアリトノ神ノ教ヲ争カ怠タルベキヤトテ、弥々細行深切ナリ。嗟末代ノ我等、恒ニ神ヲ祈ト云ヒ、曾テ靈應ニ預ラザルハ、身心不潔ニシテ、障悪重ク道心ノ祈リ少ニシテ利欲ヲノミ是ヲ祈ル。己ニ心水濁リナハ、神明ノ影何レヨリ移リシ玉ハヌ。信心清淨ナラマシカバ、神トテ神ハ護セケル者ナリ。</p>	<p>イハユル國常立尊、三輪ノ明神是也。本ハ古佛ニテマシマスガ、迹ヲ神明ニ垂レ、未タ本覺ニ歸リ玉ハデ、護法利人シ玉フトテ、感歎浅カラズ、隨喜ノ涙ニテ三輪ヲ禮拜シ玉エリ。然テ尚ヲ有リ在ルトノ神ノ教争デカ怠ルキヤトテ、彌々細行深切也。嗚呼末代ノ我等、恒ニ神ヲ祈ルト雖モ、曾テ靈應ニ預ラザルハ、身心不潔ニシテ、障悪重ク道心キノ祈少ニシテ利欲ヲノミ是ヲ祈ル。己ニ心水濁リナハ、神明ノ影何ヨリ移ラン。信心清淨ナリシカバ、祈ラジトテモ神ヤ護セケルトカヤ。</p>	<p>ノトワイユル國常立ノ尊、三輪ノ明神是ナリ。本地ワ古佛ニマシマスガ、迹ヲ神明ニ垂レ、未タ本覺ニ皈リ玉ワテ、護法利人シ玉フト、感歎浅カラズ、隨喜ノ涙頻ニテ三輪ヲ礼拜シ玉ヘリ。然ノ尚ヲ有ル在リトノ神ノ教、争カ怠ルヘキヤトテ、弥々細行深切ナリ。嗟末代ノ我等、恒ニ神ヲ祈ルト雖モ、曾テ靈應ニ預ラザルハ、身心不潔ニシテ、障悪重ク道心ノ祈少ニシテ利欲ヲノミ是ヲ祈ル。己ニ心水濁リナハ、神明ノ影何レヨリ移シ玉ハヌ。信心清淨ナラシカバ、祈ラジトテモ神ヲ護ラセ玉フ也。</p>
<p>○貞応元年 疑滞を抱く 三井寺公胤に 参問</p>	<p>六、渡唐ノ事附旅行而解毒圓之 事</p>	<p>六 師渡唐之事 旅行解毒圓之事</p>	<p>六、師渡唐ノ事 旅行解毒圓ノ得玉フ事</p>
<p>維時希玄御齡イ廿三、人王八十五代後堀川ノ貞應元年壬午ノ冬、昔シ智者大師ノ法華三昧ヲ悟リ玉フ處ニ、疑滞アルヲ以テ、是ヲ諸方ノ名納ニ質シ玉エトモ、未タ決定セズ。遂ニ三井寺ニ到テ公胤僧正</p>	<p>時ニ希玄御齡二十三、人王八十五代後堀川ノ貞應元年壬午ノ冬、昔智者大師ノ法華三昧ヲ悟、玉フ處ニ疑滞アルヲ以テ、是ヲ諸方ノ名納ニ質シ玉ヘヒ、未タ決セス。遂ニ三井寺ニ至リ公胤僧正ニ問玉フ。</p>	<p>維時希玄御齡廿三、人王八十五代後堀川ノ貞應元年壬午ノ冬、昔シ智者大師ノ法華三昧ヲ悟リ玉フ處ニ、疑滞アルヲ以テ、是ヲ諸方ノ名納ニ質シ玉ヘドモ、未タ決定セズ。遂ニ三井寺ニ到テ公胤僧正ニ</p>	<p>于時希玄御齡二十三歳、人王八十五代後堀川ノ貞應元年壬午ノ冬、昔シ智者大師ノ法華三昧ヲ悟リ玉フ處ニ、疑滞アルヲ以テ、是ヲ諸方名納ニ質シ玉ヘヒ、未タ決セズ。遂ニ三井寺ニ至リ公胤僧正ニ</p>

渡唐の準備
高充の随伴決
定

<p>二問ヒ玉フ。僧正答テ仰セケルハ、此ハは大覺世尊後融ノ旨ナリ。最澄之ヲ受テ後、其微旨ヲ得ル者鮮シ。吾聞ク宋ノ国ニ佛心印ノ傳ルノ正宗有リト。貴僧彼ニ往テ之ヲ研究セラレバ可也トアレバ、希玄大ニ喜悅マシマシテ、僧正ナレバコソ如是ハ御指南アリケルト。乃チ三井寺ヲ下リ建仁ニ往キ、古ノ趣ヲ佛樹エ仰セラレケレバ、佛樹讚歎シテ、善哉ヤ大夫。已ニ今日ノ事ヲ知ルト云氏、悟后ノ精進尚奇也。疾ク太宋ニ到テ廣ク名宿ニ參見セバ、増々吾宗ノ良方且ツ群類ノ蔭涼ト作ントナリ。</p>	<p>是モ一家ノ僧正答テ曰、仰テレケルハ、是レ大覺世尊後融ノ旨ナリ。最澄之ヲ受テ後チ、其ノ微旨ヲ得ル者鮮ナシ。吾聞宋國ニ佛心印ヲ傳ルノ正宗アリ。貴僧彼ニ往テ之研究セバ可也トアレハ、希玄大ニ喜悅マシマシテ、僧正ナレバコソ如此ハ御指南アリケルトテ、乃チ三井寺ヲ下リ建仁寺ニ往キ、右ノ趣ヲ佛樹ヘ仰セラレケルニゾ、佛樹讚歎シテ善哉大丈夫、已ニ今日ノ事ヲ知ルトイエ氏、悟后ノ精進尚奇ナリ。トク大宋ニ到リテ廣ク名宿ニ參見セバ、増々吾宗ノ良才且タ群數ノ蔭涼ト作ント。</p>	<p>問玉フ。僧正答テ仰ケルハ、此ハは大覺世尊後融ノ旨也。最澄コレヲ受テ後、其微旨得ル者鮮。吾聞宋ノ國ニ佛心印ヲ傳ル正宗有リ。貴僧彼ニ往テ是ヲ研究セラレバ可也ト有レバ、希玄大ニ喜悅増シマシテ、僧正ナレバコソ如此指南ハ有リケルト。則キチ三井ヲ下リ建仁ニ往キ、右ノ趣キ佛樹エ仰ラレケレバ、佛樹讚歎シテ、善哉大丈夫。已ニ今日ノ事ヲ知ト雖、悟后ノ精進尚奇也。疾太宋ニ到テ廣ク名僧ニ參見セバ、増々吾宗ノ良才且羣類ノ蔭涼ト作ト也。</p>	<p>問玉フ。僧正答テ仰セラレケルワ、是ハ是レ大覺世尊後融ノ旨ナリ。最澄之ヲ受テ後、其微旨得ル者鮮。吾聞宋國ニ佛心印ヲ傳ルノ正宗アリ。貴僧彼ニ往テ是ヲ研究セラレヨカシトアレバ、希玄大ニ喜悅マシシテ、僧正ナレバコソ、如此ハ御指南アリケルトテ、乃チ三井ヲ下リ、建仁ニ往キ、右ノ趣ヲ佛樹ヘ仰セラレケレバ、佛樹讚歎ノ善哉大丈夫。已ニ今日ノ事ヲ知トイヘ氏、悟后ノ精進尚奇也。疾大宋ニ到リテ廣ク名宿ニ參見セバ、増々吾宗ノ良才且群類ノ蔭涼ト作ント。</p>
<p>希玄遂ニ辭メ、渡唐ノ用意アリケルガ、先ツ父通親公エ御暇乞遊シケレバ、通親別レヲ悲ミ仰セケルハ、御身如今目下遠カラテ有スラ少ニモ風ノ音信ヲ欠時ハ、父カ意易カラズ。不審物ヲ思シニ、遠キ別レヲ聞ヤ。此齡傾ク老ノ身ヲ捨テ、異邦ニ遙ニ立行ハ、相遇日ヤ優華ノ年ヲ待ザル命ナリ。吾カ没跡ハ免モ角モ留メ度ハ待ベシ氏、学道ノ為ナレバ願意ヲ果シ</p>	<p>希玄遂ニ拜辭メ、渡唐ノ用意ナサレケル。先父上ヘ御暇請ヲ遊ケレバ、通親別ヲ悲仰セケルハ、御身如今目下遠ラテアルスラ少カニ風音ヲ吹ク時ハ、父カ心ハ安カラズ。不審物ヲ思シニ、遠キ別ヲ聞ヤ。此ノ齡傾ク老ノ身ヲ捨テ、異國ニ立イナバ、相値日ヤ優曇り花ノ年ヲ待タザル命ナリ。吾カ没跡ハ免モ角モ留メ度ハ待レ共、学佛道ノ為メナレバ願意ヲ果</p>	<p>希玄遂ニ拜辭シテ、渡唐ノ用意有リケルガ、先父通親公エ御暇乞遊シケレバ、通親別レヲ悲ミ仰ケルハ、御身如今目下遠カラテ有スラ少ニモ風ノ音信ヲ缺時ハ、父カ意ハ安カラズ。不審物ヲ思ヘシニ、遠キ別レヲ聞ヤ、コノ齡傾ク老ノ身ヲ捨テ、異邦ニ遙カタチイナバ、相遇時ヤ優曇華ノ年ヲ待ザル命也。吾没跡ハ免モ角モ留メ度ハ侍レドモ、學佛道ノ爲成バ願意ヲ</p>	<p>希玄遂ニ拜辭メ、渡唐ノ用意ナサレケル。先御父通親公ヘ御暇乞遊バシケレバ、通親別ヲ悲ミ仰ケルワ、御身如今目下遠カラテ有スラ少ニモ風音ヲ欠則ハ、父カ意安カラズ。不審初ヲ思ヒシニ、遠キ別レヲ聞ヤ、コノ齡傾ク老ノ身ヲ捨テ、異邦ニタチイナバ、相値日ヤ優曇華ノ年ヲ待ザル命ナリ。吾カ没跡ハ免モ角モ留メ度ヲ待レ氏、学佛道ノ為ナレバ、願意ヲ果シ語</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>申サレヨ。偕テ萬里波濤ノ行脚ニハ、幾ク海ヲ越エ、山ヲ過テ、危キ有為ノ旅路ナリ。孤行旅ハヲホツカ無シ。高充宜ク伴ヲ擇ヘト仰ケル。高充承リ謹言シ上ケルハ、御意畏リ承ル。最モ御譜代ノ侍共、各々御伴ヲ願ベシ。然レ臣仰キ冀クハ、此高充ニ仰付ラレハ有難シト申上ルニ、花房右近光吉、名越市ノ正張次、十何右衛門利明等、其外智勇覺エアル諸士、我モ我モ口々ニ渡唐ノ御伴仕ラント、互ニ競シ願ケル。時ニ、通親心ニ思召様ハ、長途ノ難ハ期シ。山賊海賊龍虎ノワザモ無ラマシトハ不覺也。然レバ侍共何レモ劣又強力ナリト云臣、就中高充コソト思召仰セラレケルハ、各々忠志ヲ以テ願ル、旨、神妙ノ至リナリ。然ラバ往モ留モ忠義ハトテモ同事。高充ハ往ヘシ。光吉、張次ハ留テ兼若ヲ守護セヨ。利明ハ高充ニ代テ吾家取ヨト仰セラレバ、何レモ御意ニ任セケル。希玄由ヲ聞食シ、三界ヲ家トメ、到處家ナレ</p>	<p>申サレヨ。偕テ万里ノ行脚ニハ、幾ク海ヲ越、山ヲ過テ、危峻ノ旅路ナレバ、孤行ノ旅ハ覺束ナシ。高充宜ク伴ヲ擇フベシト仰セアル。高充承リ謹言ケルハ、御意ハ畏リ奉リ、最モ御譜代ノ侍共、各御伴ヲ願フベシト云ヘドモ、仰願ハ、コノ高充ニ仰セ付ケラレバアリガタシト申上ル処ニ、花房右近光吉、名越市ノ正張次、十河左衛門利明等、其ノ表智勇ノ覺ヘアル諸士、我モ口々ト口々ニ渡唐ノ御伴仕ラント、互ニ競アラソイケル。時ニ、通忠コ、ロニ思召様ハ、長途ノ難ハ期シガタシ。山賊海賊龍虎ノワザハイモナカラマジトハ不覺ナリ。然レバ侍共何レモ劣又強者ナリト雖モ、就中高充コソハト思食仰セケルハ、各々忠志ヲ以テ願イケル旨、神妙ノ至リナリ。然レバ往モ留ルモ忠義ハ同ジ。高充ハ往クベシ。光吉ト張次ハ留リテ兼若ヲ守護セヨ。利明ハ高充ニ代テ我家ヲ取ヨト仰セラレバ、何レモ御意ニ任セケ</p>	<p>果シ申サレヨ。偕テ萬里波濤ノ行脚ニハ、幾バクカ海ヲ越ヘ、山ヲ越エ、危キ有為ノ旅路也。孤行ノ旅ハオボツカナシ。高充宜ク伴ヲ擇ベト仰ケル。高充承リ謹言申上ケルハ、御意畏リ奉ル。最モ御譜代ノ侍ドモ、各々御供ヲ願フベシ。然レドモ仰ギネガハクバ、此高充ニ仰セ付レバ有難シト申上ル處ニ、花房右近光吉、名越市正張次、十河右衛門利明等、其外智勇兼備ノ士ドモ、我モ口々ト口々ニ渡唐ノ御伴仕ラント、互ニ競ヒ願ヒケル。時ニ、通親心ニ思食様ハ、長途ノ難ハ期シ。山賊海賊龍虎ノワザモ無カラマジトハ不覺ナリ。然バ侍共何レモ劣又強者タリトイヘドモ、就中高充コソト思食仰セラレケルハ、各々忠志ヲ以テ願ル旨、神妙ノ至也。然ラバ往モ留モ忠義ハ以テ同事也。高充ハ往クベシ。光吉、張次ハ留テ兼若ヲ守護セヨ。利明ハ高充ニ代テ吾家ヲ收メヨト仰ケレバ、何レモ御意ニ任セケリ。希玄由ヲ聞食シ、</p>	<p>サレヨ。偕又万里ノ行脚ニハ、幾カ海ヲ越ヘ、山ヲ過テ、危峻ノ旅路ナリケレバ、孤行ノ旅ヲボツカナシ。高充宜ク伴ヲ撰ヘト仰アル。高充承リ謹言上ケシワ、御意畏リ奉ル。最モ御譜代ノ侍共、各々御伴ヲ願ベシ。サレ臣仰願ワ、此高充ニ仰付ラレバ、難有ト申上ル処ニ、花房右近光吉、名越市之正張次、十河左衛門利明等、其表智勇ヲボヘアル諸士、我モ口々ト口々ニ渡唐ノ御伴仕ラント、互ニ競ヒアゲツラフ。時ニ、通親心ニ思食様ハ、長途ノ難ハ期シ。山賊海賊龍虎ノワザモ無ラマシトハ不覺ナリ。然レハ侍共何レモ劣又強者タリト雖モ、就中高充コトト御思召仰ケルワ、各々忠志ヲ以テ願ル、旨、神妙也。然バ往モ留モ忠義ヲ以テ同シ。高充ハ往ベシ。光吉ト張次ハ留リテ兼若ヲ守護セヨ。利明ハ高充ニ代テ吾家ヲ收ヨト仰アレバ、何レモ御意ニ任セケリ。希玄此由ヲ聞食、僧ワ三界ヲ家トス。到ル所家ナレバ、</p>

貞心二年
渡唐(入宋)

<p>バ、足下何ヲカ畏ルベキ。万一劫賊悪獸ノ難アラバ、亦好宿ノ債ヲ償ン。何ゾ伴侶ヲ借ントテ、屢々イドミ給フ伝氏、父命親情拒ミ難キヲ以テ、遂ニ伴士ヲ受玉フ。通親御門エ奏スレバ、御門叡聞マシマシテ、好シ是レ名師ハ国家ノ寶、急キ彼ニ渡テ大法傳エ、速ニ帰朝ノ朕葦原ノヨサシナレトノ宣命有アリ。通親有難トテ御門ヲ退出シ、師ノ渡唐ヲ送り玉フ。</p>	<p>リ。希玄由ヲ聞食、僧ハ三界ヲ家トス。到处家ナレバ、足下何ニヨカ畏ルベキ。万一劫賊悪獸ノ難アラバ、又ヨシ宿ノ債ヲ償ン。ソ。伴侶ヲ借ラントテ、數々井ナミ給フソト云ヘドモ、父命親情拒ガタク、遂ニ伴士ヲ受ケ玉フ。通親御門ヘ奏達アルニ、叡聞マシマシテ、正好シ。是レ名師ハ國ノ寶、急キ彼ニ渡リ大法ヲ傳ヘ、迷情ヲ救ン為メ、速ニ皈朝シテ朕葦原ニヨホシナレトノ宣命アリ。通忠ハアリガタシトテ御門ヲヌカツキシ退リテ、師ノ渡唐ヲ送り玉フ。</p>	<p>三界ヲ家トス。到处家ナレバ、某シ何ヲカ畏ル可ケン。萬一惡賊惡獸ノアラバ、亦好宿ノ債ヲ償ン。何ゾ伴侶借サントテ、數々イナミ給フト雖モ、父命親情拒ミ難キヲ以テ、遂ニ伴士ヲ受玉フ。通親御門エ奏達アル。御門叡聞マシマシテ、好事成乎。名師ハ是國家ノ寶、急ギ彼ニ渡テ大法ヲ傳エ、速ニ歸朝シテ朕葦原ノヨサシナレトノ宣命有リ。通親有難シトテ御門ヲ遙ニ退出シ、師ノ渡唐ヲ送り玉フ。</p>	<p>足下何ヲカ畏ルベキ。万一却賊悪獸ノ難アラバ、又ヨシ宿ノ債ヲ償ン。何ゾ伴侶ヲ借ントテ、數々井ナミ給ト雖氏、父命ノ親情拒カタクヲ以テ、遂ニ伴士ヲ受玉フ。通親御門エ奏達アル。御門叡聞マシマシテ好。是名明ワ國ノ宝ヲ、急キ彼ニ渡テ大法ヲ傳ヘ、速ニ皈朝シテ朕葦原ニヨザシナレトノ宣命アリケレバ、通忠有難シトテ、御門ヲヌカツキシ退テ、師ノ渡唐ヲ送玉フ。</p>
<p>同二年春二月二日立玉フ。御年廿四、高充一人御伴ニテ高船ニ隨ヒ玉フ。高充ハ様ヲ奴僕ノ形チニ替テ麤布ノ紺衣ヲ着シ、只單刀一腰ヲ帶タリ。或説ニ明全和尚モ師ト共ニ入宋同船ト云エルハ據アルニヤ。船大洋ニ浮ミ風ニ任セテ行ク。船ノ早ヤ古郷ヲ追々ト山モ隠ル、ウナノニハ、浪ニタワレテ遊フ鴨、臚、月夜ノ沖ノ空、イトサミシケニ濱千鳥、チンタタル声ノ中、頻ニ物ヲ思ホヘテ、遠方見レバ雲ノ</p>	<p>同ジク二年癸未ノ春ル二月二日、師ノ御年二十四、高充一人御伴ニテ商船ニ隨ヒ玉フ。高充ハサマヲカヘ奴僕ノ形ニテ麤布ノ組衣ヲ着シ、只單刀一腰ヲ帶ビタリ。或ハ説ニ明全和尚モ師ト共ニ入宋同船トイヘルハ抛アルニヤ。船大洋ニ泛風ニ任セテ行ク。船ノ早ヤ古郷ノ追々ト山モカクル、ウナノニハ、浪ニタハムレン遊フ鴨モ、臚、月夜ノ沖ノ空、井トサミシゲニ濱チドリ、チンタ声ノ中、頻リニ物</p>	<p>同二年ノ春二月二日立玉フ、御歳廿四、高充一人御伴ニテ商船ニ隨ヒ玉フ。高充ハ様ヲ奴僕ノ形ニ替テ麤布ノ紺衣ヲ着シ、只單刀一腰ヲ帶タリ。或説ニ明全和尚モ師トトモニ入宋同船ト云エルハ據アルニヤ。船大洋ニ浮ミ風ニ任セテ行ク。船ノ早古郷ヲ追々ト山モ隠ルルウナノニハ、浪ニタハレテ遊ブ鴨、臚、月夜ノ沖ノ空、イトサミシゲニ濱千鳥、チンタタル聲ノ中、頻ニ物ヲ思ホヘテ、遠方見レ</p>	<p>同二年癸未ノ春二月二日、師ノ御歳二十四、高充一人御伴ニテ商船ニ隨玉フ。高充ワ様ヲヤツコノ形ニカヘ廉布ノ紺衣ヲ着シ、只單刀一腰ヲ帶タリ。或ル説ニ明全和尚モ師トトモニ入宋同船ト云ニワ、據アルニヤ。船大洋ニ浮風ニ任テ行。船ニ早故郷ノ越ト山モ隠ル、ウナノニハ、浪ニタワレテ遊ブ鴨、臚、月夜ノ沖ノ空ヲ、イトサビシゲニ濱千鳥、チンタタル声ノ中、頻ニ物ヲモホエテヲチ方</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>色、立カトスレバ消易キ、人ヲモ身ヲモ想像、海士ガ磯焼煙リナリ。近方見レバ此是葦ノ一村ニ、ワカ宿ニ樂ム人ノ釣舟ヲ早コキ出ス歌ノ声、スサキニ休ムカリカ子ノ、身モ風流ヤ面白ト語り過レバ、程モ無ク唐土日本ノ潮堺イ竺良カ沖ニ付ケレバ、惡風俄ニ起易テ、船霧海黒鳥ニ付。</p>	<p>ヲホヘテ、遠チ方見レバ雲ノ色、タツカトスレバ消ヘヤスキ、人ヲモ身ヲモ想像、海士ガ磯焼煙リナリ。コチカカタ見レバ是レヤ此ノ葦一ムラ、我方宿ニ樂シム人ノ釣り船ヲヤコギダス歌ノ声、スサキニヤスム雁身モ、風流ヤナト語りテ往ケハ、ホドナク唐ト日本ノ潮堺イ竺良ガ沖着ケレバ、惡風俄ニ起易リテ、船霧海黒鳥ニコソ付ニケリ。</p>	<p>バ雲ノ色、立ツカトスレバ消エ易キ、人ヲモ身ヲモ想像、海士ガ磯焼煙リ也。近方ミレバ此レ是ノ葦ノ一村ニ、ワカ宿ニ樂ム人ノ釣舟ヲ早コギ出ス歌ノ聲、スサキニ休ムカリガネノ身モ、風流ヤ面白ト語り過レバ、程モナク唐ト日本ト潮界竺良ガ沖ニ付キケレバ、惡風俄ニ起チ易テ、船霧海ノ黒鳥ニ付ク。</p>	<p>見レバ、色立カトスレバ消ヤスキ、人ヲモ身ヲモ、ヲモヒヤル、海士ガ磯焼煙ナリ。コチ方ミレバ是ヤ此ノ葦ノ一村、我宿ニ樂ム人ノツリ舟ヲコギ出ス歌ノ声、スサミ休ムカリ身モ、風流ヤナト語りテ往バ、ホドモナク唐ト日本ノ潮堺竺良ガ沖キニ付ケレバ、惡風俄ニ起易テ、船霧海ノ黒鳥ニ付キ。</p>
<p>偕テ此嶋ノ難義ニハ、惡龍澤ニ栖成テ、毒氣ニ物ヲ殺ニヤ。人獸曾テ到ラズ。今倚ル船ノ人音ニ惡龍怒リヲナスヤラン。黒雲ホウト推覆イ、風雷天地ヲ轟シ、雨又雹凜シク、ケシカラヌ寒サ來テ、四体シ、マリ口寒、哀ナリケル有様也。人々濕養スヘキ方便ナク、苦ヲシキ子ノ摺枕、死スル計リニ見エシカト、師高充主従ノミ氣貌常ヲ不レ改。思フニ師ハ通力ノ助ケ有リ。高充ハ生得ノ剛キ逸群ノ強者ナレバニヤ。師數多ノ人々ガ今</p>	<p>偕テ此嶋ノ難儀ニハ、惡龍澤ニ栖ミ毒氣ヲ吐テ死ス。故禽獸曾テ到ラス。今倚ル船ノ人音惡龍怒リヲナスヤラン。黒雲ボウト推覆、風雷天地ヲ轟カシ、雨又雹凜シク、ケシカラヌ寒サ來テ、四躰シ、マリクチコゴヘ、哀ナリ。人々ノ温養スベキ方便ナク、苦ヲシキ子ノ摺枕ラ、死スル計リニ見エシカト、高充主従ノミ氣貌常改ス。思フニ師ハ道力ノ助ニヤアラン。高充ハ生得ノ剛氣逸群ノ強者ナレバニヤ。師數多人々ガ今ヲ限リト見ヘ</p>	<p>偕テ此島ノ難義ニハ、惡龍サワニ栖ミ、毒氣ニ觸ルル時ハ必ズ死ス。故二人獸曾テ到ラズ。今倚ル船ノ音ニ惡龍怒リヲナスヤラン。黒雲ホフト推覆ヒ、風雷天地ヲ轟シ、雨亦雹凜ク、ケシカラヌ寒サ來テ、四體シジマリ口寒テ、哀也。人々濕養スベキ方便ナク、苦ヲシキネノ摺枕、死スル計リニ見ヘニケリ。師ト高充ハ主従ノミ氣貌常ヲ不レ改。思フニ師ハ道力ノ助ケ有リ。高充ハ生得ノ剛キ逸群ノ強者ナルニヤ。師數多ノ人々今</p>	<p>偕此嶋ノ難義ニワ、惡龍サワニ栖、毒氣物ヲ死人ニヤ、禽獸曾テ到ラズ。今倚ル船ノ人音ニ惡龍イカリヲナスヤラン。黒雲ボフト推覆イ風雷天地ヲ裏シ、雨又雹凜シク、ケシカラヌ寒サ來テ四体シマリ口コゴヘ、哀レナル人々ノ温養スベキ方便ナク、トマヲシキ子ノ摺枕、死スル計リニ見エシカト、高充主従ノミ氣貌常ヲ改ス。思フニ師ハ道力ノ助アリ。高充ハ生得ノ剛氣逸群ノ強者ナレバニヤ。師數多ノ人々ガ今ヲ限リト見</p>

黒島到着
難儀あり

石清水神・飯成山神の出現

<p>ヲ限リト見エケレバ、大悲ノ情忍ヒ難ク、扶ハヤト思召、須更祈念マシマス処ニ、翁一人忽然トノ柴ヲ負イ来テ、火ヲ焼ハ、少女一人現シ、水ヲ求テ粥ヲ煎ル。翁葉ヲ取出シ、粥ト共ニ與レバ、人々はヲ服養シ、忽チ四體濕リ、疾イユレバ、日和マテ快シトテ、忻ヒケル。</p>	<p>ケレバ、大悲ノ情忍ガタク、扶バヤト思食、須臾祈念マシマシケル処ニ、翁ナ一人忽然トノ柴ヲ負来テ、火ヲ焼バ、少女一人現レテ、水ヲ求テ粥ヲ煮ル。翁ナ藥リヲ取り出シ、粥ト共ニ與フレバ、人々はヲ服養シ、忽チ四體温マリ疾イユレバ、日和マテ快ヨシト忻ヒケリ。</p>	<p>ヲ限リト見エケレバ、大情ノ悲忍ビ難ク、扶ケバヤト思食、須臾祈念マシマス處ニ、翁一人忽然トシテ柴ヲ負来テ、火ヲ燒ケバ、少女一人現ジ玉ヒ、水ヲ求テ粥ヲ煮ル。翁葉ヲ取り出シ、粥トトモニ與レバ、人人是ヲ服養シ、忽チ四體濕リ、疾イキユレバ、日和マデ快ク成リケリトテ、忻ケリ。</p>	<p>ヘケレバ、大悲ノ情忍カタク、扶バヤト思食、須臾祈念マシマシケル処ニ、翁一人忽然トノ柴ヲ負イ来テ火ヲ燒バ、少女一人現レ出、水ヲ求テ粥ヲ煮ル。翁葉ヲ取出シ、粥ト共ニ與レバ、人々は服養シ忽チ四體温リ、疾イユレバ、日和マデ快ヨシトテ、忻ケリ。</p>
<p>師、翁及少女ニ問玉フ。二人如何ナル御方ニテ此難難ヲ救ヒ玉フ事、報謝シ難キ処ナリ。粥葉亦不思議ト宣ヘハ、翁答テ、吾レフ師ト同ジ郷、石清水ノ主神ナリ。師ノ慈念亦道心ヲ守護シ来ル。葉ハ是解毒圓、大神仙ノ方信心ニ服スレバ、必死スモ命ヲ延、萬病皆治スト。師ノ言ク、仰冀クハ此方ヲ授ケ玉エ。吾果ノ大道ヲ極メナハ、普ク神藥ヲ與エテ、外生死ノ病ヲ治シ、法葉ヲ施シテ、内泥涅ノ喜樂ヲ得セシメント。神聞食大哉至命。授ケ申サントテ、一卷ノ書ヲ附與シ玉エハ、少女卓立ノ云ケルハ、吾モ同ク師ノ古郷山代ノ飯成山姫神ナリ。師ノ學道ヲ常ニ</p>	<p>時ニ師、翁ナ及ヒ少人ニ問イ玉フ。二人如何ナル御方ニテ此難難ヲ救ヒ玉フゾ。報謝シガタキ処ナリ。粥葉又タ不可思議トノ玉ヘハ、翁答テ、吾ハ師ト同郷ト、石清水ノ主神ナリ。師ノ慈念又ク道心ヲ守護シキタル。藥ハ是解毒圓、大神仙ノ方信心ニ服スレハ、必ス死命ヲモ延フ。万病皆治スト。師ノ言ク、仰冀ハ授ケ玉ヘ。吾果メ大道ヲ極メナハ、普ク神藥ヲ與ヘテ、外生死ノ病治シ、法葉ヲ施シテ、内泥涅ノ喜樂ヲ得セシメン。神聞食テ大哉至哉。授ケマイラセントテ、一卷ノ書ヲ附與シ玉ヘバ、又タ少女神卓立シテ云ヘルハ、吾モ同ク師ノ古郷ノ山</p>	<p>師、翁及ビ少女ニ問玉フ、二人如何ナル御方ニテ此難難ヲ救ヒ玉フ。報謝シ難キ處也。粥葉亦不可思議トノ玉ヘバ、翁答テ、吾ハ師ト同ジ里、石清水ノ主神也。師ノ慈念又道心守護シ來ル。藥ハ是解毒圓、大神仙ノ方、信心ニ服スレバ、必死モ命ヲ延ブ、萬病此治スト。師言ク、仰冀ハ授ケ玉エ。吾果シテ大道ヲ極メナバ、普ク神藥ヲ與エテ、外生死ノ病ヲ治シ、法葉ヲ施シテハ、内泥ノ喜樂ヲ得サシメント。神聞食大哉至哉。授ケ申サントテ、一卷ノ書ヲ附與シ玉エバ、少女又卓立シテ云ク、吾モ同ジク師ノ古郷ノ山代ノ飯成山ノ姫神也。師之學道ヲ常ニ護ル行末</p>	<p>師、翁及少女ニ問テノ玉フワ、二人如何ナル御方ニテ此難難ヲ救ヒ玉フ。報謝シガタキ処ナリ。粥葉又不可思議トノ玉ヘバ、翁答テ曰、吾レハ師ト同郷石清水ノ主神ナリ。師ノ慈念又道心ヲ守護シ來、葉ワ是解毒圓トテ、大神仙ノ方信心ニ服スレバ、必死モ命ヲ延フ。万病皆治スト。師ノ曰ク、仰願ヲ授玉ヘ。吾果大道ヲ極メナハ、普ク神藥ヲ與テ、外生死ノ病ヲ治シ、内法葉ヲ施ノ、泥涅ノ喜樂ヲ得セシメン。神聞食、大哉至哉。授ケマヒラセント、一卷ノ書ヲ附與シ玉フ。少女又卓立ノ云ヘルワ、吾モ同ク師ト同郷ノ山代ノ飯成山ノ姫神ナリ。師ノ學道ヲ常ニ</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>護ル行末、先ノヨサシ好シト言テ、二神同ク先ヲ放チ、飛テ雲井ニ隠レサセ玉フ。時ニ高充ヲ始船中ノ人々未曾有ノ事ヲ拜ミ、必死ノ殆キヲ免レシハ、偏ニ師ノ道德ノ至ニ依ル。師ハ肉身ノ大士ナリ。然ラズンバ争カ神降ノ奇特ヲ拜ン。有難キ次第也トテ、感涙袖ヲ湿シケリ。</p>	<p>代ノ食成山ノ姫神ナリ。師ノ学道ヲ常ニ守護ス行末、先キヨク守ント言イアテニ、神同ク光リヲ放テ、飛ンテ雲井ニ隠レサセ玉フ。時キニ高充ヲ初メ船中ノ人々未曾有ノ事ヲ拜ミ、必死ノ殆ヲ免レシハ、偏ニノ道德ノ至リニヨル。師ハ肉身ノ菩薩ナリ。然カラズンバ争デカ神降ノ奇特ヲ拜ミ、有リガタシ貴也トテ、感涙袖ヲ湿ニケリ。</p>	<p>エ、先ノヨサシヨシト言テ、二神同ク光ヲ放チ、飛デ雲井ニ隠レサセ玉フ。時ニ高充ヲ始メ船中ノ人々未曾有ノ事ヲ拜ミ、必死ノ危キヲ免レシハ、偏ニ師ノ道德ノ至リニ依ル。師ハ肉身ノ大士也。然ズンバ争カ神降ノ奇特ヲ拜マン。難有貴也トテ、感涙袖ヲ濕シケリ。</p>	<p>守ル行ク末、サキクヨザシヨシト言フテ、二神同ク光ヲ放チ、飛テ雲井ニ隠レサセ玉フ。時ニ高充ヲ初メ船中ノ人々未曾有ノコトヲ拜ミ、必死ノ危ヲ免レシワ、師ノ道德ノ至ナリ。然レバ師ヲ肉身ノ大士ナリ。然ラバ神降ノ奇特ヲ拜ン。難有貴キ氏云テ、感涙袖ヲ湿シニケリ。</p>
<p>○嘉定十六年 太白山(天童山)に上る 山賤(童子)の先導</p> <p>七、師太白星ニ値給事附戒臘公事ノ事</p> <p>然而帆ヲ順風ニ打任セ行ハ、程ナク明州ノ堺ニ着給フ。及太元ノ嘉定十六年夏四月、太白ニ登リ給シカ、誤テ本路ヲ踏差イ、餘処ノ山路ニ行暮テ、樹ノ下影ヲ宿トセバ、花ヲ主ト頼ム夜ノ、語リ伴ナリ人モカナ。石ノ枕ニ苔席、イト、サエ行ク夜半ノ冷キ露、コモル澤辺ノ落ル水ノ音、峯ノ松風身ニシミテ、寝ラレハコソ安カラヌ、蛇尾シケレト早鹿ノ、友喚声ノア</p>	<p>七ニハ師太白星ニ値玉フ事附戒臘公事ノ事</p> <p>然ジテ帆ヲ順風ニ打任テ行ハ、ホドナク明州ノ堺ニ着給フ。乃太白元ノ嘉定十六年ノ夏四月、太白ニ登リ玉ヒシガ、誤テ本路ヲ踏差イ、餘所ノ山路ニ行暮レテ、樹ノ下影ヲ宿トセバ、花ヲ主ジト頼夜ノ談リ伴フ人モガナ、石ノ枕ニ苔席、イト、サヘ夜半ノ冷シク露、コモル澤邊ニ落ル水ノ音、峯ノ松風身ニシミテ、寝ラレハコソ安スカラメ、蛇尾シケレトテ早鹿ノ友喚フ</p>	<p>七 師太白星ニ値玉フ事附戒臘公事ノ事</p> <p>然而帆ヲ順風ニ打任セ行ケバ、程無ク明州ノ堺ニ著キ給フ。則太元ノ嘉定十六年夏四月、大白ニ上リ玉エシガ、誤テ本路ヲ踏差イ、餘所ノ山路ニ行暮テ、樹ノ下影ヲ宿トセバ、花ヲ主ト頼ム夜ノ、語リ伴フ人モガナ、石ノ枕ニ苔席口、イトドサエユク夜半ノ冷キ露、コモル澤邊ニ落ル水ノ音、峯ノ松風身ニシミテ、寐ラレネバ社安カラネ、蛇尾シケレトモ早鹿ノ、友喚</p>	<p>七、師太白星ニ値玉フ事附戒臘公事ノ事</p> <p>然ノ帆ヲ順風ニ打任セ行バ、ホドナク明州ノ堺ニ着給フ。乃チ太元嘉定十六年ノ夏四月、太白ニ登リ玉イシガ、誤テ本道ヲ踏差ヒ、餘所ノ山路ニ行暮テ、樹ノ下影ヲ宿トセバ、花ヲ主トタノム夜ノ、談リ伴人モナク、石ノ枕ニ苔席、イト、サヘ夜半ノス、シキニ露、ゴモル澤邊ニ落ル水ノ音、峯ノ松風ノ身ニシミテ、寝ラレバコソ安カラメ、蛇尾ケレトテ早鹿ノ、友</p>

太白山の由来

<p>ワレニヤ。寝物語リモ短夜ノ、早ヤ明方ニナリケレバ、四十字餘ノ山賤カ、斧打カツキ見エケルヲ、高充喜ヒ立寄テ、太白山トハ何地ナリ。本路如何ト問ケレバ、山賤答テ曰様ハ、見ルニ日本ノ人ナルカ、太白エ遍歴トハ修證ノ為カ頼シヤ。賤ガ樵ハ遅カラズ。去來道シルベ申サント、前ニ立テ誘引ス。纒ニ往ハ長安ノ廣キ驛路ニ出ニケリ。</p>	<p>声ノアワレナド、寝物語リモ短夜ノ、早ヤ明方ニナリケレバ、四十字餘ノ山賤カ、斧打カツキ見ヘケル。高充喜ヒ立寄テ、太白山トハ何地ナル、本路如何ト問ケレバ、山賤答テ曰ヤウハ、見ルニ日本ノ人ナルガ、太白ノ遍歴修證ノ為カ頼シヤ、賤ガ木コリハ遅カラズ、去來道シルベ申サント、サキニ立テ誘引ス。纒ニ行ケバ長安ノ廣キ驛路ニ出テニケリ。</p>	<p>聲ノアハレニヤ、寐物語リモ短夜ノ、早明方ニ也ケレバ、四十字餘ノ山賤ガ、斧打カツキ見エケルヲ、高充喜ヒ立倚テ、太白山トハ何地ナル、本路如何ト問ケレバ、山賤答テ云様ハ、見ニ日本ノ人ナルカ、太白エ遍歴トハ修證ノ為カ頼シヤ。賤ガ樵リハ遅カラズ、去來道シルベ申サント、前ニ立テ誘引ス。纒ニ往バ長安ノ、廣キ驛路ニ出ニケリ。</p>	<p>喚声ノアワレナド、寝物語リモ短夜ノ、早明方ニナリケレバ、四十字餘ノ山賤カ斧打カツキ見ヘケルヲ、高充喜ヒ立倚テ、太白山トハ何地ナル、本路如何ト問ケレバ、山賤答テ曰様ワ、見ニ日本ノ人ナルガ、太白ヘノ遍歴ワ修證ノ為カ頼シヤ。賤ガ木コリワ遅カラズ、去來道シルベ申サント、前ニ立テ誘引ス。纒ニ往バ長安ノ、廣キ驛路ニ出ニケリ。</p>
<p>山賤又指シテ、早太白ハ那方ナリ。夫レ太白ト申セシハ、昔シ天ノ太白カ童子ト為テ降り、此山ニ住ケル故、大白山トモ亦天童山ト名付タリ。佛法鎮護ノ誓アリ。今ニ守神ナト、語ル間ニ、御山ハ此ソ此景德モ見ユルナリ。其太白トハ吾ナルカ、上人ノ学道世ニ妙ナルニ、メテ、コソカク顯レテ導引シテマイラスル。行末々モ守ント、忽チ忽天童ノ形ト成リシカ、跡ヲ潜シテ見エザリケリ。師奇特ニ思召、吾ガ得道ノ先兆トテ、御胎ハ限り無し。</p>	<p>山賤又指サシテ早ヤ太白ハ那方ナリ。夫レ太白ト申ハ、昔シ天ノ太白ガ童子ト成テ降、此ノ山ニ住ケル故、太白山トモ天童山トモ名付タリ。佛法鎮護ノ誓アリ。今ニ守ノ神ナト、語ル間ニ、御山ハ景德寺ナリ。其ノ太白ハ吾レナルガ、上人ノ学道世ニ妙ナルニ、メデ、コソカク顯レテ道引キマイラスル。行末々モ守ラントテ、忽チ天童ノ形ヲ現シテ、跡ヲ潜シテ見ヘサリケリ。師奇特ノ思ヲ成シ、吾ガ得道ノ先兆トテ、御怡カガリナシ。</p>	<p>山賤又指シテ、早ヤ太白ハ那方也。夫レ太白ト申セシハ、昔シ天ノ太白ガ童子ト為テ降り、此山ニ住ミケル故、太白山トモ又天童山トモ名付タリ。佛法鎮護ノ誓アリ。今ニ守護神也ケリト語ル間ニ、御山ハ是ゾ此ノ景德寺モ見ル也。其ノ太白トハ吾ナルカ、上人ノ学道世ニ妙成ニ、メデテコソカク顯テ導引シマイラスル。行末々モ守ント、忽チ天童ノ形ト成リシガ、跡ヲ潜シテ見エザリケリ。師奇特ニ思食、吾ガ得道ノ先兆トテ、御怡限リナシ。</p>	<p>山賤マタ指テ、早太白ワアナタナリ。夫太白ト申セシワ、昔天ノ太白星童子ト成テ天降り、此山ニ住ケル由、太白山トモ又ワ天童山トモ名ケタリ。佛法鎮護ノ誓アリ。今ニ守ノ神ナド、語ル間ニ、御山ワ是ゾ、此ノ景德寺モ見ルナリ。其ノ太白トワ吾ナルガ、上人ノ学道世ニ妙ナルニ、メデ、コソカク顯エテ道引マヒラスル。行末々モ守トテ、忽チ天童ノ形トナリシガ、跡ヲ潜シテ見ヘザリケリ。師奇特ニ思食、吾ガ得道ノ先兆トテ、御怡カガリナシ。</p>

太白山掛錫
住持無際了派

〔戒臘公事〕
〔新到列位〕

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>已ニ太白ニ至テ掛錫アリ。貶ニ派無際和尚景德寺ヲ領セララル。派無際和尚、師ヲ一見シテ法器ト称ス。</p>	<p>已ニ太白ニ登リテ掛アル。時ニ派無際和尚景德寺ヲ領セララル。派無際、師ヲ一見シテ法器ト称ス。</p>	<p>已ニ太白ニ至テ掛錫有ル。吃ニ派無際和尚景德寺ヲ領セララル。派無際禪師、師ヲ一見シテ法器ト称ス。</p>	<p>已ニ太白至テ掛錫アル。吃ニ派無際和尚景德寺ヲ領セララル。派無際降師ヲ一見シテ法器ト称ス。</p>
<p>然レモ外国ノ人ナルヲ以テ新戒ノ位ニ列ス。師云、夫レ夏臘ハ乃チ釋氏ノ法歳ナリ。其ノ長幼ヲ序スルニ斯レニ縁ズト云フ無シ。サレバコソ梵網ニハ、老少國王奴婢ヲ問ズ、先戒ノ者ハ前ニ在テ坐シ、後受戒ノ者ハ皆是次第ニ坐スト説リ。亦法華主ニハ今此三界ハ皆是レ我カ力有ナリ。其ノ中ノ衆生悉ク是レ吾カ子ナリト説リ。豈ニ貴賤老少ヲ擇ンヤ。且ツ此土他土ヲ論ンヤトテ、證ヲ引テ質シ玉フ。派無際ノ謂ラク、昔シ四百十八年ノ前、吾國德宗皇帝ノ貞元二十年ハ、汝方國ノ桓武天皇ノ延暦二十三年甲申ノ冬、空海最澄ノ兩人結制ニ預リキ。則チ新戒ニ列子シカトモ、從テ諍ス。今汝獨リ何ゾ然ルヤト有ケレバ、衆儀紛然トノ果ス処ナシ。</p>	<p>然レ共外国ノ人ナルヲ以テ新戒ノ位ニ列ヌ。師曰ク、夫レ夏臘ハ乃チ釋氏ノ法歳ナリ。其ノ長幼ヲ序スルニ斯レニ縁ズト曰コト無シ。サレハヨリ梵網ニハ、老少國王奴婢ヲ問ハス、先受戒ノ者ハ次第ニシテ坐スト説ケリ。又ク法華經ニハ、今此三界ハ皆是我有ナリ。其ノ中ノ衆生悉ク是吾ガ子ナリト説キ玉エリ。豈ニ貴賤老少ヲ擇ンヤ。且此土他土ヲ論センヤト、證ヲ引テ質シ玉フ。派無際ノ云エラク、昔シ四百十八年ノ前キ、吾方國德宗皇帝ノ貞元二十年ハ、汝方國ノ桓武天皇ノ延暦二十三年甲申ノ冬、空海最澄ノ二人來テ結制ニ預リ、乃チ新戒ニ列子シガ共、從テ諍ハス。汝今獨リ何ソシカルヤト有リケレバ、衆議紛然トノ果ス。</p>	<p>然ドモ外國ノ人成ヲ以テ新戒ノ位ニ列ス。師曰、夫レ夏臘ハ乃チ釋氏ノ法歳也。其長幼ヲ序スルニ斯ニ縁ズト云事ナシ。サレバコソ梵網ニハ、老少國王奴婢ヲ問ズ、先戒ノ者ハ前ニ在テ坐シ、後受戒ノ者ハ皆是次第ニシテ坐スト説リ。亦法華經ニハ今此三界ハ皆是我有也。其中ノ衆生悉ク吾子也ト説ケリ。豈ニ貴賤老少ヲ擇ンヤ。且ツ此土他土ヲ論センヤトテ、證ヲ引テ質シ玉フ。派無際ノ謂ク、昔シ四百十八年ノ前キ、吾國德宗皇帝ノ貞元二十年ハ、汝方國ノ桓武天皇ノ延暦二十三年甲申ノ冬、空海最澄ノ兩人結制ニ預リキ。則チ新戒ニ列ネシカドモ、從テ諍ス。今汝獨リ何ゾシカルヤト有ケレバ、衆議紛然トシテ果ス處ナシ。</p>	<p>然レトモ外國ノ人ナルヲ以テ、新戒ノ位ニ列ヌ。師曰ク、夫夏ノ臘ワ乃チ釋氏ノ法歳ナリ。其ノ長幼ヲ序スルヲ斯レニ縁ラズト云フナシ。サレバコソ梵網ニハ、老少國王奴婢ヲ問ズ。先受戒ノ者ワ前ニ在テ坐シ、後受戒ワ次第シテ坐スト説ケリ。又法華經ニワ、今此三界ワ皆是我有ナリ。其中ノ衆生悉ク是吾子ナリト説ケリ。豈貴賤老少ヲ擇ンヤ。且此土他土ヲ論センヤト。證ヲ引テ質シ玉フ。派無際ノ曰ヘラク、昔シ四百十八年ノ前、吾國德宗皇帝ノ貞元二十年、汝方國ノ桓武天皇ノ延暦二十三年甲申ノ冬、汝國空海最澄ノ二人來テ、結制ニ預リキ。乃チ新戒ニ列子シカトモ、從テ諍ハズ。今汝獨リ何ゾシカルヤト有ケレバ、衆議紛然トシテ果ス所ナシ。</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>行處ヲ、鎮頭傍ヨリ突ト出テ、侍者ヲ拈ンデトウト投、汝ハ是破和合ノ僧、何ゾ小國ノ沙弥ト昵近ニシテ、大國ノ大徳ヲ輕忽ス。思知セントテ押ヘテ頸ヲ拈切ントセシ処エ、身ノ尺一丈計リナル甲冑ヲ着ケル人、忽然ト見レバ、鎮ガ頭ヲ抓拈ミ、汝等コソ無道野心ノ披袈裟賊、有道ノ僧ヲ殺サントヤ。汝ハ五逆ノ無間罪、賞罰見ヨト伝俣ニ、千尋餘ル谷底エ飛礫ノ如クナゲラレテ、微庄ト作りテ失タリケリ。</p>	<p>師ノ宿寮ニ忍ビ行ク処ニ、鎮頭傍ヲヨリ突ト出テ、侍者ヲ掴デドウト投、汝ハ是レ和合僧ヲ破リ、何ソ小國ノ沙弥ト昵近シテ、大國ノ大徳ヲ輕忽ス。思ヒシラセントテ押テ頸ヲ切ラントセシ処ニ、身ノ長ケ一丈計ノ甲冑着タル人、忽然トノ現レ、鎮頭抓拈ンテ、汝等コソ無道野心ノ披袈裟賊、有道ノ僧ヲ殺ントヤ。汝ハ五逆無間ノ罪ミ、賞罰見ヨト曰俣ニ、千丈ニ餘ル谷底ヘ飛礫ノ如クナゲウタル。微塵ト作テ失ニケル。</p>	<p>忍ビ行ク處ヲ、鎮頭傍ヨリ突ト出デ、侍者ヲ拈デドウト投、汝ハ是破和合ノ僧、何ゾ小國ノ沙彌ト昵懇ニシテ、大國ノ大徳ヲ輕忽スヤ。思シラセントテ押ヘテ頸拈切ントセシ處エ、身ノ尺一丈計リナル甲冑ヲ著ケル人、忽然トアラハレテ、鎮ガ頭ヲ抓拈ミ、汝等コソ無道野心ノ披袈裟賊、有道ノ僧ヲ殺ントヤ。汝ハ五逆ノ無間ノ罪、賞罰見ヨト云儘ニ、千尋ニ餘ル谷底ヘ飛礫ノ如クナゲラレテ、微塵トナリテ失タリケリ。</p>	<p>ノ宿寮ニ忍行処ニ、鎮頭傍ヨリヲドリ出テ、侍者ヲ拈テドウト投、汝ワ是破和合僧、何ゾ小國ノ沙弥ト昵懇シテ、太國ノ大徳ヲ輕忽スル。汝思イシラセントテ、押テ首ヲ拈切ラントセシ処ヘ、身ノ長一丈計ナル甲冑着タル人、忽然トノ見レ出、鎮頭ヲ抓拈ミ、汝ラコソ無道野心ノ披袈裟賊、有道ノ僧ヲ殺ントヤ。汝ワ五逆無間ノ罪賞罰見ヨト云フ俣ニ、千尋ニ餘ル谷ニ底ヘ飛礫ノ如クナゲウタル、微塵ト作テ失セタリケル。</p>
<p>時ニ明侍者辛キ命ヲ拾ヒ得テ、異人ニ向云、如何ナル御方ニテ我ヲ助ケ玉フゾ。異人ノ云エラク、吾ハ是此山ノ護法神、名ハ掌簿伝者ナリ。常ニ大衆ヲ擁護シテ、善ヲ賞シ惡ヲ罰ス。賀明ノ心善ニシテ、法ヲ荷負スルカラアリ。玄公ハ至人ナリ。務那懈タルヲ莫レト云テ、忽チ蹤ヲ潛セリ。侍者彌々感嘆シ、増々精進勇猛ニシテ、遂ニ此事發明シ、永ク出世ヲ棄却</p>	<p>中ニ侍者辛キ命ヲ得テ、異人ニ問テ曰ク、如何ナル御方ニテ我レヲ扶ケ玉フゾ。異人ノ曰ヘラク、吾レハ是レ此ノ山護法神、名掌簿ト曰者ナリ。常ニ大衆ヲ擁護シテ、善ヲ賞シ惡ヲ罰スル。明ノ心口善ニシテ大法荷負スルノカラアリ。玄公ハ至人ナリ。務ヨヤ懈タルゾト曰ツテ、忽チ跡ヲ潛セリ。侍者彌々感嘆シ、マシテ精進勇猛シテ、遂ニ此ノ事ヲ發明シ、永ク</p>	<p>時ニ辛キ命ヲ拾得タリト、明侍者異人ニ問テ曰、如何ナル御方ニテ我ヲ助ケ玉フゾ。異人ノ云エラク、吾ハ是レ此山ノ護法神、名ハ掌簿ト云者也。常ニ大衆ヲ擁護シテ、善ヲ賞シ惡ヲ罰ス。明ノ心善ニシテ法ヲ荷負スル力有リ。玄公ハ至人ナリ。務耶ヤ懈タル事莫レトテ、忽チ蹤ヲ潛セリ。侍者彌々感嘆シ、増々精進勇猛ニシ、遂ニ此事ヲ發明シ、永ク出世ヲ棄卻シ</p>	<p>時ニ賀明辛キ命ヲ拾ヒ得テ、異人ニ問テ云ク、如何ナル御方ニテ我ヲ扶ケ玉フゾ。異人答テ云ヘラク、吾ワ是此山ノ守護神、名ワ掌簿ト云。常ニ大衆ヲ擁護シテ、善ヲ賞シ惡ヲ罰ス。賀明汝心善法ヲ荷負スル力アリ。希玄ワ至人ナリ。務耶懈ソト云テ、忽チニ跡ヲ潛セリ。侍者愈々感嘆シ玉イテ、イヨク精進勇猛ニテ、遂ニ此ノ事ヲ發明シ、永ク出世ヲ棄却</p>

実道の至人賀明

悪僧の思念

<p>シテ、古人ノ跡ヲ学ヒ、深山ノ奥ニ柴庵ヲ結ヒ、影ヲモ移サテ果サレケリ。是実道ノ至人、参学ノ棟梁ナル皆人カクアリナバ、天神ノ擁護ナト力無ラサラン。慎ムヘキ事トモナリ。</p>	<p>出世ヲ棄却シテ、太梅禪師ノ跡ヲ学ビ、深山ノ奥柴ノ菴ニ影モ移サテ呆ラレケルト也</p>	<p>テ、大梅ノ跡ヲ學ビ、深山ノ奥ニ柴庵ヲムスビ、影ヲモ移サデ果サレケリ。是レ實道ノ至人、參學ノ棟梁ナル物乎。</p>	<p>シテ、太梅ノ跡ヲ学ヒ、深山ノ奥ノ柴ノ菴ニ、影モ移サデ果サレケルトナリ。</p>
<p>永平開山元禪師行狀傳聞記卷之上終</p>	<p>勅賜佛法禪師永平開山道元大和尚之行狀傳聞記下</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記卷之上尾</p>	<p>永平道元禪師之行狀傳聞記卷上終</p>
<p>八、悪僧共神天之罰ヲ蒙ル事 其時南海北竜等ノ三人相倚テ云ク、一昨夜ヨリ鎮頭ガ行方知レズトテ、手分ニ成テ尋シガ共、見エサレバ、遂ニ博士ヲ喚テ占ナワセケル。ト者占テ云ク、此僧高ヨリ深キニ身ヲ抛ウタレテ死ス。是荒フル神ノワザト見エ、亦人ノ業ト見エタリ。但シ屍子ハアレト千尋ノ底深ニ有リテ、得難クケル。悪僧共聽テ有徳ノ衲子トシテ、我等ガ依怙タルニ、靈神争カ守ララシテ、佳人ヲ失ヒケルトテ、自作自得ノ悪業ヲハ、却テ善事トヤ思ケン。横ニ佛院神祇ヲ怨ミ非事、</p>	<p>八ニハ悪僧共神天之罰ヲ蒙ル事 其ノ時、南海胡舌北竜等ノ三人相傍テ云ク、一昨夜ヨリ鎮頭ガ行方知レズ。手分ニ作テ尋シガ共、見エサレバ、遂ニ博士ヲ喚テ占ナハセケル。博士占テ曰ク、此ノ僧高キヨリ深キニ身ヲ抛レテ死ス。是レ暴破神ノワサトモ見エ、亦人ノワザトモ見ヘタリ。但シ屍ハ有リト千尋ノ底深キニ在、得ガタシトゾ云ケリ。悪僧共聽テ哀哉、有徳ノ衲子トシテ我等ガ依怙タルニ、靈神争カモラズシテ、佳人ヲ失ナイケルトテ、自作自得ノ悪業ヲハ、返テ横ニ仏陀神祇</p>	<p>八 悪僧共神天之罪ヲ蒙ル事 其時、南海北龍等ノ三人相倚テ云ク、一昨夜ヨリ鎮頭ガ行方知レズ。手分ニ成テ尋シカ共、見エザレバ、遂ニ博士ヲ喚占ナハセケル。ト者占テ曰、此僧高ヨリ深ニ身ヲ抛ウタレテ死ス。是荒フル神ノワザトモ見ユル。亦ハ人ノ業トモ見エタリ。但シ屍ハ有レドモ千尋ノ底深キニ有リテ、難レ得ト云フ。悪僧共聞テ有徳ノ衲子トシテ我等ガ依怙タルニ、靈神争カ守ラズシテ、佳人ヲ失ヒケルトテ、自作自得ノ悪業ヲハ、却テ善事トヤ思イケン。横ニ佛院神祇ヲ怨ミ悲</p>	<p>其時、南海北龍等ノ三人相倚テ云ク、一昨夜ヨリ鎮頭カ行方知レズ。手分ニ作テ尋シカ共、見エサレバ、遂ニ博士ヲ喚テ占ナワセケル。ト者占テ云ク、僧ニノ高キヨリ深キニ身ヲ抛レテ死ス。是荒キ神ノワザトモ見ヘ、亦ワ人業ト見ヘタリ。但シ屍ワ有ト雖ト、千尋ノ底深キニ有テ、得難シトゾ云ケリ。悪僧共聽テ哀哉有徳ノ衲子トシテ我ラカ依怙タルニ、靈神争カモラズシテ、佳人ヲ失ヒ玉フトテ、自作自得ノ悪業ヲハ、カヘリミズ、横様ニ佛陀神明ヲ怨</p>

計略

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>野哉無道自尿臭ヲ知ラヌトハ、彼等カ事ナリ。</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>ヲ怨ミ悲シム事、野哉無道自尿ノ臭キ事ヲ知ラズトハ、彼等カ事トモナリ。</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p> <p>ム事、野哉無道自尿臭ヲ知ラヌトハ、彼等カ事也。</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p> <p>ミ悲ムルコト、野哉無道ノ自尿臭コトヲ知ズトワ、彼等カ事ゾカシ。</p>
<p>爰ニ海龍兩人ガ云イケルハ、ト者ノ語ヲ按ズルニ、神ノワザトハ心得ス、人ノ業トハ云中タリ。思ニ是ハ侍者ト希玄トカ仕業ト覚エタリ。何者鎮頭ガ路傍ニ待伏シテ、侍者ヲ殺サントセシ處エ、希玄目ガ出合、二人ニテ千丈ガ嶽ヨリ放逐セラレテ、深谷ニ投ジテ死ヌナラン。嗟鎮頭ハ無双ノ強力有テ敵セル者無リシニ、何トノ殺ナラヌ奴等ニ殺サレケリ。口惜ヤ、向ノ敵ヲ取ラテ安クヨクヘキヤ。聞ハ希玄夜々後山ノ中峯ニ登リテ坐禪スト。先往テ彼ヲ巖下ニ墜殺シ、其後侍者ヲ殺ント相定メ、壯年血氣ノ惡僧共三十餘人ヲスグツテ、南海北龍胡管三人大將ニテ、今夜子ノ刻ヨシトシメシ合セタリ。オロカナル天罰ヲ招キ難義ニ遇ン。</p>	<p>爰ニ海龍ガ云ク、博士ノ語ヲ按ズルニ、神ワザトハ心得ヘズ、人ノワザトハ云當タリ。思ニ是レハ侍者ト希玄トガ仕業ト覚エタリ。何者鎮頭路傍ニ待伏シテ、侍者ヲ殺ントセシ處ヘ、希玄目ガ出合セ、二人ニテ千丈ガ嶽エ放墜セリ。深谷ニ投ジテ死ヌナラヌ。嗟々鎮頭ハ無双ノ強力有テ敵スル者ナカリシニ、何ニトテ敵ナラヌ奴等ニ殺サレケル。口惜シキ事カナ。敵ヲ取ラテ安ベキカ。聞ケバ希玄夜々後山ノ中峯ニ登リ坐禪スト。往テ彼レヲ岩下ニ墜殺ント。其ノ後侍者ヲ殺ント相定、壯年血氣ノ惡僧トモ三十餘人ヲスグツテ、南海北龍胡舌三人太將ニテ、今夜子ノ刻ヨシトシメシ合セタリ。ヲロカナルカナ又天罰ヲ招クベシ。</p>	<p>爰ニ海龍兩人ガ云イケルハ、ト者ノ語ヲ按ズルニ、神ノワザトハ心得ズ、人ノ業トハ云中テタリ。思ニ是ハ侍者ト希玄トガ仕業ト覺タリ。何トナレバ鎮頭路傍ニ待伏シテ、侍者ヲ殺サントセシ處エ、希玄目ガ出合セ、二人ニテ千丈嶽ヨリ放墜セラレ、深谷ニ投ジテ死ヌナラン。嗟鎮頭ハ無雙ノ強力有テ敵セル者無リシニ、何トシテ數ナラヌ奴等ニ殺サレタルヤ、口惜シヤ、向ノ敵ヲ取テ安クオク可キヤ。聞バ希玄夜々後山ノ中峯ニ登リ坐禪スト。先往テ彼ヲ巖下ニ墜殺シ、其後侍者ヲ殺ント相定メ、壯年血氣ノ惡僧共三十餘人ヲスグツテ、南海北龍胡舌三人大將ニテ、今夜子ノ刻ヨシトシメシ合セタリ。オロカナルカナ天罰ヲ招キ難ニ遇ン。</p>	<p>爰ニ海龍二人カ云ク、ト者ノ語ヲ按ズルニ、神ノワザトハ心得ズ、人ノ業カト云中レリ。思ニ是ワ侍者ト希玄トカ仕業ト覚ヘタリ。何者鎮頭路傍ニ待伏シテ、侍者ヲ殺ントセシ處ヘ、希玄目カ出合セ、二人シテ千丈カ嶽ヨリ放墜セラレ、深谷ニ投ジテ死スルナラン。嗟鎮頭ハ無双ノ強力有テ敵スル者ナカリキニ、何トシテ數ナラヌ奴等ニ殺ケル、口惜キ事カナ。敵ヲ取イテ安ベキヤ。聞バ希玄夜々後山ノ中峯ニ登リ坐禪スト云。先往テキヤツメヲ巖下ニ墜殺シ、其後侍者ヲ殺ント相定メ、壯年血氣惡僧トモ三十餘人ヲスグツテ、手合云合、南海北龍胡舌三太將ニテ、今夜子ノ刻ゾヨシトシ合セタリ。ヲロカナルカナ亦天罰ヲ招クヘシ。</p>

高充の忠義心

先表カヤ時ニ高充ハ単過ニ独り窓ニ對シテ徒然ナル夕陽ニ、何人モ知レズ、一兩人窓ノ外ヲ語り通りケルハ、傷シヤ日本ノ僧希玄コソ、今夜夜半ニ至テ惡僧共ニ中峯ヨリ抛墜セラレント社イト悲キワザナリト。高充聞テ愕キ、窓ノ外見ルニ、人見エズ。是ハ神天ノ告玉フカ。若シ由断ノ師ヲ失イマイラセバ、吾独り何ノ面白在テ本郷ニ還ンヤ。設イ吾身ヲ失フモ、師ノ寶命ヲ全ノ飯朝マシマサバ、實ニ僕力草下ノ本懐ト、思フ意ゾ頼母シケレ。

時ニ高充ハ旦過ニ孤窓ニ對シテ徒然ナル夕陽ニ、何人トモ知レズ、一兩人窓外ヲ語り通りゲクハ、傷シヤ日本ノ僧希玄、此夜夜中ニ到テ惡僧共ニ中峯ヨリ抛墜セラレヌ社ソ取悲キワザナリト。高充聞キテ愕キ、窓外ヲ見ルニ、人見エズ。是レハ神天ノ告玉フカ。若油断シテ師ヲ失ヒ奉テ、吾レ獨リ何ノ面目アリテ本郷へ還ランヤ。設ヒ吾身ハ失ナウトモ、師ノ寶命ヲ全フシテ、飯朝マシマサバ、實ニ僕ガ草下ノ本懐ト、思フ心ソ頼母シキナリ。

先表ニヤ高充ハ旦過ニ獨り窓ニ對シテ徒然ナル夕陽ニ、何人トモ知レズ、兩人窗外ヲ語り通りケルハ、傷マシヤ日本ノ僧希玄、今夜夜半ニ至テ惡僧共ニ中峯ヨリ抛墜サレム社イト悲シヤワザナリト。高充聞テ驚キ、窗外見ルニ、人見エズ。是ハ神天ノ告玉フカ。若シ油断シテ師ヲ失ヒマイラセテハ、吾獨り何ノ面目在テ本郷ニ還ンヤ。設イ吾身ハ失フトモ、師ノ寶命全フシテ、歸朝マシマサバ、實ニ僕ガ草下ノ本懐ト、思フ心ソ頼母シケレ。

時ニ高充ワ旦過寮ニ孤り窓ニ對シテ徒然夕陽ニ、何人トモ知レズ。窓外ヲ通りツ、傷シヤ日本ノ僧希玄、此夜夜ノ中ニ到テ惡僧共ニ中峯ヨリ抛墜セラル、ハズ社イト悲キワザナリト。高充聞テ大ニ愕キ、窓外ヲ見レバ、人見エズ、是社神天ノ告玉フ処ナリ。若油断シテ師ヲ失ヒマイラセバ、吾獨何ノ面目ニ本郷ニ還ンヤ。設へ吾身ハ失ウモ、師ノ寶命全フシテ、飯朝マシマサバ、實ニ僕ガ草下ノ本懐ト、思フ心ソ頼母布キ。

高充の活躍

高充時分ヲ考へ、則チ黄巾ノ髮卷ニ例ノ一腰相横エ、惡僧ニ先達テ峯ニ登リテ、師エ此ト訴エケル。師咲テ言ク、意ナリ高充殺サバ殺サルベシ。他ナ殺シゾ。身世元來限り有リ。死活明ムベシ。善惡總テ宿ニ定ルニトテ、亦定坐マシマセリ。高充心ニ咲メ云、至哉大丈夫、八風吹ト不動トワ我師ノ事ナルト、師ヲ覆護スルノ志弥々止テヤマザレス。師ヲ去ルコト七八丁、岩坂ニ一圍半計リナル松ノ屈

高充時分ヲ考へ、乃チ黄巾ノ髮卷ニ例ノ一腰相横へ、惡僧共ニ先達テ峰ニ登リテ、師ヘカクト訴ヘケル。師笑テ言ク、意ナリ高充殺サルベキ人ナ殺シゾ。身世限りアリ。死活明ムベシ。善惡總而宿ニ定ルゾトテ、又夕定坐マシマセバ、高充心ニ嘆メ至レル哉大丈夫、風吹トモ不動トハ我師ノ事ナリト。師ヲ覆護スルノ志シ弥々已マス。師ヲ去ルコト七八町、岩城ノ嶮路ノ下ヲ見レバ、四五丈斗谷川

高充時分ヲ考エ、則チ黄巾ノ髮卷ニ例ノ一腰相横エ、惡僧共ニ前キ達テ峯ニ登リ、師エ角ト訴ケル。師咲テ言ク、意也高充殺サバ殺サルベシ。人ナ殺シゾ。身世元來限り在リ。死活明ム可シ。善惡總テ宿ニ定ルニトテ、又定坐マシマセリ。高充心ニ嘆テ云、至哉大丈夫、八風吹トモ不動トハ我師ノ事也ト。師ヲ覆護スルノ志シ彌々ヤメテヤマザレバ、師ヲ去コト七八丁、巖坂ニ一圍半計リナル松ノ屈

高充時分ヲ考へ、乃チ黄巾ノ髮卷ニ例ノ一腰相横へ、惡僧共ニ前立テ峯ニ登リ、師ニ見ヘカクト訴ケル。師笑テ言ク、意ナリ高充殺サバ殺サルベシ。他ナ殺シメ。身世限りアリ。死活明ムベシ。善惡總テ宿ニ定ルニトテ、亦定坐マシマセリ。高充心ニ嘆スラク、至哉大丈夫、八風吹トト不動トワ、我師ノ御事力ナト、師ヲ覆護スルノ志シイヨク切ナリ。師ヲサル事七八町、岩坂ノ嶮路ノ下ヲ見レ

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>曲ト横ニナリ出、嶮路ヲ覆テ有リケルヲ、高充見テ適レ好シト悦ヒ、松ヲ取テ推シタワメ、腰打掛テ悪僧共ヲ今ヤ遅シト俟ケル処ニ、案ノ如ク悪僧共多勢サワメキ来テ、高充ヲ急度見、狹路ニアルハ何者ゾ。高充答テ、吾ハ日本ノ僕ナリ。聞ケハ実ニ悪僧等、吾師ヲ害セン為中峯エ登ト聞ク故ニ、爰ニ防ク。僧ハ悪ヲ止メ善ヲコソワ修スヘケレ。不善事ヲ何事ゾ。夜更ニ爰ニ来レルハ、悪僧達ト覺エタレ。通サジト訝カレバ、南海聞テ打晒イ、イワレヌ僕ガ口ヲテカナ、利アレバ行ズ菩薩戒、汝ガ俗ノ知ルヘケンヤ。先ツ汝ヲモ退スマシ。胡管掛レ伝ケレバ、高充手ヲ懷ロニノ云、珍シキ菩薩戒。吾ハ無戒ノ者ナレバ、僧ニ敵スルノ心無シ。身ヲ方々ニ任スルゾ。去來行セヨト云ケレバ、運ノ究ヤ南海ト北竜胡管三人ガ、唯倒レ木ト心得テ、ノサノサト踏著ケ踏著ケ高充ヲ抓拈テ巖下ニ墜殺セントセシ処ヲ、高充ソツト身ヲ引ハ、三人ノ</p>	<p>ノ水深ク見ヘケリ。岩坂ニ一圍半計リナル松ノ屈曲ト、横ニ成出テ、嶮路ヲ覆テアルケルヲ、高充見テ適レ好シト悦ビ、松ヲ取テ推シタワメ、腰ヲ打掛テ悪僧共ヲ今ヤ遅シ待ケル処ニ、案ノ如ク悪僧共多勢サワメキ来テ、高充ヲ急度見テ、狹路ニアルハ何者ゾヤ。高充答テ、吾ハ日本ノ僕ナリ。聞ケバ實乎悪僧達、吾師ヲ害セン為メ、中峯ヘ登ルト故ニ、爰ニ防ク。僧ハ悪ヲ止メ善ヲコソ修スベキニ、不善事何ニ事ゾ。夜深テ来ルハ悪僧達ト覺タリ。コ、通サジト訝レバ、南海聞テ打晒イ、イハレヌ僕ガ口チ立哉、利アレバ行ズ菩薩戒、汝ガ俗ノ知ルベケンヤ。先ズ汝ヲ退スマシ。胡舌掛レト云ケレバ、高充手ヲ懷ニシテ曰ク、珍布菩薩戒、吾レハ無戒俗ナレバ、僧ニ敵スル心ナシ。身ヲ方々ニ任スルゾ。去來行セヨト云ケレバ、運ノ究メヤ南海北竜胡舌三人ガ、此ノ松ヲ唯倒レ木ト心得ヘテ、ノサノサト踏著々々高充ヲ</p>	<p>曲ト横ニ成リ出デ、嶮路ヲ覆テ有リケルヲ、高充見テ適レ好シト悦ビ、松ヲ取テ推シタワメ、腰打掛テ悪僧共ヲ今ヤ遅シト待ケル處ニ、案ノ如ク悪僧共多勢サワメキ来テ、高充ヲ急度見テ、狹路ニアルハ何者ゾ。高充答テ、吾ハ日本ノ僕也。聞ハ實トヤ悪僧共、吾師ヲ害セン爲、中峯エ登ト聞ク故ニ、爰ニ吾ヲ待居タリ。僧ハ悪ヲ止メ善ヲコソ修スベケレ。不善事ハ何事ゾ。夜深ケテ爰ニ来レルハ、悪僧達ト覺エタリ。通サジト社訝カレバ、南海聞テ打笑イ、キワレヌ僕ガ口ヲテ乎。利アレバ行ヌ菩薩戒、汝ガ俗ノ知ルベケンヤ。先汝ヲ退スマジ。胡舌掛レト云ケレバ、高充手ヲ懷ニシテ云、珍シキ菩薩戒、吾ハ無戒ノ俗ナレド、僧ニ敵スル心ナシ。身ヲ方々ニ任ズルゾ。去來行セヨト云ケレバ、運ノ究ヤ南海ト、北龍、胡舌三人ガ、此松ヲ唯倒木ト心得テ、ノサノサト踏ミ付ケケ、高充ヲ抓拈テ巖下ニ墜落サントセシ處</p>	<p>バ、四五十丈ノ深谷、タニ川水深ク見ヘケリ。亦岩坂ニ一圍半計ナル松ノ屈曲ト、横ニ成出嶮路ヲ覆テ有ケルヲ、高充見テ是適レ好ト獨笑。松ヲ取テ推タワメ、腰打掛テ悪僧共ヲ今ヤ遅シト待ケル処ニ、案ノ如ク悪僧共多勢サワメキヨジ登リ、高充ヲキツト見テ、狹路ニアルワ何者ゾ。高充答テ、吾ヲ日本ノ僕ナリ。聞バ實乎悪僧タチ、吾師ヲ害セン為、中峯ヘ登ルト聞故ニ、爰ニ防ク。僧ヲ悪ヲ止メ善ヲコソ修スベキニ、不善事何コトゾ。夜深テ爰ニ来レルワ、悪僧等ト覺タリ。透サジト訝バ、南海聞テ打晒ヒ、井ワレヌ僕ガ口立カナ。利有レバ行ズ菩薩戒、汝俗体ノシルベケンヤ。先汝ヲ退スマジ。胡舌カ、レト云ケレバ、高充手ヲフトコロニシテ曰、珍布キ菩薩戒、吾ヲ無戒ノ俗ナレド、僧ニ敵スルナシ、身ヲ方々ニ任スルゾ。去來行セヨト云ケレバ、運ノ窮ヤ南海ト北龍胡舌三人ガ、此ノ松唯倒木ト心得テ、ノサノサト踏</p>

高充の独語

悪僧天罰を蒙
むる

<p>悪僧共松ニクワツトハ子揚ラレ、梢ヲ捉ル間モナク、岩下ニトウト墜落シ、流レケワシキ谷川ノ底ノミクズト成リニケリ。</p>	<p>時ニ俄ニ天曇リ、山鳴、亦谷響、光リ物処々飛ヒ、其気色寒ク、残ル悪僧共コハケシカラヌ。畏ロシヤ是山神ノ尤ナリトテ、振イヲノ、キ逃ケルカ、暗夜ノ山路見エ難ク、岩下ニ轉墜スルモ有リ。或ハ此ニ逃ハツシ、坂路ニ絶エ入ルモアリ。恙カナク山下ニ走セ付タルワ、漸ク四五箇計ト聞エケリ。</p>	<p>于時高充独リ語ニ、嗚呼柔和忍辱ノ衣ハ、外ノ耻カクシ、悪行内ニ溢餘シテ天罰ヲ于此受ク。吾ヲ怨ルモ莫レト云テ、師ニ善惡ヲ奏シ、御伴仕リ、京師ノ傍ニ覺念トシ律僧ノ草庵ニ到テ、少時休息シ玉エリ。</p>
<p>抓搦ンセシ処ヲ、高充ソツト身ヲ引ハ、三人ノ悪僧共松ニクハツトハ子アゲラレ、梢ヲ捉間ナク、岩下ニドウト墜落シ、流レケハシキ谷川ノ底ノミクズト成リニケル。</p>	<p>時ニ俄ニ天曇、山鳴、又タ谷響、光物ニテ、其ノ氣色寒ク、残ル悪僧共コハケシカラズ、畏シヤ是レ山神ノ尤ナリトテ、振イヲノ、キ逃ケルガ、暗夜ノ山路見エカ子テ、岩下ニ轉墜スルモアリ。或ハ此ニ逃ゲハツミ、坂路ニ絶入スルモアリ。恙ナク山下ニ走ツキタルハ、四五箇計リト見エニケリ。</p>	<p>時ニ高充獨語ニハ、嗚呼柔和忍辱ノ衣ハ、外ノ耻カクシ、悪行内ニ溢餘シテ天罰ヲ受ル事、我ヲ怨ル事勿レト云リ。師恙ナク、高充伴ニテ、京師傍ニ覺念ト云エル律僧ノ草庵ニ到テ、少時休息マシマスナリ。</p>
<p>ヲ、高充ソツト身ヲ引バ、三人ノ悪僧共松ニクワツトハネアゲラレ、梢捉ウル間モ無ク、巖下ニドウト墜落シ、流レキビシキ谷川ノ底ノミクヅト成ニケリ。</p>	<p>時ニ俄ニ天曇リ、山鳴リ、又谷響キ、光リ物ノ處々ニ飛ビ、其氣色冷シク、殘ル悪僧共是ハケシカラヌ。恐シヤ是山神ノ咎也トテ、振イオノノキ逃ケルガ、暗夜ノ山路見ヘ難ク、巖下ニ轉墜スルモ在リ。或ハココニ逃ハツミ、坂路ニ絶エ入ル者モ有リ。恙ガナク山下ニニゲ付キタルハ、四五箇計ト聞エケリ。</p>	<p>時ニ高充獨語ニ、嗚呼柔和忍辱ノ衣ハ、外ノハチカクシ、悪行内ニ溢餘シテ天罰ヲ于此受ク。我ヲ恐ル事莫レト云テ、師ニ善惡ヲ奏シ、御伴仕リ、京師ノ傍ニ覺念ト云シ律僧ノ艸庵ニ到テ、暫ク休息シ玉ヘリ。</p>
<p>着々高充ヤラジト抓搦、岩下ヘ墜殺セントセシ所ヲ、高充ソツト身ヲ引バ、三人ノ悪僧共、松ニクワトハ子アケラレ、梢ヲ捉間モナク、岩谷深墜落シ、流ケワシキ谷川ノ底ノミクズト成ニケル。</p>	<p>時ニ俄ニ天曇山鳴谷響ク電光ソマロニテ、其氣色ズサマシ、殘ル悪僧共コワケシカラヌ。畏シヤ是山神ノ咎ナリトテ、フルイヲノ、キ逃ケルガ、暗夜ノ山路見ヘサレバ、岩下ニ轉墜スルモアリ。トシヲイアワテ大クズレ、或ワ此ニ逃ハツミ、坂路ニ絶入スルモアリ。アワレニモ亦シヤフシナリ。恙ナク山下ニ走着タルワ、四五箇計ト聞ヘケル。</p>	<p>于時高充獨リ語、嗚呼柔和忍辱ノ衣ハ、外ノ耻カクシ、悪行内ニ溢餘シテ天罰ヲ于此ウク。我ヲ怨ルコトナカレト云ヘリ。師恙ナク、高充御伴仕リ、京師ノ傍ニ覺念ト云シ律僧ノ草庵ニ到テ、少時休息マシマシケリ。</p>

「上表」

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>九、師臘ヲ質シ了テ如淨ニ依ル 事並ニ亡靈救玉フ事</p> <p>此ノ律僧、師ノ凡相ナラス路體ノ絶倫ナルヲ知テ、忻怡限り無く、慇懃ニ恭慕シ饗應シ奉ル。于茲於テ、表ヲ上帝ニ来シテ、具ニ奏達セリ。</p>	<p>九ニハ師戒臘ヲ質了如淨禪師ニ依リ玉フ事并ニ亡靈ヲ救玉フ</p> <p>此ノ覺念律僧、師ノ凡相ナラズ道體ノ絶倫ナルヲ知テ、忻怡限りナク、慇懃ニ敬慕シ饗應シ奉ル。師コ、ニツイテ表ヲ上帝ニ奉リ、具ニ奏達セリ。</p>	<p>九 師臘ヲ質シ了テ如淨ニ依ル 事并ニ亡靈救玉フ事</p> <p>此律僧、師ノ凡相ナラヌ道體ノ絶倫ナルヲ知テ、忻怡限りナク、慇懃ニ恭慕シ饗應シ奉ル。師于茲於テ、表ヲ上帝ニ奉ジテ、具ニ奏達セリ。</p>	<p>九、師臘ヲ質了テ如淨ニ依セ玉フ并ニ亡靈ヲ救玉事</p> <p>此律僧ワ、師凡相ナラズ道體ノ絶倫ナルヲ知テ、忻怡カギリナク、慇懃ニ敬慕シ饗應シ奉ル。師于茲ヲヒテ、表ヲ上帝ニ奉シテ、具ニ奏達セリ。</p>
<p>戒臘遵守の勅 裁下る</p> <p>上乃チ叡感不淺、遂ニ勅使ヲ賜テ、日本ノ僧ノ言處、仏制ヲ曲ケズ。宋土ノ釈氏何ゾ非例ヲ不改シテ律儀ヲ顛倒シ、私ヲ以テ道トスルカ。殊ニ天童欽山寺等ハ天下ノ選仏場トシテ、正邪ヲ定ルノ本ナリ。自今以後ハ倭國ノ臘次ヲ以テ、法位具セシム可シ。亦會裏ノ愚僧共、和國ノ僧ヲ誹毀シ、或ハ掠奪ト風ニ聞エアリ。是亦獅子身中ノ虫ナリ。重テ彼ヲ毀犯セバ、刑法宥ムヘカラストノ嚴命ナリ。倫言四海ニ響テ、景德ハ云ニ不レ及、天ノ叢下一時ニ不法ヲ改メテ、僧臘速ニ正クナリ、茲ヨリ師ノ英声雄名宋土ニ蕩々タル事ヲ得</p>	<p>上帝乃叡感不淺。遂ニ勅使ヲ賜テ、日本ノ僧ノ所レ言、佛制ヲ曲ス、宋土ノ釋氏何ソ悲例ヲ不改メ律儀ヲ顛倒シ、私ヲ以テ道トスル歟。殊ニ天童欽山等ハ天下ノ選佛場トシテ、邪正ヲ定ルノ本ナリ。自今以後ハ倭國ノ臘次ヲ以テ、法位ヲ具セシムベシ。又會裏ノ愚僧共、倭國ノ僧ヲ誹毀シ、或ハ掠奪ルト風ニ聞ヘ在リ。是又獅子身中ノ蟲レハ亦タ獅子身中ノ虫ナリ。重テ彼ヲ毀犯セバ刑法宥ムヘカラストノ嚴命ナリ。論言四海ニ響テ、景德寺ハ云ニ及バス、天下ニテノ叢林一時ニ不法ヲ改テ、僧臘速ニ正クナリ、又是ヨリ師声名宋土ニ</p>	<p>上乃チ叡感不淺、遂ニ勅使ヲ賜テ、日本ノ僧言處、佛制曲ケズ、宋土ノ釋氏何ゾ非例ヲ不改シテ律儀ヲ顛倒シ、私ヲ以テ道トスルカ。殊ニ天童徑山等ハ天下選佛場トシテ、正邪ヲ定ムルノ本也。自今以後ハ倭國ノ臘次ヲ以テ、法位ヲ具セシムベシ。亦會裏ノ愚僧共、倭國ノ僧ヲ誹毀シ、或ハ掠奪ルト風ニ聞ヘ在リ。是又獅子身中ノ蟲也。重テ彼ヲ毀犯セバ、刑法宥ムヘカラストノ嚴命也。倫言四海ニ響キテ、景德ハ云ニ不レ及、天下ノ叢下一時ニ不法ヲ改テ、僧臘速ニ正ク成リ、是ヨリ師ノ雄名宋土ニ蕩々タルコトヲエタリ。</p>	<p>上乃チ叡感不淺、遂ニ勅使ヲ賜テ、日本ノ僧所レ言佛制ヲ曲ズ、宋土ノ釈氏何ゾ非例ヲ不改ノ律儀ヲ顛倒シ、私ヲ以テ道トスル歟。殊ニ天童欽山寺ハ天下ノ選佛場トシテ、正邪ヲ定ルノ本也。自今以後ハ倭國ノ臘次ヲ以テ、法位ヲ具セシムベシ。亦裏ノ愚僧共、倭僧ヲ誹毀シ、或ワ掠奪ルト風相聞ヘアリ。是又師子身中ノ虫ナリ。重テ彼ヲ毀犯ノ輩ワ、刑法宥ムヘカラストノ嚴命ナリ。論言四海ニ響テ、景德ワ云ニ不レ及、天下叢林一時ニ不法ヲ改メテ、僧臘速ニ正クナリ、又茲ヨリ師ノ声名宋土ニ蕩々タルコトヲ得タリ。</p>

<p>諸方参学（徑山・小翠巖等）</p>	<p>幾クナラサルニ、徑山ニ詣テ琰淅翁ヲ礼シ、天台ノ小翠巖ニ登テ卓公ニ見エ、尚ヲ惟一、宗月、月堂、無象等ノ諸耆老ニ參テ、問答機縁ニ至ル。師平昔氣ヲ以テ自負セリ。諸方其鋒ニ中ル者無リキ。</p>	<p>タリ。</p>
<p>老礎、如浄への参問を指示</p>	<p>サルニ因テ宋土扶桑、吾ニ勝レル者ナシト、大我謾ヲ発シ既ニ皈朝ヲ催シ玉フ。時ニ老礎ト云者アリ。師ニ語テ曰、子既ニ叢林ニ遍參シ、普ク名宿ニ參セル。然レハ天下第一ノ宗匠ハ、唯如浄一人ノミゾ。子往テ見エハ、正ニ処得アラント。</p>	<p>蕩々タリ。</p>
<p>○嘉定十七年如浄と初相見「身心脱落」師資相承</p>	<p>時ニ寧宗皇帝、浄公ノ道德世ニ高キヲ以テ、詔シテ天童山ニ住セシム。師教ニ隨テ、疾ク錫ヲ振テ行テ、浄公ニ依レリ。是則嘉定十七年、師ノ御年二十五、日本ノ後堀川ノ元仁元年甲申ニ當ル。浄公、師ヲ見テ、大ニ懼ヒ、甚タ是ヲ器量アル。時ニ丹知客怪ンテ是ヲ</p>	<p>幾バクナラザルニ、徑山ニ詣シテ琰淅翁ヲ禮シ、天台ノ少翠巖ニ登テ卓公ニ見ヘ、尚惟一、宗月、月堂、無象等ノ諸大老ニ參ジテ、問答機縁ニイタル。師平昔氣ヲ以テ自負セリ。諸方其ノ鋒キニ當ル社ナカリキ。</p>
<p>是ニ於テ皈朝ヲ催シ玉フ。時ニ老礎ト云ウモノアリ。師ニ語テ曰ク、子スデニ叢社ニ遍遊シテ、普ク名宿ニ參セリ。然レハ天下第一ノ宗匠ハ只タ如浄禪師一人ノミゾ。子往テ彼ニ見ヘハ、所得アラント。</p>	<p>幾バクナラザルニ、徑山ニ到テ淅翁ヲ禮シ、天台ノ小翠巖ニ到リ、尚ヲ惟一、宗月、月堂、無象等ノ諸耆老ニ參テ、問答機縁ニ至ル。師平昔氣ヲ以テ自負セリ。諸方其鋒ニ中ル者ナカリキ。</p>	
<p>時ニ寧宗、浄公ノ道德世ニ高キヲ以テ、詔シテ天童山ニ住セシム。師錫ヲ振テ行テ、浄公ニ依レリ。是嘉定十七年、師ノ御年二十五、日本ノ後堀川ノ元仁元年甲申ニ當ル。浄公師ヲ一見シテ、大ニ懼甚ダ是ヲ器重アル。時ニ、丹知客怪デ是ヲ問。浄公云ク、前夜洞山ノ</p>	<p>是ニ於テ皈朝ヲ催シ玉フ。時ニ老礎ト云フ者アリ。師ニ語テ云ク、子スデニ叢社ニ遍遊シテ、普ク名宿ニ參セリ。然レハ天下第一ノ宗匠ハ、只如浄一人ノミゾ。往テ彼ニ見ヘハ、所得アラント。</p>	<p>幾ナラザルニ、徑山ニ詣テ琰淅翁ヲ禮シ、天台ノ小翠巖ニ登リ、卓公ニ見ヘ、尚惟一、宗月、*○月堂、無象等ノ諸大老參ジテ、問答機縁ニイタル。師平昔氣ヲ以テ自負セリ。諸方其鋒ニ中ル者ナカリキ。 *○印、上欄に「落字ト見不知」とある。</p>

永平開山禪師之行狀傳聞記	永平開山道元大和尚行狀傳聞記	永平開山元禪師行狀傳聞記	永平開山道元禪師行狀傳聞記
<p>問。浄云云ク、前後洞山ノ悟本大師此ニ来ルト夢見タリ。此子恐ハ是洞山ノ後身ナルヘシ。向後正ニ大ニ吾宗ヲ弘ムベシト原シ玉フ。師朝參暮請寸陰ヲ捨テズ、飲食寒暖共ニ忘レ精行純一無雜ナリ。或時浄禪師、衆僧ノ坐睡ヲ責テ云ク、參禪ハ須ク身心脱落ナルヘシ。只管打睡ノ什麼ノ為ス。師於レ此豁然トノ大悟アリ。猶服勤マシマス。四年ノ内、日々ニ智證ヲ増シ、尽ク其ノ蘊ヲ得タマエリ。</p> <p>○宝慶二年 太白山遊覽</p> <p>其後理宗ノ宝慶二年丙戌ノ四月、太白山ノ四ノ嶽ニ登リ、遊覽シ玉フニ、西北ハ峨々ト龍テ松樹鬱密タリ。東南ハ坦々ト廣シテ香草繁茂シ、日受常ニ暖ニシテ、青苔柔カニ坐褥ニ觸ルカ如ク、亦平堤タル清池アリ。鏡ノ如ク冷水甘美ニシテ、阿法師ガ車軸ノ水ニ似タリ。好景塵ノ世ヲ隔テ、サナカラ仙境カト怪シマル。</p> <p>師已ニ夕陽ニ及ヘ忞皈ル事ヲ忘レ</p>	<p>曰ク、前夜洞山ノ悟本大師此ニ来タリ玉フト夢見タリ。此ノ子恐クハ是レ洞山ノ後身ナルベシ。向後マサニ大ニ吾宗ヲ弘ムベシト原シ玉フ。師朝參暮請寸陰ヲ捨テズ。飲食寒暖共ニワスレ、精行純一無雜ナリ。或時浄公衆僧ノ坐睡ヲ責テ曰ク、參禪ハ須ク身心脱落スベシ。只管打睡シテ什麼ノ為メゾ。師於レ是豁然トノ大悟アリ。猶服勤マス。四歳ノ中、日日ニ智證ヲ増シ、盡ク其ノ蘊ヲ得玉ヘリ。</p> <p>其ノ後チ理宗ノ宝慶二年丙戌ノ四月、太白山ノ西ノ嶽ニ登リ、遊覽シ玉フニ、西北ハ峨々トノ聳テ松樹鬱密タリ。東南ハ坦々ト廣シテ香草繁茂シ、日受ケ常ニ暖カニシテ、青苔柔ニ坐褥ニ觸ガ如シ。清池アリ。鏡ノ如シ。冷水甘美ニシテ、阿法師車軸ノ水ニ似リ。好景塵世ヲ隔テ、サナガラ仙境カト怪シマル。</p> <p>師已ニ夕陽ニ及ベドモ皈ル事ヲ忘</p>	<p>悟本大師此ニ来ルト夢見タリ。此子恐クハ洞山ノ後身成ルベシ。尙後正ニ大ニ吾宗ヲ弘ベシト原シ玉フ。師朝參暮請寸陰ヲ捨テズ、飲食寒暖共ニ忘レ、精行純一無雜也。或時浄禪師衆僧ノ坐睡ヲ責テ云、參禪ハ須ク身心脱落ナルベシ。只管打睡シテ什麼ノ為ゾ。師於レ此豁然トシテ大悟アリ。ナラ服勤マシマス。事四歳ノ中、日ニ智證ヲ増シ、盡ク其蘊ヲ得玉ヘリ。</p> <p>其後理宗ノ寶慶二年丙戌ノ四月、太白山ノ西ノ嶽ニ登リ、遊覽シ玉フニ、西北ハ峨々ト聳テ松樹鬱密タリ、東南ハ坦々ト廣シテ香草繁茂シ、日受ケ常ニ暖ニシテ、青苔柔カニ坐褥ニ觸ルガ如ク、清池アリ。鏡ノ如シ。冷水甘美ニシテ、阿法師車軸ノ水ニ似タリ。好景塵ノ世ヲ隔テ、サナガラ仙境カトゾ怪シマル。</p> <p>師已ニ夕陽ニ及ベドモ歸ル事ヲ忘</p>	<p>前夜ニ洞山ノ悟本大師、此ニ来リ玉フト夢見タリ。此ノ子恐クワ是レ洞山ノ後身ナルベシ。向後マサニ大ニ吾ガ宗ヲ弘ムベシト原合シ玉フ。師朝參暮請寸陰ヲ捨テズ、飲食寒暖共ワスレ、精行純一無雜ナリ。或時浄公衆僧ノ坐睡ヲ責テ曰、參禪ハ須ク身心脱落ナルベシ。只管打睡シテ什麼ノ為ゾト。師於レ是豁然トシテ大悟アリ。猶服勤マス。四歳ノ中、日々ニ智證ヲ増シ、尽ク其ノ蘊ヲ得玉ヘリ。</p> <p>其ノ后、理宗ノ寶慶二年丙戌ノ四月、太白山ノ西ノ嶽ニ登リ、遊覽シ玉フニ、西北ハ峨々トノ聳テ、暖カニシテ、青苔柔ニ坐褥ニ觸ル、ガ如ク、清池アリ。鏡ノ如シ。冷水甘美ニシテ、阿法師車軸ノ水ニ似タリ。好景塵世ヲ隔テ、サナガラ仙境カトゾ怪シマレケル。</p> <p>師スデニ夕陽ニ及ヒ忞歸ルコトヲ忘</p>

亡婦出現

亡婦昇天（成仏）

<p>玉イ、遂ニ通夜苔ニ坐、西ニ傾ク月影ハ霞ヲ帯テ静ニ、更ニ葉ヲ吹風モナク、心ヲ澄シ、寂々トシテ御座アル処ニ、二十余ノ婦人独リ忽然トノ見レ、其間息サモ苦シゲ二見エテ、師ニ近キ手ヲ合テイト幽ナル声ニテ、妾ハ元此山ノ麓遠カラズノ住ケル李氏ガ婦ニテ有ケルカ、性トノ貪リ猶ヤフサカニ奴婢小婦ヲ憐レマス、日々ニ打罵罵シ、空ク駆使シテ、剩ヘ衣食ヲハキ、寒暑ニ恵ミ減リ、好天カ善事ヲ障拒、遂ニ三宝ニ皈投セズ。只貪リタクワエテ、千代ノ榮花ヲ計ル処ニ、天然ヲ終スノ五日以前ニ早ク死ス。今獄卒ノ手ニ懸リ、鉄湯銅炎ノ責メ、嗚呼如何カセン。上人利益ヲ賜トテ、忽チ見エザリキ。</p>	<p>レ、遂ニ通夜苔ニ坐シ、西ニ傾ク月影ハ霞ヲ帯ビテ静ニ、更ニ葉ヲ吹風モナク、心ヲスマシ寂々トシテ御坐トコロニ、二十年餘リノ婦人獨忽然トノ現レ、其アエグ息サモ苦シゲニ見ヘテ、師ニ近キ手ヲ合セ取幽ナル声ニテ、妾ハ元此山ノ麓遠カラテ住ケル李氏ノ婦ニテアリケルカ、性トシテ貪テ、猶ヤフサカニ奴婢小婢ヲ憐ス、日ニ打罵シ、空ク駆使テ、剩エ衣食ヲハブキ、寒暑ニ恵ヲ欠キ、好夫ガ善事ヲ障ヘ拒テ、遂ニ三宝ニ皈投セズ。只貪リタクハヘテ、千代ノ榮花ヲ計ルニ、天然ヲ終ヘズシテ五日以前ニ早死ス。今獄卒ノ手ニ係、鉄湯銅炎ノ責、嗚如何セン。上人利益ヲ賜トテ、又タ忽チ見エザリキ。</p>	<p>レ、遂ニ通夜苔ニ坐シ、西ニ傾ク月影ハ霞ヲ帯テ静ニ、更ニ葉ヲ吹ク風無ク、心ヲ清シ、寂々トシテ御坐處ニ、廿歳餘ノ婦人獨リ忽然トシテ見レ、其間苦ゲニ息ヲツキテ師ニ視エ、手ヲ合セテイト幽ナル聲ニテ、妾ハ元ト此山ノフモト遠カラズシテ住ミケル李氏ノ婦ニテ有ケルガ、性トシテ貪リ、猶ヤブサカニ奴婢小婦ヲ憐レマス、日ニ打罵シ、空シク駆使テ、剩エ衣食ヲバハギ、寒暑ニ恵ヲ缺ク。好夫ガ善事ヲ障拒デ、遂ニ三寶ニ歸投セズ、只貪リタクワエテ、千代ノ榮花ヲ計ル處ニ、天然ヲ終ラズシテ五日以前ニ早死ス。今獄卒ノ手ニ掛リ、鐵湯銅炎ノ責メ、嗚呼如何。上人利益ヲ賜エトテ、忽チ見エザリキ。</p>	<p>レ、遂ニ通夜苔ニ坐シ、西ニ傾ク月影ハ霞ヲ帯テ、靜ニ、更ニ葉ヲ吹ク風モナク、心ヲスマシ、寂々トシテ、御坐トコロニ、二十餘ノ婦人獨リ忽然トシテ見レ、其アヘグ息サモ苦シゲニ視テ、師ニ近ヅキ、手ヲ合、糸幽ナル声ニテ、妾ハ元此山ノ麓遠フアラデ、住ケル李氏ノ婦ニテ有ケルガ、性トシテ貪テ、猶ヤブサカニ奴婢小婢ヲ憐マズ、日々ニ打罵シ、空ク駆使テ、剩、衣食ヲハブキ、寒暑ニモ不恵、好夫ガ善事ヲモ、障拒テ、遂ニ三宝ニ歸投セズ、只貪タクワエテ、千歳ノ榮花ヲ計トロニ、天然ヲ終ズシテ、五日以前ニ早死ス。今獄卒ノ手ニ係リ、鐵湯銅炎ノ責、嗚呼如何セン。上人利益ヲ賜ヘトテ、又忽見ヘザレバ。</p>
<p>師ノ至慈豈サシヤクニ忍ンヤ。乃チ清池ノ水ヲ汲ミ、一字水輪ノ法ヲ加持シ、大悲神咒ヲ誦シテ、暫ク靜慮シ玉フ。時ニ天女一人現ジ來テ、師ヲ拜シ、吾ハ前來ノ亡婦ナリ。上人ノ慈力ニ依リ惡趣ノ苦誅ヲ免レ、速ニ今切利天ニ到</p>	<p>師ノ至慈豈サシヤクニ忍ンヤ。乃チ清池ノ水ヲクミ、一字水輪ノ法ヲ加持シ、大悲神咒ヲ誦シテ、暫ク靜慮シ玉フ。時ニ天女一人現シ來テ、師ヲ拜シ、吾ハ前來ノ亡婦ナリ。上人ノ慈力ニ依リ惡趣ノ苦誅ヲ免レ、速ニ今切利天ニ到</p>	<p>師ノ至慈豈ニサシヤクニ忍ンヤ。乃チ清池ノ水ヲ汲ミ、一字水輪ノ法ヲ加持シ、大悲神咒ヲ誦シテ、暫ク靜慮シ玉フ。時ニ天女一人現ジ來テ、師ヲ拜ミ、吾ハ前來ノ亡婦也。上人ノ慈力ニ依リ惡趣ノ苦誅ヲ免レ、速ニ今切利天ニ到</p>	<p>師ノ至慈豈サシヤクニ忍ンヤ。乃チ清池ノ水ヲクミ、一字水輪ノ法ヲ加持シ大悲神咒ヲ誦シテ、暫ク靜慮シ玉フ。時ニ天女一人現ハレテ來ル。師ヲ拜ミテ、吾ワ前來ノ亡婦ナリ。上人ノ慈力ニ依リ、惡趣ノ苦誅ヲ免レ、速ニ今切利天ニ</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>ル。故ニ來テ深恩ヲ謝シ奉ル云シガ、俄ニ香風四方ニ薰シ、青白ノ雲東西ニ鬨キ、風雲ト諸共天女ハ去テ見エザリキ。是道人ノ処為トシテ、回向廣大ノ力、太多奇特ノ至ナリ。猶豫ヲ怪ム事莫レ。</p>	<p>ル。故ニ來テ深恩ヲ謝シ奉ルト云イシガ、俄ニ香風四方ニ薰シ、青白ノ雲東西ニタナビキ、風雲ト諸共ニ天女ハ去テ見ヘサリケリ。是レ道人ノ所為トシテ、回向廣大ノ力ヲ太多奇特ノ至リ。猶豫ヲ懷怪ム事勿レ。</p>	<p>ル。故ニ來テ深恩ヲ謝シ奉ルト云イシガ、俄ニ香風四方ニ薰ジ、青白ノ雲東西ニ鬨キ、風雲ト諸共ニ天女ハ去テ見エザリキ。是道人ノ所為トシテ、回向廣大ノ力、太ダ奇特ノ至也。猶豫ヲ懷キ怪ム事勿レ。</p>	<p>生ズ。故ニ來テ深恩ヲ謝シ奉ルト云シガ、俄ニ香風四方ニ薰シ、青白ノ雲東西ニタナビキ、風雲トモニ去リウセケリ。是道人ノ所為トシテ、回向廣大ノ力、太ダ奇特ノ、猶豫ヲ懷キ怪ムコトナカレ。</p>
<p>○宝慶三年 「彈虎拄杖」</p> <p>十、虎齒痕之拄杖之事並皈朝之路惡黨二逢玉フ事</p>	<p>拾ニハ虎齒痕拄杖之事附皈朝之路惡黨二逢玉フ事</p>	<p>十 虎齒痕之拄杖之事并歸朝路之惡黨二逢玉フ事</p>	<p>十、虎齒痕ノ拄杖之事并歸朝ノ路ニ惡黨二逢玉フ事</p>
<p>時ハ宝慶三年ノ秋、師高充ヲ伴トシ江南西ノ路ヲ行玉フ。廣々タル原野ニテ日已ニ暮掛リ、更ニ往來ノ人モ無ケレバ、宿トラハヤトテ、高充アタリヲ尋子見シシカレ、曾テ頼ルヘキ人家モナク、師仰セケル様ハ、草ノ裏コソ風流ヤ。此方ニ宿レ。終夜月ニ嘯キ明スヘシ。アカヌ涼シキ秋風ノ、枕ニソヨク草ノ間ニ、聚促織蛩 鈴虫蜻蛉 轡虫、吾レヲ問カト樂シマレ、思ヒ邪マナキ処ニ、向方ノ草ノ中ヨリモ大虎一ツ唇ヲ鼓シ、師ヲ咬ント飛來ルヲ、高充見テ虎トハ汝カ珍シキ、吾ト力ヲ競トテ、大手ヲ開ケ待ケ</p>	<p>寶慶三年ノ秋、師高充ヲ御伴トシテ江西ノ路ヲ行キ玉フ。廣々タル原野ニテ日已ニ暮カタリ、更ニ往來ノ人無ケレバ、宿トラバヤトテ、高充ガアタリヲ尋見シカレ、曾テ頼ルベキ人家ナシ。師仰セラレ様ハ、草ノ裏コソ風流ヤ、此方ニ宿リ、終夜月ニ嘯キ明スベシ。アカヌ涼シサ秋風ノ、枕ニソヨク草ノ間ニ、聚促織蛩 鈴虫蜻蛉 轡虫吾レヲ問カト樂シマル。思イ邪マナキ処、向方ノ草ノ中ヨリモ大虎一ツ唇ヲ鼓シ、師ヲ咬ント飛來ルヲ、高充見テ虎トハ汝カ珍布ヤ、吾レト力ヲ競エトテ、大</p>	<p>時是寶慶三年ノ秋、高充ヲ伴トシ江南西ノ路ヲ行キ玉フ。廣々タル原野ニテ日已ニ暮掛リ、更ニ往來ノ人モ無ケレバ、宿トラバヤトテ、高充ガアタリヲ尋ネ見シカドモ、曾テ頼ムベキ人家ナシ。師仰ケル様ハ、草ノ裏コソ風流ヤ、此方ニ宿レ、終夜月ニ嘯キ明スベシ。アカヌ涼キ秋風ノ、枕ニソヨグ草ノ間ニ、聚促織 蛩キ、鈴虫 蜻蛉、轡蟲、吾ヲ伺カト樂シマレ、思ヒ邪無キ處ニ、向方ノ草ノ中ヨリモ大虎一ツ唇ヲ鼓シ、師ヲ咬マントテ飛ビ來ヲ、高充見テ虎トハ汝カ珍布シ、吾ト力ヲ競ント</p>	<p>次ニ宝慶三年ノ秋、師高充ヲ伴トシテ江西ノ路ヲ行玉フ。廣々タル原野ニテ日已暮カ、リ、更ニ往來ノ人モ無レバ、宿トラバヤトテ、尋見レ曾テ頼ベキ人家ナシ。師仰セケルワ、草ノ裏コソ風流 此方ニ宿レ、終夜月ニ嘯キ明ベシ。アカヌ涼シキ秋風ノ、枕ニソヨク草ノ間ニ、聚促織、蛩々ス、鈴虫、蜻蛉、轡虫、吾ヲ問カト樂マレ、思ヒ邪マナキ処ニ、向方キ草ノ中ヨリモ大虎一ツ唇ヲナラシ、師ヲ咬ントテ飛來ヲ、高充見テ虎トワ汝カ珍布シ、吾ト力ヲ競ヘトテ、大手ヲ開キ得ケルヲ、師</p>

ルヲ、師押テ余レ思フ処ノ有リ。
 汝彼ニ觸ル、事莫レト言フ処エ、
 虎馳掛テ咬ントセシガ、拄杖忽チ
 龍ト化ノ是ヲ防ク。少時闘シガハ、
 尋常ナラヌ龍ナレバ、虎争カ勝ル
 ヘギ、道ニ蹤ヲ潜メテニケ去リヌ。
 是道德ノ至リ、天地感動セシムル
 ノ妙処ナリ。此拄杖ヲ倭ニ呼テ、
 虎齒痕ノ拄杖云。今ニ傳テ宝物タ
 リ。

手ヲ開キ待ケルヲ、師押ヘテ余思
 フ処アリ。彼ニ觸ル事勿レト言フ
 処ヘ、馳カ、ツテ咬ントセシカ
 バ、拄杖忽チ龍ト化シテ是ヲ防
 少時闘イシカハ、尋常ナラン龍ナ
 レバ、虎争カ勝ベキニ、遂ニ跡ヲ
 潜メテ去リヌ。是レ道德ノ至リニ
 テ、天地モ感動セシムル妙処ナ
 リ。此ノ拄杖ヲ倭ニ呼ンテ、虎齒
 痕ノ拄杖ト云フ。今ニ傳タヘテ宝
 物タリ。

テ、大手ヲ開ケ待ケルヲ、師押ヘ
 テ餘レ思フ處有リ。汝彼ニ觸ルル
 事勿レト言處エ、虎馳掛テ咬ント
 セシガ、拄杖忽チ龍ト化シテ是ヲ
 防グ。小時闘シカドモ、尋常ナラ
 ヌ龍ナレバ、虎争カ勝ルベキ、遂
 ニ蹤ヲ潜メ去リニケリ。是道德ノ
 至リ、天地ヲ感動セシムルノ妙處
 也。此拄杖ヲ倭ニ呼テ、虎齒痕ノ
 拄杖ト云フ。今ニ傳テ寶物タリ。

押テ曰ク、余レ思処アリ。汝彼ニ
 觸レ勿ト言フ処エ、虎馳カ、ツテ
 咬ンセシカバ、拄杖忽チ龍ト化シ
 テ、是ヲ防ク。少時闘ヒシガハ、
 尋常ナラヌ龍ナレバ、虎争カ勝
 キヤ。遂ニ跡ヲ潜メ去リケル。是
 道德ノ至リ、天地ヲ感動セシムル
 ノ妙處ナリ。此拄杖ヲ倭ニ呼テ、
 虎齒痕ト云フ。今永平ニ傳來ス。

韋將軍出現

扱テ又此未明ニ童子一人來テ云、
 師正ニ本國ニ皈テ、法幢ヲ建立シ
 テ、直指ノ道ヲ唱フ可シ。久ク茲
 ニ留ル事莫レト。師言ク、汝は何
 人ゾ。童子答テ、我ハ是韋將軍ナ
 リ伝訖テ見エザリキ。

偕テ亦未明ノ項童子一人來テ曰
 ク、師正ニ本國ニ皈テ、法幢ヲ立
 テ、直指ノ道ヲ唱ベシ。久ク茲ニ
 留ルコト勿レト。師ノ曰ク、汝ハ
 是レ何人ゾ。童子答テ、我ハ是韋
 將軍ナリト、言訖テ見ヘザリキ。

扱テ又此未明ニ童子一人來テ曰、
 師正ニ本國ニ歸テ、法幢ヲ建立シ
 テ、直指ノ道ヲ唱ベシ。久シク茲
 ニ留ル事莫レト。師言ク、汝ハ是
 何人ゾ。童子答テ、我ハ是韋將
 軍也ト。言イ訖テ見エザリキ。

偕亦此未明ニ童子一人來テ曰ク、
 師マサニ本國ニ皈テ、法幢ヲ立
 テ、直指ノ道ヲ唱ベシ。久ク茲ニ
 留ルコト莫レト。師曰ク、汝ハ何人
 ゴ。童子答テ、我ハ是韋將軍ナリト、
 言訖テ見ヘザリキ。

如淨と別離
附与物・垂誠

師天神ノ告ニ任セ、直ニ太白山ニ
 趨テ、皈郷ノ別ヲ伸玉フ。時ニ淨
 和尚附与スルニ、芙蓉ノ伽梨并自
 讚ノ頂相ヲ以テシテ曰、汝外國ノ
 人ナル故ニ、此衣ヲ授ク。傳法ノ
 信トスベシ。國ニ皈リテ法ヲ弘
 メ、衆生ヲ利益シ、國王大臣ニ近
 ク事無ク、城邑聚落ニ不レ住シテ深

師天神ノ告ニ任セテ、夕、チニ太
 白ニ走テ、皈郷ノ別ヲ伸ベ玉フ。
 時ニ淨公付與スルニ、芙蓉ノ伽梨
 并自贊ノ頂相ヲ以テシテ曰ク、汝
 ハ外國ノ人ナルガ故ニ、此ノ衣ヲ
 授ク。傳法ノ信トスベシ。國ニ皈
 テ法ヲ弘メ、衆生ヲ利益シ、國王
 大臣ニ近ク事勿レ。城邑聚落ニ住

師天神ノ告ニ任セ、直ニ太白山ニ
 趨テ、歸郷ノ別ヲ伸給フ。時ニ淨
 和尚附與スルニ、芙蓉ノ伽梨並ニ
 自贊ノ頂相ヲ以テシテ曰、汝外國
 ノ人ナルガ故ニ、此衣ヲ授ク。傳
 法ノ信トスベシ。國ニ歸テ法ヲ弘
 メ、衆生ヲ利益シ、國王大臣ニ近
 ク事無ク、城邑聚落ニ不レ住シテ

師天神ノ告ニ任セ、直ニ太白ニ趨
 テ、皈郷ノ別ヲ伸玉フ。時ニ淨和
 尚付與スルニ、芙蓉ノ伽利并ニ自
 贊ノ頂相ヲ以テシテ曰ク、汝外國
 ノ人ナルガ故ニ、此衣ヲ授ク。傳
 法ノ信トスベシ。國ニ皈テ法ヲ
 弘、衆生利益シ、國王大臣ニ近ク
 コト莫レ。城邑聚落ニ不住シテ、

永平開山禪師之行狀傳聞記

山幽谷ニ居ルベシ。時機未レ稔。一箇ヲ接取シテ、吾ガ宗ヲ嗣續シテ、断絶セシムルヲ勿レトナリ。

永平開山道元和尚行狀傳聞記

セスシテ、深山幽谷ニ居ルベシ。時機未タ稔ナラス、一箇半箇ヲ接取シテ、吾宗ヲ嗣續アレ。断絶セシムルコト莫レトナリ。

永平開山元禪師行狀傳聞記

深山幽谷ニ居ルベシ。断絶セシムルコト勿レト也。又時機未レ稔、一箇半箇ヲ接取シテ、吾宗ヲ嗣續セシメト也。

永平開山道元禪師行狀傳聞記

深山幽谷ニ居住スベシ。時機イマダ念ナラス、一箇半箇ヲ接取シテ、吾宗ヲ嗣續アレ。断絶セシムルコト莫レトナリ。

〔二夜碧岩〕
白山明神加筆

此日ノ暮方ニ碧岩集ノ全体ヲ得玉フテ、是ヲ繕写有リケルニ、四更ニ到テ、其ノ全備シガタキヲ思召。時ニ白衣ノ神人來テ助筆ヲ乞、率ニ其功ヲ問玉フ。倭ニ謂ユル一夜碧岩トハ是ナリキ。今ニ傳テ尊信ス。師喜ヒ亦怪ンテ其姓名ヲ問玉エハ、神答エテ、我ハ乃チ日域男女ノ元神ナリト言イテ、即チ隠レマス。是マサシク白山明神ナルヲ知レリ。

此ノ日ニ暮レ方碧岩集ノ善本ヲ得玉フテ、是ヲ繕寫アリケル。師四更ニ至リ、其ノ全備シカタキ事ヲ思食。時ニ白衣ノ神人來テ助筆ヲ乞、卒ニ其ノ功ヲ問玉フ。師善、又タ怪ンテ其ノ姓名ヲ問ヒ玉ヘバ、神答テ、我レハ乃チ日域男女ノ元神ナリト言已テ、即隠レマス。是マサシク白山明神成ル事ヲ知レリ。

此日ノ暮方ニ碧岩集ノ全本ヲ得給フテ、是ヲ繕寫有リケリ。師四更ニ到テ其全備難キ事ヲ思食。時ニ白衣ノ神人來テ助筆ヲ乞イ、卒ニ其功ヲ問給フ。倭ニ謂ル一夜碧岩トハ是也。于レ今傳エテ尊信ス。師喜ビテ亦怪シミ、其姓名ヲ問玉ヘバ、神答テ、我ハ乃チ日域男女ノ元神也ト云テ、即チ隠レ玉ヘケリ。是正シク白山明神成事知レリ。

此日ノ暮方ニ碧岩集ノ全本ヲ得玉フ故、是ヲ繕寫アリケリ。師四更ニ到テ、其ノ全備シガタキコトヲ思念ス。時ニ白衣ノ神人來リテ助筆ヲ乞、卒ニ其ノ功ヲ問玉フ。倭ニ謂ユル一夜碧岩集トハ是ナリ。于今流ヘテ尊信ス。師御喜ヒ亦怪ミテ、其姓名ヲ問玉フ。神答テ、我ワ是日域男女ノ元神也ト言已テ、即チ隠マス。是マサシク白山明神ナルコトヲ知レリ。

太白山辞去

然シテ師辞シテ太白ヲ出玉エバ、名残ガ諸友達、送テ麓ニ到リケル。是ヨリ別ル袖ノ外、高充ヲ御伴ニテ漸々歩行マシマスガ、復此ノ國ヲ見ニ事有リヤ有ラマジ。別レテハ身ハ老易キ幻ノ命、短キ世ノ中ゾ。厭ヌ詠ノモ今シバシ、長キ驛路ノ門々ノ山河村野ノ

然シテ師辞シテ太白ヲ出テ玉ヘバ、名残ヲシカル諸友達、送リテ山下ニ到リケル。是ヨリ別ル袖ノ外、高充ヲ御伴ニテ漸々歩行マシマスガ、復タ此ノ國ヲ見ンコトノアルヤアラシナ、別レテハ身ハ老イヤスシ幻シノ命、短キ世ノ中ゾ。厭ヌ詠モ今シバシ、長キ驛路

然テ師辭而太白ヲ出玉ヘバ、名残ヲシカル諸友タチ、送テ麓ニ到ケル。是ヨリワカレ、高充ヲ御伴ニテ漸々歩行マシマスガ、復此國ヲ見ンコトノ有ヤアラマシ、別レテハ身ハ老易キ幻ノ命、短キ世ノ中ゾ、厭ヌ詠メモ今暫シ、長キ驛路ノ間々ノ山河村野ノ好景ヲ觀メ、

然ノ師辭而太白ヲ出玉フバ、名残ヲシカル諸友タチ、見送テ山下ニ到リケル。是レヨリ別レ、ミ袖ノ外高充ヲ御伴ニテ、漸々歩行マシマスガ、復此ノ國見ンコトノ、有ヤ有ラマジ、別テワ身ヲ老ヤスシ幻ノ人命、短キ世ノ中ノ、厭ヌ詠モ今シバシ、長キ驛路ノ間々ノ山河

明州津で悪僧と相遇
高充の活躍

<p>好景ヲ觀ジテ、口吟詠ノ幽カニ往玉フ。</p>	<p>早ヤ明州ノ津モ近ク、七八里程此方ニテ日モ入相ノ鐘ノ音、宿トラハヤト尋ルニ、民家四五家有ル中ニ、張氏カ屋ヲ宿トシテ一夜明サセ玉イケル。時ニ先年、師ノ怨敵ト成ケル、南海胡管等方同類共、アマタアリテ、于今鬱憤ヲ挾ミ、共ニ勅制ニ恐テ報ル事不能。時節ヲ伺フ処ニ、師ノ歸郷ヲ傳エ聞キ、時ヲ得タリト喜テ、已ニ似タル悪賊共ヲ率シ、僧俗四十餘人ガ心ヲ合セ、子ノ刻ヲ考ヘ張子ガ門ヲ打破ル。張氏驚キ走り向エ、是ハ夜盜カ狼藉ヤ。吾カ身貧キ家ナレバ、劫テモ一物無シ。入ルコト勿レト云ケレバ、悪僧共答テ、イヤ汝ヲ掠ル者ナラズ。今夜宿假兩人ノ客、我等カ昔ノ怨敵ナリ。誅取ン其爲ニ追テ是マテ來リタリ。寢処ヲ案内セヨト云。張氏カ兎角ト云ヲ問ニ、高充聽キ者ナレバ、早起アガリ、刀ヲ帶ヒ物ノ透間ニ指ノゾキ、トツクト様子ヲ察シタリ。何ニカ踟躕ニ及ヘキ、大戸ヲ</p>
<p>ノ間々ノ山河村野ノ好景ヲ觀テ、口吟吟ミ往玉フ。</p>	<p>早ヤ明州ノ津モ近ク、七八里ホト此ノ方ニテ日モ入相ノ鐘ノ音、宿トシテ一夜ヲ明サセ玉イケル。時ニ先年、師ノ怨敵トナリタル南海胡舌等方同類共、アマタ有リケルカ。今ニ鬱憤ヲ挾ミ、共ニ勅制ニ恐テムクウ事アタハズ。時節ヲ伺フ攸ニ、師ノ皈朝ヲ承リ、時ヲ得タリト喜テ、己レニ似合タル悪俗共ヲ卒シ、僧俗二十四人ガ心ヲ合セ、子ノ刻ヲ考ヘ長氏ガ門ヲ擊破ル。長氏驚キ走向イ、是レハ夜盜ガ狼藉ヤ、吾身貧キ家ナレバ、劫テモ一物モナシ。入事勿レト云ケンバ、悪僧共答テ、イヤ汝ヲ掠ル者ナラズ。今夜宿カス二人ノ客、我等ガ昔ノ怨敵ナリ。誅取ン其ノ爲ニ追テ是迄テ來リタリ。寢處ヲ按内セヨト云フ。長氏ガ兎角ト云ハン問ニ、高充聽トキ者ナレハ、早ヤ起アカリ刀ヲ帶ニ物ノ透間ニサシノゾキ、トクト様子ヲ察シテ、何ニカ踟躕ニ及フベキ、大戸ヲ活ト推開キ見レバ、即チ月ア</p>
<p>口吟詠シテ、遙ニ往キ玉フ。</p>	<p>早明州ノ津モ近ク、七八里程此方ニテ日モ入相ノ鐘ノ音、宿ラバヤト尋ルニ、民家四五戸有ル中、張氏ガ屋ヲ宿トシテ一夜明サセ玉イケル。時ニ先年師ノ怨敵ト成ケル、南海胡舌等方同類共、數多在リテ、于レ今鬱憤ヲ挾サミ、共ニ勅制ニ恐レテ報ル事不能。時節ヲ伺フ處ニ、師ノ歸郷ヲ承リ、時ヲ得タリト喜デ、己レニ似タル悪俗共ヲ率シ、僧俗四十餘人ノ心ヲ合セ、子ノ刻ヲ考エ張氏ガ門打破ル。張氏驚キ走り向ヒ、是ハ夜盜カ狼藉ヤ。吾身貧シキ家ナレバ、カスメテモ一物ナシ。入ルコトナカレト云ケレバ、悪僧共答テ、イヤ汝ヲ掠ル者ナラズ。今夜宿カス兩人ノ客、我ラガ昔ノ怨敵也。誅取ン其爲ニ追テ是ヘ來リタリ。寢處ヲ案内セヨト云フ。張氏ガ兎角云ヌマニ、高充耳トキ者ナレバ、早起上リ、刀ヲ帶物ノ透間ニ指シノゾキ、トツクト様子ヲ察タリ。何カ踟躕ニ及フベキ、大戸ヲ豁ト</p>
<p>村野ノ好景ヲ觀テ、口吟往玉フ。</p>	<p>早ヤ明州ノ津モ近ク、七八里ホト此方ニテ日モ入相ノ鐘ノ音、宿トラバヤト尋ルニ、民家四五戸有中ニ、張氏ガ屋ヲ宿トシテ、一夜ヲ明サセ玉ヒケル。時ニ先年怨敵トナリケル、南海胡舌等方同類共、アマタ有テ、于今鬱憤ヲ挾メトモ、勅制ニ恐レテ報コト不能。時節ヲ伺フ攸ニ、皈郷ノ由ヲ承リ、時ヲ得タリト喜ヒ、已ニ似タル悪俗共ヲ率シ、僧俗四十人余ノエセ者共心ヲ合、子刻ヲアイツニ、長氏カ門ヲ擊破ル。長氏驚走向イ、是ハ夜盜カ狼藉ナリ。吾身貧キ家ナレバ、劫テモ一物ナシ。入コト勿レト云イケレバ、悪僧共答テ云ク、汝ヲ掠ル者ナラズ。今夜宿假二人ノ客、我等ガ昔ノ怨敵ナリ。誅取ン其爲ニ、追テ是迄來タリ。寢處案内セヨト云フ。長氏ガ兎角ト云ワヌ問ニ、高充聽キ者ナレバ、夫レト聞ヨリ起アガリ、刀ヲ帶テ物ノ透ヨリ、指ノゾキ、トクト様子ヲサツシタリ。何カ踟</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>豁ト推シ開キ見レバ、即チ月照レリ、眠リ飽タリ長キ夜ノ慰ミ也ト、喜テ廣庭ニ走り出ルヲ、師袂ヲ引留メ荒キヲスナ高充ヨ、菩薩ノ慈悲欠クヘカラズ。人ナ壞リゾ。身命ヲモ彼ガ欲セバ、得サスベシトノタマエリ。ハヤリ立タル高充ガ、慈言ヲモ肯ス、品ニコソヨレ。吾カ師トテ見レバ、張氏カ屋作りスル柱梁等積テ有ケルヲ適レ得タリト云俣ニ、二丈計ノ大柱輕タシク提ケ出テ、何怨敵トヤ身ヲ知ラヌ、放逸無漸ク曲者共、日本ノ僕カ手ニ掛リ、閻魔ノ廳ニ附淨婆梨ノ鏡ニ罪ヲ決セヨトテ、縦横ニ打テ向エバ、惡儻共大イニ恐レ、是人間ノ業ナラズ。設イ萬騎モ及ストテ、皆散々ニ迷失セリ。高充大ニ打咲イ、懸リニ似セヌ臆病者ヤ。ニクル背ノ可咲。狗遂者トハ是ゾトテ、柱ヲ庭ニトウトヲク。高充カ武勇ノ底、適レ希有ノ振舞ヤト張氏ヲ始メ、口々ニ咲美セザル人ハ無シ。</p>	<p>カリ、眠リ飽タル長夜ノ慰ミナリト、喜ヒテ廣庭ニサシ走り出ルヲ、師袂ヲ拽留メアラキ事スナ高充ヨ。菩薩ノ慈善欠クベカラス。人ナ壞ルゾ。身命ヲモ彼ガ欲セバ、得スベシトノ玉ヘバ、ハヤリタツタル高充ガ、慈言ヲモ肯セス、品ニコソヨレ、吾師トテ見レバ長氏ガ屋造リスル柱ヲ梁、積テアリ適レ得タリト云俣ニ、二丈ハカリノ大柱カル／＼ト提ケ、何ニ怨敵ヤト身ヲ知ラヌ放逸無漸ノ曲者トモ、日本ノ僕ガ手ニカ、リ、閻魔ノ廳ノ淨婆梨ノ鏡ニ罪ヲ決セヨトテ、縦横ニ打テ向ヘバ、惡儻トモ大キニ恐レ、是レ人間ノ業ナラズ。設イ萬騎モ及バシトテ、皆散々ニ迷失タリ。高充大キニ打咲イ、懸リニ似セヌ臆病者、マクル背ノ可咲サヨ、狗遂フ者トハ是ゾトテ、柱ヲ庭ニドウトヲ。高充ガ武勇ノ底、適レ希有ノ振舞ヤト長氏ヲ始メ、口々ニ嘆美セザルハナカリケル。</p>	<p>推シ開キ見レバ、即チ月照リ、眠リ飽タリ長キ夜慰ミ也ト。喜テ廣庭ニハセ出デ、師袂ヲ引キ留メ荒キ事スナ高充ヨ、菩薩ノ慈悲ヲ缺ベカラズ。人ナ壞リゾ、身命ヲモ彼ガ欲セバ、得サスベシト言ヘド、ハヤリ立タル高充ガ、慈言ヲモ肯ハズ、品ニコソヨレ、吾師トテ見レバ張氏ガ屋作スル柱ヲ梁リ積テ有ル適レ得タリト云儘ニ、二丈計リノ大柱輕タ布引提ゲテ、何怨敵トヤ身ヲ知ヌ放逸無漸ノ曲者共、日本ノ僕ガ手ニ掛リ、閻魔ノ廳ノ淨婆梨ノ鏡ニ罪ヲ決セヨトテ、縦横ニ打テ向エバ、惡儻共大ニ恐レ、是人間ノ業ナラズ、設イ萬騎モ及バズトテ、皆散々ニ迷失セケリ。高充大キニ打笑ヒ、懸リニ似合ヌ臆病者、ニグル背ノ可咲。狗又遂者トハ是ゾトテ、柱ヲ庭ニドウトヲク。高充ガ武勇ノ底、適レ希有ノ振舞ヤト張氏ヲ始メ、口々ニ嘆美セザル人ハ無シ。</p>	<p>躋ニ及フベキ、大戸ヲ活ト推開キ、見レバ、時シモ月アガリ、眠飽タル長夜ノ慰ミ、喜ヒ切テ廣庭ニゾ走出ヲ、師袂ヲ拽留メ、荒キ事スナ高充ヨ、菩薩ノ慈善ヲ欠ベカラズ。人ナ壞ゾ身命ヲモ彼ガ欲セバ、得サスベシトノ玉ヘバ、ハヤリ立ツタル高充カ、慈言ヲモ肯ンゼズ、品ニコソ由、吾師トテ、長氏ガ屋作スル柱、梁積在ルヲ適レ得タリト。云俣ニ、二丈バカリノ大柱カル／＼ト提ケ、何怨敵ヨバワリトヤ、身ヲ知ヌ放逸無漸ノ曲者氏日本ノ僕ガ手ニカ、リ、閻魔ノ廳ノ淨婆梨ノ鏡ニ罪ヲ決セヨト云俣ニ、縦横無塵ニ打テ向ヘバ、惡儻共、大キニ恐レ、是人間ノ業ナラズ。設ヒ千騎萬騎モ及バジトテ、皆散々ニ迷失タリ。高充大キニ打笑ヒ、懸リニ似セヌ臆病者、ニクル背ノ可咲サヨ。狗遂者トワ是ゾトテ、柱ヲ庭ニトウトヲク、高充ガ武勇ノ底、適レ希有ノ振舞ヤト、長氏ヲ始メ口々ニ嘆美セズト云ナシ。</p>

解纜
招宝七郎出現

十一、龍天善神並一葉ノ觀音現
玉フ附師ノ御父母生天事

同ク冬十月、纜ヲ解テ船ヲ發ス。天寒ノ白雪ハ鵝毛ノ飛ニ異ナラズ。身ニシム風モ忍ハレズ、忽チ神人顯レテ舟ニ駕ル。師云ク、汝ハ何レノ神ゾト有レバ、答テ、我ハ是龍天ナリ。支那ニ在テハ招宝七郎伝シ者也。師ノ祖印ヲ佩テ還ルヲ知り、師ニ隨テ正法ヲ護ント仰セケル。師嘆異不淺ノ、若然ハ少身ヲ現ジ玉エト有ケレバ、則チ三寸計ノ白蛇トナリ、鉢囊ニ入テマシマセリ。

十一ニハ龍天善神之事一葉ノ觀音現シ玉フ事
附師ノ御父母生天之事

同ク冬十月、纜ヲ解テ船ヲ發ス。天寒フシテ白雪ハ鵝毛ノ飛フニ異ナラス。身ニシム風モ忍レズ。忽チ神人アラハレテ船ニ駕リ、師ノ曰ク、汝ハ何レノ神ナルゾトアレハ、答テ、我ハ是龍天ナリ。支那ニ在テハ招宝七郎ト云フ者ナリ。師ノ祖印ヲ佩テ郷ニ還ルコトヲ知ル。我師ニ隨テ正法ヲ護ラント仰セケル。師嘆異淺カラズ、若然ラバ小身ヲ現シ玉ヘト有リケレバ、乃チ三寸計リノ白蛇トナリ、鉢囊ニ入テマシマセリ。

十一 龍天善神并一葉觀音現ジ
玉フ事 附師御父母生天之事

同冬十月、纜ヲ解テ船ヲ發ス。天寒フシテ白雪ハ鵝毛ノ飛ニ異ナラズ、見ニシム風モ忍バレズ、忽チ神人顯レテ舟ニ駕ル。師云、汝ハ何レノ神ゾト有レバ、答テ、我ハ是龍天也。支那ニ在テハ招寶七郎ト云イシ者也。師ノ祖印ヲ佩テ郷ニ歸ルヲ知り、師ニ隨テ正法ヲ護ント仰セケル。師嘆略不淺シテ、若シ然バ小身ヲ現ジ玉エトアリケレバ、則チ三寸計ノ白蛇ト也、鉢囊ニ入テマシマセリ。

十一、龍天善神并一葉觀音現玉
事 附師御父母生天ノ事

同冬十月、纜ヲ解テ船ヲ發ス。天寒フシテ白雪ハ鵝毛ノ飛ニ異ナラズ。身ニシム風モ忍バレズ、忽チ神人アラワレテ船ニ駕ル。師云ク、汝何レノ神ゾトアレバ、答テ、我ワ是龍天ナリ。支那ニ在リテワ、招宝七郎ト云フ者ナリ。師ノ祖印ヲ佩テ郷ニ還ルコトヲ知ル。我レ師ニ隨テ正法ヲ護ント仰セケル。師嘆異不淺、若シ然ラバ小身ヲ現ジ玉ヘト有リケレバ、乃チ三寸計ノ白蛇トナリ、鉢囊ニ入テマシマセリ。

一葉觀音出現

然而船漸ク行ケバ、赤黒風俄ニ起リ、荒波怒リ鼓、一船ノ人々已ニ死地ニ没ントス。師此急難ヲ哀ミテ、普門品ヲ誦シ玉フ。乃チ入於大海乃至羅刹ノ難伝ニ至テ、風波共ニ恬如タリ。

忽チ觀音薩埵蓮葉ニ乗ジテ、海上ニ浮ヒ玉フ。其妙相ノ端嚴ナル、光彩天地ヲ耀セリ。師瞻仰シテ禮

然シテゾ船漸ク行ケバ、又夕黒風俄ニ起リ、荒波滋波怒鼓、一船ノ人々已ニ死地ニ没ントス。師此急ヲ哀シテ、普門品ヲ誦シ玉フ。乃チ入於大海ヨリ羅刹之難ト云處ニ到テ、波風共ニ恬如タリ。

師猶一心ニ誦シ玉フ。一分奉ヨリ多宝佛塔、無故意ニ至ル迄、觀音薩埵蓮花一葉ニ乗シテ海上ニ浮ヒ

然而船漸ク行ケバ、亦黒風俄ニ起リ、荒波滋波怒鼓、一船ノ人々已ニ死地ニ没トス。師此急難ヲ哀レミテ、普門品ヲ誦シ玉フ。乃チ入於大海乃至羅刹之難ト云ニ到テ、風波共ニ恬如タリ。

忽チ觀音薩埵蓮葉ニ乗ジテ、海上ニ浮ヒ玉フ。其妙相ノ端嚴ナル、光彩天地ヲ耀セリ。師瞻仰シテ禮

然シテ船漸ク行ケバ、又黒風俄ニ起リ、荒波滋波怒鼓、船ノ人々已ニ死地ニ没ントス。師此急ヲ哀ンテ、普門品ヲ誦シ玉フ。乃チ入於大海乃至羅刹ノ難ト云ニ到テ、波風共ニ恬如タリ。

忽チ觀音薩埵蓮葉ニ乗ジテ、海上ニ浮玉フ。其妙相ノ端嚴ナル、光彩天地ヲ耀セリ。師瞻仰シテ、禮

永平開山禪師之行狀傳聞記	永平開山道元大和尚行狀傳聞記	永平開山元禪師行狀傳聞記	永平開山道元禪師行狀傳聞記
<p>拜シ、未^レ卑^ニ乃^チ御形隠^クレ玉フ。一船ノ人々難^レ遭^フノ思^ハヲナシ、歡喜踊躍シテ讚嘆限^リ無^シ。</p>	<p>玉フ。其ノ妙相之端嚴ナル事、光彩天地ニ輝カセリ。師瞻仰禮拜シ玉フテ一船ノ人々難^レ遭^フノ思^ハヲナシ、歡喜踊躍シテ讚嘆限^リナシ。</p>	<p>拜シ、未^レ終^ニ乃^チ御形隠^レ玉フ。一船ノ人々難^レ遭^フノ思^ハヲナシ、歡喜踊躍シテ讚嘆限^リ無^シ。</p>	<p>拜、未^タ畢^ラザルニ、乃^チ御形隠^レ玉フ。一船ノ人々難^レ遭^フノ思^ハヲナシ、歡喜踊躍シテ讚嘆カギリナシ。</p>
<p>○安貞元年 河尻着岸 〔觀音図贊〕 故ヲ以テ順風ニ帆ヲ揚^ゲ、飛ガ如ニシテ肥後ノ國河尻ニ着玉フ。頃ハ則チ日本朝後堀川ノ安貞元年丁亥ノ極月廿八日也。師未^タ夕^タ旬^日ヲ過ザルニ、自^ラ海上ニ現^ジ玉フ觀音ノ妙容ヲ圖シ、其ノ上ニ贊^ヲ記シ、是ヲ梓ニ刻玉フ。其像今ニ至テ天下ニ流布ス。</p>	<p>故ニ今ニ我宗ニハ、祈禱ノ普門品ニ一分奉^ル時、合掌シテ昔年ヲ慕^シム。夫レヨリ順風ニ帆ヲアケテ、飛ガ如ニシテ乃チ肥後國河尻ニ着船アリ。此ハ乃チ本朝後堀川ノ安貞元年丁亥ノ極月二十八日ナリ。師未^タ夕^タ旬^日ヲ過サルニ、海上ニ現^シ玉フ觀音妙容ヲ圖シ、其上ニ贊^ヲ記シ、是ヲ梓ニ刻玉フ。其ノ像今ニ天下ニ流布ス。</p>	<p>故ヲ以テ順風ニ帆ヲ揚^ゲ、飛ガ如ニシテ肥後ノ國河尻ニ著玉フ。頃ハ則チ日本朝後堀川ノ安貞元年丁亥ノ極月廿八日也。師未^タ夕^タ旬^日ヲ過ザルニ、自^ラ海上ニ現^ジ玉フ觀音ノ妙容ヲ圖シ、其上ニ贊^ヲ記シ、是ヲ梓ニ刻玉フ。其像今ニ至テ天下ニ流布ス。</p>	<p>故ヲ以テ順風ニ帆ヲ揚^ゲ、飛ガ如ニシテ肥後ノ州河尻ニ着船アル。頃^ハ乃チ本朝後堀川ノ安貞元年^丁亥ノ極月二十八日ナリ。師未^タ夕^タ旬^日ヲ過^リ玉フ觀音ノ容ヲ圖シ、其上ニ贊^ヲ記シ、是ヲ梓ニ刻玉フ。其像今ニ至テ天下ニ流布ス。</p>
<p>河尻滞在五年 且又釈迦文佛之茵褥、六祖大師ノ念珠、鬱多羅僧安陀會、鉢多羅羅檀、黒竹篋、白拂子、悟本ノ頂相、如淨ノ語録等、皆師ノ帶ヒ来リマス者也。師河尻ニ名ヲ埋^ミ、跡ヲ隠シテ御座ス事五年也。</p>	<p>且亦釋迦文佛之茵褥ト、六祖大師ノ念珠鬱多羅僧安陀衣、鉢多羅羅師壇、黒竹篋、白拂子、悟本ノ頂相、如淨禪師ノ語録等、皆ナ師帶^ヒ来リマシマス者也。今ニ傳テ永平寺之宝藏ニ在リ。師河尻ニ名ヲ埋^ミ、跡ヲ隠シテ御マス事五年。</p>	<p>且又釋迦文佛ノ茵褥、六祖大師ノ念珠、鬱多羅僧安陀會、鉢多羅羅師壇、黒竹篋、白拂子、悟本ノ頂相、如淨ノ語録等、皆師ノ帶^ヒ来リマス者也。今ニ到^テ永平ノ庫藏ニ有リ。師河尻ニ名ヲ埋^ミ、跡ヲ隠シテ御坐事五年也。</p>	<p>且亦釈迦文佛ノ茵褥、六祖大師ノ念珠、鬱多羅僧安陀會、鉢多羅羅師壇、黒竹篋、白拂子、悟本ノ頂相、如淨ノ語録等、皆師ノ帶來リマス者ナリ。今ニ傳ヘテ永平ノ庫藏ニ有リ。師河尻ノ名ヲ埋^ミ、痕ヲ隠シテ御座コト五年。</p>

*上欄に「會ワ衣カ」とある。

兼若、光若を
派遣

叱二洛ニテ兼若公、風ニ聞食、忻然限り無く、便チ御迎ノ為ニ光吉ヲ遣サル。光吉、河尻ニ至リ、師ノ草庵ニ尋子着シカハ、師對面マシマシテ、不喜ノ云、吾ハ深く身ヲカクシ、影モ移サヌ柴ノ庵、誰カ告ゲル。遙々ト汝ヲ勞シ來タセルヤ。時ニ光吉、謹テ白上ル條、恐ラクハ隠レタルヨリ顯レタルハ無シト。師ノ道德ノ至リ、天神ノ推ス処ナレバ、豈ニ洛ノミナランヤ。朝野悉ク知レ之。

時ニ洛ニテ兼若殿、風ニ聞召、忻然限りナク、便チ御迎イノ為光吉ヲ遣サル。光吉河尻ニ到テ、師ノ草庵ニ尋付シカバ、師對面マシマシテ、喜バズシテノ玉ハク、吾ハ深く身ヲ隠シ影モ移サヌ柴ノ庵、誰カ告ゲケル。遙々ト汝ヲ勞シ來セルヤ。時ニ光吉、謹ンテ白シ上ル條、恐クハ隠タルヨリ顯タルハナシ。師ノ道德ノ至リ、天神ノ推ス処ナレバ、豈洛ノミナランヤ。朝野悉ク是ヲ知ル。

叱ニ洛ニテ兼若公、風ニ聞シメシ、忻然限り無く、便チ御迎ノ爲ニ光吉ヲ遣サル。河尻ニ至テ師ノ草庵ニ尋ネ著シカバ、師對面マシマシテ、不レ善シテ云、吾ハ深く身ヲ隠シ、影モ移サヌ柴ノ庵ヲ、誰カ告ケル。遙遙ト汝ヲ勞シ來タラセルヤ。時ニ光吉、謹テ白上ル條、恐クハ隠レタルヨリ顯レタルハ無シト聞。師ノ道德ノ至リ、天神ノ推ス處成バ、豈ニ洛ノミナランヤ。朝野悉ク知レ之。

叱ニ洛ニテ兼若殿、風ニ聞シメシ、忻然限りナク、便チ御迎ノ爲光吉ヲ遣ワサル。光吉河尻ニ到テ師ノ草庵ニ尋付シカバ、師對面マシマシテ、不レ喜シテ曰ク、吾ハ深く身ヲ隠シ、影モ移サヌ柴ノ庵、誰カツゲ、ルソ。遙々汝ヲ勞シ來タセセルヤ。叱ニ光吉、謹テ白シ上ル條、恐クワ隠タルヨリ顯レタルワナシ。師ノ道德ノ至リ、天神キ推トコロナレバ、豈洛ノミナランヤ。朝野悉ク知之。

兼若の奉迎

故ニ兼若公、僕ヲ以テ迎奉レリ。先告シ上ヘキ事、恨ラクハ、父上去年ノ春三月十日空ク世ヲ逝玉フ。唯其時ノ朝迄モ寢レバ、夢覺レバ幻シニ師ノ御事ヲ言キ、御遺詞ニハ師ノ皈朝マシマサバ、只菩提ニ廻向シテ、沈淪ヲ救ヒマイラセヨト仰セケル。速ニ都ニ御上リアツテ、父上ノ御為ニ道場ヲ設ケ、廣ク説法マシマシテ、普ク親疎ヲ度シ玉ヘト、高充諸共請シ奉ル。時ニ師黙シテ思召ケルハ、我善逝已ニ成道アリ。久カラズシテ國ニ皈テ、父王並ニ親屬ヲ度シ、

故ニ兼若殿、僕ヲ以テ迎ニ奉ツレリ。先申シ上ベキ事、恨ラクハ、父上去年ノ春ル三月十日ニ空シク世ヲ逝リ玉フ。只其ノ時ノ朝マテ寢レハ、夢ニ覺レバ幻シニモ師ノ御事ノミ言キ。御遺詞ニハ師ノ皈朝マシマシサハ、只菩提ニ回向シテ、沈淪ヲ救イマイラセヨト仰セケレバ、速ニ洛ニ御上リ有テ、父上ノ御タメニソ道場ヲ設ケ、廣ク説法マシマシテ、普ク親疎ヲ度シ玉ヘトテ、高充諸共ニ請シ奉ル。時ニ師黙然トノ心ニ思召シケルハ、我釋尊モ已ニ成道アリ。久

故ニ兼若公、僕ヲ以迎奉レリ。先告シ上グベキ事ハ、恨ラクハ、御父上去年之春三月十日ニ空ク世ヲ逝リ玉フ。唯其時ノ朝迄寢レバ、夢覺レバ幻ニモ師ノ御事ヲ宣ベキ、御遺詞ニハ師ノ歸朝マシマサバ、只菩提ニ廻向シテ、沈淪ヲ救ヒマイラセヨト仰セラル。速ニ都ニ御上リ有テ、父上ノ御爲ニ道場ヲ設ケ、廣ク説法マシマシテ、普ク親疎ヲ渡シ玉ヘト、高充諸共請シ奉ル。時ニ師黙然トシテ思食ケルハ、我が善逝已ニ成道有リ。久シカラズシテ國ニ歸テ、父王並ニ

故ニ兼若殿、僕コ以テ迎奉レリ。先告上ベキコト、恨ラクワ、父上去年、春三月十日ニ空ク世ヲ逝玉フ。只其時ノ朝迄寢レバ、夢覺レバ幻シニモ師ノ御事ノミ言キ、御遺詞ニワ師ノ皈朝マシマサバ、只菩提ニ回向シテ、沈淪ヲ救ヒマイラセヨト仰セケレバ、速ニ洛ニ御上リ有テ、父上ノ御為ニ道場ヲ設ケ、廣ク説法マシテ、普ク親疎ヲ度シ玉ヘトテ、高充モロ共請シ奉ル。時ニ師黙トシテ心ニ思シメシケルワ、我が善逝已ニ成道アリ。父

永平開山禪師之行狀傳聞記

更二忉利ニ安居シテ母ヲ利濟シ玉
エリ。或ル黄檗ハ儀渡ニ母ヲ導
キ、玄沙ハ嶺南ニ父ヲ救ヘリ。我
後生オクレタリ云トモ、得道何ゾ
仏祖ニ殊ナランヤ。既ニ明師二見
ヘ来ル。豈其功無ンヤトテ、則チ
香花灯燭ヲ撃ゲ、禪坐思惟純一也。

永平開山道元和尚行狀傳聞記

シカラズシテ國ニ皈リ、父王亦タ
諸親ヲ度シ、更ニ忉利ニ安居シ
テ母ヲ利濟シ玉ヘリ。或ハ黄檗ハ
儀渡ニ母ヲ導キ、玄沙ハ嶺南ニ父
ヲ救イシナリ。我レ後生ヲクレタ
リト云エヒ、得道何佛祖ニ殊ナラ
ン。既ニ明師二見ヘ来ルトテ、乃チ
香花灯燭ヲ撃、坐禪思惟純一ナリ。

永平開山元禪師行狀傳聞記

親屬ヲ渡シ、更ニ忉利ニ安居シテ
母ヲ利濟シ玉エリ。或ハ黄檗ハ儀
渡ニ母ヲ導キ、玄沙ハ嶺南ニ父ヲ
救エリ。我後生オクレタリト雖
モ、得道何ゾ佛祖ニ殊ナラムヤ。
既ニ明師二見ヘ来ル。其功ナカラ
ンヤトテ、則チ香花灯燭ヲ撃ゲ、
禪坐思惟純一也。

永平開山道元禪師行狀傳聞記

王又諸親ヲ度シ、東ニ忉利ニ安居
シテ、利濟シ玉フ。或ハ黄檗ハ儀
渡母ヲ導キ、玄沙ハ嶺南ニ父ヲ救
エリ。我後生ヲクレタリトモ、得
道何ゾ佛祖ニ殊ナラン。既ニ明師
二見ヘ来タルトテ、乃チ香花灯燭
ヲ撃、坐禪思惟純一ナリ。

亡父の生天

時ニ無月ノ夜半ノ殊ニ曇リ暗々タ
ルガ、四方俄ニ明サシ、香風靜ニ
晴レ吹薫、空ニ声有リ。告テ云、
我ハ是師ノ父也。師ノ道力地附ニ
振イ、智光幽冥ヲ照サル、ニ由
テ、独リ我苦報ヲ免ルノミニ非
ス。諸ノ罪人込俱ニ免レ、速ニ天
ニ生ズ。爭法恩謝シト計リニテ、
音モ聲モ無ク為セケリ。高充モ光
吉モ、茲希有ヲ瞻仰シテ、亡君ノ
生天ヲ恐怡シ、師ノ道徳ヲ深ク信
ジ、感嘆更ニ涯リ無シ。

時ニ無月ノ夜半殊ニ曇リテ暗々タ
ルガ、四方俄ニ明リサシ、香風靜
カニ吹薫、空ニ声エアリ。告テ曰
ク、我レハ是レ師ノ父ナリ。師ノ
道力地附ニ振イ、智光幽冥ヲ照シ
ル、ニ依テ、獨リ我苦報ノミ免
ル、ニ非ズ。諸ノ罪人マデ、俱ニ
免レ、速ニ天ニ生ズ。法恩ハ謝シ
ガタシト計リニテ、声モナクナラ
セケル。高充モ光吉モ、此ノ希有
ヲ瞻仰シテ、亡君ノ生天ヲ恐怡
シ、師ノ道徳ヲ深ク信シ、感嘆涯
リナシ。

時ニ無月ノ夜半ノ殊ニ曇リ暗々タ
ルガ、四方俄ニ明サシ、香風靜ニ
晴吹薫ヒ、空ニ聲有リテ、告テ云、
我ハ是師ノ父也。師ノ道力地附ニ
振イ、智光幽冥ヲ照サルルニ由
テ、獨我苦報ヲ免クルノミニ非
ズ、諸ノ罪人迄、俱ニ免レ、速ニ
天ニ生ズ。爭法法恩謝シ難シト計
リニテ、音モ聲モ無ク成セケリ。
高充モ光吉モ、此ノ希有ヲ瞻仰シ
テ、亡君ノ生天ヲ恐怡シ、師ノ道
徳ヲ深信シ、感嘆サラニ涯リ無シ。

時ニ無月ノ夜半ノ殊ニ曇暗々タル
ガ、四方俄ニ明リサシ、香風靜ニ
吹薫ヒ、空ニ声アリ。告テ云ク、
我ワ是師ノ父也。師ノ道力地附ニ
振、智光幽冥ヲ照サル、ニ由テ、
獨リ我苦報ヲ免ル、ニ非、モロ
クノ罪人マデ、俱ニ免レ、速ニ
天ニ生ズ。法恩謝難シト計ニテ、
声モ臭モナクナラセケル。高充モ
光吉モ、茲ニ希有ヲ瞻仰シテ、亡
君ノ生天ヲ恐怡シ、師ノ道徳ヲ深
信シ、感嘆涯リナシ。

○貞永元年

上洛

師出定マシマシテ、二人ノ者ニ仰
セケルハ、吾先年建仁ノ佛樹師ニ

師出定マシマシテ、二人ノ者ニ仰
セケルハ、吾レ先年建仁ノ佛樹公

師出定マシマシテ、二人ノ者ニ仰
ケルハ、吾レ先年建仁ノ佛樹師ニ

師出定マシクテ、二人ノ者ニ仰
ケルワ、吾先年建仁ノ佛樹ニ事ヘ

兼若、家督を
続く

建仁寺寓居

<p>或日、兼若公、父ノ家督ヲ紹セラレバ、<small>フヤナ</small>小字名ヲ改メテ、源ノ朝臣忠好卿ト称シ、建仁三年癸亥ノ御</p>	<p>然レ氏師ハ利名ヲ事トシ玉ハ子ハ、<small>マコ</small>上命ヲモ喜ヒズ、猶建仁ニ寓居シ玉フ事、一年餘リ也。</p>	<p>事テ在シ時、母已ニ生天ヲ告ク。<small>マコ</small>今亦父ガ生處ヲ喜ブ如此。父ヲ渡シ、吾本懐ヲ茲滿ツ。然ト云レ、佛祖ノ出世ハ小師ニ同ジカラ。耻クハ吾末世ニ小師トナリシカレ、已ニ佛祖ニ紹来ル。何ゾ四恩ヲ忘ジ三有ヲ憐マサル可ヤ。上洛セント言ヘハ、兩人怡ヒ限り無く、則チ御伴仕リ、洛ニ上ラセ玉イケル。頃ハ貞永元年極月廿一日洛陽エ上着マシマセバ、兼君殿ヲ始メ御一門ノ公達、花待得タル御對面、互ニ忻怡不淺、懷抱語リ心内モ解ル水ノ如クナリ。然而師ノ皈朝ヲ御門エ奏聞有ケレバ、御門御歡斜メナラズ、師ノ爲ニ佳境ヲエラビ、精舎ヲ建テヨトノ勅命有リ。</p>
<p>或曰ク兼若殿、父ノ家督ヲ紹セケンバ、<small>フヤナ</small>小字ヲ改メテ、源ノ朝臣忠好卿ト称ス。建仁三年癸亥ノ御生</p>	<p>然レ氏師ハ利名ヲ事トシ玉ハ子ハ、<small>マコ</small>上命ヲモ喜ハス、猶ヲ建仁ニ寓居マシマス事、一年餘リト聞エタリ。</p>	<p>二事テ在リシ時、母已ニ生天ヲ告ク。今亦父ノ生處ヲ喜フ。カク父ヲ度シ、母ヲ度シ、吾ガ本懐茲ニ滿タリト雖モ、佛祖ノ出世ハ、小々ニ同カラズ。耻之吾レ末世ノ小師ナリシカト、已ニ佛祖ニ紹キ来ル。何ソノ四恩ヲ忘レ三有ヲ憐マサルベキヤ。上洛セント言ヘハ、二人悅限ナク、乃チ御伴仕リ、洛ニ上ラセ玉ヒケル。頃ハ貞永元年極月二十一日ニ洛ニ上着シ玉ヘバ、兼君殿ヲ始メ、御一門ノ公卿達、華待得タル御對面、互ニ忻怡アサカラズ、目出度シトモ云ハカリナシ。然シテ師ノ皈朝ヲ御門エ奏聞ス。御門御歡斜ナラズ、師ノ爲ニ佳境ヲエラビ、精舎ヲ建立セヨトノ勅命アリ。</p>
<p>或云、兼若公、父ノ家督ヲ續セケレバ、<small>フヤナ</small>小字名ヲ改テ、源ノ朝臣忠好卿ト稱ス。建仁三年癸亥ノ御誕</p>	<p>然ドモ師ハ利名ヲ事トシ玉ハネバ、<small>マコ</small>上命ヲモ喜ヒズ、猶建仁寓居シ玉フ事、一年餘リ也。</p>	<p>仕テ在シ時、母已ニ生天ヲ告ク。今亦父ガ生處ヲ喜ブ如レ此。父ヲ渡シ母ヲ渡シ、吾ガ本懐于レ茲滿ツ。然ト雖モ、佛祖ノ出世ハ小々ニ同ジカラズ。恥之吾レ末世ニ小師トナリシカドモ、已ニ佛祖ニ紹来ル。何ゾ四恩ヲ忘レ三有ヲ憐マサルベキヤ。上洛セント宣ヘバ、兩人悅ビ限りナク、則チ御伴仕リ、洛ニ上セ玉ヒケル。頃ハ貞永元年極月廿一日ニ、洛陽エ上著マシマセバ、兼君殿ヲ始メ、御一門ノ公卿達、花待得タル御對面、互ニ忻怡淺カラズ、懷抱語リ心内モトゲルコホリノ如ク也。然シ師ノ歸朝ヲ御門エ奏聞有ケレバ、御門御歡斜メナラズ、師ノ爲ニ佳境ヲエラビ、精舎ヲ建テヨトノ勅命有リ。</p>
<p>或云ク、兼若殿、父ノ家督ヲ紹セケレバ、<small>フヤナ</small>小字ヲ改メテ、源朝臣忠好卿ト称ス。建仁三年<small>癸亥</small>ノ御生</p>	<p>然レ氏師ハ利名ヲ事トシ玉ワ子ハ、<small>マコ</small>上命ヲヨロビズ、猶建仁寓居マシマスコト、一年餘リト聞ヘタリ。</p>	<p>テ在リシ時、母已ニ生天ヲ告ク。<small>マコ</small>今亦父ガ生處ヲ喜ブ。如レ此父ヲ度シ、母ヲ度シ、吾カ本懐于茲滿シ、シカリト雖モ、佛祖ノ出世ハ小々ニ同カラズ。恥之ワ吾レ末世ニ小師ナリシカト、已佛祖ニ紹来ル。何ゾ四恩ヲ忘レ三有ヲ憐マサルベキヤ。上洛セント言ヘバ、二人快ヒ限りナク、乃チ御伴仕リ、洛ニ上ラセ玉ヒケル。頃ハ貞永元年極月二十一日ニ洛ニ上着マシマセバ、兼君殿ヲ始メ、御一門ノ公卿等、花待得タル御對面、互ニ忻怡不淺、目出度シトモ云フ量ナシ。師ノ皈朝ヲ御門ヘ奏聞アル。御門御歡斜ナラズ、師ノ爲ニ佳境ヲエラビ、精舎ヲ建立セヨトノ勅命アリ。</p>

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>高充、受戒し 道正と号す</p> <p>生也。今三十字ニナリ玉フ。</p>	<p>レニテ、今三十字ニナリ玉フ。</p>	<p>生也。今三十字ニ成玉フ。</p>	<p>レ、今三十字ニナリ玉フ。</p>
<p>偕テ高充ハ先祖ヨリ木下ニ住シ、 代々通親ノ家ニ事ル。父ガ名ハ木 下將監高利ト云フ。高充生年七歳 ニテ父ノ高利死ス。文治四年戊申 ノ春トカヤ。高充ガ師ニ事ル其ノ イサヲシ、幾多猶未タ休セズ。其 齡ハ壽永元年壬寅ノ生レニテ、今 貞永元年壬辰ノ春ニ至テ五十一歳 也。文武勇力絶倫ナルヲ以テ、公 郷大臣議テ國主ニ封セント有リシ カト、固ク辭ゾ云、僕ハ己ニ老テ 殊ニ妻子ハ俱セサルハ、夫レ宿善 ノ餘慶難値、明師ニ逢。是僕ガ幸 也。唯師ニ隨順ノ、身ヲ終シコソ 本懐ナリトテ、少シモ受ル氣色ナ シ。師彼ガ増々隨侍ノ功ノ至切ナ ルヲ愍ンテ、為ニ法ヲ説キ、優婆 戒ヲ授ケ、法号ヲ賜リテ道正ト云 フ。艸庵ヲ木下ニ結フ。故ニ道正 庵ト名ク。道ハ無上ノ道、正ハ正 直也。是正直捨方便、但説無上道 ノ佛語ヲ示シ玉フ者歟。</p>	<p>偕テ高充ハ先祖ヨリ木下ニ主シト シテ、代々通忠ノ家ニ事ル。父 ガ名ヲ木下將監高利ト云フ。高充 生年七歳シテ父高利ハ死ス。文治 四年戊申ノ春トカヤ。高充ガ師ニ 事ル其ノイサヲシ、幾多猶未 タ休セズ。其ノ齡ハ壽永元年壬寅 ノ生レニテ、今貞永元年壬辰ニ至 リテ五十一歳ナリ。文武勇力絶倫 ナルヲ以テ、公卿大臣議、國王ニ 封セント有リシカド、固ク辭シテ 曰ク、僕ガ己ニ老テ殊ニ妻子ヲ 欲セス。夫レ宿善ノ餘慶難値、 明師ニ値フ。是僕ガ幸ナリ。唯師 ニ事テ世ヲ終シトテ不レ受。師モ 彼ガ増々隨侍ノ至切ナルヲ愍ミ テ、為ニ法ヲ説キ、優婆塞戒ヲ授 テ、法号ヲ賜テ道正ト云フ。草庵 ヲ木ノ下ニ結ビ、故ニ道正庵ト名 ク。道ハ無上道、正ハ正直ナリ。 是レ正直捨方便、且説無上道ノ佛 語ヲ示シ玉フ者歟。</p>	<p>サテ高充ハ先祖ヨリ木下ニ住シ テ、代々通親ノ家ニ仕ル。父ガ名 ハ木下將監高利ト云フ。高充生年 七歳ニテ父ノ高利死ス。文治餘年 戊申ノ春トカヤ。高充ガ師仕ル其 イサヲシ、幾多猶未ダ休セズ。 其齡ハ壽永元年壬寅ノ生レニテ、 今貞永元年壬辰ノ春ニ至テ、五十 一歳也。文武勇力絶倫成ヲ以テ、 公卿大臣議テ國王ニ封セント有リ シカドモ、固ク辭シテ云、僕ハ己 ニ老テ殊ニ妻子ハ俱セサルハ、 夫レ宿善ノ餘慶難値。今明師ニ 値フ。是僕ガ幸也。唯師ニ隨順シ テ、身ヲ終エンコソ本懐也トテ、 少シモ受ル氣色ナシ。師彼ガ増々 隨侍ノ至切成ヲ愍ンデ、爲ニ法ヲ 説キ、優婆塞戒ヲ授ケ、法号ヲ賜 リテ、道正ト云フ。草庵ヲ木下ニ 結。故ニ道正庵ト名ク。道ハ無上 ノ道、正ハ正直也。是レ正直捨方 便、但説無上道ノ佛語ヲ示シ玉フ 者歟。</p>	<p>偕高充ハ先祖ヨリ木下ニ主トシ テ、代々通忠ノ家ニ事ツル。父ガ 名木下將監高利ト云フ。高充生年 七歳ニシテ、父高利死ス。文治四 年戊申ノ春トカヤ、高充ガ師ニ事 マツル其イサヲシ、幾多猶未タ休 ス。其齡ハ壽永元年壬寅ノ生レ ニテ、今貞永元年壬辰ニ至テ、五十 一歳ナリ。文武勇力絶倫ナルヲ以 テ、公卿大臣議テ國主ニ封セント 有シカド、固ク辭シテ云ク、僕ワ 己ニ老テ、殊ニ妻子ヲ欲セズ。 夫宿善ノ餘慶、難レ値明師ニ値フ。 是僕ガ幸ナリ。唯師ニ事テ世ヲ終 トテ、不レ受。師彼ガマス／＼隨 侍ノ功ノ至切ナルヲ愍ンテ、為ニ 法説、優婆塞戒ヲ授ケ、法号ヲ賜 テ道正ト云フ。草庵ノ木下ニ結 フ。故ニ道正庵ト名ク。道ワ無上 道、正ワ正直也。是正直捨方便、 且説無上道ノ佛語ヲ示玉ウ者歟。</p>

解毒円を広め
る

師亦解毒圓ノ方ヲ附与シ玉フテ、
子々孫々ノ榮營、末代ノ猶盛シナ
ルガ為也。若シ一國ノ主ニ封セラ
レバ、榮衰量ル可シ。古今榮衰ヲ
不レ知シテ、子孫福樂窮リ無キハ、
先祖ノ道正ガ成功、且ツ大師ノ深
恩ニ非スヤ。

又夕解毒圓ノ方ヲ附與シ玉フテ、
子々孫々ノ榮華、末代猶盛シナリ。
若一國ニ封セラレバ、榮衰カハル
ベキニ、古今榮衰ヲ知ラズ、子孫
ノ福樂窮リナキハ、先祖ノ道正ガ
成功、且ツ禪師ノ深恩ニアラズヤ
ト云云。

師又解毒圓ノ方ヲ附與シ玉ヘテ、
子々孫々ノ榮營、末代ノ猶盛シ成
ガ爲也。若シ一國ノ主ニ封セラレ
バ、榮衰量ルベカラズ。古今榮衰
ヲ不知而、子孫ノ福樂窮リナキ
ハ、先祖ノ道正ガ成功、且ツ大師
之深恩ニ非哉。

師亦解毒圓ノ方神仙傳ノ一卷ヲ附
與シタモフ。榮衰計ルベシ。古今
榮衰ヲ知ラズ。子孫營榮、末代猶
盛ナリ。若一國ニ對セラレバ、榮
衰計ルベシ。古今福樂窮リナキ
ワ、先祖道正ガ成功、且又師ノ深
恩ニ非スヤト云云。

○天福元年
宇治に禪院を
開創

十二、師住持弘法之事附白山詣
之事

人王八十六代四條院天福元年癸巳
ノ春、師ノ御歲三十三、于時弘誓
院正覺禪尼等、師ノ道徳ヲ崇仰シ
テ、伽藍地ヲ洛ノ東南ナル宇治ノ
縣深草ノ郷極樂寺旧跡ヲ見立テ、
禪苑ヲ營ミ、七堂悉ク成就シテ、
即チ師ヲ請シ開山第一ノ祖ト仰キ
奉ル。

十二ニハ師住持弘法之事附白山
詣之事

全八十六代四條院ノ天福元年癸巳
ノ春、師御歲三十三、時ニ弘誓院
正覺禪尼等、師ノ道徳ヲ崇仰シ
テ、伽藍ノ地ヲ洛ノ東南ナル宇治
ノ縣深草ノ郷極樂寺ノ旧跡ヲ見
立テ、禪院ヲ營メリ。七堂尽ク成
就シテ、即チ師ヲ請シテ開山第
一ノ祖ト仰キ奉ル。

十二 師住持弘法之事附白山詣
之事

人王八十六代四條院天福元年癸巳
ノ春、師ノ御年三十三、于レ時弘
誓院正覺禪尼等、師ノ道徳ヲ崇仰
シテ、伽藍地ヲ洛ノ東南ナル宇治
ノ縣深草ノ郷極樂寺ノ舊跡ヲ見立
テ、禪苑ヲ營。七堂悉ク成就シテ、
即チ師ヲ請シテ開山第一ノ祖ト仰
ギ奉ル。

十二、師住山弘法之事并白山詣
之事

人王八十六代四條院ノ天福元年
癸巳ノ春、師ノ御歲三十三、于時
弘誓院正覺禪尼等、師ノ道徳ヲ崇
仰シテ、伽藍ノ地ヲ洛ノ東南ナル
宇治縣深草郷極樂寺ノ旧跡ヲ立
テ、禪苑ヲ營リ。七堂悉ク成就
シテ、即チ師ヲ請シ開山第一ノ祖
ト仰キ奉ル。

○嘉禎三年
開堂演法

嘉禎三年丁酉ノ冬、師ノ御歲三十
七ノ十月十五日ニ開堂演法シ玉エ
リ。其規儀次第悉ク皆太白ニ
則リ、衲子雲ノ如ク集リ、檀越斗
ノ如クニ仰ク。寺ヲ勅シテ觀音導
利院興聖寶林寺ト稱ス。

嘉禎三年丁酉ノ冬、師ノ三十七ノ
十月十五日ニ開堂演法シ玉ヘリ。
其ノ儀規次第悉ク皆太白ニ則
レリ。衲子雲ノ如ク集リ、越檀斗ノ
如クニ仰ク。寺ヲ觀音導利院興聖
寶林禪寺ト稱ス。

嘉禎三年丁酉ノ冬、師ノ御歲三十
七ノ十月十五日ニ開堂演法シ玉エ
リ。其儀規次第悉ク皆大白ニ則
レリ。衲子雲ノゴトク集リ、檀越
星ノ如クニ仰グ。寺ヲ勅シテ觀音
導利院興聖寶林寺ト稱ス。

嘉禎三年丁酉ノ冬、師ノ御歲三十
七ノ十月十五日ニ、開堂演法シ玉
フ。其儀規次第、悉ク皆太白ニ則
レリ。衲子雲如ク集リ、檀越斗ノ
如ニ仰ク、寺ヲ觀音導利院興聖寶
林禪寺ト稱ス。

神足弟子雲集

神足ノ弟子ニハ懷井、僧海、詮惠

神足弟子ニハ懷井、僧海、詮惠等、

神足ノ弟子ニハ懷井、僧海、詮慧

神足ノ弟子ニハ懷井、僧海、詮慧

<p>懷井等</p>	<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>由良の覺心參法、後に入宋</p>	<p>由良の覺心參法、後に入宋</p>	<p>由良の覺心參法、後に入宋</p>	<p>由良の覺心參法、後に入宋</p>	<p>由良の覺心參法、後に入宋</p>
<p>○寛元元年 北越入山 興聖寺を詮慧に託す</p>	<p>然人王八十七代後嵯峨院ノ寛元元年癸卯ノ夏、師ノ御歳四十三、于時如淨禪師ノ御遺誠ヲ思召シ、繁花ノ地、爰ニ久居ル可ラストテ興聖ヲ詮慧ニ附シ、越ノ前州吉田ノ郡志比ノ山ニ入り、手ヲ柴ノ庵ヲ結ヒ、安閑ト御座ス。此時ノ御詠歌ニ</p>	<p>然シテ人王八十七代後嵯峨ノ院寛元元年癸卯ノ夏、師御年四拾三、時ニ如淨禪師ノ御遺誠ヲ思召シ、繁花ノ地、爰ニ久ク居ルベカラズトテ、興聖ヲ詮慧ニ附シ、越ノ前州吉田ノ郡志比ノ山ニ入り、手ツカラ柴ノ菴ヲ結ヒ、安閑ト御居。此ノ時ノ御詠歌ニ</p>	<p>然人王八十七代後嵯峨院ノ寛元元年癸卯ノ夏、師ノ御年四十三、于レ時如淨禪師ノ御遺誠ヲ思召、繁花ノ地、爰ニ久シクヲルベカラズトテ、興聖ヲ詮慧ニ附シ、越ノ前州吉田ノ郡志比ノ山ニ入り、手ツカラ柴ノ庵ヲ結ヒ、安閑ト御坐ス時、御詠歌ニ、</p>	<p>然ジテ人王八十七代後嵯峨ノ院キ寛元元年 癸卯ノ夏、師ノ御歳四十三、于時ニ如淨禪師ノ御遺誠ヲ思メシ、繁花ノ地、爰ニ久ク居ルベカラズトテ、興聖寺ヲ詮慧ニ附シ、越ノ前州吉田ノ郡志比ノ山ニ入り、手ヲ柴ノ菴ヲ結ヒ、安閑ト御居ス。此時ノ御詠歌ニ</p>
<p>○花紅葉雪ノ明ホノ見シ事モ思エ ハクヤシ色ニ見テケル 然レ道香徳色ノ泄ル、事、弥々潜シテカクレズシテ、増々止テヤマサレバ、衆々ノ大臣官長諸國ノ刺</p>	<p>○花紅葉雪ノ曉ボノ見シ事ヲ思ヘ バクヤシ色ニメデケル ト然レ道香徳色ノ池ル、事ト、弥々潜バ弥々潜レズ、已レバ、衆々已ス、衆ノ大臣官長諸國ノ</p>	<p>花紅葉雪ノ曉ボノ見シ事モ思エ バ悔シ色ニ見テケル 然ドモ道香徳ノ色ノ泄ルル事、彌々潜レズシテ、増々止メテ止ザレバ、衆々大臣官長諸國ノ刺史</p>	<p>花紅葉雪ノ曉ボノ見シコトヲ思 ベクヤシ色ニメテケル ト、然レ道香徳色ノ池ル事、イヨク潜セバ、イヨクアラワレ、已レドイヨク已ズ、衆ノ大臣官</p>	<p>等龍象ノ大士也。推拂ノ下、常ニ一万人、菩薩戒ヲ受ル者二千余人ナリ。</p>
<p>皆龍象ノ菩薩ナリ。推拂下ニ、常ニ一万人、菩薩戒ヲ受ル者二千餘人ナリ。</p>	<p>由良ノ覺心モ師ノ化益ノ昌ナルヲ聞テ來參シ、磋磨ノ功ヲ受、更ニ菩薩戒ヲ授レリ。此ノ覺心ハ建長六年ニ入宋シテ、道ヲ悟リ、皈朝シ、由良ノ開山法燈國師ト稱セララル、ナリ。師已ニ以テ興聖ニ住シマス事、前十一年。</p>	<p>由良ノ覺心モ師ノ化益シテ昌ナルヲ聞テ來參シ、磋磨ノ功ヲ受、殊ニ菩薩戒ヲ授カレリ。此ノ覺心ハ建仁六年ニ入宋シテ、道ヲ悟リ、歸朝シテ、由良ノ開山法燈國師ト稱セケル。師已ニ興聖ニ住シ玉フ事、前後十一年。</p>	<p>由良ノ覺心モ師ノ化益シテ昌ナルヲ聞テ來參シ、磋磨ノ功ヲ受、殊ニ菩薩戒ヲ授レリ。此ノ覺心ハ建仁六年ニ入宋シテ、道ヲ悟リ、歸朝シテ、由良ノ開山法燈國師ト稱セケル。師已ニ興聖ニ住シ玉フ事、前後十一年。</p>	<p>等、龍象ノ大士也。推拂ノ下、常ニ一萬人、菩薩戒ヲ受ル者二千餘人也。</p>
<p>由良ノ覺心モ師ノ化益シテ昌ナルヲ聞テ來參シ、磋磨ノ功ヲ受、更ニ菩薩戒ヲ授レリ。此ノ覺心ハ建長六年ニ入宋シテ、道ヲ悟リ、皈朝シ、由良ノ開山法燈國師ト稱セララル、ナリ。師已ニ以テ興聖ニ住シマス事、前十一年。</p>	<p>由良ノ覺心モ師ノ化益シテ昌ナルヲ聞テ來參シ、磋磨ノ功ヲ受、更ニ菩薩戒ヲ授レリ。此ノ覺心ハ建長六年ニ入宋シテ、道ヲ悟リ、皈朝シ、由良ノ開山法燈國師ト稱セララル、ナリ。師已ニ以テ興聖ニ住シマス事、前十一年。</p>	<p>由良ノ覺心モ師ノ化益シテ昌ナルヲ聞テ來參シ、磋磨ノ功ヲ受、殊ニ菩薩戒ヲ授カレリ。此ノ覺心ハ建仁六年ニ入宋シテ、道ヲ悟リ、歸朝シテ、由良ノ開山法燈國師ト稱セケル。師已ニ興聖ニ住シ玉フ事、前後十一年。</p>	<p>由良ノ覺心モ師ノ化益シテ昌ナルヲ聞テ來參シ、磋磨ノ功ヲ受、殊ニ菩薩戒ヲ授レリ。此ノ覺心ハ建長六年ニ入宋シテ、道ヲ悟リ、皈朝シ、由良ノ開山法燈國師ト稱セララル、ナリ。師已ニ以テ興聖ニ住シマス事、前十一年。</p>	<p>等、龍象ノ大士也。推拂ノ下、常ニ一萬人、菩薩戒ヲ受ル者二千餘人也。</p>
<p>由良ノ覺心モ師ノ化益シテ昌ナルヲ聞テ來參シ、磋磨ノ功ヲ受、更ニ菩薩戒ヲ授レリ。此ノ覺心ハ建長六年ニ入宋シテ、道ヲ悟リ、皈朝シ、由良ノ開山法燈國師ト稱セララル、ナリ。師已ニ以テ興聖ニ住シマス事、前十一年。</p>	<p>由良ノ覺心モ師ノ化益シテ昌ナルヲ聞テ來參シ、磋磨ノ功ヲ受、更ニ菩薩戒ヲ授レリ。此ノ覺心ハ建長六年ニ入宋シテ、道ヲ悟リ、皈朝シ、由良ノ開山法燈國師ト稱セララル、ナリ。師已ニ以テ興聖ニ住シマス事、前十一年。</p>	<p>由良ノ覺心モ師ノ化益シテ昌ナルヲ聞テ來參シ、磋磨ノ功ヲ受、殊ニ菩薩戒ヲ授カレリ。此ノ覺心ハ建仁六年ニ入宋シテ、道ヲ悟リ、歸朝シテ、由良ノ開山法燈國師ト稱セケル。師已ニ興聖ニ住シ玉フ事、前後十一年。</p>	<p>由良ノ覺心モ師ノ化益シテ昌ナルヲ聞テ來參シ、磋磨ノ功ヲ受、更ニ菩薩戒ヲ授レリ。此ノ覺心ハ建長六年ニ入宋シテ、道ヲ悟リ、皈朝シ、由良ノ開山法燈國師ト稱セララル、ナリ。師已ニ以テ興聖ニ住シマス事、前十一年。</p>	<p>等、龍象ノ大士ナリ。推拂ノ下、常ニ一萬人、菩薩戒ヲ受ル者二千余人ナリ。</p>

「弘法靈場」

波多野義重、
寺院を結構

○寛元二年
大仏寺開堂
瑞相

<p>史達、梵宇ヲ造リテ、師ヲ延ント 欲スル人、十有三人ナリ。</p>	<p>中ニ就テ越前ノ大守波多野雲州義 重、佛法ニ帰投スル事、信心甚タ シ。師庵處最モノ佳境ナレハ、師 ノ為ニ精舎ヲ造シテ願シカハ、 師止事ヲ不得シテ祈ニ應ジ玉フ。 義重歡ヒ、秋七月一野ノ東、傘松 ノ峯ノ下ニ於テ、自ラ土籠ヲハコ ビ、木ヲ曳テ、遂ニ精舎ヲ結構セ リ。</p>	<p>刺吏等、梵宇ヲ造リテ、師延ト欲 スル者、十有三人ナリ。</p>	<p>中ニ就テ越前ノ大守波多野雲州義 重、佛法ニ皈投シテ、信甚タアツ シ。師ノ菴處最モノ佳境ナレバ、頻 リニ師ノ為ニ精舎ヲ造シテ願 フ。師モヤム事ヲ得ズシテ、其ノ 祈ニ應ジ、義重歡ヒ、秋七月一 野ノ東シ、傘松ノ峯ノ下ニ於テ、 自手土籠ヲハコビ、木ヲ曳テ、遂 ニ精舎ヲ結構セリ。</p>	<p>達、梵宇ヲ造リテ、師ヲ引カント 欲スル人、十有三人也。</p>	<p>就レ中越前之太守波多野雲州義重、 佛法ヲ歸投スル事、信心甚ダ厚 シ。師庵處最モノ佳境ナレバ、師ノ 爲ニ精舎ヲ造シテ願イ奉ル。 師止ム事ヲ得ズシテ、意ニ應ジ玉 フ。義重歡ヒ、秋七月一野ノ東、 傘松ノ峯ノ下ニ於テ、自ラ土籠ヲ ハコビ、木ヲ曳テ、遂ニ精舎ヲ結 構セリ。</p>	<p>長諸國ノ刺吏等、梵宇ヲ造リテ、 師ヲ延ント欲スル者、十有三人。</p>	<p>中ニ就テモ越前太守波多野雲州義 重公、佛ニ皈授スルコト、信甚ア ツシ。師ノ菴處モツトモ佳境ナレ バ、頻ニ師ノ為ニ精舎ヲ造ランコ トヲ願ヘリ。師ヤムコトヲ不得シ テ、其祈ニ應ジ玉フ。義重歡ヒ、初 秋七月一野ノ東、傘松ノ峯ノ下ニ於 テ、自手土籠ヲハコビ、木ヲ曳テ、 遂ニ精舎ヲ結構セリ。</p>
<p>同二年甲辰ノ夏、諸堂悉ク成就シ、 秋七月十八日ニ入院開堂マシマセ リ。時ニ天龍雲ヲ起シ、山神形ヲ 現ジ、弁木叢林迄喜ベル色アリ。 師是ゾ吉祥ノ驗ナリトテ、山ヲ吉 祥ト号シ、寺ヲ大佛ト名ケリ。</p>	<p>同ク二年甲辰ノ夏、諸堂悉ク成就 シ、秋七月十八日ニ入院開堂マシ マシセリ。時ニ天龍雲ヲ起シ、山 神形ヲ現シ、弁木叢林花ヲ放開 ス。誠ニ是レゾ吉祥ノシルシナリ トテ、山ヲ吉祥ト号シ、寺ヲ大佛 ト名ケリ。</p>	<p>同二年甲辰ノ夏、諸堂悉ク成就 シ、秋七月十八日ニ入院開堂マシ マセリ。時ニ天龍雲ヲ起シ、山神 形ヲ現ジ、弁木叢林迄喜ベル色ア リ。師是ゾ吉祥ノ驗シ也トテ、山 ヲ吉祥ト號シ、寺ヲ大佛ト名ケリ。</p>	<p>同ク二年甲辰ノ夏、諸堂悉ク成就 シ、秋七月十八日入院開堂マシマ セリ。時ニ天龍雲ヲ興シ、山神形 ヲ現シ、弁木叢林喜ベル色アリ。 師是ゾ吉祥ノシルシナリトテ、山 ヲ吉祥ト号シ、寺ヲ大佛ト名ケ リ。</p>				
<p>師義重ニ語リテ言ク、此山ノ主山 ハ高く、案山ハ低シ。東ノ丘ハ白 山ノ神廟ニ連リ、西ノ溪ハ青海ノ 竜宮ニ接ス。峯巒重疊ニシテ、人 烟ヲ隔ツルハ、實ニ弘法ノ靈場也 ト。義重聞テ歡喜シ、増々皈依シ</p>	<p>師時ニ義重ニ語テノ玉ハク、此ノ 山ハ主山ハ高く、案山ハ低シ。東 シ岳ハ白山ノ神廟ニ連リ、西ノ溪 ハ青海ノ龍宮ニ接ス。峰巒重疊ニ シテ人烟ヲ隔。實ニ弘法ノ靈場タ リト。義重聞テ歡喜シ、増々皈依</p>	<p>師義重ニ語リテ曰、此ノ山ノ主山 ハ高く、案山ハ低シ。東岳ハ白山 ノ神廟ニ連リ、西溪ハ青海ノ龍宮 ニ接ス。峯巒重疊ニシテ、人烟隔 ツルハ、實ニ弘法ノ靈場也ト。義 重聞テ歡喜シ、益々歸依シテ、誠</p>	<p>師義重ニ語リテノ玉フハ、此山ワ 主山ハ高く、案山ハ低シ。東ノ岳 ワ白山ノ神廟ニ連リ、西ノ溪ワ青 海ノ龍宮ヲ接ス。峯巒重疊ニシ テ、烟ヲ隔ツ。實ニ弘法ノ靈場タ リト。義重聞テ歡喜シ、増々皈依シ</p>				

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>テ、誠ニ須達ガ佛ニ歸シケルニ似タリ。未タ幾ナラザルニ、四衆集ル^{アツル}、雲霞ノ如シ。</p>	<p>時ニ紫雲山ヲ覆イ、香風吹送テ諸堂ヲ廻リ、尚方丈ニ鬢^{ウシ}キ、板戸ニ畫ク如ニ、遂ニ消ヘズ。其戸近キ頃迄宝物トシテ有シガ、朽敗シテ今ハ無シ。惜哉。</p>	<p>○寛元四年 大仏寺を永平寺と改称</p>	<p>寛元四年丙午ノ夏、師ノ御歳四十六、六月十五日上堂アリ。時ニ大佛ヲ改テ永平ト称スナリ。其意ハ昔シ後漢ノ明帝ノ永平年中ニ、摩騰法蘭ノ二師始テ佛法ヲ弘メシカ爲、仏経ヲ持シ來テ、仏法大ニ弘通セリ。吾宗始テ日本ニ傳來ルモ、亦彼ノ二師ニ異ナラズ。故ニ永平ト号シ玉フ。</p>	<p>白山參詣 権現の歌</p>	<p>同九月上旬ニ、師ツラツラ神恩ヲ謝セント思召、懷^イ葬、僧海ヲ誘^イキ、白山エ詣マシマス。頃シモ秋ノ末ナレバ、御社^{ミヤ}邊モ紅葉ノ錦ナリケルヲ、師見玉フテ、祠ニ向テ既ニ</p>
<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>シテ、須達ガ佛ニ皈シケルニ似タリ。未タ幾クナラザルニ、四衆集^{アツル}事、雲霞ノ如シ。</p>	<p>時ニ一日紫雲山ヲ覆ヒ、香風吹送テ、諸堂ヲ廻リ、ナヲ方丈ニタナビキ、板戸ニ粘シ畫クガ如クシテ、遂ニ消ヘズ。其戸近キ頃迄宝物トシテアリシガ、朽敗シテ今ハナシ。</p>	<p>寛元四年丙午ノ夏、師ノ御年四十六ノ六月十五日ニ上堂アル。時ニ大佛寺ヲ改メ永平寺ト称ス。其ノ意ハ昔シ後ノ明帝ノ永平年中ニ、摩騰法蘭ノ二師始メテ佛經ヲ持シ來テ、佛法大ニ弘通ス。今始テ吾宗日本ニ傳ヘ來ルモ、亦夕彼ノ二師ノ如シ。故ニ似テ永平ト称シ玉フ。</p>	<p>同ク九月上旬ニ、師情々神恩ヲ謝セント思シ召シ、懷^イ葬、僧海等ヲ誘^イイ、白山エ詣テマシマス。頃シモ秋ノ末ヘナレバ、御社^{ミヤ}ノ邊モ皆紅葉ノ錦ナリケルニ、師ミ玉フ</p>	<p>同九月上旬ニ、師ツラツラ神恩ヲ謝セント思召、懷^イ葬、僧海ヲ誘^イキ、白山エ詣マシマス。頃シモ秋ノ末ナレバ、御社^{ミヤ}邊モ紅葉ノ錦ナリケルヲ、師見玉フテ、神祠ニ向テ</p>	
<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p> <p>ニ須達ガ佛ニ歸シケルニ似タリ。未ダ幾多ナラザルニ、四衆集ル事、雲霞ノ如シ。</p>	<p>時ニ一日紫雲山ヲ覆ヒ、香風吹送テ、諸堂ヲ廻リ、尙方丈ニ鬢^{ウシ}、板戸ニ畫クガ如シテ、遂ニ消エツ。其戸近キ頃迄實物トシテ有シガ、朽敗シテ今ハナシ。惜哉。</p>	<p>寛元四年丙午ノ夏、師ノ御年四十六、六月十五日上堂有リ。時ニ大佛ヲ改テ永平ト稱ス也。其意ハ昔シ後漢ノ明帝ノ永平年中ニ、摩騰法蘭ノ二師始メテ佛法ヲ弘メンガ爲、佛經ヲ持シ來テ、佛法大ニ弘通セリ。吾宗始テ日本ニ傳エ來ルモ、亦彼ノ二師ニ異成ラズ。故ニ永平ト號シ玉フ。</p>	<p>同九月上旬ニ、師ツラツラ神恩ヲ謝セント思召、懷^イ葬、僧海ヲ誘^イキ、白山エ詣マシマス。頃シモ秋ノ末ナレバ、御社^{ミヤ}邊モ紅葉ノ錦ナリケルヲ、師見玉エテ、神祠ニ向テ</p>	<p>同九月上旬ニ、師ツラツラ神恩ヲ謝セント思召、懷^イ葬、僧海等ヲ誘^イヒ、白山ヘ詣テマシマス。頃シモ秋ノ末ナレバ、御社^{ミヤ}ノ邊モ紅葉ノ錦ナリケルヲ、師御覽マシマシ</p>	
<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p> <p>テ、須達カ佛ニ皈シケルニ似タリ。未タ幾ナラザルニ、四衆アツマル事、雲霞ノゴトシ。</p>	<p>時ニ一日紫雲山ヲ覆^フ、香風吹送テ、諸堂ヲ廻リ、方丈ニタナビキ、板戸ニ粘シ畫クガ如クシテ、遂ニ消ヘズ。其戸近頃マテ宝物トシテ有シカド、朽敗シテ今ハナシト。</p>	<p>寛元四年^{丙午}ノ夏、師ノ御歳四十六、六月十五日ニ上堂アル。時ニ大佛ヲ改メ、永平寺ト称セリ。其意ハ昔シ後漢ノ明帝ノ永平年中ニ、摩騰法蘭ノ二師始テ佛經ヲ持シ來テ、佛法大ニ弘通ス。今吾宗始テ日本ニ傳來ルモ、亦彼ノ二師ノ如ク、故ニ永平ト号スト。</p>	<p>同九月上旬ニ、師ツラツラ神恩ヲ謝セント思召、懷^イ葬、僧海等ヲ誘^イヒ、白山ヘ詣テマシマス。頃シモ秋ノ末ナレバ、御社^{ミヤ}ノ邊モ紅葉ノ錦ナリケルヲ、師御覽マシマシ</p>	<p>同九月上旬ニ、師ツラツラ神恩ヲ謝セント思召、懷^イ葬、僧海等ヲ誘^イヒ、白山ヘ詣テマシマス。頃シモ秋ノ末ナレバ、御社^{ミヤ}ノ邊モ紅葉ノ錦ナリケルヲ、師御覽マシマシ</p>	

二神携帯由来

龍天・権現

<p>是白山権現、何トシテカ紅葉ナルト問玉へバ、御戸則チ豁ト開ケテ、妙ナル神音ニテ</p>	<p>○白露ノヲノカ容ヲ其俛ニ、紅葉ニヲケバ紅井ノ玉 ト答エ玉フ。是ハ此神明ノ御詠歌ナレバ、其意味甚ダ深キ到テハ、凡情ノ知ル可キ理ニ非ス。唯師ノ三玄旨ヲ知ロシメシ、乃チ再拜シテ御下向遊シケル。</p>	<p>テ、神祠ニ向テ既ニ是白山明神、何ントシテカ紅葉ナルト問ハセケレバ、御戸スナハチバツト開ケ、イト妙ナル神音ニテ</p>	<p>○白玉ノヲノガ容ノ無キ俛ニ、紅葉ニヲケバ紅ノ玉 ト御答玉フ。是レバ神明ノ御詠歌ナレバ、其ノ意味ノ甚深ニ至テハ、凡情ノ知ルベキ理ニ非ス。唯夕師ノミ玄旨ヲ知シメシ、乃チ再拜シテ御下向遊シケリ。</p>	<p>既ニコレ白山権現、何トシテカ紅葉成ト問玉へバ、御戸則豁ト開ケ、イト妙ナル神音ニテ、</p>	<p>白露ノ己ガ容ノナキ儘ニ、紅葉ニヲケバ紅ノ玉 ト御答エアリ。這レハ是レ神明ノ御詠歌ナレバ、其意味甚ダ深キニ到テハ、凡情ノ知ルベキ理ニ非ズ。唯師ノミ玄旨ヲシロシ召シ、乃チ再拜シテ御下向遊シケル也。</p>	<p>テ、神祠ニ向テ、既ニ是白山、何トシテカ紅葉ナルト、問ワセケレバ、御戸スラノト開ケテ、イト妙ナル神音ニテ、</p>	<p>○白玉ノヲノガ容ヲソノ俛ニ、紅葉ニヲケバ紅ナイノ玉 ト御答シ玉フ。是レワ、神明ノ御詠歌ナレバ、其イミノ甚深ニ至テハ、凡情ノ知ベキ理ニ非ズ。唯師ノミ玄旨ヲシロシ召、又乃再拜シテ御下向シ玉フ。</p>
<p>或日、師歸朝マシマシテ、河尻ニ着船ノ辰、彼龍天鉢囊裡ヨリ光ヲ放テ、白雲ニ乗シテ賀州ノ白山ニ飛セ玉フ。是ニ由テ此ヲ觀レバ、龍天モ又白山権現モ一體ノ分身ニノ、支那ニハ招宝七郎ト稱シ、天竺ニテハ龍天ト稱シ、日本ニテハ但縊ニオキ白ニヲキ、信心如法ナルトキハ、一切ノ所願其祈ニ應ジ玉ハズト云事無シ。是去來諸尊、本地八十一面ノ觀世音、三國應化ノ靈神也。</p>	<p>或ハ曰ク、師皈朝マシマシテ、河尻ニ着船ノ時、彼ノ龍天鉢囊ノ裏ヨリ光明ヲ放チ、白雲ニ乗シテ賀州ノ白山ヘ飛玉フ。是レニ此ヲ見レバ、龍天モ亦タ白山明神ニテ、支那ニハ招宝七郎大権菩薩ト稱シ、天竺ニテハ龍天ト稱シ、日本ニテハ去來諸尊、本地八十一面觀音、是三國應化ノ靈神ナリ。但縊ニヲキ白ニヲキ、信心如法ナルトキハ、一切ノ祈願、其祈ニ應ジ玉ハズト云事ナシ故ニ。</p>	<p>或云、師歸朝マシマシテ、河尻ニ著船ノ時、彼ノ龍天鉢囊ノ裏ヨリ光ヲ放テ、白雲ニ乗ジテ賀州ノ白山ニ飛ビ玉フ。是ニ由テ是ヲ觀レバ、龍天モ又白山権現モ、一體分身ニシテ、支那ニハ招寶七郎ト稱シ、天竺ニテハ龍點ト稱シ、日本ニテハ但ダ縊ニオキ白ニオキ、信心如法成時ハ、一切ノ所願其祈ニ應ジ玉ワズト云フ事ナシ。是レ去來諸尊、本地八十一面觀世音、三國應化ノ靈神也。</p>	<p>或云ク、師皈朝マシマシテ、河尻ニ着船アリケレバ、彼ノ龍天鉢囊ノ裏ヨリ光明ヲ放チ、白雲ニ乗ジテ、賀州ノ白山ヘ飛玉フ。是ニ依テ此ヲ見バ、龍天モ亦白山権現ニテ、支那ニハ招宝七郎ト稱シ、天竺ニテワ龍天ト稱ス。日本ニテワ去來諸尊、本地ワ十一面觀世音、是三國應化ノ靈神ナリ。但縊ニ置、白ニ置、信心如法ナルトキワ、一切ノ諸願、其祈ニ應ジ玉ワズト云フコトナシ。</p>				
<p>故ニ吾宗ノ僧徒常ニ竜天白山ノ二神ヲ仰テ求法ヲ禱ル。人果シテ靈</p>	<p>吾宗ノ僧徒、恒ニ竜天白山ノ二神ヲ仰テ求法ヲ禱ル者、果シテ靈應</p>	<p>故ニ吾宗僧徒常ニ龍天白山ノ二神ヲ仰デ、求法ヲ禱ル。人果シテ靈</p>	<p>故ニ吾宗ノ僧徒恒ニ龍天白山ノ二神ヲ仰テ、求法ヲ禱ル者、果シテ</p>				

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>應ニ預ラザルハ無シ。実ニ弘誓深如海、歴劫不思議ノ謂ハ、更ニ誤リ無キ者也。</p>	<p>十三、時頼請レ師建^ル寺事附師 鎌倉下向 時頼、菩薩戒を受く 後嵯峨院紫衣を賜う</p> <p>(後出)</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>ニ預^アラサルハナシ。實ニ弘誓深如海歴劫不思議ノ謂ハ、サラニアヤマリナキ者也。</p>	<p>十三ニハ勅シテ号^{并ニ}紫衣ヲ賜^タフ事附時頼寺ヲ建テ師ヲ請スル事^{并師}亡靈ヲ救玉フ事</p> <p>人王八十七代後嵯峨ノ院、師ノ道譽叡聞ニ達シ、紫衣ヲ賜リ、號ヲ佛法上人禪師ト輪言ニテ、三度遣御勅使ヲ賜リ、三度辞スレ^マ氏許シ玉ハス。終ニコレヲ納受シ玉フテ、即作^ニ一偈^ヲ曰ク、 永平雖^ニ山^ト浅^ト、勅命重^キ重々却^レ被^ル笑^ハ猿鶴、紫衣一老翁今上増々欽重ヲ加エ玉フ。嗚呼末世ノ愚僧ハ、金銀ヲ入テモ、紫衣ヲガナト名聞利養グルシキハ、何事ゾヤ。慚愧裏ニ向テ、此ノ意ヲ通ズベキ者也。</p>
<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p> <p>應ニ預カラザルハナシ。實ニ弘誓深如海、歴劫不思議ノ謂ハ、更ニ誤リナキ者也。</p>	<p>(後出)</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p> <p>靈應ニ預ラザルワナシ。実ニ弘誓深如海、歴劫不思議ノ謂ハ、サラニアヤマリナキ者也。</p>	<p>(後出)</p>

○宝治二年
永平寺帰山
時頼に詠歌を

于時師ノ御歳四十七、人王八十八代後深草院宝治元ノ末ノ秋八月、鎌倉ノ副元帥平ノ時頼公、師ノ徳

其後子師ノ御四十七ニテ、人王八十八代後深草院ノ宝治元年丁未ノ秋八月、鎌倉ノ副元帥平ノ時頼、

于時師ノ御年四十七、人王八十八代後深草院寶治元年丁未ノ秋八月、鎌倉ノ副元帥平ノ時頼公、師

其后、師ノ御歳四十七、人王八十八代後深草ノ宝治元年丁未ノ秋八月、鎌倉ノ副元帥平時頼公、師ノ

授ける

望ノ一時ニ重キヲ以テ、使ヲ遣シテ師ヲ招ク。師兼テ東國ヲ一件セバヤト思食処ニ、幸ナリトテ相州ニ行キ玉フ。時頼大ヒニ悦ヒ、便チ弟子ノ禮ヲ報シテ、菩薩戒ヲ受ケ、仰礼供養セル事、精誠ヲ盡セリ。更ニ道俗男女ノ禮謁スル事、遠近ヲ不レ云、師ノ至德亦教テ不レ倦。機ニ隨テ說法シ玉フ。度人授戒ノ者幾千万人ト云數ヲ知ラズ。鞠多尊者ノ昔シ惠能大師ノ古ヘモ、カウソト思イ知ラレタリ。時頼新ニ寺ヲ創シテ師ヲ請セラル。師辭シテ就玉ワズ。

師ノ德望ノ一時ニ重キヲ以テ、使ヲ遣シテ師ヲ請シケル。師モ兼テ東國ヲ一見セバヤト思召ス処ナレハ、幸ニ相陽ニ趣キ玉フ。時頼大ニ悦ヒ、便チ弟子ノ禮ヲ執テ、菩薩戒ヲ受、朝暮ノ供養セル事、精誠ヲツクセリ。更ニ道俗男女禮謁スル事、遠近ヲ云ハス。師ノ至慈亦ヲ教テ不レ倦。機ニ隨テ說法シ玉フ。度人受戒ノ者、千万人ト云事ヲ知ラズ。鞠多尊者ノ昔シ、慧能大師ノ古モ、角ゾト計リ知ラレケルナリ。時頼最明寺ヲ創シテ、師ヲ請セラル。師固ク持シテ就キ玉ハズ。

ノ德望ノ一時ニ重キヲ以テ、使ヲ遣シテ師ヲ招ク。師兼テ東國ヲ一見セバヤト思召ス處ニ、幸成トテ相州ニ行玉フ。時頼太夕悦ヒ便チ弟子ノ禮ヲ報ジテ、菩薩戒ヲ受ケ、仰禮供養セル事、精誠ヲ盡セリ。更ニ道俗男女ノ禮謁スル事、遠近ヲ云ズ、師ノ至慈亦教テ不レ倦。機ニ隨テ說法シ玉フ。度人受戒ノ者、幾千萬ト云フ數ヲ知ズ。鞠多尊者ノ昔シ、惠能大師ノ古モ、カクゾト計リ知レタリ。時頼新ニ寺ヲ創シテ、師ヲ請セラル。師辭シテ就キ玉ハズ。

德望ノ一時ニ重ヲ以テ、使ヲ遣シテ師ヲマシク。師兼テ東國ヲ一見セバヤト思シメス処ニ、幸ナレバトテ相陽ニ行玉フ。時頼大ニ悦ヒ、便チ弟子ノ禮ヲ執テ、菩薩戒ヲ受ケ、仰禮供養セル事、精誠ヲツクセリ。更ニ道俗男女ノ禮謁スルコトキ、遠近ヲ不レ云。師ノ至慈教ヘテ不倦、機ニ隨テ說法シ玉フ。度人授戒ノ者、幾千万人ト云フコトヲ不知。鞠多尊者ノ昔、慧能大師ノ古モ、カクヤト計知レケル。時頼新ニ寺ヲ創シテ、師ヲ請セラル。師辭シテ就玉ワズ。

時頼の事
建長寺建立

次ノ年戊申ノ春三月上旬ニ、錫ヲ杖テ越前ニ皈リ玉フ。或云、時頼ハ頼朝ヨリ第六世ノ征夷大將軍宗尊親王ノ執權相模守北条時頼、泰時ノ孫、時氏が二男也。篤ク師ヲ仰テ法ヲ聽、戒ヲ受ク。師示シ玉フニ、四十八首ノ詠歌並ニ法華經ノ二十八品ヲ詠ノ、時頼ニ授玉フ四十八首ハ、皆イロハヲ冠字ニ安シ今往々ニ書傳テ拜見スル者多シ。時頼后入道ノ、最明寺ト云フ。

次ノ年戊申ノ春三月上旬ニ、錫ヲ振テ越州ニ皈リ玉フ。或曰ク、時頼ハ頼朝ヨリ第六世ノ征夷大將軍宗尊親王ノ執權相模守泰時ノ孫、時氏ノ二男ナリ。篤ク師ヲ仰テ法ヲ聽キ、戒ヲ授リテ、師示シ玉フニ、四十八首ノ詠歌並ニ法華經ノ二十八品ヲ詠シテ、授ケ玉フ四十八首ノ歌ハ、皆ナ以呂波ヲ冠字ニ安キエリ。今二世ニ傳テ有リ、見ル処ナリ。時頼後チハ入道シテ師

次ノ年戊申ノ春三月上旬ニ、錫ヲ杖テ越前ニ歸リ玉フ。或云、時頼ハ頼朝ヨリ第六世ノ征夷大將軍宗尊親王ノ執權相模守北條時頼、泰時ノ孫、時氏が二男也。篤ク師ヲ仰テ法ヲ聽キ、戒ヲ受ク。師示シ玉フニ、四十八首ノ詠歌并法華經ノ二十八品ヲ詠ジテ、時頼ニ授ケ玉フ四十八首ハ、皆イロハヲ冠字ニ安ジ、今往々ニ書傳テ拜見スル者多シ。時頼後入道シテ、最明寺

次ノ年戊申ノ春三月上旬ニ、錫ヲ杖テ越前ニ皈リ玉フ。或曰ク、時頼ハ頼朝ヨリ第六世ノ征夷大將軍宗尊親王ノ執權相模守時頼、泰時ノ孫、時氏が二男ナリ。篤ク師ヲ仰テ法ヲ聽キ、戒ヲ受ク。師示玉フニ、四十八種ノ詠歌并ニ法華經ノ二十八品ヲ詠ジテ、時頼ニ授玉フ。二十九種、今後世ニ書傳テ、拜見スル僧徒ノアリトナン。時頼后ニ入道シテ、最明寺ト云フ。師爲ニ造

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>師ノ為ニ造レル寺ハ、鎌倉ノ建長寺是ナリ。建長元年ニ創シケレバ、年号ヲ寺号ニナス。</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>ノ為ニ造ル最明寺ヲ鎌倉ノ建長寺ト改テ、建長ノ年号ヲ寺号トスレバナリ。</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p> <p>ト云フ。師ノ為ニ造レル寺ハ、鎌倉ノ建長寺是也。建長元年ニ創シケレバ、年號ヲ寺號ニナス。</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p> <p>ル寺ワ、鎌倉ノ建長寺是ナリ。建長元年ニ創スレバ、年号ヲ寺号トス。</p>
<p>蘭溪道隆に開山を請す</p> <p>寛元四年ニ蜀ノ國ヨリ、道隆蘭溪ト云シ知識來朝シテ有ケルヲ、時頼建長元年ニ請シテ、此寺ニ開山ト仰キケルナリ。</p>	<p>師ノ教ニ依テ寛元元年ノ比ヨリ、蜀ノ國ヨリ道隆蘭溪禪師ト云フ知識、來朝シテアリケルヲ請シテ、此ノ寺ノ開山ト仰レケルト也。</p>	<p>寛元四年ニ蜀ノ國ヨリ、道隆蘭溪ト云シ知識來朝シテアリケルヲ、時頼建長元年ニ請シテ、此寺ニ開山ト仰ケル也。</p>	<p>寛元四年ニ蜀ノ國ヨリ、道隆蘭溪ト云シ知識ノ來朝シテ有リケルヲ、時頼建長元年ニ請シテ、此寺ニ開山ト仰レケルトナリ。</p>
<p>星井女人に血脈授与</p> <p>又師鎌倉ニテ星井ノ女人ノ亡魂ヲ血脈ヲ授ケテ、生天セシメ玉フト。世ニ傳テ物語シケル。</p>	<p>亦タ師鎌倉ニテ星井女人ノ亡魂血脈ヲ授ケテ、生天セシメ玉フト、世ニ言傳エタリ。</p>	<p>又鎌倉ニテ星井ノ女人ノ亡魂ヲ血脈ヲ授ケ、生天セシメ玉フト、世ニ傳ヘテ、物語リシケル。</p>	<p>又師鎌倉ニテ星ノ井ノ女人ノ亡魂ヲ、血脈ヲ授ケテ、生天セシメ玉フト、世ニ語り傳ヘタリ。</p>
<p>湯尾にて疫病を度す</p> <p>亦鎌倉ヨリ坂山ノ時、越前ノ湯尾トウケニテ、疫神ニ逢玉フテ、説法シテ疫神ヲ度シ、一生抱瘡ノ役ヲ脱シ玉フコト、是又人ノ知ル処ナリ。又疫癘公案ハ猶宗旨ニ流リ、諸寺院ノ室中ニ參スル者ハ、拜視スヘシ。智慧愚癡通般若ト云頌アリ。戸札ニ書テ彼ヲ防ク云。</p>	<p>亦タ鎌倉ヨリ坂山ノ時キ、湯ノ尾峠ニテ、疫神ニ逢玉フ事有テ、説法シテ疫神ヲ度シ、師ハ一生抱瘡ノ役ヲ免レ玉フ事、是レ亦人ノ知ル処ナリ。疫癘ノ公案ハ猶我々宗旨ニ流リ、諸寺院ノ室中ニ參ス者ハ、拜見スベキナリ。知惠愚痴通般若ト云フ頌アリ。戸札ニ書テ彼ヲ防クト云云。</p>	<p>又鎌倉ヨリ歸山ノ時、越前ノ湯尾トウケニテ、疫神ニ逢イ玉キテ、説法シテ疫神ヲ度シ、一生抱瘡ノ役ヲ脱シ玉フ事、是又人ノ知處也。又疫病ノ公案ハ猶宗旨ニ傳ハリ、諸寺院ノ室中ニ參ズル者ハ、拜視スベシ。智慧愚癡通般若ト云頌在リ。戸札ニ書テ彼ヲ防グト云。</p>	<p>又鎌倉ヨリ坂山時、伊能峠ニテ疾神ニ逢玉ウテ、説法シテ疾神ヲ度シ、師一生抱瘡ノ役ヲ脱シ玉フコト、是亦人ノシル攸ナリ。又疫癘ノ公案ハ猶宗旨ニ流リ、諸寺院ノ室中ニ參スル者ワ、拜視スベシ。智慧愚癡通般若ト云頌、戸札ニ書テ彼防グト云。</p>
<p>師永平ニ皈り、増々説法シ、利生員ヲ知ラス。飛禽走獸、蛇蝎ノ類モ、人ヲ不レ怖シテ聽衆ニ交リテ</p>	<p>師永平ニ皈リ玉フテ、増々説法シ、利生員ヲシラザリキ。飛禽走獸、蛇蝎ノ類モ、人ヲ不レ畏聽聞</p>	<p>師永平ニ歸リ、増々説法シ、利生員ヲ知ズ。飛ビ禽走獸、蛇蝎ノ類モ、人ヲ不レ怖シテ聽衆ニ交リテ</p>	<p>師永平ニ皈り、マス／＼説法シ、利生員ヲシラス。飛禽走獸蛇蝎ノ類モ、人ヲ不レ畏聽衆ニ交リテ法</p>

「血脈度靈」

法ヲ聽シナリ。

本州ニ藤原ノ永平伝者、師ヨリ優婆塞戒ヲ受ケ信心ノ善男子アリ。其妻死シテ蛇トナリ、又愛欲ノアサマシク、嫉妬ノ晴深シテ免レ難ケレバ、又師是ヲ愍テ菩薩戒ノ血脈ヲ授ケ玉ヘリ。脩ニ變シテ男子ノ身トナリ、便チ師ヲ禮謝シ、光明ニ乗シテ天ニ登ル。嗚呼法血ノ功德不可思議ノ至リナリ。然ルニ近代ノ悟ニ醉ル僧徒、偏枯ヲ見解ニ苦シンテ、糞ヲ拭フ古紙ノ如ス。不立文字教外別傳ノ言ヲ悪ク心得テ、常ヲ以テ常ニカエスト云フヲ知ラザルナリ。

セシトナリ。

本州藤原ノ永平トテ、師ヨリ優婆塞戒ヲ受テ信心ノ善男子ナリ。其ノ愛妾死シテ蛇トナリ、亦ク愛欲ノ淺マシク、嫉妬ノ情深カケレバナリ。師ヨリ是ヲ愍テ菩薩戒ヲ授ケ、血脈ヲ授ケ玉エバ、忽チ變ジテ男子トナリ、便チ師ヲ禮謝シテ、光明ヲ放チ天ニ登リキ。嗚呼、法脈ノ功德不可思議ノ至リナリ。然ルニ近年ノ悟ニ醉ル僧徒、偏枯ノ見解ニクルウテ、糞ヲ拭フ古紙ノ如クス。不立文字教外別傳ノ言フヲ悪シク心得シ故カ、誠ニ獅子身中ノ虫ナリ。同シク修行イタシテ、天魔外道ノ見解ニシテ、禪天魔トモ云ベキカ、慎ムベキ事ナリ。

法ヲ聞也。

本州ニ藤原ノ永平トテ、師ヨリ優婆塞戒ヲウケ信心ノ善男子アリ。其妻死シテ蛇ト也、又愛欲ノ淺マシク、嫉妬ノ情深シテ免レ難ケレバ、又師是ヲ愍テ菩薩戒ノ血脈ヲ授ケ玉エリ。忽チ變ジテ男子身トナリ、便チ師ヲ禮謝シテ、光明ニ乗ジテ天ニ登リキ。嗚呼法血ノ功德不可思議ノ至リ也。然ルニ近代ノ悟リニ醉ル僧徒、偏枯ノ見解ニクルシンデ、糞ヲ拭フ古紙ノ如ス。不立文字教外別傳ノ語ヲ悪シク心得テ、常ヲ以テ常ニカエスト云フコトヲ不知也。

ヲ聽シトナリ。

本州ニ藤原ノ永平トテ、師ヨリ優婆塞戒ヲ受信心ノ善男子アリ。其妻死シテ蛇トナリ、又愛欲ノ淺マシク嫉妬ノ情フカケレバナリ。師是ヲ愍ンデ、菩薩戒ノ血脈ヲ授玉ヘバ、忽チ變ジテ男子ノ身トナリ、便チ師ヲ禮謝シテ光明ニ乗ジテ天ニ登トナリ。嗚呼法血ノ功德不可思議ノ至ナリ。然ルニ近代ノ悟ニ醉ル僧徒、偏枯ノ見解ニクルフテ、糞ヲ拭フ古紙ノ如ス。不立文字教外別傳ノ言ヲ悪ク心得、不解之迷冥ニヨルイエナリ。可恐可鎮。

○建長元年
羅漢供養

同建長元年ノ春正月十五日、始テ羅漢供養ヲ行イ玉フ。時ニ五百ノ大羅漢堂ヨリ光ヲ放チ降臨シ、老松ノ上ニ止リマス。羅漢松トテ今ニ有リ。已ニ供養了レバ、羅漢皆師ヲ瞻敬シ、團扇ヲ以テ山門ノ内ニ擲下セリ。是モ今ニ傳テ宝物タリ。

茲ニ建長元年ノ春正月十五日ニ始テ、師羅漢供養ヲ行イ玉フニ、十六及ビ五百ノ大羅漢堂ヨリ光ヲ放チ降臨シ、老松ノ上ニ止リマス。羅漢松トテ今ニ有テ見ル処ナリ。已ニ供養了レバ、羅漢モ師ヲ瞻敬シ、團扇ヲ以テ山門ノ内ニ擲下ス。是モ今ニ傳テ宝物ト成ル。

建長元年ノ春正月十五日、始テ羅漢供養ヲ行ヒ玉フ。時ニ五百大羅漢堂ヨリ光ヲ放チ降臨シ、老松ノ上ニ止マリマス。羅漢松トテ今ニ有リ。已ニ供養了レバ、羅漢皆師ヲ瞻敬シ、團扇ヲ以テ山門ノ内ニ擲下セリ。是モ今ニ傳テ寶物タリ。

同建長元年ノ春正月十五日ニ、始テ羅漢供養ヲ行玉フ。時ニ五百ノ大羅漢達、空ヨリ光ヲ放チ降臨シ、老松ノ上ニ止リマシマス。羅漢松トテ今ニアリ。已テニ供養了ヌレバ、羅漢達師瞻敬シ、團扇ヲ以山門ノ内ニ擲下ス。是モ今ニ傳テ宝物ナリ。

瑞相

後嵯峨院紫衣を賜う

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p> <p>時二道俗男女、羅漢ノ來光ヲ拜ミ、師ノ道德ヲ思イヤリ、我等宿ニ如何ナル善根ヲ植ケン。カ、ル未曾有ノ勝會ニ遇奉ルトテ、隨喜ノ涙流シ、感嘆セザル者ハナシ。又大布薩ヲ行イ玉フ。今ニ到テ怠タラス。</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p> <p>時二道俗男女羅漢ノ來光ヲ拜ミ、師ノ道德ヲ思イヤリ、我等昔シ如何ナル善根ヲ殖ケン。未曾有ノ勝會ニ遇奉ルトテ、隨喜ノ涙ヲ流ササルハナシ。亦菩薩ヲモ始テ行ヒ玉フ。今ニ到テ退轉アル事ナシ。</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p> <p>時二道俗男女羅漢ノ來光ヲ拜ミ、師ノ道德ヲ思イヤリ、我等宿ニ如何ナル善根ヲ植シケン。未曾有ノ勝會ニ遇イ奉ルトテ、隨喜ノ涙ヲ落シ、感嘆セザル者ハナシ。又大布薩ヲ行ヒ玉フ。今ニ到テ怠タラズ。</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p> <p>于時道俗男女羅漢ノ來光ヲ拜。師ノ道德ヲ思ヒヤリ、我等宿ニ如何ナル善根ヲ殖ケン。未曾有ノ勝會ニ遇奉ルトテ、隨喜ノ涙ヲ落ササルワナシ。又大布薩ヲ行ヒ玉フ。今ニ到テ怠タラズ。</p>
<p>後嵯峨院道譽聽召シ、紫衣ヲ賜フトテ號ヲ佛法禪師ト勅シ玉フ。師三度辭シ玉エモ不許シテ賜レバ、卒ニ此ヲ納受シ玉ヘリ。則有レ偈</p>	<p>(前出)</p>	<p>後嵯峨院師ノ道譽ヲ聽シ召、紫衣ヲ賜フ。號ヲ佛法上人禪師ト勅シ玉フ。師三度辭スレドモ許シ玉ハネバ、卒ニ此ヲ納受セリ。則在レ偈、</p>	<p>人王八十七代後嵯峨ノ院、師ノ道譽ヲ聽シメシ紫衣ヲ賜リ、號ヲ佛法上人禪師トシ玉フ。師三ヒ辭スレモ不許、卒ニ之納受シ玉フ。依而作偈曰ク、</p>
<p>○永平雖山淺、勅命重々重、却被猿鶴笑、紫衣一老翁ト 上増々欽重ヲ加エ玉フ。嗟末代ノ愚僧隨俗名利ノ輩ハ、本師ノ深志ヲ失シ、謾ニ金銀ヲ入レ、紫衣ヲカナト名聞ニ眼睛ヲコラシ、這裏ニ大事者ルヲ知ラザルハ何ソヤ。今日遠流ヲ汲テ、師ノ厚恩ヲ報ント、欲セハ、自己ニ省テ、裏ニ慚愧ヲ知りテ、此意ヲ通徹セヨ。光陰空ク送ルコト莫レ。</p>	<p>「永平雖山淺、勅命重重重、卻被猿鶴笑、紫衣一老翁」 上増々欽重ヲ加エ玉フ。嗟末代ノ愚僧隨俗名利ノ輩ハ、本師ノ深志ヲ失シ、謾ニ金銀ヲ入レ、紫衣ヲカナト名聞ニ眼睛ヲコラシ、這裏ニ大事アルコトヲ知ザルハ何ソヤ。今日遠流ヲ汲テ、師ノ厚恩ヲ報ント欲セバ、人人自己ヲ省テ、裏ニ慚愧ヲ知りテ、此意ヲ通徹セヨ。光陰空送ル事勿レ。</p>	<p>永平雖山淺、勅命重々々、却被猿鶴、紫衣一老翁 上増欽重ヲ加ヘ玉フ。嗟末代ノ愚僧ワ、金銀ヲ入テモ、紫衣ヲカナトテ名聞クルシキワ何ソヤ。慚愧裏ニ向テ此意ヲ通ズベキ者。</p>	<p>永平雖山淺、勅命重々々、却被猿鶴、紫衣一老翁 上増欽重ヲ加ヘ玉フ。嗟末代ノ愚僧ワ、金銀ヲ入テモ、紫衣ヲカナトテ名聞クルシキワ何ソヤ。慚愧裏ニ向テ此意ヲ通ズベキ者。</p>

○建長二年
義重藏經施入

亦建長二年ニ、義重公、藏經ヲ本庵ニ捨入セリ。是偏ニ師ノ大徳ナル故乎。

同ク二年、波多野義重、藏經ヲ捨入セリ。

亦建長二年ニ、義重公、藏經ヲ本庵ニ捨入セリ。是偏ニ師ノ大徳成ル故乎。

建長二年ニ、義重公藏經ヲ本庵ニ捨入セリ。

○建長四年
遺教經講授

十四、師就レ病入洛之事附遷化示寂之事

同四年壬子ノ夏、遺教經ヲ講シ玉フ。僧俗男女群ヲ成シ來テ、膝又膝ヲ重テ、日々ニ聽聞頻ナリ。異類モ亦數ヲ知らズ。此緣ニ預ラザルハ無シ。

事附師御遷化之事

十四ニハ師病ニ依テ入洛シ玉フ建長四年壬子ノ夏、遺教經ヲ講ジ給フ。僧俗男女群ヲナシ來テ、膝ヲカサ子テ、日ニ聽ヲソビヤカス。異類モ亦數ヲ知らズ。

十四 師病ニ由テ入洛之事付師遷化示滅之事

同四年壬子ノ夏、遺教經ヲ講シ玉フ。僧俗男女羣ヲナシ來リテ、膝又膝ヲ重テ、日ニ聽聞頻也。異類モ又數ヲ知らズ。此緣ニ預ラザルハナシ。

十四、師病ニ由テ入洛ノ事付師遷化ノ事

同四年壬子ノ夏、遺教經ヲ講シ玉フ。僧俗男女群ヲナシ來テ、膝マタ膝ヲカサ子テ、日々ニ聽ヲソビヤカス。異類モマタ數ヲ不知。

○建長五年
上洛

同五年癸丑ノ夏、病ヲ示セリ。王公親族、師ノ不豫ヲ聞召シ、洛ニ上シマイラセテ、良醫ヲ尽ントテ、忠好卿ヨリ御迎トシテ、光吉ヲ遣サル。師王公諸一門ノ志ヲモタサレテ、止事ヲ得玉ハズシテ、得ザレハ、

同ク五年癸丑ノ夏、病ヲ示給フ。王公親族達、師ノ不豫ヲ聞召シ、洛ニ上ラセ玉エ。良醫ヲ尽シマイラセントテ、忠好卿ヨリ御迎イトシテ、光吉ヲ遣サル。師モ王公諸一門ノ志シモダシガタク、止事得ザレハ、

同五年癸丑ノ夏、病ヲ示セリ、王公親族達、師ノ不豫ヲ聞召シ、洛ニ上シ參ラセテ、良醫ヲ盡ントテ、忠好卿ヨリ御迎トシテ、光吉ヲ遣サル。師王公諸一門ノ志ヲモタサレズ、止ム事不得シテ、

同五年癸丑ノ夏、病ヲ示シ玉フ。王公親族タチ、師ノ不豫ヲ聽シメシ、洛ニ上セマイラセ、良醫ヲ尽ントテ、忠好卿ヨリ御迎トシテ、光吉ヲ遣サル。師王公諸一門ノ志シモダシガタク、已コトヲ不得シテ、

西洞院逗留

其秋ノ八月五日、駕ニ命ジテ、洛ニ入玉フ。忠好卿ヲ始、御一門ノ公卿、御悅者テ、則チ西ノ洞院ニ館ヲ造リテ、師ヲ安坐マシマセリ。師自手額ヲ妙法蓮華經院ト遊シケルナリ。

其ノ秋八月五日、駕ニ命シテ洛ニ入り玉フ。忠好卿ヲ始メ御一門ノ公卿達、御悅ビ限りナク、乃チ西洞院ニ館ヲ造リ、師ヲ安坐マシマスナリ。師自手額ヲ妙法蓮華院ト遊ハシケルトナリ。

其秋ノ八月五日、駕ニ命ジテ、洛ニ入玉フ。忠好卿ヲ始メ、御一門ノ公卿達、御悅有テ、則チ西ノ洞院ニ館ヲ造リテ、師安坐マシマセリ。師自額ヲ妙法蓮華經院ト遊シケルト也。

其秋八月五日、駕ニ命ジテ洛ニ入玉フ。忠好卿ヲ始メ、御一門ノ公卿達、御悅ビニテ、乃チ西ノ洞院ニ館ヲ造リテ師安坐マシマスナリ。師自手額ヲ妙法蓮華經院ト遊ハシケルトヤ。

僧俗礼謁

月見の御詠歌

天医治療

遺傷

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>爰ニノ僧俗ノ禮謁スル者綿綿トノ一日モ不レ絶。師ノ偏ニ至慈ナル人ヲ教導スルニ、其根機ニ隨テ法ヲ説キ、人ヲ利益マス事不レ少。</p>	<p>爰ニテ僧俗礼謁スル者綿々トシテ一日モ絶エズ。師一重至慈ニテ人ニ倦玉ハズ、其根機ニ隨テ法ヲ説キ、人ヲ利益マシマス事少カラズトカヤ。</p>	<p>爰ニシテ僧俗ノ禮謁スル者、綿々トシテ一日モ不レ絶。師ノ偏ニ至慈人ヲ教導スルニ、其根機ニ隨テ法ヲトキ、人ヲ利益マス事不レ少。</p>	<p>爰シテ僧俗ノ禮謁スルモノ綿々トシテ、一日モ不レ絶。師ノ一ヘニ至慈人ニウマズ。其根機ニ隨テ法ヲ説、人ヲ利益マスコト不レ少。</p>
<p>三五ノ夜、明月ノ御詠歌有リ。 ○又見ント思シ時ノ秋ダニモ今宵ノ月ニ子ラレヤハスル ト詠シ玉フ。人口ニ膾炙セル者也。其意ヲ推量ルニ、預メ亦寂シ玉ン事ヲ、知ロシメセバナリ。</p>	<p>三五夜ノ明月ニ詠歌マシマシケル。 ○マダ見ント思ヒシ時ノ秋ダニモ今宵ノ月ニ寢ラレヤハセン カクヨミ玉イテ人口ニ膾炙セル者ナリ。其ノ御意ヲ推スニ、逆メ示寂シ玉フ事ヲ、知ロシ召シテナリ</p>	<p>三五ノ夜、明月ノ御詠歌有リ。 又ミント思ヒシ時ノ秋ダニモ、今宵ノ月ニネラレヤワスル、 ト誦ジ玉フテ、人口ニ膾炙セル者也。其心ヲ推計ルニ、アラカジメ示寂シ玉フ事ヲ、知シ召バ也。</p>	<p>三五ノ夜、明月ノ詠歌アリ。 マタ見ント思ヒシ時ノ秋ダニモ今宵ノ月ニ子ラレヤワスル ト誦玉フ。人口ニ膾炙セル者アリ。其コ、ロヲ推ニ、逆メ示寂シ玉ワヌ事ヲ、知シメセバナリ。</p>
<p>上勅シテ天醫ヲ使シ、病ヲ眎セシメ玉フニ、師ノ談笑平日ノ如シ。聖者ノ境界ハ、凡身ヲ以テ計ルベキ非ス。</p>	<p>上勅シテ天醫ヲ遣シテ、病ヲ眎セシメ玉フニ、師ノ談笑平日ノ如ナレバ、聖者ノ境界、凡身ヲ以テ量リ知ルベキ者ニ非ス。</p>	<p>上勅シテ天醫ヲ使シ、病ヲ眎セシメ玉フニ、師ノ談笑平日ノ如シ。聖者ノ境界ハ、凡身ノ以テ計リ知ベキニ非ズ。</p>	<p>上勅シテ天醫ヲ使シ、病ヲ眎セシメ玉フニ、師ノ談笑平日ノ如シ。聖者ノ境界ハ、凡身ヲ以テ量知ベキ者ニ非。</p>
<p>同廿八日夜澡浴シ、淨衣ヲ整エ、辭衆、筆ヲ索テ書シテ云、</p>	<p>同二十八日澡浴シテ、衣ヲ整ヘテ辭レ衆、筆ヲ索テ書テ曰、</p>	<p>同廿八日ノ夜澡浴シ、衣ヲ整エ、辭衆、筆ヲ素メテ書シテ云、</p>	<p>同ク二十八日ノ夜澡浴シ、衣ヲ整ヘ、辭レ衆ヲ、筆ヲ索テ書ノ曰、</p>
<p>五十四年、照第一天、打箇躡跳、觸破大千、渾身無着処。咦。活陷黄泉。</p>	<p>五十四年、照第一天、打箇ノ躡跳、觸破大千、渾身無レ處レ活ニ落ニ入黄泉。</p>	<p>五十四年照第一天、打箇躡跳觸破大千、渾身無レ所レ覓、活入ニ黄泉。</p>	<p>五十四年、照第一天、打箇躡跳、觸破大千、渾身無レ處レ覓、活入ニ黄泉。</p>

入寂	ト云了テ筆ヲ投 ^{マツ} ケテ、怡然トシテ坐シナガラ化シ玉フ。忠好ハ本ヨリ王公大臣朝野ノ遮 ^{マツ} 民迄、入寂ノ由ヲ聞テ、哀嘆セザル者ハナシ。況ヤ法恩ノ輩ヲヤ。生ルガ如シ。	筆ヲ投 ^{マツ} テ、怡然ト坐シナガラ化シ玉フ。忠好ヲ始メ王公大臣朝野ノ庶民迄、入寂シ玉フヲ聞テ、悲ミ哀ザルハナシ。況ヤ法恩ヲ受ケシ輩ヲヲヤ。	ト云テ筆ヲ投ジテ、怡然トシテ坐シナガラ化シ玉フ。忠好卿ハ本ヨリ王公大臣朝野ノ庶民迄、入寂ノ由ヲ聞テ、哀嘆セザル者ハナシ。況ヤ法恩ノ輩ヲヤ。	ト云テ、筆ヲ投テ、怡然トシテ坐シナガラ化シ玉フ。忠好元ヨリ王公大臣朝野ノ庶民マデ、入寂ヲ聞テ、悲ミ哀カザルハナシ。況ヤ法恩ノ輩ヲヤ。
瑞相	聖體ヲ留事三日、尊容猶室内ニ異香有テ、茶毘ノ後、多ニ舍利ヲ得タリ。	聖鉢ヲ留 ^ト ル事三日、尊容生ルガ如シ。室内異香アリ。茶毘シテ多ク舍利ヲ得タリ。	聖體ヲ留 ^ト ル事三日、尊容生ルガ如シ。室内異香有リ。茶毗ノ後、多ニ舍利ヲ得タリ。	聖留ルコト三日、尊容生ルガコトシ。室内ニ異香アリ。茶毘シテ多クニ舍利ヲ得タリ。
取骨、帰山建塔	季秋九月六日ニ懷 ^{マツ} 井及ヒ隨徒、骨ヲ納テ永平ニ皈 ^{マツ} リ、塔宇ヲ西北ノ隅ニ建ラレタリ。	即季秋九月六日ニ懷井及門人達、御靈骨ヲ、サメテ永平寺ニ皈 ^{マツ} リ、塔ヲ本山西北ノ隅ニ建ラレタリ。	季秋九月六日ニ懷井及門人達、靈骨ヲ納テ永平ニ歸 ^{マツ} リ、塔ヲ本山西北ノ隅ニ建タリ。	季秋九月六日ニ懷井ヲヨビ聞人達、御靈骨ヲオサメテ永平ニ皈 ^{マツ} リ、塔ヲ本山ノ西北ノ隅ニ建ラレタリ。
世寿・撰述書	世壽五十四歳、僧臘ハ四十四年ニナリ玉フ。師曾テ正法眼藏ト、叢林清規ト、學道用心集、衆寮清規、業識ノ圖等ノ書ヲ作り玉フ。並行ル語録有リ。	御世壽五十四歳、僧臘四十四歳ニ成ラセ玉フ。師曾テ正法眼藏ト、叢林清規ト、學道用心集ト、亦衆僚清規ト業識ノ圖等、書ヲ作り玉フ。世ニ業ハル、処、亦語録有リ。	世壽ハ五十四歳、僧臘ハ四十四年ニ成玉フ。師曾テ正法眼藏ト、叢林清規ト、學道用心集、衆寮清規、業識ノ圖等ノ書ヲ作り玉フ。竝ニ世ニ行ル。語録有リ。	世壽五十四歳、僧臘四十四年ニナリ玉フ。師曾テ正法眼藏ト、叢林清規ト、學道用心集ト、衆寮清規ト、業識ノ圖等ノ書ヲ作り玉フ。並ビ世ニ行ナワル。又語録有リ。
宋 義尹の事、入	其徒義尹、人王八十九代文永元年甲子ニ、是ヲ携テ宋ニ入リ太白山ニ到ル。時ニ義遠無外序ヲ作ル。靈隱退耕、徑山處堂、語ニ書尾ニ着テ、悉ク是ヲ稱讚セリ。	其徒寒嚴法王人王八十九代龜山ノ院ノ文永元年甲子ニ、是ヲ携テ宋ニ入リ、太白山ニ到ル。時ニ義遠無外序ヲ作り、靈隱退耕、徑山虛堂、語ヲ書ノ尾ニ着テ、悉ク是ヲ稱ス。	其徒義尹、人王八十九代文永元年甲子ニ、是ヲバ攜テ宋ニ入リ、太白山ニ到ル。時ニ義遠無外序ヲ作ル、靈隱退耕、徑山虛堂、語ヲ書尾ニ著テ、悉ク是ヲ稱讚セリ。	其徒義尹、人王八十九代文永元年甲子ニ是ヲ推 ^{ツカサ} 乃 ^ハ 太白ニ到ル。時ニ義遠無外、序ヲ作ル。靈隱退耕、徑山虛堂、語ヲ書尾ニ着ケテ悉ク是ヲ稱讚セリ。

賛辞

奥書

<p>永平開山禪師之行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元大和尚行狀傳聞記</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記</p>	<p>永平開山道元禪師行狀傳聞記</p>
<p>嗚呼大師ノ悲願力ニ乗シテ、法ノ檀度トナリ、其契主上、名天下ニ聞、其全機大用ハ、得テ名ケ狀ルヘカラス。事緣軌迹又悉ク記ル事不能。少ニ傳聞スル處、鉅海ノ一滴ヲ記ル而耳。</p>	<p>嗚呼禪師、悲願力ニ乗シテ、法ノ檀度トナリ、道ハ契主上ニ名ハ天下ニ聞エ、全機ハエテ名ケカタドルベカラス事緣軌迹、亦タ悉ク記ス事克ス。少ニ傳聞スル處、大海ノ一滴ヲ記スノミ。</p>	<p>嗚呼大師悲願力ニ乗ジテ、法ノ檀度トナリ、其道契主上、名天下ニ聞エ、其全機大用ハ、得テ名ケ狀トル可ラス。事緣軌迹又悉ク記ス事アタワズ。小カニ傳聞スル處、鉅海ノ一滴ヲ記スル而已。</p>	<p>嗚呼、大師悲願力ニ乗ジテ法ノ檀度トナリ、其道契主上、名天下ニ聞溢レ、其全機大用ヲ得テ名ケ狀ルベカラス。事緣軌迹、マタコトク記スコト克ワズ。少ニ傳聞トスル處、鉅海ノ一滴ヲ記スノミナリ。</p>
<p>永平開山元禪師行狀傳聞記卷下尾 寛永六年己丑五月端午日 赤城龍源閑虚聲謹書 又寶歴九戊卯年十月七日 普門謹拜写之</p>	<p>勅賜佛法禪師永平開山道元大和尚行狀傳聞記下終</p>	<p>永平開山元禪師行狀傳聞記卷之下尾 文化二乙丑歲夷則吉辰 萬松山宗泉院主幸</p>	<p>永平開祖道元大和尚行狀傳聞記卷下終 若州遠敷郡田野村 大光寺去外 荒木三秀拜主</p>

お断り

本紀要の紙幅上、後半部は(十一下)として次号に掲載します。

各地に所蔵する掛絡について

川口 高風

妙心寺に所蔵する二つの絡子

妙心寺（京都市右京区花園妙心寺町）開山の関山慧玄（一二七〇—一三六〇）が使用したと伝えられる袷袋について、江戸時代に書かれた「開山袷袋修補之記並考」（妙心寺蔵）がある。この文書は現在整理中で、未公開のことであるが、「妙心寺」展の図録（平成二十一年一月 読売新聞社）に出品された袷袋の解説にしばしば引用されているところから、（作品解説三三四、三三五頁）その引用文より関山の袷袋をながめてみよう。

それによれば、関山の袷袋は九条袷袋が三肩、七条袷袋が一肩、五条袷袋は二肩、あわせて六肩あることを示している。また、関山の所用品をまとめた溜塗の箱の蓋表の貼紙には、内容品が

「開山布衣壹領 壹包／開山七條袷袋大小貳領 壹包／開山
五條貳領并袷袋 壹包／同（開山）藤環 衆封 壹包／同

各地に所蔵する掛絡について

（開山）葛籠 衆封 壹包／古切 壹包／藤環 壹包（この項、朱の合点あり）（／は改行、へは内は解説の筆者山川暁氏による注）

と記されており、その中に「開山五條貳領并袷袋 壹包」とあることから五条袷袋を二肩所蔵している。なお、「開山袷袋修補之記並考」にも二つの五条袷袋をあげているとのことである（作品解説三三五頁）。

二つの五条袷袋は「絡子」として世に紹介されている。それは『妙心寺大観』（昭和四十七年三月 妙心寺派宗務本所）の工芸二九八、『妙心寺の名宝』（昭和五十二年三月 妙心寺）工芸品八九、『妙心寺』（平成二十一年一月 読売新聞社）出品作品十五に写真が各々掲げられており、二本の威儀によつて首から提げる形態になっている。

一肩は淡黄の平絹が用いられ、裏地は紅麻で、環はついていない。田相の縦は三十九・五センチ、横は四十八センチで、真ん中の条と左右の条との間にタックがあり、タックの幅は右側が四・七センチ、左側が五・三センチであるところから、本来の横の長さは四十八プラス四・七プラス五・三の五十八センチであった（図一）。

内側の竿は左右ともに絞られている所で裂が上下に分れており、上端に先端が輪となったものを付し、別裂で竿となるものを作り、それを輪の中に通している。環をつける部分の左側は、編んだ紐の輪が開閉できるようにとめ具となっている。内側の竿の

長さは約一三二・二センチで、マネキに縫いつけられておらず自由に動く状態である。なお、この絡子は図録の『妙心寺』にカラー写真であげられている。

もう一肩は、『妙心寺大観』と『妙心寺の名宝』において白黒写真で紹介されている。解説によれば、二種の縹系はんだの紗を用いているが、中央部をはじめ各所に破損があり傷んでいたため、裏裂を白茶平織の麻で修補し刺子のように縫いつけている。環はついていない(図2)。

田相は縦三十三・五センチ、横四十一・三センチであるが、真ん中の条と左右の条の間にタックがあるため、本来の横の長さももっと広いものであろう。筆者は実物を拝覧していないため、正確な長さを明らかにすることはできない。左右の内側の竿には絞られている所があるが、裏は白茶平織の麻で修補されており、左側は環がつけられていたものと思われる。

以上、関山の二肩の五条衣(絡子)をみてきた。図録などでは「絡子」と紹介されているが、田相の大きさからすれば大掛絡にあたる。内側の左の竿は環をつけるために絞ったものと思われ、右側は田相についている竿と上からの竿を絞って結んだようである。その下に修補した時、新しく縫いつけられた裂(白茶平織の麻)がある。したがって、本来、環はあったが傷んで修補した時にとりはずしたままにしていたものか、上下の竿を結んだものではなかるうかと思われる。何れも関山が使用していたものと伝えられているところから、十三世紀後半から十四世紀のものといえ

よう。



図2 関山慧玄の絡子(『妙心寺の名宝』より転載)



図1 関山慧玄の絡子(『妙心寺』より転載)

高安寺蔵の守持衣と堺屋九左工門寄進の掛絡

高安寺（府中市片町）に守持衣と思われる袈裟がある。縦四十八センチ、横九十三・五センチで、田相は三条のみしかみえない。真ん中の条の内側左右にタックが施されていたようにみられる。そのため本来は五条衣であった。左上角に紐がついており、長さ三十四・五センチ、太さ〇・六センチである。右上角には二センチ程の紐があるが、本来はもつと長いもので、切れてなくなっただと思われる（図3）。したがって、紐は左上角に施されている。田相は繻子地絵緯綾とじ錦の草花雑宝模様で、裏は絹布の一枚布が付されている。それには、

本山並諸寺院中興梵刹健（マ）立成就之所

持衣一頂 奉贈

大徹心悟禪師法座下

貞利（マ）四戊子歳仲秋吉旦

源大将尊氏納焉

と墨書があり、貞利（マ）（和）四年（一三四八）に足利尊氏（一三〇五―一五八）が高安寺開山の大徹心悟に寄贈したものと思われる（図4）。

高安寺の草創は、東国の豪族で武將の藤原秀郷公が武蔵国国守となつて府中の現在地に館を建てて赴いたのが始まりで、任務を終えて帰郷した秀郷公の館跡が寺になつたといわれる。当時は市

各地に所蔵する掛絡について

川山見性寺と呼ばれたが、宗派などの詳細は不明である。源義経が京都に向かう途中、しばらく滞在して弁慶らと赦免祈願の『大般若経』を書写したともいわれている。



図3 高安寺蔵の守持衣（『「染」と「織」の肖像』より転載）

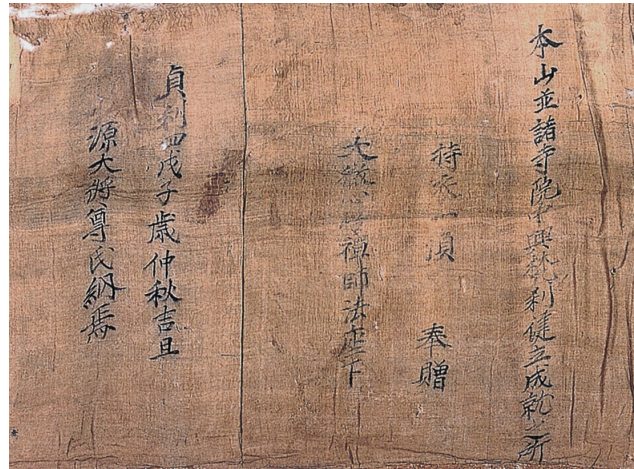


図4 高安寺蔵の守持衣の裏書（『「染」と「織」の肖像』より転載）

南北朝の兵乱の世で建武の中興後、足利尊氏が征夷大將軍となつて武家政治を復活させたが、国家の安泰をみるため尊氏は夢窓国師の勧めに依じて、暦応年間（一三三八―四二）に鎮護国家と衆生救済を祈つて諸国に安国寺、利生塔の建立を発願して人々の動搖を平安に導く抛り所とした。そのため国ごとに一寺建立をめざし、有名な寺院の再興をはかつて安国、利生を祈願した。

この時、市川山見性寺が武蔵国安国寺として改められ、龍門山

高安護国禪寺と呼ばれて再興されたのである。当時は、臨済宗建長寺の末寺として大伽藍を整え塔頭十院、末寺七十有余寺を擁した。広大な寺領は、東は代田村（東京都世田谷区）、西は貝坂（立川市）、南は向山（川崎市）、北は山口（所沢市）に及び四方およそ四里（約十五・六キロ）を有していたといわれる（『高安寺もの語り』（平成二年三月 高安寺）十一、二頁）。

こうして高安寺は足利氏の衰退とともに衰えていき、海禅寺（青梅市二俣尾）七世天江東岳がそれを憂えて慶長年間（一五九六―一六一五）に再中興し、臨済宗より曹洞宗に改めて開山となったとされる。しかし、実質的には中興と称される三世の海雲良鯨が大きな役割を果たしていたのではなからうか。良鯨は天正十七年（一五八九）から慶長十三年（一六〇六）まで住持しており、関東に入国した徳川家康から天正十九年（一五九一）に御朱印十五石を与えられている。

家康に仕えて武蔵府中の代官となり、文禄元年（一五九二）に領地を与えられて地頭となった高林吉利は慶長元年（一五九六）に高安寺に葬られ、その子吉次も地頭を受け継いだことなどから、良鯨が地頭の高林氏の外護を受けて中興したものと思われる。そのため海雲良鯨が曹洞宗の実質開山で、天江東岳は勧請開山であったといわれる（『高安寺もの語り』三十七頁）。

本袈裟が、曹洞宗の高安寺に伝承される由緒はこのような訳であったが、染織の分野から裂地をみると、我が国の慶長期（一五九六―一六一四）、明の萬曆（一五七三―一六二〇）頃のもの



図5 桃山裂で作られた掛絡（『ハギレの日本文化誌～時空をつなぐ布の力～』より転載）

見做される。したがって、実質は曹洞宗として中興された頃に作成されたものではなからうか（図録『「染」と「織」の肖像』（平成二十年十月 国立歴史民俗博物館）二十三頁）。

その他にも同時期頃に作成された掛絡がある。それは大谷みちこ氏蔵で、縦三十七・五センチ、横五十八・三センチ、裂地は桃山時代である（図録『ハギレの日本文化誌』時空をつなぐ布の力』（平成十八年九月 福島県立美術館）二十九頁）。

田相は三条になっており、タツクの施された様子はみえない。現在は紐がないが、以前もなかったかについては不詳である（図5）。掛絡の入っている桐箱の表には「桃山裂袈裟」とあり、蓋の裏には「松崎乃局御実家 堺屋九左エ門寄進」と墨書のあるところから、松崎の局の実家で掛絡を仕立てて由縁のある寺院へ寄進したものであろう。その寺院や松崎の局の出自などについては不詳である。

上杉憲実の掛絡

上杉謙信より四代前の上杉憲実（一四一〇―一六六）は、応永十七年（一四一〇）に越後守護上杉房方の三子として生まれ、幼名を孔雀丸、後に四郎、安房守と称した。山内上杉憲基の養子となり、同二十六年には鎌倉公方足利持氏の管領となり、伊豆・上野守護に任じられた。また、幕府から管理を委ねられていた下野足利荘内の足利学校を再興している（『国史大辞典』第二卷（昭和五十五年七月 吉川弘文館）十九頁）。

永享元年（一四二九）には傑堂能勝を挿草開山に招き、高弟の顕窓慶字を開山に請して雲洞庵（南魚沼市雲洞）を再興した。雲洞庵は戦国期に謙信から多くの庇護を受け、継嗣景勝は幼少年時代に直江兼続とともに十世北高全祝の下で教育を受けている。

雲洞庵の開山堂には、開基の憲実の木像が祀られている。木像は掛絡を掛けており、竿は細く、内側の竿には環がつけられている。マネキは正方形で、内側の竿が上部に、外側の竿が下部にあり、竿、マネキともに緑色になっている。田相は白く塗られており、条相は書かれていないため、タツクがあつたかは明らかにならない（図6・7・8）。

新井勝龍住職によると、この木像は二十年程前に京都の仏具店において修理したとので、草創期のままではない。雲洞庵の本堂が宝永四年（一七〇七）に再建されているところから、それ以後のものともいわれている。右手には采配（さいはい）を持っており、左手は何かを握った形であるが、本来は数珠（ずしゆ）を持っていたものと思われる。あるいは右手に払子（ほうす）を持ち、左手でその毛先を軽く握っていた姿といわれている。

憲実の木像からは細い竿とマネキの形状を知ることができる。これによって掛絡が縮小されていた過程の一部をみる事ができよう。



図6 掛絡をかけた上杉憲実の木像（雲洞庵蔵）



図7 前面上からの上杉憲実の木像



図8 背後からの上杉憲実の木像

絵巻や屏風にみられる掛絡

室町期に描かれた絵巻や屏風に掛絡を搭けた僧の描かれているものがある。當麻寺（奈良県葛城市當麻）に所蔵する「當麻寺縁起」は享祿四年（一五三二）十月に三条西実隆が記した奥書によれば、室町末期、戦国動乱のために荒廃した當麻寺の復興に活躍した近江出身の勧進聖宗胤法師の発願で製作されたものである。絵は絵所えどころ預あづかり土佐光茂の筆で、詞書は後奈良天皇以下の貴人や高僧ら九人によって書かれている。土佐派の伝統的な画風によって描写されているが、山水や人物の配置は古式を伝えている。

この絵巻の下巻第七段には當麻寺迎講むかえこうの法事の様子が描かれており、そこには直袂姿で掛絡を搭けた三人の僧がいる。掛絡は竿が一本のみで環はない。後にマネキがついており、田相は田の字のみで条相はみられない（図9）（『日本古寺美術全集 第八巻 室生寺と南大和の古寺』（昭和五十七年十一月 集英社））。

もう一つは扇子を持った女性と傘を持った従者とともに描かれた禅僧で、それには竿が二本ある大掛絡を前から搭けている。しかし、環やマネキの様子はまったくわからない（図10）（『大和古寺大観 第二巻 當麻寺』（昭和五十三年十二月 岩波書店））。

次に「高雄観楓図屏風」（東京国立博物館蔵）は六曲屏風一隻で、画面の寸法は縦一五〇・三センチ、横三六四・三センチである。洛西高雄山の裾すそを流れる清瀧川の溪谷は錦雲溪と呼ばれ、古

各地に所蔵する掛絡について



図10 竿が二本ある大掛絡を搭けた禅僧（『大和古寺大観 第二巻 當麻寺』より転載）



図9 直袂姿で掛絡を搭けた三人の僧（『日本古寺美術全集 第八巻 室生寺と南大和の古寺』より転載）

くから紅葉の名所として名高かった。その清流の側で、人々が紅葉をみて秋の一日を楽しむ光景である。

作者は狩野秀頼で、秀頼は狩野元信の次男乗信のことである。天文三年（一五三四）頃から天正四、五年（一五七六、七七）頃までの活動が確認されているところから、永禄年間（一五五八―七〇）の制作と推定されている。

左手の橋の手前側に禅僧の一行五人が描かれている。橋へさしかかる有髪の童子二人は、金色の扇を手にした喝食の行者である。喝食は禅寺の食事の種類や作法の次第を唱える役目であったが、後にさらびやかに飾った有髪の童僧となったという。

その左には、黒い帽子をかぶった二人の禅僧と傘をかかえた肩衣袴の従者がいる。二人の禅僧は一人が髭をはやした壮年風で、もう一人は少し若い。一説によれば、清拙正澄（一二七四―一三三九）と夢窓疎石（一二七五―一三五二）ではなかるうかともいわれている（鈴木廣之『絵は語る』8 狩野秀頼筆高雄観楓図屏風——記憶のかたち』（平成六年二月 平凡社）三十六、三十七頁）。二人とも直裾の上に大掛絡を掛けており、竿は二本である。環の有無は判明しないが、おそらく存在したものと思われる。前面の田相部分はみえるが、背後の様子は不詳である（図11）。

室町後期より安土桃山期の掛絡は田相が小さくなっており、竿は二本、あるいは一本で肩より両腕にずらした掛け方である。五、六十年程前の一休宗純（二三九四―一四八一）の掛絡とも似

ているが、田相の小さいものと大きいものがあつたことも知ることのできる絵図である。



図11 黒い帽子をかぶった二人の禅僧
（『絵は語る』8 狩野秀頼筆 高雄観楓図屏風——記憶のかたち』より転載）

執筆者紹介

山野 明 男 (本学教授……………地 理 学)
YAMANO Akio

小 村 賢 二 (本学教授……………統 計 学)
KOMURA Kenji

清 水 義 和 (本学教授……………英 語)
SHIMIZU Yoshikazu

伊 豆 原 英 子 (本学教授……………日 本 語)
IZUHARA Eiko

川 口 高 風 (本学教授……………宗 教 学)
KAWAGUCHI Kōhū

木 村 文 輝 (本学准教授……………宗 教 学)
KIMURA Bunki

吉 田 道 興 (本学教授……………宗 教 学)
YOSHIDA Dōkō (Michioki)

教 養 教 育 研 究 会 委 員

(会長) 稲垣正巳 (副会長) 佐々木 真

(会計) 北村伊都子

※岡島秀隆 ※尾崎孝之 河合泰弘

小林秀一 ※城貞晴 高木靖文

前山慎太郎 松浦國弘 安富眞澄

鷲嶽正道

※本号編集委員

編 集 後 記

季節が春から夏へと移り行き、新学期のあわただしさも静まって教育と研究にある種の落ち着きをもってあたることのできるこの頃です。

今年度の最初に発行される本号には、論文5編、資料3編の投稿がありました。執筆者の魂のこもった研究成果が多くの読者の心に届くことを祈っています。(尾崎記)

愛知学院大学教養教育研究会会則

- 第 1 条 本会は愛知学院大学教養教育研究会と称する。
- 第 2 条 本会の事務所は愛知学院大学教養部に置く。
- 第 3 条 本会は大学設立の趣旨に則り、人文科学・社会科学・自然科学・語学・健康総合科学等の、教養教育に関する諸学の研究成果ならびに教育成果の発表を通じ、学問の水準を維持、向上せしめ教育及び社会一般に寄与することを目的とする。
- 第 4 条 本会の会員は次の通りとする。
- (1) 正 会 員 本大学の教養部専任教員とする。
 - (2) 準 会 員 本大学の在學生とする。
 - (3) 賛助会員 本大学の卒業生及び本会の趣旨に賛同し、会長の承認を得た者とする。
- 第 5 条 本会は第 3 条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 機関誌「愛知学院大学論叢教養部紀要」の刊行
 - (2) 研究会、講演会、討論会等の開催
 - (3) その他本会の目的を達成するために必要と認められる事業
- 第 6 条 「愛知学院大学論叢教養部紀要」は原則として毎年 4 回発行し、会員に配布する。
- 第 7 条 本会は教養教育研究会委員会を置き、委員は次の者で構成する。
- (1) 会 長 1 名
 - (2) 副 会 長 1 名
 - (3) 委 員 12 名
 - (4) 会 計 1 名
- 2 会長は学長これを委嘱する。
 - 3 委員は正会員の互選により、人文科学・社会科学・自然科学・第 1 外国語・第 2 外国語および健康総合科学の各系列より 2 名あて選出する。委員の任期は 2 年とする。ただし、再任を妨げない。
 - 4 副会長及び会計は委員の互選により、会長がこれを委嘱する。
- 第 8 条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
- 2 副会長は会長を補佐し、会務を掌る。
 - 3 委員は委員会を構成し、本会の企画運営にあたる。
- 第 9 条 会長は委員会を招集し、その議長となる。
- 第 10 条 会長は本会の会務執行のため、必要あるときは実行委員会を委嘱することがある。
- 第 11 条 会員は毎年度始めにおいて会費を納入する。
- 2 新入会員は入会金を納付するものとする。
- 第 12 条 本会の運営費は、会員の納付する会費、愛知学院大学からの補助金または有志からの寄付金およびその他の収入をもってこれにあてる。
- 第 13 条 本会の会計は 4 月に始まり、翌年 3 月に終る。
- 第 14 条 本会の会則の改正は正会員の 3 分の 2 以上の賛成をもって成立する。
- 付 則

本会則は、昭和32年4月1日に制定し、即日施行する。

本会則は、昭和53年2月6日に改正し、即日施行する。

本会則は、昭和57年3月24日に改正し、同年4月1日より施行する。

本会則は、昭和58年6月17日に改正し、即日施行する。
本会則は、昭和63年4月1日に改正し、即日施行する。
本会則は、平成2年7月6日に改正し、同年4月1日より施行する。
本会則は、平成8年7月19日に改正し、即日施行する。
本会則は、平成11年12月17日に改正し、翌年4月1日より施行する。
本会則は、平成20年12月12日に改正し、翌年4月1日より施行する。
本会則の施行により愛知学院大学一般教育研究会会則を廃止する。

愛知学院大学論叢「教養部紀要」投稿規定

1988年4月1日成立・実施

〔投稿資格〕

第 一 条 この会誌に投稿する資格をもつ者は、原則として教養教育研究会正会員とする。

〔転載の禁止〕

第 二 条 他の雑誌に掲載された論文・資料・翻訳・書評などは、これを採用しない。

〔原稿の形式〕

第 三 条 投稿に際しては、次の要領に従って本文、図および表を作成する。

- (1) 原稿は、原則として原稿用紙または電子媒体による入稿とする。(電子媒体による入稿の場合プリントアウトを一部添付する。)
- (2) 原稿の量はおおむね16,000字以内とする。
- (3) 本文の前に、別紙で、次の3項を次の順序で付する。
 - (i) 和文の題目および執筆者名。
 - (ii) 欧文の題目および執筆者名。
 - (iii) (イ) 論文・資料・翻訳・書評などの区別
(ロ) その論文・資料・翻訳・書評などが属する専門領域名。
ただし、ここにいう専門領域は、人文・社会・自然・外国語・健康総合科学の5部門に区別する。
 - (iv) 教授・准教授・講師・助教・外国人教師など別
- (4) 原稿の欧文箇所は、すべて活字体で書くか、またはワープロを用いる。
- (5) 図は、白紙または淡青色の方眼紙に墨書し、縮尺を指定する。これに対する文字は鉛筆で入れる。ただし、表はこれらの限りではない。
- (6) 写真に文字または印を入れるときは、トレーシング・ペーパーを重ねてそれに書き入れる。

〔原稿の申込み〕

第 四 条 投稿希望者は、教養教育研究会委員会（以下、委員会と称す）の公示する期限までに、委員会の提示する申し込み用紙に氏名を記入する。

ただし、申し込み者が所定の数に達しないか、またはそれを越える場合には、委員会がこれを調整する。

〔提出期限〕

第 五 条 投稿は委員会の定める提出期限までにこれを行う。締切り日以後に提出された原稿は掲載されないことがある。

〔原稿組版の制限〕

第 六 条 図版・カラー写真などの掲載により一般の経費より多くかかる場合は、その必要性を各号の編集責任者に申し出て委員会を開催して審議し、承認を得ることとする。なお、承認を得られず掲載を希望する場合、その費用を別途に個人負担とする。

〔原稿修正の制限〕

第 七 条 投稿後の原稿の修正は、原則としてこれを行わないものとする。やむをえない場合は初校において修正し、その範囲は最小限度にとどめる。大幅な修正の結果、印刷費が追加されるときは追加費用を個人負担とすることがある。

〔校 正〕

第 八 条 校正は原則として第3校までとし、本文については執筆者がこれに当たり、表紙・奥付その他については編集委員がこれに当たる。

〔抜き刷り〕

第 九 条 抜き刷りは、論文・資料・翻訳・書評など各1篇につき50部までを無料とする。これを越える分については実費を執筆者の負担とする。50部以上を要する場合には、執筆者はその必要全部数を原稿の表紙に朱記する。

〔掲載論文等の複製権・公衆送信権〕

第 十 条 この会誌に掲載された論文等の電子化および公開に関わる複製権および公衆送信権は、教養教育研究会に属するものとする。

ただし、掲載された論文などの執筆者が他の機関への転載もしくは複製権または公衆送信権の行使を申し出た場合は、正当な理由がない限り、教養教育研究会はこれを拒むことはできない。

付 則

- 一、本規定の改正には、教養教育研究会正会員の3分の2以上の賛成を要する。
- 二、本規定は、1988年4月1日に成立し、即日施行する。
- 三、本規定は、1996年7月19日に改正し、即日施行する。
- 四、本規定は、1999年12月17日に改正し、翌年4月1日より施行する。
- 五、本規定は、2003年11月21日に改正し、即日施行する。
- 六、本規定は、2005年4月22日に改正し、即日施行する。
- 七、本規定は、2007年11月16日に改正し、即日施行する。

申し合わせ（教養部会 2010. 7. 16）

- 第一条の「投稿する資格を持つ者」には、以下の非正会員を含む。
 - (1) 正会員との共同執筆による投稿
 - (2) 正会員が推薦する本学教養部の非常勤講師で、本務校をもたない人の投稿
 - (3) 元正会員で、本務校をもたない人の投稿
- 上記(1)(2)(3)に該当する投稿希望者がある場合は、担当編集委員が投稿の可否を決定し、投稿希望者に通知する。担当編集委員で判断できない場合には、教養教育研究会委員会を開いて投稿の可否を決定する。
- 投稿原稿の掲載に際しては、(1)の場合の原稿料は1篇分とし、(2)(3)の場合の原稿料は支払われない。また、(1)(2)(3)いずれの場合も抜き刷り50部までは無料とする。
- 投稿者は、第三条の〔原稿の形式〕を厳守し、第四条の〔原稿の申し込み〕の時に委員会の提示する「投稿票」用紙に必要事項を記入のうえ添付して投稿する。
- 投稿された原稿について担当編集委員から検討の申し出があった場合は教養教育研究会委員会を開き、

委員会名において訂正を依頼したり投稿を断ることがある。

- 第六条「図版・カラー写真の掲載」については、紀要作成予算の範囲内と見なされる場合、その採否は紀要編集委員の決議にゆだねるものとする。ただし、予算の範囲を逸脱する、あるいは採否の決議が困難の場合は教養教育研究会委員会を開催して、決定することとする。

(注) 教養教育研究会が本会正会員の著書・論文等について書評を依頼する場合は、原稿料を支払うこととする。

平成22年7月25日 印刷
平成22年7月31日 発行

(非売品)

愛知学院大学論叢
教養部紀要第58巻
第1号 (通巻第167号)

編集責任者
稲垣正巳

発行者 愛知学院大学
教養教育研究会
〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12

電話 〈0561〉(73) 1111 (代表)

印刷所 株式会社あるむ

電話 〈052〉(332) 0861

THE JOURNAL OF AICHI GAKUIN UNIVERSITY

Humanities & Sciences

Vol.58 No.1
(Whole Number 167)

CONTENTS

Articles

- Akio YAMANO : A Consideration on Egyptian Agriculture Depending on the River Nile..... (1)
Kenji KOMURA : Time Series Forecasting with Transfer Function (19)
Yoshikazu SHIMIZU : Underground Film by Shuji Terayama and Andy Warhol (33)
Eiko IZUHARA : An Analysis of Teaching Skills for Academic Writing (2) (63)
Kōhū KAWAGUCHI : A Study of “Kara” Owned in Various Places (228)

Material

- Bunki KIMURA : Annals of the Chief Priests at the Buddhist Temples belonging to the Sōtō Sect
in the Middle and Eastern Parts of Shizuoka Prefecture (5) (73)
Dōkō (Michioki) YOSHIDA : A Zen Master Dōgen’s Biographical Compilation (10-1) (220)
Kōhū KAWAGUCHI : On Sōtō Sect Priests’ Lives and Works After the Meiji Era (2) (132)

Published
by

Aichi Gakuin University
Nagoya, Japan
2010